

P S O 2 ～煌々たる白明～

クビキリサイクル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらゆるクラスになれる第三世代の中でも、突出して優れた戦士がいた。

士官学校主席卒業生・ハクメイ。

常識をどこかに置き去りにしてきた彼は、相棒のアフィンと共に修了任務を受け、ナベリウスの地に降り立つが……。

欲望の赴くままに最強最高のアークスを志す、強欲なアークスの物語。

PSO2×PSO2esとなっております。本編に合わせてesを捻じ曲げてる感じです。

活動報告にて閑話のアンケートを取っております。

お気軽に自分の好きなウエポノイドを書き込んでください！

<https://syosetu.org/?mode=kapp>
<https://syosetu.org/?mode=kapp>

質問箱

<https://syosetu.org/?mode=kapp>
<https://syosetu.org/?mode=kapp>

目次

【Episode 1-0】『ずっとこの日を待っていた』

楽勝の修了任務。の筈が…… | 1

なんかイケメンな先輩です | 17

オリジナルかと思ったら、二番煎じだったの巻 | 31

むっっちゃ怪しい女からむっっちゃ怪しい物を渡された | 48

キャラ設定 | 59

【Episode 1】『明日を待つ』

熱血な教え子ができてもた | 64

戦いたい一般人と、戦いたくない戦士 | 77

特徴的過ぎる担当官達とエンカウント | 89

双子で胸の大きさが極端に違うって、エロゲみたいだよ | 106

約束は守る男だ。なので依頼もきっちりこなさなきゃ気が済ま

ないタイプ。なんだけどさあ…… | 124

気味の悪い男と突然バトった | 142

気味悪い男のおかわりとかいらなそうですけど…… | 154

色々あったが、全てを許そう。だって可愛いから | 165

キャラ設定 | 177

【Episode 2】『不測の予測が見せるもの』

記録とは塗り替えられるために存在している | 184

なんかすこぶる元気なのがあつっ! | 197

才能なんて要は楽できるかどうかにか過ぎない | 212

女に花を贈るって、理想を押し付けるみたいであんま喜ばれないか

と思ってたが、案外そうでもないらしい | 224

新技術のお披露目と、ちっちゃいメンバー | 240

モアの実力と対照的な組み合わせ	250
強くなりたい、その理由は	264
V S 森林を駆る雌雄爪獣	276
足早に帰宅帰宅う	296
ニューマンの長耳のメリットがフォトンを感じしやすいだけだと 思うたか	309
なんでその様子を撮影してないんだお前は！（理不尽）	322
不気味なダーカー。不穏なる影	331
枯れた刀匠の頼み事	340
（二人が）震える凍土で武器探し	351
もうちよつと、こう……予兆的なのをさあ……	365
生死を賭けた凍土撤退戦	381
俺としても内心ドツキドキの判断でした	394
職人が目の色変えた時ってすさまじい	411
あなたが優しい、その理由	421
キャラ設定	431
オリジナル要素一覧	442
【Episode 1—2. 5】『闇に触れる雛鳥』	
秘密と仲間と暗躍と……	445
思いがけない奴等に思いがけない縁があつた時って、どんな顔して いいやら	455
狂乱の研究者・ザツカード	469
ゴリラの相手とかご勘弁	478
狂人に対する思考実験	495
鏡合わせの二人	508

逃げ惑い、逃げ狂い、それを追い

522

ギヤースカ暴れてる奴を見てると逆に落ち着くあれ

531

炎神『プロメテウス』

538

一つの結末。一つの始まり

553

【Episode 1-3】 『砂塵の奥』

センスが残念な奴は、得てして自分が残念な自覚がないものである

566

【Episode 10】『ずっとこの日を待っていた』

楽勝の修了任務。の筈が……

『アークス』。それは、宇宙に蔓延る害悪『ダーカー』を討伐する戦士である。

ダーカーを浄化することが出来る唯一の力『フォトン』を操り戦う、栄誉ある職業だ。

……まあ名目上は各惑星の調査兵团なんだけれども。

ダーカーに対抗出来るのがアークスしかないから、ほとんど対ダーカー戦闘兵团なのだ。

フォトンを扱うアークス以外でもダーカーを倒すことは出来るが、ダーカーが持つダーカー因子を浄化することが出来ず、体内に取り込まれてしまう。それが溜まり、限界が訪れた時、その生物は凶暴化してしまうのだ。

そうなってしまう生物——『原生種』がダーカー因子に取り込まれてしまう前に、フォトンで浄化するのも、アークスの仕事である。

ダーカーが病原菌なら、アークスはそれに対抗する白血球なのだ——医者の方がいいかな。

しかし、決して楽な仕事ではない。戦士である故に、死と隣り合わせ。

今はまだ増える数も少ないわけではないとはいえ、アークスが死亡し、減っていく数も少ないわけじゃないのだ。

そんな中、新たに選抜されるアークスには適正が重要視される。戦えるか否かではなく、適性があるか否か。

そんな理由で、本人の意思を半ば無視して、適性だけを見て戦場に駆り出されるアークスがいるのが現在の情勢だ。

「その点気軽に考えてる奴多いよなあ……」

「? どうしたんだよ相棒。ボーっとして」

「なに。感慨深いなあと思つてよ」

「あー成程なあ。相棒、これまで大変だったもんなあ」

「そんな日々も、今日で一区切りかと思つてな。色々考えちゃまった」

俺ことハクメイ、そしてアフィンの二人は、惑星ナベリウスに来ていた。

何故かつて?

修了任務のためである。

アークスになるためにはまず、アークスを育てる機関である士官学校に入り、そこで修練を積み重ねなければならぬ。通常より短い期間でアークスになれる特例も存在はするが、俺達は普通に士官学校に入り、普通に数年間修練して、そして普通に修了任務に臨むのだ。

初めて実地で戦闘をするこの任務で、アークスとしてやっていけるかどうか、戦えるかどうかを判断するのだ。

(この任務で合格すれば、正式にアークスとして認定。そうすりゃ……)

アークスになる人間には、様々な動機がある。

アークスという正義の職業に憧れるか。

適正が高いからなるか。

ダーカーが憎いからなるか。

様々な惑星に行けるようになりたいからなるか。

大まかに分けてそんなところだが、俺の場合は。

場合は……。

「……うーむ、やりたいこと多過ぎてズバツと言えん。アフィン、どう言えばいいかね?」

「いや、誰に向けて何をだよ」

「だってよし、アークスになったら『貴方はなんでアークスになったん

ですか?』って聞かれること多いじゃん? 実際俺もこの前まで聞く立場だったし。そういう時のこともシミュレートしとかないと」
「まだなつてもいないのに、そんな心配かよ……」

呆れたように言うアフィン。

いやー、俺がアークスになりたい理由って大小様々なんだよね。

アークスカッコいいし、歴史に名を残すような英雄になりたいし、ダーカーと戦って勝てるようになりたいし、色んな惑星観光したいし、お金欲しいし、武器や防具作って自分で使いたいし、尊敬される男になりたいし、ついでにモテたいし。

ダーカーは倒すべき敵って認識はあるけど、ダーカー憎し! っていう動機でアークスになる人程じゃないんだよなあ。

うちの両親はダーカーに殺されたとは言われるが、生憎俺は試験管ベイビー。母親が腹を痛めて生まれた訳でも、愛情持って育てられた訳でもない。

施設で育ててくれたおばちゃんやガキ共は元気でやってるし。

まあ、今後も元気でやるためってのも理由の一つかね。

「アフィンは理由がシンプルでいいよなあ。探し物のためにアークスになるんだろ?」

「そうだな。アークスになれば、色んな惑星に行ける。探し物が見つかるかわかんないけど、アークスにならないと探すことも出来ないからな」

そう語るアフィンは、少し遠い目をしていた。

アフィンは、俺が士官学校にいた頃のルームメイトだ。

背丈は俺より若干低いものの、引き締まった体をしている童顔の男で、金髪のニューマン。黒髪（ハクメイなのに、黒。それ一番言われているやつ）のヒューマンである俺とは種族が違うわけだが、俺もこいつもそんなの気にする柄ではなく、気の合う同士仲良くやっているのだ。いやほんと、気にする奴は気にするからね。恋愛とかならまだし

も、同性同士で友達付き合いするのにまで、種族ガーとかなんやら。それで、アークスになる理由について話したこともあったが、めっちゃ語った俺とは対照的に、アフィンの理由はシンプルだった。

ただ、その探し物がなんなのかは教えてもらっていない。

アークスになった暁には探し物を手伝う、そうでなくとも情報が手に入ったら教えるぐらいはしてやろうかと思うんだが、どうにも語りたくないようなのだ。

けどさ。本人が語りたくないのを無理矢理聞き出す気にもなれんし。

語りたいたときにでも語ってくれたらいいとは言っている。

……あれから何年経ってるだろ。

「けど相棒。俺は相棒みたいにな、アークスになる理由が色々あってもいいと思うぜ？」

「別に悪いとは思ってねーよ。ただ、人に紹介する時に困ったもんだなーとか思っただけでさ」

話しながら、俺達はナベリウスの地を歩く。

ここは森林エリアと呼ばれていて、緑豊かな土地だ。どこもかしこも緑だらけである。緑一面だ。草も木も生い茂っている。

ナベリウスの原生種は、猿のウーダン、ボス猿のザウーダン、狼のガルフ、ボス狼のフォンガルフ、逃げ足の速い飛ばない鳥のナヴ・ラツピー、赤い鳥のアギニス、硬い甲羅を持つデカイダンゴムシのガロンゴ。他にもデカイので、岩に覆われた巨人のロックベア、番いで行動する紫色した豹のフアングパンサー・フアングパンシー。

デカイ原生種はそう数現れないし、ここ辺りでは出ないとされているが、一応警戒は必要だろう。

さて、修了任務の内容はザウーダン討伐、その後指定ポイントまで到達して無事帰還することだが……。

「アフィン」

「お、どうした？ 相棒」

「見つけたぞ、目標だ」

「早速か。場所は？」

「北北西の方角に500m。ただ、群れで行動してるな。小さいのが20、比べてデカいのが3」

「ウーダンが20で、ザウーダンが3……。いきなり集団戦かあ。他の反応は？」

「無いな。多分、あの群れがこちら一帯を縄張りにしてるんだろう。あいつらから離れて別の奴を探してもいいが、結構歩きそうだし、あいつらでいいだろう」

「わかった。でもその前に、俺等戦闘は初めてだから、動きの練習しようぜ。それくらいはさせてもらえるみたいだし」

探知に引つ掛かった情報をアフィンに伝えると、アフィンは持っている長銃を構える。その後、不規則に並ぶ大きな岩に向けて何発か放つ。

武器の使い心地を試しているらしい。

俺も素振りくらいするか。

「電剣『エレキ』」

生命体以外をフォトンに分解して仕舞えるアイテムパックからエレキを呼び出し、何回か振ってみる。

エレキは、青に近い紫色の刀身を持つ双小剣だ。

俺の自作である。

その特性上、常に電気を帯びていて、刀身からパリパリという音が小さく聞こえてくるのだ。

このままなら電気には静電気程度の威力しか持たないが——。
うん。使い心地は問題なさそうかな。

「お。相棒、エレキ使うのか？」

「ああ。近接の集団戦ならこれがいいだろう。もう行けるか？」
「おうよ。相棒、無いとは思うけどハマすんなよ」
「抜かせ。お前こそ誤射なんぞしたらお仕置きだからな」

(いたぜ)

アフィンが小声で話し掛けてくる。

目標のザウーダン集団を補足し、俺達は近場の岩に隠れる。

向こうは俺達に気付いた様子はない。耳の良い原生種だが、隠密は上手くいっていると見ていいだろう。

(相棒、集団戦のプランAでいいんだよな?)

(ああ。とりあえず復習だ。どんな内容だったでしょう?)

(こちらが補足していて向こうが気付いていない時。相棒が合図と同時に突っ込んでいって、向こうが気付いて注目が集まった段階で俺が射撃を開始。最優先は相棒の遠くにいる奴から。ただし、状況に応じて目標を変えていく。俺にエネミーが来て、俺だけで対処できない時はプランCに移行。相棒が離脱したい時はプランEに移行。だろ?)

(花丸)

ザウーダン達は三体で一塊、その周囲を取り囲むようにしてウーダン達が歩いている構成だ。

木が生えていないエリアとはいえ、この辺りは崖が多い。どこから敵が来てもまずウーダンが相手をして対処に当たる形だ。これなら、ザウーダンを暗殺というわけにはいかないだろう。

ここから銃で狙い撃つのもいいが、初撃で多数を狩るためにはやは

り俺が切り込むのがいい。

それに……銃じや感触が分からない。

今後のために、エネミーと言えど殺す感触に慣れなければならないのだ。

(行くぞアフィン)

(OK相棒。1)

(2の……)

(3!)

岩陰から飛び出し、一番近くのウーダン向かって駆ける。

「キイツ!?!」

飛び出して6、7歩走ると、目標のウーダンがこちらに気付く。

速度優先とはいえ極力足音は消してるんだが、流石に察知が早い。だが、これなら迎撃より早く攻撃できる!

反射的に爪を振るおうとするウーダンの眼前に滑り込み、その腕と首を同時に斬り飛ばした。

「……思ったより嫌な感触だな」

だが、大丈夫だ。

ちゃんと動ける。

気分は悪いが、固まりはしない。

こちらに気付いていた左右のウーダンの眉間を、両手の双小剣で同時に貫く。

肉の裂ける感触が剣越しに伝わってきた。

「キイツ!? キキツ!」

「キツ!」

「キヤツキヤツ！」

騒ぎに気付いた猿共が騒ぎ出し、俺を取り囲もうと動こうとする。だが、そう簡単に囲まれてはやらない。

囲もうと回り込むウーダンに、P フォトンアイツ Aを発動する。

「レイジングワルツ！」

弾丸のようにウーダンに直進し、到達した所でその顎をアッパーのように斬り上げた。

ウーダンの頭部が両断される。

飛び上がった俺に対して、ウーダンの一体が飛び掛かってきた。

「式！」

そのウーダン目掛けて、もう一度弾丸のように直進。

「キツ!？」

空中で方向転換するとは思ってなかったのか、驚愕の鳴き声を上げるウーダンに、今度は打ち下ろしの刃で頭部を両断した。

その身体を踏んづけて、奥にいたもう一体のウーダンに飛び掛かった。

避け切れないと見たのか、そのウーダンは腕を上げて防御の体勢を取る。

俺は構わず、その腕を斬り付けた。

両腕を重ねていたので両断とはいかず、刃が途中で止まる。

だが――

「ギギギイツ!？」

エレキから電撃が流れ、ウーダンの全身が硬直した。

電撃で肉が焼ける匂いを感じながら、電撃で空いた口にもう片方の剣を差し込む。

喉元を貫かれたウーダンが絶命したのを感じると、エレキを両方とも引き抜いた。

「さて、初撃で六体殺せたはいいが」

周りを見回す。

「……囲まれたか」

ウーダン達が俺を囲み、ザウーダン達がその後ろで全体を見る形だ。

エネミーといえど、成程。中々連携が取れていると見える。

ウーダンは……二体減ってる。ザウーダンも知らぬうちに手下が減っていて首を傾げているようだ。アフィンが上手くやったようだ。

周りのウーダンはそんなことも知らずに、俺を囲んだことに喜んでいる。

「ハン。所詮は猿知恵だな」

俺はそのアホ面向けて、テクニックを6つ展開した。

「フォイエ・並列起動6」

俺の周りに展開された小さな爆炎が拡散するようにウーダンに走る。

周りにいたウーダン達は巻き添えを食わないよう跳んだが、目標にされたウーダンは避けることも出来ずに火の玉を受けた。

火で毛皮が焼け焦げ、消化しようとウーダンが地面を転がる。

チツ。やっぱ一発じゃ殺せねえか。今後に期待だな。

「フオイエ・並列起動12」

その転がるウーダンに向け、一体につき二発ずつ追加で打ち込む。抵抗も出来ず、ウーダンは全身火だるまとなる。後に残ったのは焦げた猿肉だけだった。

「後は……6と3か。掛かってこい」

「ギ……………ギキイ！」

遠距離は危険と見たのか、残り6体のウーダン達が突っ込んでくる。ザウーダン達はその後ろで、地面から何かを引っ掻こうとしていた。

あれは……確か身の丈程の石を持ち上げて、こちらに投げってくる。ザウーダンの攻撃パターンだったな。前衛をウーダンに任せて、遠くから投げってくるつもりか。

あつちはアフィンに任せとくか。あいつも場所を移動して特定されないようにしてるようだし。

「となると俺は、ウーダン共だな」

一番先に到達した正面のウーダンに、右手の剣による逆薙ぎで一閃するが、後ろに大きく跳ばれ、躲かれる。

右から襲い掛かってくる二体。爪を振り下ろしてくるその攻撃を、返す刃で受け止めた。

「学習しねえな」

エレキの機能を発動。

電撃が二体の身体に襲い掛かり、毛皮に覆われた全身が焦げる。

そのまま重力に従って落ちる二体にトドメを刺す前に、正面からのウーダンの爪を左手の剣で受け止め、左から来たウーダンは右足を背面に回して、腹部に蹴りを叩き込む。

そして上空に蹴り上げた左のウーダンを尻目に、正面のウーダンを電撃で沈め、後ろ二体を正面に捉える。

「ワイルドラブソディ！」

回転斬りと回転蹴りを組み合わせたP フォトンアーツ Aを発動。

一太刀目、左前の奴に防がれる。

二太刀目、左前の奴の胴体を浅く薙ぐ。

一撃目、左前の奴に叩き込み、そのまま右前の奴にぶつける。

二撃目、左前の奴の頭部に叩き込み、二体纏めて地面に叩きつける。

半周して三太刀目、最初正面にいたウーダンの首を飛ばす。

一周して四太刀目、地面に叩きつけた二体まとめて回転を曲げて縦に切り裂く。

三撃目、落ちてきたウーダンを地面に叩きつける。

五太刀目、横回転を再開して電撃で固まっている二体の首を刎ねる。

六太刀目、三撃目で叩きつけたウーダんに剣を突き刺す。

周り六体の息の根が絶たれた。

「近接は問題なし、と」

さて、あとはザウーダンだが……周りを見回してみる。

ザウーダンは三体とも手を撃たれたようで、持っていたであろう身の丈程の石が地面に落ちていた。

手を押さえ、地面に蹲るザウーダン達。

俺はエレキを地面に突き刺し、新たに武器を取り出した。

「火杖『フレア』」

法撃武器の中でも炎に特化した長杖を構える。

「フオイエ・並列起動3」

威力が増幅された爆炎が、それぞれに一発ずつ放たれ、直撃した。爆炎はザウーダンの全身をたちまち呑み込み、耳障りな叫びが耳に響いてきた。

「二丁上がり」

「へへ。上手くいったな、相棒」

近くの木に隠れていたアフィンと合流し、その場を後にした。

「やっぱ、相棒がいると楽だよなあ。流石主席ってやつ?」

あの後も何度か戦闘が行われ、しかし一度の敵数が少ないのもあってより楽に、指定討伐数に達した。

今は道中のエネミーを遠距離からアフィンと一緒に銃で狩りつつ、指定ポイントに向かつてる途中である。

「他の同期も二人一組だけど、俺達以上に早いのないんじゃないかねえかな?」

「道中でもこんなに出るんなら、最初から指定ポイントに向かつてりやもつと早かったらうけどな」

話ながら、道先に現れたガルフ三体の群れの内、二体を俺がフオイ
工四発、一体をアフィンの長銃が仕留める。

学校の成績は優秀でも、初めての实战だし、油断せずに挑んでいた
つもりだが、ここまで楽勝だとな。

念のための休憩を挟みつつ任務を遂行する筈だったのに、息一つ切
らさないせいでそれも入れなくても問題なさそうだ。

卒業試験がこんなだと、なんか肩透かし。

「まあいいか。これも俺の成長によって齎された寂しさよ」

「はは。相棒は変わんねえな」

「当然。ゆくゆくは六芒均衡も超えた最強最高のアークスになる俺
だ。修了任務くらいかるーく飛び越えないとな」

六芒均衡。

それは、アークス最高戦力の六人だという称号。

世襲制であるその称号と、アークス全体の一部権力を得ると同時
に、失われた技術によって生み出されていた最強の武器・創世器をそ
の手にすることが出来るのだ。

現存する数少ない創世器は、普通の武器とは天地の性能差があり、
その武器を手にするだけで弱小の戦士が超一流を超えろと言われて
いる。中でも四十年前の大戦を戦い抜いた三英雄の一人、六芒の一・
レギアスの持つ創世器『世界』^{よのほて}は、その一振りですべてを両断すると言わ
れている程だ。

そんな先達を超えるのが、俺の野望の一つ。

そんな創世器を超えた武器を作り上げるのが、俺の野望の一つ。

まあそーゆー大言壮語を昔っから言ってたもんだから、士官学校
じゃアフィン以外に友達いなかったわけだけでも。

俺は欲張りだからな。

これが欲しいと決めたら何としても手に入れるし、こうなりたいと
決めればあらゆる努力を惜しまない。それが真の強欲だ。

「というわけで目先の野望、修了任務異例のスピード遂行を達成せねばな。ほれアフィン。道はこつちだぞ」

「そんなに急ぐなよ相棒。どーせ他はついてこれないって」

合格後に出来るようになることを一つ一つ頭に思い浮かべて、浮かれたスキップしながら立ち塞がるウーダンをフオイエっていき、道が十字に分かれた広場に辿り着いた。

その時だった。

『管制より、ナベリウスに寄港中のアークス各員へ緊急連絡！』

緊急用回線に、通信が入り込んだ。

「あ……？ 緊急連絡？」

広場の中心手前で立ち止まり、横に追いついたアフィンにも同様の通信が入ってきたことを確認する。

緊急連絡。

普通、修了任務で持ち上がるような単語ではない。

それを押してでもこうして持ち上がったということは、普通でないということだ。

普通でないということは、異常事態ということだ。

『惑星ナベリウスにてコードD発令！ フォトン係数が危険域に達しています！』

「コードD……ッ!？」

そしてコードDとは。

Dに当たるものが現れたということだ。

そのDとは――

『繰り返します。惑星ナベリウスにてコードD発令！ 空間浸蝕を観測、出現します！』

「お、おい相棒！ あれ！」

そして、そいつは現れた。

まさに、黒。

まさに、醜。

まさに、影。

まさに、闇。

それこそ――

「ダーカー……」

『ダーカー出現を観測！ 空間許容限界を超えています！』

赤黒い霧のような何かを伴って地面から湧き出たそいつは、次々とその数を増やし、最終的には八体、俺達がいる広場に出現した。

「こいつらが……ダーカー？ アークスの敵で、宇宙の敵で……全てを喰らい尽くすもの」

隣のアフィンが、怯えたようにそいつらを見る。

探知には……チツ。こいつら以外にも出現してるようだな。

目の前にいるダーカーは、四本足の蜘蛛のような造形をしている。中心にある赤いコアがついた本体から、斜め四方に分かれた脚が伸び、本体を支えている形だ。記憶の中にある資料によれば、確かダガンと呼ばれていた個体だ。

「なんでだよ！ どうしてだよ！ ナベリウスにはいない筈だろ!？」

「アフィン、落ち着け」

「相棒！ でもよ！」

「元々ダーカーなんざ、空気読まずに現れて無差別に攻撃するのが生き甲斐みたいな連中だ。いや、生き甲斐つても生物かどうかも怪しいか」

アイテムバックから、新たな武器を取り出す。

「剛剣『ブーステッド』」

大剣にカテゴリズされる、身の丈程ある鉄塊のような片刃剣を構える。

やっぱり重いな、こいつは。この重さこそが武器なんだが。

「アークスになりやいずれ戦う相手だ。どこに現れるか分からんから試験に導入されなかったが、弱小個体のダガン如き、狩れずにアークス語れるかよ」

「相棒……」

「むしろ、俺と二人だけで隠す必要もない今だからこそ、使えるもんがあるだろ？」

「！ そ、そうだよな！ 使っ方がいいんだよな!? アレ！」

「やるぞ」

「おう！」

怯えが抜けたアフィンと共に、叫ぶ。

その力を。

「P D !!」

フォントドライブ

なんかイケメンな先輩です

シフタとデバンド、という補助テクニクがある。

この二つはそれぞれ、攻撃力と防御力を強化するというもので、主にテクターのクラスに属する人が仲間のサポートに使うテクニクだ。

一般的なアークスはその恩恵を受けるのみだが、ここで一つ踏み込んでみよう。

一体何の攻撃力、防御力が強化されているか。

独自に調べてみた所、それぞれ装備している武器と防具であるユニットの強化が為されていることが分かった。

それによって結果的にアークスの攻撃力と防御力が強化されているのだが、しかしそれはつまり、アークスそのものの強化ではないということだ。

武器やユニットのフォトンを活性化させて強化しているに過ぎず、アークスが強くなったわけではない。

ならば。

ならば、アークスの肉体を強化すればどうなるか？

普通なら武器に注ぎ込むフォトンを全身に行き渡らせて、全細胞を強化したらどうなるか？

その答えが、フォトンドライブ P Dである。

光景がゆっくり流れるような感覚。

蟲のように素早く蠢いていたダガン達の動きも、木々から落ちる葉も、空気の流れも。まるでスロー再生のようによつくりと動いてい

る。

そんな中、俺とアフィンだけがいつも通りに動く。

いや、いつも通りじゃないな。感覚も強化されてるから、ゆっくりに見えるだけ。

俺達が速いんだ。

「ブースター、起動」

ダガンに向かいながら、今は軽々と振るえるブーステッドの機能を起動する。

片刃の鉄塊、その峰に備え付けられたフォトンブースターが噴射。

加速された剣が横並びのダガン三体を右から薙ぐ。

片刃の鋭さは、まるで無い。しかし刃がある故に、殴打ではなく斬撃。

そして切れ味を生み出すのは鋭さではなく、その重量だ。

「斬り潰れる」

何の抵抗もなく吸い込まれたその斬撃は、三体のダガンを横に両断しながらその身体を広場の壁に飛ばし、叩きつけた。

正面にもう一体のダガン。

柄を回転させて、勢いを殺さないまま大上段に構える。ダガンは未だ反応出来ていない。

振り下ろした。

ダガンの身体が縦に両断されつつ潰れ、そのまま剣が地面まで到達すると、重い音と同時に3mくらいの地割れが出来た。

おお。ちよつと勢い余ったか。

目の前のダガンが、靄が霧散するように消滅する。

先に壁へと叩きつけた三体も同様に消えた。

「すげえ……！ やっぱすげえよP フォトンドライブ D！ ダーカーも瞬殺だ！」

アフィンの方から歓喜の声が上がる。

他四体のダガンは、アフィンの銃によってどれもコアを撃ち抜かれたようだ。

俺が担当した分と同じく、消滅していくダガン。

「相棒の技術、やっぱスゲーよ!」

「浮かれるのはいいが、ダガンはこの先でも他のところでもまだまだ湧いてるみてえだ」

「つてうえつ、マジかよ……」

しよぼくれるアフィン。忙しいやつだ。

通信は……駄目か。ダーカーが出てきた影響か、さっきの緊急連絡を最後にうんとすんとも言わなくなりやがった。

指定ポイントに辿り着くまでは歩きつていう試験だったから、ズルしないように転送装置のテレパイプもねーし、ほんつとタイミング悪い。

「探知に引つ掛かった数からして長期戦になるのは間違いないな。ただでさえPフォトンドライブDはバテやすい。倒せる自信はついたろうから、ここぞつて時にとつておけ」

「うう……そうだよな」

フォトンドライブ
P D。

俺と、俺が教えたアフィン以外に使い手のいない、肉体強化のオリジナル技術である。

フォトンを全身に流動させ、活性化。神経、筋肉、骨の強度までも、全身のありとあらゆる強化を行うのだ。

どれだけの強化が為されたかは計測したことがないのでわからないが、テクニク並列起動の最大数と模擬戦闘、それと今の実戦を鑑みるに、単純計算で通常の戦闘能力から五倍に底上げされてると見て

いいだろう。

とはいえ、発動中は体内のフォトン自体も消費するし、全身を活性化させているので通常状態より疲れやすいという欠点もあるのだ。俺の場合は前者はある程度、後者は完全に克服する術を心得ているのだが、同じ第三世代でもレンジャーに特化しているアフィンにその術を扱うのは難しい。というか出来ない。

「で、どうする？ 相棒。救助を待つか、とにかく動くか」

「そうだな……」

……恐らく、ダーカーがここに出てきたら迎撃し、身を隠して救助を待つ、というのが一番交戦確率が少ないだろう。

探知を使える俺ならば、急に俺達の前に現れたりしない限りは逃げられる。

生存確率はそれが一番高い筈だ。

(でも、そんなのつまんねーしな)

通常状態でダーカーと戦えるかも確認したいし、数を減らせば減らすだけ、他の修了任務に來ている訓練生達も楽になるだろう。

それに、この異常事態……何か原因があるとするれば、それを突き止められるようなら突き止めておきたいところだ。

「とにかく動く。ただし、元々の指定ポイントに向かってだ。他の奴等が集まるとすれば、そこが一番可能性があるだろう」

「分かった。それじゃあ、早速動こうぜ相棒」

重たいブーステッドをアイテムパックに仕舞って、エレキを再び取り出しつつ、指定ポイントを目指して俺達は十字路を真っ直ぐ進んだ。

「つたく、キリがねえな！」

目の前に迫ったダガンをエレキで四つに分断し、その後方に向けて
フォイエを三発放った。

爆炎がダガン一体を呑み込んだのを横目で確認しつつ、後方のア
フィンへ向かおうとする個体にエレキを一本投擲する。

コアに刺さる前から走って近付き、その横を駆け抜けながら引き抜
いて、振り返り様フォイエを五発放った。

結論から言えば、通常状態でも問題なく戦えはする。

ダーカーはその習性故に最優先で討伐すべき対象として挙げられ
るが、その危険度は原生種と同じく個体によって違う。下もいとこ
ろのダガンでは、ザウーダン達とそう変わりはない。

ただ、その数が問題だった。

最初に探知していた時よりもその数は増え、密度まで変わってきて
いる。

「ピアッシングシエル！」

俺の後ろから迫ってきていたダガンをアフィンが貫通性能の高い
P^{フォトンアーツ}Aの銃撃で撃ち抜く。

「フォイエ・並列起動7！」

俺が生み出した爆炎が同じ場所へ向かって着弾。爆発が重なり、範
囲の広い爆炎がダガンの集団を蹴散らす。

さつきからこれの繰り返しだ。

俺が近接戦闘とテクニクを織り交せて多数を相手取り、そのバツクアップとしてアフィンが離れたところから援護射撃を行う。アフィンに向かいそうな奴は優先して撃破。アフィンは俺の死角から襲い掛かる奴を撃破という構図だ。俺に負担が大きい戦略だが、体力とフォトン消費する問題は俺なら克服可能だ。ダーカーが出てきた影響で、フォトン係数が高いこともある。

しかし、初めての戦闘なのにいくら倒しても湧いてくる敵というのは、精神面ではかなり堪えてくる。

神経を尖らせ続ける内にミスが出てきて、敵の攻撃を受けそうになるのだ。今はカバー可能な範囲だが、このままじゃジリ貧だ。

なんとか脱却したいというのに、ダーカー達は地面や崖の上からどんどん湧いてくる。

「くっそ、来るなら一気に来いよなあ……。そしたら纏めて消し飛ばしてやるっつーのに」

「はっ……はあ………なんで、こんなにたくさん来るんだよ……」

くそ……。アフィンも息が上がってきたな。奇襲を受けるとか危険な時にはPフォントドライブDを使ってきたからなあ。

アフィンもテクニクが使いこなせるならまだ楽だったろうが、あらゆる武器やクラスのスキルを万遍なく扱う俺とは違って、アフィンはレンジャー。

フォトンを弾丸として撃ち出す中・遠距離型のクラスだが、アフィンの扱うアサルトライフルは集団戦には滅法弱い。

集団を巻き込むPAも無いことは無いが、隙が大きい分爆風で多数の敵を吹き飛ばす大砲と比べると雲泥の差だ。

俺が持つ自作武器に大砲もあるが……。今は駄目だな。集団を吹き飛ばすならテクニクで出来るし、問題の解決にならん。

アフィンは迫ってくるダガン達を見据え、後退しながら叫ぶ。

「何が目的なんだよお前等は!!」

その時。

ダンドンダンツと。

目の前のダガン三体がコアを撃ち抜かれて、消滅した。

「なっ!？」

(銃撃!? 一体誰が!?)

俺でもなければ、アフィンでもない。

俺達の後ろからの射撃だった。

俺達二人を挟んで、それに掠りもせずダガンの急所に、それも三発連射で……?」

「……いや、恐ろしいぐらいドンピシャ」

その声は、俺達の背面から聞こえてきた。

後ろを振り向く。

「悠長なエコー置いてきて正解だったぜ」

そこには、ガンスラッシュの構えを解いた赤髪のアークスがいた。

上半身は赤、下半身は黒でコーデインイトされた戦闘服で、顔には鼻の上に右下がり一文字に切り裂かれたような古傷がある。俺より少し大きいぐらいの体躯と鍛えられた肉体を持つ、飄々とした雰囲気その肩の上を、正規アークスの証とも言える機械生命体のマダグが、その色を赤に染めて浮いている。

今のをこの人が……?」

「アークス、か……?」

「救援に来てくれたんですね! 良かった、助かった……」

アフィンが隣で一息ついた心地。

俺もようやく張り詰めていた緊張の糸を少しだけ緩めることが出来た。

こちらへと歩いてくる赤髪のアークス……：そーういや先輩になるんだな。その人は困った顔をして頭を掻いていた。

「あー……うーん。なんつーか、思ったより数がいるな、これ。正直すっげえ予想外」

……これで一段落って顔じゃねえな。

空を見上げるも、キャンプシップらしき影は見えない。

「え、あの……？　ちよつと先輩、助けに来てくれたんじや……？」

「おう、だから今助けの助けを呼んどいた。合流地点はこの先だ、突っ切るぞ」

「ちよ、ちよつ！　お、俺達も戦うんですか!？」

あー、やっぱそういう感じかー。

ま、しゃーない。ちゃんと帰れるってわかっただけよしとするか。

先輩の助力もあるわけだし。

エレキの方も……問題なさそうだ。

「アークスなんだから当然だろ？　ほら、お前と違ってそっちの奴はしつかり準備してるぜ」

「相棒……」

「情けない声出すなよアフィン。助けの助けを呼んどいたって話ですけど、そっちの通信は生きてるんですか?」

「ん？　まあな。とはいっても、アークスシップじゃなくて近くにいるキャンプシップにしか繋げないけどな」

「キャンプシップには繋がるんですね……。俺達が乗ってきたのは、試験始まったら帰っちゃったからなあ」

となると、先行部隊が訓練生の救出にあたって、キャンプシップに待機している部隊が合流地点を目指してキャンプシップを動かすつて具合か。

本来なら無人でもアークスシップの遠隔操作でキャンプシップを動かせるのだが、今回のようにアークスシップと繋げないのならば、無人では救出部隊と連携が取れず、合流することが叶わないのだろう。

「……お前、初陣にしては肝が据わってるな」

「そうっすか？ まー流石にダーカーは想定外でしたが、いつまでも慌てふためいてちやこの先やっていけないでしょう」

「おい相棒。それ俺のことデイスってんのか？」

「はは、中々見所あるぜ。……………って、んん？」

「? どしました？」

「いや、ちよいと失礼」

そう言う先輩はこちらをじつくりと——え、なに？

俺、そっちの気はないんですけれども。

「先輩、今こいつ頓珍漢な事考えてますよ。俺にはわかります」

「顔色から俺の心を読むな。先輩、俺の顔に何かついてますか？ 傷でも出来てますか？」

「そういうわけじゃないんだが……。その顔、どっかで見たことあるような……………どこだったかな？」

「ん？ 救助対象のリストを配られた時に見た、とかそんなんじゃないんですか？」

「いや、俺そういうの渡される前に来たからな」

「……急いでくれたのは有難いですけど、救助対象とそれ以外をどやって見分けるつもりだったんですか？」

「とりあえず目の前のアークスっぽい奴を助けてりやいいだろ？」

すごい大雑把。

ピンチにアークスも訓練生もないし、アークスだったら合流して一緒に救出に向かえばいいだけかもしれないけれども。

「ま、考えるのは後でいいか。それじゃあ行くぜ、ルーキー共。きちんとついてこいよー!」

「了解でありまーす」

「うう……なんで初陣からこんなことに……」

「そう悲観するなよルーキー。安心しとけて」

先輩はその厚い胸板を叩いて言う。

「二人とも、俺が守ってやるからよ」

やだ、イケメン。

俺達も戦うとは言うが、近接と射撃が同時に出来るガンストラッシュだからといって、見た目ファイターの俺に矢面に立てと言うつもりはないらしく、先輩は先頭をズンズンと進んでいた。武器の特色を考えれば、俺、先輩、アフィンの順で並んだ方が戦略的に有効なものにも関わらず、だ。

俺達を守る、というのは言葉だけではないと分かる。
良い先輩らしいのは伝わってくるのだが――。

(なあ相棒。やっぱり秘密にしといた方がいいよな?)

隣を歩くアフィンが小声で話し掛けてくる。

(ああ。先輩は悪い人じゃないだろうが、わざわざバラすメリットはないな。流星に命の危険があっても使わないってわけにはいかないが……)

(……俺も誰にもバラさないって条件で教えてもらった身だけどき、そんなに警戒することあるのか？　ダーカーが知ったところで、真似できるわけじゃないだろうに)

(それはそうだがな……)

あんなもんを埋めこんでくる組織を、知ってる俺が信用しろってのは無理な話だ。

そのことは、アフィンにも言えないのだが。

(とにかく先輩がいる間は、俺は普通のファイターとして過ごす。さっきの腕前を見る限り先輩は結構な実力者だ。先頭を迷いなく歩ける感じからして、近接も出来ると見ていいだろう。テクニクが使えない分俺の立ち回りは制限されるが、自分の身を守っておけばなんとかなるだろう)

(そうは言われても、俺ビビってついつい使っちゃまいそうなんだよなあ……)

(反射的に使っちゃまうなら、命の危険がある時だって言ったら。そんなときや仕方ねえさ)

元々反射的に使えるくらい身体に染み付かせたのは俺だしな。

「おーい、ルーキー共ー。なにこしよこしよ内緒話してんだ？　置いてっちまうぞー」

「あつ、待ってくださいって」

「いえいえ、大した話でもないです——っ!!」

探知に反応があった。

くそ、またこのパターンか……！ 目の前に来てやがるな。
しかもこれ、ダガンとは違う反応もあるぞ。

「お、出やがったな」

先輩は慌てた様子もなく、目の前の地面から湧き出たダーカーを見据える。

ダガンを数体先頭に、台座と塔をくっ付けたようなダーカーが三体、そして蟻の腹部分が肥大化して頭まで呑み込まれたようなダーカー二体が、次々と姿を現した。

「うわあ！ な、なんかさっきまでとは違う奴等がいますよ!?!」

「プリアーダに、カルターゴだな。初見だとあっさりやられちまう
アークスがっつと、お前等!」

「! アフィン、横に跳べ!」

台座と塔をくっ付けたようなダーカー——カルターゴ三体がその胴体の羽根部分を開き、頭の上で黒いフォトンが集まり出したのを見て、俺は咄嗟に指示を飛ばした。

「うひい!」

アフィンと先輩が左に、俺が右へと飛び、一拍遅れて俺達がいた場所を三つの黒い光線が通り過ぎて行った。

「あつぶねえ。やっぱ資料予習しといて正解だったわ」

「……カルターゴはビーム撃ってくるから気を付けろって言うつもりだったが、勉強熱心だなお前さんは」

跳んでそのまま腰を抜かしたアフィンを横目に、先輩は武器を構える。

剣モードにしてるので、近接戦に挑むつもりなのだろう。

「あと、プリアーダは放っておくとエル・ダガンつてのを産むから優先的に倒す、ですよね」

「ああ。やっぱ見所あるな。大体そういうの知らなくて痛い目見るのが通過儀礼なんだが」

「これでも主席なもので」

手を貸してアフィンを立ち上がらせ、俺達も武器を構えた。

羽根部分を閉じたカルターゴは中々硬く、正面から当たるには面倒な相手だ。その分胴体の背中部分のコアを突けばすぐに倒れるが、それには一々回り込まなきゃいけない。

空を飛ぶプリアーダは、跳躍で届かない所に飛ばれると近接クラスでは手が届かず、そこからエル・ダガンを生み出すダガンエッグを産んでくるので、厄介な輩だ。

「カルターゴとダガンは俺と先輩、プリアーダはレンジャーのアフィんに任せようと思うんですが、どうですか？」

「戦略もよし。お前さん、ほんとに新人か？」

「よ、よし！ あの飛んでる奴狙えばいいんですね!？」

「ああ……って言いたいところだが」

「え？」

なんか間違えたかと思ったら、先輩は一人前に進み出た。

「ここは俺一人でやる」

「え、お、俺達もやるんじゃないんですか!？」

「アフィン、さつきから狼狽え過ぎ……。急にどうしたんですか先輩」

「んー？ いや、出来の良さそうな後輩達に、ちよいと先輩が良いとこ

「見せようかと思ってな」

俺達が話し合ってる間にも、ダーカー達は迫ってくる。
しかし先輩は余裕の表情を崩さない。

この程度の奴等に作戦など必要ないと言うように。

「見て驚け、ルーキー共！」

そう言っつて先輩は、こう続けた。

フォントドライヴ
「P D！」

「は!?!」

今度は俺も狼狽えた。

オリジナルかと思ったら、二番煎じだったの巻

圧倒的だった。

ダーカーが反応出来ない速度で迫ったかと思うと、ダガン数体があつという間に縦一文字に切り裂かれた。

カルターゴも三体が三体とも再度のビームを放つ間もなく回り込まれ、背中のコアを貫かれていく。

そして銃モードに切り替えると、プリアーダの腹の先にあるコアを撃ち抜いていった。

瞬く間に、ダーカー達は地に墜ち、その姿を消したのである。

「おっし。これで終わりだな」

それを為した先輩は、涼しい顔でガンスラッシュを腰のホルダーに掛け直す。

「どうだルーキー共？ 初陣でこれ見れるの、レア中のレアだぜ？」

「……………」

俺もアフィンも、開いた口が塞がらなかった。

驚きである。

驚愕である。

驚天動地である。

ただ、先輩の狙ったものではないだろう。

「あ、相棒……………」

「ん？ どした？」

「…………先輩」

秘密にするとは言っていたが、これは聞かなければいけないだろう。

俺の秘密がバレるとしても。

「今の、誰に教えてもらったんですか？」

フォトンドライブ

P Dは、俺が自分で開発して編み出すまで数年掛かったが、人に教える分には簡単だ。

やり方と感覚さえ掴めば、大体の奴は出来る。

フォトンドライブ

しかし、俺が開発したP Dは、アフィン以外に教えた覚えがない。また、アフィンにも教えられる筈がない。

俺が聞いてないだけではなく。

アフィンは人に教えられるほど熟練してるわけではないのだから。

「……んー？ ああ！」

先輩は、数秒の間首を傾げていたが、やがてポンと手を打ち、言う。

「お前さん、もしかして師匠の事知ってるのか？」

「……師匠？」

……カマかけてみただけだったんだが、師匠ってことは先輩もまた誰かに教わったってことか？

開発者の俺が知らない使い手が、また増えた。

「そうそう。十年くらい前だったかな？ ひよっこり現れて、原生種を素手の一撃でぶっ飛ばしてるところ見て一目惚れしちゃって、弟子入り志願したんだよ」

「十年も前から……」

「原生種を素手の一撃って……。そんな、熟練のアークスでも出来るのなんかいないですよね？」

「ん？ となると、お前さんらも探知とか、テクニクの並列起動とか、ディスクの改造起動とか使えるのか？」
「っ!？」

この人……どこまで？

「えーとお、その……」

「いいよ。言っちゃまおうぜアフィン」

「……わかった。俺は、フォトンドライブP Dだけです。こっちの相棒に教えてもらいました」

「成程……。そっちのお前さんは？」

「全部使えます」

先輩が目を見開いた。

俺は続ける。

「ただ、どれも俺が独自に開発した技術の筈です。先輩が言う師匠の事は知りません」

「……はー、すっげえな。それにすげえ偶然。俺も師匠に教えてもらって、フォトンドライブまともに使えるのP Dくらいだっつーのに」

人を選ばないという意味では、確かにフォトンドライブP D程有用なのはない。

探知——フォトンマップP Mは、体内のフォトン_{フォトン}を薄く広げるように放出して、範囲内のものを把握できる。だが、外に出したフォトン_{フォトン}を支配下に置く必要がある上、限りなく薄くしなければすぐにバテてしまうのがオチだ。把握した情報を演算処理する時の脳の負担も尋常じやないので、回復効果を生み出すフィールドを展開するテクニク、レス_{レス}タを常に自分にだけ展開するようにしなければ、耐えられるものじゃない。

テクニクの並列起動も同様に、数が増えれば増える程、それこそ腕を増やした数だけ動かすかのような負担が脳に掛かる。

ディスクの改造起動は、威力を底上げする分挙動が選べないP Aフオートンアーツ やテクニックを、アークス既製の零式のようにディスクをカスタマイズすることで独自の挙動に変えることだ。本来ディスクを使うことでアークスはP Aフオートンアーツ やテクニックを使うことが出来るようになるが、一般的なアークスは威力やチャージ速度を短縮などを多少弄するか零式に変えるのみかのところを、俺は自分好みにカスタマイズして戦略の幅を広げることが出来る。ちなみに、零式と旧式は同時には扱えないが、俺はどちらも扱えるようにしてある。そのカスタマイズしたディスクさえあれば誰でも使うことは出来るが、そのカスタマイズ出来るのが俺の知る限り俺しかない。……いなかったのだ。

他にも自作武器とか、色々と開発した技術はあるのだが……一番教えやすく、習得しやすいのはP Dフオートンドライブ だろう。

「……………その、師匠っていうのはどんな人だったんですか？」

「あー……………それが、十年前に別れたつきりで、もう顔も思い出せないんだよなあ。極秘なのか、アークスの筈なのに噂も聞かなかったしよ。けど、教えてくれたことや言ってたことはしっかり覚えてるぜ」

忘れる順としては逆じゃねえかな……………。

「凄かったんだぜー、師匠は。さつき言った原生種の他にも……………そういや、お前さんはテクニックの並列起動はどれくらい出来るんだ？」「そうですね……………。通常状態で12、P Dフオートンドライブ 中なら60つてところですよ。後先考えずにやるなら、15、75つてところですよ」

具体的に言うなら、常に掛けてるレスタを解除して、その分の演算処理を並列起動に回すならつてことだ。

ただしそれをやると多分その場でぶっ倒れるので、やらないが。ちなみに、P Dフオートンドライブ は脳をも強化するので、演算処理やその負荷に耐える許容も強化される。なので、並列起動の最大数も五倍に増える。

「ほうほう。やつぱフォトンドライブP Dと並列起動の相性はいいんだな……。お前さんも凄いが、師匠はもつと凄かったぜ。最大数、どれぐらいだったと思う?」

「うーん……。相棒が60だから、100とか!」

「そうだなー……。俺の限界の倍で、150とかですかね?」

「と思うだろ? 聞いて驚け」

うーむ。

人間の脳の許容にそこまで違いがあるとは思えんし、精々80とかが現実的だろうけど――。

「5000だ」

「ちよつと言ってる意味わかんないです」

完全に人間辞めた。

文字通り桁が違う。

いや、5000とか。一発で脳がぶっ壊れるどころじゃないよ?

「俺もそう思うけど、実際にそうとしか思えないくらいの数見せてくれたんだよ師匠。探知の範囲も、俺は今でも4mが限界なのに、師匠は30kmとか言ってたし」

「ますますもって意味わかんないです」

「……そんな人が全く知られてないとか、どんだけ極秘の任務についてたんだよその人」

ちなみに俺のPフォトンマップMの探知範囲限界は500mだ。

師匠さんは俺の60倍である。

なんなの先輩の師匠さん。

神?

「あんまりにもヤベーもんだから六芒均衡の人なのかと思ったら違う

みたいだったし、ほんと謎だらけな師匠だったよ」

「そうですね……俺くらいでもどれだけ大変か分かるだけに、ヤバさがよく分かります」

「けど、良い師匠だったよ。まさにアークスの鑑！　つつー感じだな」

そう語る先輩は正に憧れを語るようで……本当にその師匠を尊敬していたのだろう。

十年も前でそれつきりだというのに。

その桁外れの能力だけでなく、人間性も、先輩が憧れを抱くに十分な人だったのと思われる。

「つと。立ち話してる場合じゃないな。早く合流地点に行かないと、エコーにどやされちまう」

「あ、そうっすね。早くここから脱出しないと……。行こうぜ、相棒」
「……ああ」

二人と共に歩きながら、俺は考える。

師匠、ねえ……。

その能力にとんでもない差がついてるとはいえ、開発した技術が偶然一致してるなんて、有り得るのか？

偶然じゃないとするなら、そこに一体どんな意味がある？

「スリラーブロード！」

「グレネードシェル！」

「フォイエ、並列起動9！」

先輩が放り投げた弾倉を撃ち抜くP Aを。
フォトンアーツ

アフィンが爆発する弾丸を放つP Aを。
フォトンアーツ

そして、俺が九つの爆炎を放ち、三つあったダーカーの集団がそれぞれの爆発によって吹き飛んだ。

先輩は、かなり心強い。

技術を開発しようとする戦術経験は皆無に等しい俺やアフィンと違い、判断が早く、的確だ。判断してから動くまでの時間も短い。射撃は（最初のはマグレと言ってた通り）遠くの敵を精密に狙うのは苦手なようだが、近接で組み合わせる分にはやり手だった。

……多少前に出過ぎるくらいはあるが、頼り甲斐があるのだと思っておく。

「しかし、近接しながらテクニクとか。クラスに縛られずに色んなことが出来るって、いいよなあ第三世代は」

「ふ、ふう、ふうー………………。これだけ万遍なく出来るの相棒ぐらいですよ。俺や他のみんなは、得意なクラスで固めちゃいますし」

「俺は欲張りなもんで。こういうのコンプしたい性質なんですよ」

先輩には隠す必要もないと判断したので、俺も技術を余すことなく使っていた。

それもあり、アフィンと二人の時よりもずっと楽に、道中のダーカー達は消滅させられていく。

余裕綽々だった。

油断はしないが。

「さて、優秀な後輩の活躍もあってもうすぐ合流地点なわけだが……探知の反応はどうだ？」

「そうですね……」

腕に装着したデバイスから呼び出したスクリーン。そこにある地図上の、先程合流地点に付けたマークA周辺と、P Mの情報を照ら
フォトンマップ

し合わせる。

ふむ……。現在位置も周辺も、地図とP フォトンマップ Mに相違はないな。

「原生種もダーカーも反応なし。ただ……。湧き出るとしたら合流地点目の広場ですかね。奇襲も警戒しますが、大量に出てくるのはここくらいでしょう」

「うし、じゃあちやっちゃと終わらせますか」

「二人共、ハイペース過ぎだつて……。もうすぐ終わるつて言っても、もう休みたい……」

「……モノメイト飲むくらいはいいんだぞ？」

アフィンだけ余裕なかった。

まあこいつ、元々戦闘は苦手だつて言つてたしな……。P フォントドライブ Dで強化は出来るようにしたが、アークスとしては調査を主にするのとことだ。

三人で合流地点を目指して歩いていると、奇襲こそなかったが、案の定目の広場にてダーカーが湧き出してきた。

「うわあ！ こ、ここにもこんないっぱい！ ど、どーするんすか先輩!？」

「いちいちうつせーなあ。道中含めりやもつといただろうが、いい加減慣れろつての」

「……今までで一番多い集団ですね。P フォントドライブ Dと並列起動で消し飛ばしますか？」

「うんにゃ。せつかくだ。も一つ、いいもん見せてやる」

いいもん……？

となると……。噂に聞くあれか。

「さて、ルーキー。最後の仕上げだ。ここいらの奴等をブチ倒して、おしまいにするぞ」

先輩は前に進み出てダーカー達と相對すると、それを使った。

「奥の手、行くぜ!!」

その言葉に合わせて、マグが光り輝き、その形態を変化させる。

正規アークスに支給されるマグは、アークスの活動をサポートする機械生命体であり、戦闘中における援護や、各種機能による支援を行う。デバイスや育て方でその種類はアークスの数だけ変化するが、基本的にその内容は暗闇の中で活動するためのヘッドライトだとか地味なものだ。

ただし、それは最初の内だけ。

ある一定の水準まで育て上げると、マグはアークスの切り札となる。

「P B ! 《ヘリクス・ブロイ》!!」

フォトンブラスト

全長三メートルを優に超える、一角獣の幻獣が現れた。

光り輝く球体から現れた幻獣もまた光輝く身体を持つ、四足歩行の獣のような姿だ。

その幻獣が前足を振り上げ、振り下ろすや否や、額の槍のような一本角を突き出し、ダーカーの群れに向かって突撃していった。

鎧袖一触。

正にそんな言葉が似合うであろう蹂躪だった。

一番攻撃力が高いのは今もダガンを纏めて串刺しにしている一本角だろうに、蹄で踏まれるどころか、駆け抜ける幻獣が纏うフォトンの風だけで、ダーカーは次々と消滅していく。

ダーカーの群れは、大多数が幻獣の中央突破でその姿を消し、残った奴等も反転した幻獣の追走によって同じように蹂躪された。

たった一度のPフォトンブラスト Bで、夥しい数のダーカーは一匹残らず消滅したのである。

「今のがPフォトンブラスト B……」

幻獣が消え、元の姿へと戻ったマグが先輩の肩上に戻るのを見ながら、アフィンは呟く。

「ヘリクスタイプか……。アークスの切り札と聞いちゃいましたが、まさかこれだけの威力とは」

「ま、こっちはマグを育てさえすりゃ誰でも出来るもんだ。一度使うとしばらくは使えないし、俺が頼りにしてんのはむしろPフォトンドライブ Dの方だな」

そういうもんか。

しかし、瞬間火力という面では圧倒的にPフォトンブラスト Bが上だろう。

夥しい数のダーカーを一掃したり、巨大エネミーを討伐する時、この力は頼りになる。勿論長期戦には向かないし、Pフォトンブラスト Bだけでは倒れないエネミーくらい今後は出てくるだろう。

だが、この力を俺も使えるようになれば。

更には改造して俺好みにカスタマイズなんかした暁には――。

「……くひっ」

おっといけない。キモい笑いが。

「……どした、アイツ？」

「わかんないっすけど、多分えげつないもの考えてると思います」

「はい、お帰りなさい」

合流地点からキャンプシップに乗り込むと、アークスのお姉さんに出迎えられた。

ミルク色の髪をツインテールに纏め、大胆にも肩から胸元に掛けて露出された服を着ている。そこから下は普通のコートだ。背中に背負ったロッドと同じく、テクニック職らしい。

「あなたたちも大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「ええ。この通りピンピンしてますよ」

「おいおい、俺がついてたんだぜ？ そんなへまさせるかっての」

先輩が軽口を叩くように言う。どうやら顔見知りらしい。

「改めて、俺はゼノっていうんだ」

「あ、そういやまだ自己紹介してませんでしたね俺等」

「ほんつとそれな。んで、こっちのがうるさいのがエコー」

「よろしくね。あと、うるさくないからね」

俺とアフィンの向かいに並び、そう自己紹介をしてくる二人の先輩。

エコー先輩、か。

どっかで聞いたことあるような……あ。

「確か、悠長だからとゼノ先輩に置いてけぼりにされたっという？」

「……ゼノ？」

「それで、お前さんらはっ。」

……流した。

「あ、俺、アフィンっていいいます。よろしく願いします。こいつは、相棒のハクメイ」

「ハクメイっす」

「俺達、アークスになったばっかで、なにがなんだかわけがわからなくて……」

「いーんだよ、細かいことは考えなくて。そういうのは上の仕事だ。あるいは、自分で調べろ」

(……上、ねえ)

流星に、今回のようにダーカーをどうこう出来るとは思えんが。

かといって例え原因が分かったとしても、それを素直に俺達下っ端アークスに教えてくれるのやら。

……ゼノ先輩と、その旧知の間柄と見受けられるエコー先輩が信用できないとは思わないが、アークスの上層部は別だ。

ここは、俺も少しくらい調べてみるかね。

「さつき出てきたのがダーカーで、俺達アークスの不倶戴天の敵。俺から言えるのはそのぐらいだ。まー、ヘンな夢抱いたままじゃなくて、いきなり現実を知ることができたってのは逆に良かったと思うぜ」

「ちよつとゼノ！ 少しは考えてよ！ この子達、いきなりの実戦でシヨックを受けてるのよ？」

「そんなん慮ったところで、ダーカーと戦うって現実はかわらねーよ。だったら、早めに知っておいた方が良い。その方が長生きできるからな」

「でもねえー！」

「いーんですよ、先輩。俺は覚悟できてましたし、むしろ思ったよか楽勝で拍子抜けしたくらいですし」

まあ、流石にいきなりあんな歪な化物共と戦うことになるとは思ってなかったけどよ。

そんなこと、この見ず知らずの後輩のために怒れる優しい先輩に言う事はないだろう。

「アフィンも、他の奴じゃなくて俺と一緒に楽勝だったんだから、ラツキーぐらいに思っとけて」

「……………」

「おらおら、そんな辛気臭い顔するな。お前らは生きてる。生還したんだぞ？ 修了任務達成、万々歳じゃねえか！」

「……………はい」

「そう。それでいいぜ、アフィン。納得できなくても、頷く気力があれば大抵のことはなんとかなるさ」

覇気を感じられないアフィンに、ゼノ先輩は言う。

「その悔しさを忘れるな、諦めるな。忘れず、諦めずにいれば、いつかきつとなんとかなる」

「ほお……………」

名言だな。

経験者は語るってやつか。

心のメモに残しておこう。

「……………かつこいいいこと言ってるように聞こえるかもしれないけど、今の、完全に受け売りだからね」
「おいこらエコー、ばらすな！ いいんだよ。師匠の言葉は俺の言葉だ」

「格言を勝手に作らないの！ まったく、昔から勝手ばかりして。あたしの苦労も考えてよね」

「お前の遅刻癖は俺のせいじゃないだろ」

「うっ、うるさいゼノ！ ほら、もうすぐアークシップに着くわよ！」

「……………」

目の前で繰り広げられる痴話喧嘩を見て、意図せず顔を見合わせて苦笑いする俺とアフィン。

……随分気安いなあとと思ったら、そういう感じか。

実際にいるんだなあ、こういうテンプレ的な友達以上恋人未満の幼馴染。

見るからにエコー先輩の片想いっぽいから、多分付き合っていないんだろうけど。

「こら、そこのルーキーくん二人組も笑ってないで準備しなさい！」

「……………それにしても、また師匠ですか」

話題を逸らすついでに、気になったことを聞くことにする。

「極秘っぽいとは聞いてたんですけど、エコー先輩も知ってるんですね」

「え？ ええ。実際に会った事はないけど、ゼノに耳にタコが出来る程聞かされたから……………それが？」

「あ、そうそう！ それで思い出した！ エコー、こいつらは期待できるぜ！」

「え？ なにが？」

「こいつら、特にハクメイの方。師匠と同じことが出来るんだよ」

「は？ それってあの……………フォトンドライブP Dのこと？」

「あ、はい。俺は、それだけですけど……………」

「このハクメイは他にも探知だとか並列起動だとか改造だとか出来るんだと」

「……………先輩に聞いた師匠さんみたいなの、アホみたいな規模じゃないで

すけどね」

……エコー先輩も知ってるってことは、やっぱりゼノ先輩はPフォトンドライブ Dを隠そうとしてないようだな。今日会ったばかりの後輩に披露するくらいだしな。

となると、うん。さつき考えてた通りにするか。

「はー……すっごいね。あたしもゼノに聞かされたけど、ゼノってば教え方悪いから。誰かに教えようとしても全然習得できないのよね」「しようがないだろ？ 俺だって、師匠に教えてもらったみたいの後輩達に伝えてやりたいけど、今でもどうやってあんな風に教えられるかわかんねえんだから」

「そ、そうなんですか？ やっぱ相棒すげえんだな……」
「……………」

師匠さんも、あの方法で教えられるのか。

口許を左手で隠しつつ、考える。

一体何者なんだ？ 師匠さんは。こうまで技術が被るなんて……………。

「……それで、相談なんですけど」

「おう、どうした？」

「俺とアフィン。俺達フォトンドライブのP Dは、ゼノ先輩から教えてもらったってことにしてください」

三人が、驚いたように俺を見る。

「もちろん実際に使うのは少し期間を空けてからにしますが、俺が開発した……筈だって事は伏せておきたいんです」

「開発……ちよ、ちよつと待つて。君が開発したのをなんでゼノがつてのも気になるけど、どうして隠す必要があるの？ 聞いただけだけ

ど、すごい技術なんですよ？ 他のアークスも使えた方がいいんじゃない？」

「時期を見て、俺も伝える努力します。ですけどそれまでは、出来るだけ悪目立ちはしたくないんです」

……果たして、そんな時期が訪れるかどうか、それが何時になるかも分からんが。

本来であれば俺もアフィンも、それまで人目につく所でP フォトンドライブ Dを使わないつもりだったが、ここでゼノ先輩と会えたのは幸運だった。

隠れ蓑……と言うのは悪いが、ゼノ先輩が口で伝えた技術をなんとか解読して、習得したというなら、多少不自然でも使える理由としては十分だろう。

それでも他の技術は大っぴらにできないが、この先の戦いはずっと楽になる筈だ。

「うーん……でもなあ」

「いいじゃねえか、エコー。そこまで悪目立ちしたくない理由は分からねえけど、折角の優秀な後輩がこれから現役って時に、教導官染みたことで現場に出られなくなるのも可哀想じゃねえか。それに、安易に教えて強くなったと勘違いして、無理する奴が続出すると思うぜ？」

「……まあ、それもそうか。でも、ずっと生き残ってられたとしてもいつかは引退するんだから、その時までにはちゃんと誰かしらに教えてあげてね？」

「約束します」

口約束とは言え、ちゃんと秘密にできたようで良かった。さて、そろそろ降りる準備をしないと。

「ところでよ、これからどうする？ なんなら、俺とエコーで作ってるチームにお前等も入るか？ そしたら初心者アークスのお前等を

しっかりサポートしてやるけどよ」

「そう言っつて、チームに入らなくなつて世話焼く癖に……。別にノルマとかルールとかなしで、とりあえず所属するだけのチームだけど、良かったら入る？」

「あ、その……俺は、いいです。パーティ組むのはいいですけど、そういうのは一人の方がいいので……。俺個人の目的もありますし……」

「折角のお誘いですが、俺もいいです。チームとかそういうのは、自分で一から作るタイプなので」

「そっか……。将来有望そうな奴等だから、今の内に囲い込んじゃおうかと思っただけだな」

「そういうの口に出して言わない」

そうして、俺達はアークシップへと帰還した。

むっちや怪しい女からむっちや怪しい物を渡された

アークスシップの、アークスが任務地である惑星へと向かうキャン
プシップに乗り込む入り口。そこに、ゲートエリアと呼ばれる場所が
ある。

アークスが任務を受注する手続きを行う、管理官が並ぶクエストカ
ウンター。

アークスが負傷した時に治療を受けられる、ドクターやナースが控
えるメディカルセンター。

アークスがクラス変更の際、体内のフォトン組織を変える設備が整
うクラスカウンター。

アークスが個人的に集まるチームを作る時に、その手続きをする
チームカウンター。

加えて、椅子が円形に並べられた広場なんてのもあり、アークスが
任務への待ち合わせや即時的な準備を行えるようになっていく。

……ちなみに、クラス適性があつて最初からほとんど変えること
のない第二世代と違って、得意クラスを模索する第三世代はクラスカウ
ンターに通うことになるだろうが、俺にはその必要はない。

なにせ、戦闘中であれ自分の体内のフォトン組織を変えることが出
来るのだから。

というか近接も射撃も法撃も、全て出来るように自分の身体をフォ
トンを制御して弄くっているのだから、変える必要がないのだ。

それもまた、俺の秘密の技術の一つである。

一応公的には、ファイターということにしてある。

ちなみに、俺達はまだ許可が下りていないが、クラスはメインとサ
ブの二つを選ぶことが出来る。フォトン組織を二つのクラスのちよ
うど中間に調整して、二つのクラスを扱えるようにしているとのこ
と。色で言えば、赤と青を混ぜて紫にしているようなものだと考えて
いい。

それでも似たり寄ったりなクラスを選んで特化しようとする奴がほとんどらしいが。

その時はテクターがサブクラスってことにしておこう。

「さて」

キャンプシップからロビーに移る通用口であるゲート前で、ゼノ先輩は一つ伸びをする。

「無事に戻ってきたことだし、ロビーでのんびりすつか!」

「だめ! 報告が先!」

「はいはいわーってるよ。うっせえなあ……」

夫婦かな?

そんなことを考える俺と、アフィンを見て先輩は言う。

「ま、そんなわけでルーキー達。俺がお守りしてやれるのはここまでだ。こうやって知り合ったのも縁だろ。何かあったら声掛けてくれ」「ええ。その時はよろしくお願いするっす」

「んじや、またな」

「がんばってね」

先輩二人が激励を俺達に送り、ロビーの奥へと歩いていく。

「……はあ。嵐のような人だったな。いや、嵐のような出来事って言うのか?」

「そうだなー。あの人達自身はまともっぽいから、嵐なのは出来事の方だろ」

「なにはともあれ、疲れた」

くたびれた様子で、アフィンが言う。

まあ、色々とあったからな。俺も考えなきやいけない事増えたし。悪いことばかりつてわけじゃないのは、救いだけだよ。

ナベリウス以外の惑星にも修了任務のために行った同期はいるけど、そっちはどうだったんだが。

「ここつてアークスのために用意されたロビーつてどこだろ？ ショップなんかはもちろん、休憩するための施設なんかもある筈だからさ」

アークスロビーは、ここゲートエリアの他にも、アフィンの言うショップが立ち並び、休憩する施設もあるショップエリアなるものがある。

その説明は……行つてからするか。

「俺、ちよつとロビー回つて頭を冷やしてくるよ。色々あり過ぎて頭がぐつちやぐちやでさ。相棒はどうする？」

「そうだなー……とりあえず、マグを受け取つて、チームの申請して、ちよつくら買い物したら、ルームで寝るわ」

「相棒は余裕だなー……」

「あんなん見せられたから、気が急いてな。チームも申請だけならすぐだし、買い物もちよいとディスク買うくらいだ。それやり終わったら、ゆつくり寝られる……ふああ〜」

「……もう寝た方がいいんじゃない？」

「いやいや、やることやつとかないと」

「そっか。じゃあまたな、相棒」

そう言つて、アフィンも手を振りつつ、先輩達とは違う方に去つていく。

「さて。とりあえずマグとチーム、と……」

「思いの外、早めに終わったな」

左肩の上に浮かぶマグを見つつ、ショップエリアへ到達。

マグは、正規アークスになったと伝えるとほんとにポンと渡してくれたし、チームも新しく作ると言ったら、申請書類を渡されて終わりだ。

新しくチームが設立し、俺がチームメンバーを集めているところだけはアークスの掲示板に載せておいてくれるらしい。

しかし、チーム名か。

後で変えることも出来るらしいけど、あんまポンポン変えても定着しないだろうし、最初が肝心だよな。

他にも、どんなチームにするかとか、どんなメンバーを募集してる？とかいう項目も。

チーム自体は俺以外にメンバーがいなくても運用できるが、それだともうチームではない。

(かといって、誰でもいいってわけにもいかないし……)

「いらっしやいませ」

俺の目の前にあるディスクショップで、売っているディスクのラインナップに目を通しつつ考える。

やっぱり面接とかも入れてみるか？

入団希望者が増えたら面倒そうだけど、信用のおけるメンバーが増えたら分割して面談すればいいだろうし。

そうになったら、試験なんかも入れてみるのもいいかもな。

別に少なかったら少なかったで、少数精鋭のチームにしてもいいだ

ろう。

夢が広がる。

なんて考えていると、アイテムショップの方で叫び声が上がった。

「素晴らしく運が無いな、君は」

「ぬおおおおおおお!!!」

アイテムショップの店長らしい、もじゃもじゃ髪なヒゲのおっさんの前で、白髪で gangs 口のちよび髭なおっさんが膝を折っているという、醜い光景である。

(……)愁傷様

心の中で冥福を祈る。

このショップエリアには、様々なショップが並んでいる。

アークスが使用する武器を売っていたり。

惑星で拾われた過去のアークスの正体不明の遺留品を鑑定したり。

防具であるユニットや、コスチュームを売っていたり。

アークスが現地で使う回復や支援のアイテムを売っていたり。

フォトシールド
P Aやテクニクを習得するためのディスクを売っていたりだ。

で、さつき叫び声が上がったアイテムショップだが、奇声が上がったにも関わらず、それを気に掛ける者はいない。

それもその筈。ああいったことはあそこでは日常茶飯事だからだ。

店に金を払い、施設を使つて武器やユニットを強化する。それがアイテムショップの役割だ。

上級者になると、武器に組み込まれた因子を、他の武器の因子と組み合わせる特殊な強化を齎したりもする。しかしその成功率は、その武器やユニットによってまちまち。武器やユニットが強ければ強いほど、特殊な強化であればあるほど、成功率は下がり、かかる費用は上がる。

このアイテムショップの鬼畜な所は、失敗しようと素材となる武器

やユニットを戻すことなく、使った大金も返すことなく、ただあの煽つてるとしか思えない言葉を吐く所だ。店長はあのような態度だが、唯一の店員である女性はかなり気弱な性格で、責めるに責められないという嫌なバランスをとっている。だというのに、やはり武器も防具もアークスの命を預けるものであるわけだから、この施設に通わずにはいられないのだ。そして、低い成功率に夢を見て、大金を注ぎ込む。そうして貧困に陥ったアークスが、何人もいるのだそうだ。

一時期暴動が起きた（起きる前に武力的に制圧された）と言われる程のアークスの魔窟と化しているのだ。あそこは。

（ま、俺には関係ないんだけども）

俺の秘密の技術の一つ、自作武器。

施設などなくとも、自前の道具と素材さえあれば武器もユニットもその他諸々もお手の物。強化も改良という形で行う事が出来る。

一から全部作り上げる必要があるが、自分の望む物を最高の状態で、材料費以外の費用を掛けずに手に入れることが出来る。

そして市販のものにはない特殊な機能や、能力などを組み込むことが出来るのだ。

……これがバレたら、俺はきつとアークス達の憎しみを一身に受けることになるのだろう。

「それじゃあ、この一通りのP フォトンアーツ Aと、初級テクニックを全部ください」

「かしこまりました。ですが、よろしいのでしょうか？ 新人アークスがこれだけ買うと、他の施設にお金を掛けられないのでは……？」

「いいんです」

むしろアイテムショップを利用することがないから、金はこの先有り余るだろうから。

回復アイテムも支援アイテムも一通り揃ってるし、武器も防具も素

材として買うことはあるだろうが、今買う程じゃない。コスチュームなんてオシャレするのは、金が貯まってからでいい。

それより、士官学校でいくつかしか選ばせてもらえなかったPフォトンアーツAやテクニツクの方が先だ。

双小剣用にレイジングワルツとワイルドラブソデイ。テクニツクでフォイエとバータ、ゾンデとレスタ。それだけである。

早めに習得して、カスタマイズも出来るようにしたい。

「お買い上げ、ありがとうございます」

ショップの店員の挨拶を受けつつ、俺は帰路に移る。

さて、カスタマイズその他は明日以降にやるとして、今日はもう寝るか。

アークスになると、それぞれ自分の部屋を持つことが出来る。

マイルームと呼ばれているそこでベッドを転送したら寝よう。部屋の飾りつけや運び込みも明日以降だな。

そう考え、自分のルームの場所を確認しようとスクリーンを出そうとしたところで。

急に、いた。

目の前にいきなり現れた筈なのに、まるでずっと前からそこにいたかのように。

白衣を着た研究者のような女性が、俺に背を向けて存在していた。

「……待っていた」

その女性は、そう言って振り向く。

「否。この表現は認識の相違がある。待たせてしまった、だろうか」

「……誰だ、お前」

見覚えがない女だった。

三つ編みを編み込んで団子を作ってアップに纏め、前髪は七三に分かれた黒髪で、理知的なメガネを掛けた女性だ。

しかしその奥にある瞳は、理知的と言うよりは感情が希薄といったほうがしっくりくる色を持っている。

白衣の胸元にある証明写真に写った彼女の方が、人間味を感じるくらいだ。

美しいと、そう言えるのは確かだろうが、人間の女性に抱くそれではなく、人形に対して抱くそれに近い。

(いや、それ以前に……)

姿は見えている。

声も聞こえてる。

なのに——探知に引つ掛からない。

「私の名は……シオン」

「シオン……？」

やはり、聞き覚えの無い名前だ。

俺はこんな女を待たせてなどいないし、待つてもいない。

しかし彼女は、希薄な感情の瞳で、真っ直ぐに俺を見据える。

まるで——俺をずっと前から知っているかのように。

「私の言葉が貴方の信用を得る為に、幾許かの時間を要することは理解している」

なんだ、こいつは。

確かにここにいる筈なのに、俺の探知の中では存在せず、ここに居る他の人間も、彼女のことを気にも留めない。

俺だけに見える幽霊だとも言うのか？

「それでもどうか、聞き届けてほしい。無限にも等しい思考の末、私が見出した事象を」

「……わざわざ難しい言葉でお茶を濁そうとするな。誰だ、じゃその答えだってんなら聞き直す。お前は——なんだ？ 何者だ？」

「私は観測するだけの存在。貴方への干渉は行わない。行えない」

……………何者だ、でもその訳の分からない答えか。

「だが、動かなければ道は潰える」

「道、なあ？」

「故に私は示す。あらゆる偶然を演算し、計算し、ここに表す」

そして彼女は、その右手をこちらに差し出す。

そこには、光る何かが輝いていた。

ただ光っている何かとしか表現できないそれは、彼女の右手を離れ、宙に浮かび、そのまま俺の腕にあるデバイスへと吸い込まれていった。

「な……っ!? おい！ 今のは!？」

「偶時を拾い集め、必然と為す。そのものをマターボードという」

「マター……ボード？」

「わたしは観測するだけの存在。貴方を導く役割を持たない。だが、マターボードは貴方を導くだろう」

彼女はそう言う。

その瞳で、未だ俺を見据えている。

「……私の後悔が示した道が、指針なき時の、標となることを願う」
「……………」

「未だ信用も信頼も得られずと推測する。貴方のその思考は正しく正常である。私もそれを、妥当と判断する」

……………疑われることは承知済みっか。
見透かされてるみたいで不愉快だ。

「しかし、私はそれでも貴方を信じている」
「ふざけんな」

思ったまま、そう言ってやった。

「お前の後悔だかなんだか知らねえが、導くなんてえらっそーに。俺が何かを決めるのは、俺の欲望に従って、だ。信じるのは勝手だが、お前の望む通りに俺が動くと思ってんじゃねえ」

「……………それでいい。貴方は、そうであるべきだ。私もまた、それを望んでいる」

「……………チッ」

……………どこまで見透かしてやがる。

「私は貴方の空虚なる友。どこにでもいるし、どこにもいない。質問はいつでも受け入れよう」

そう言って、彼女はまた背を向けて。

その時にはもう——彼女の姿は見えなくなった。

「……………いつでも受け入れるつつつて、すぐ消えんのかよ」

どーせ今何か質問したところで、その答えを信じられやしねえけどな。
非現実的な出来事だった。

修了任務の疲れで白昼夢を見てたのかとさえ思えるが……。

(ま、夢じゃねえんだろうな)

スクリーンに浮かび上がる、マターボードの文字。

いくつかあるメニューに新しく項目が追加されたかのように、そこにあつた。

そのファイルを開き、中身を表示させる。そこには、どこに向かえ。何々を拾え。誰と話せ。そういう旨が書かれている。

まるで、俺にこう動けと指図しているかのような、不愉快極まりないものだ。

「……いいぜ、乗ってやるよ。俺の好奇心に従ってな」

これが罠だつてんなら、それも上等。

正面から打ち破つてやる。

「ま、なにせよ明日だな」

そうして俺は、マイルームへと戻っていった。

キャラ設定

ハクメイ

年齢：17

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ファイター（本当はオールラウンダー）

髪色：黒

髪型：少しツンツン気味。襟足が少しだけ長く、首の根本に掛かるくらいのを纏めている。

服装：クローズクォーター。任務に出掛けない時はラフな格好でいる。アイテムパックに常に仕舞っているので、緊急時でも対応できるようにしてある。

・主人公。

・自らを強欲と称する程欲張りな性格で、最強最高のアークスとなることを野望としている。

・欲しいものは自分で作るタイプ。

・フォトンコントロールにおいて自分の右に出る者はいないと自負している（ゼノの師匠は番外扱い）

・アークスの上層部に対して不信感を抱いている。何か根拠を持っているそうだが……。

・予習はしっかりしておく派。

・アークスに必要と考える様々な技術に精通していて、アイテムや武装、ディスクなどを自作、改造出来る。一から自分で作れるが、元からあるものを改造したり、分解して新しい物に組み換える方が早く、安上がりなときもある。

・士官学校時代はアフィンと一緒に他人の恋愛沙汰を楽しんでいたりする。自分の恋愛や結婚願望もあるので、そろそろモテ期が来てほしいと考えている。他人の恋愛の機微には敏感だが、自分は……。

・性欲は強め。女性の性的魅力を一番に感じるのはおっぱいだが、大小に貴賤はないと主張する派閥。次点で髪の毛が好き。

武装

剛剣『ブーステッド』

自作した大剣。鉄の塊のような片刃剣で、色はそのまま鉄色。鋭さは全くなく、敵を叩き斬ることに特化している。峰に当たる部分にブースターが付いていて、任意のタイミングで起動させて剣速と破壊力を増すことが出来る。

電剣『エレキ』

自作した双小剣。雷のテクニックを使って帯電させられた剣で、触れる毎に電撃が敵に流れる。通常状態であれば静電気程の電撃しか流れていないが、雷のフォトンを流し込むことで電撃でスタンさせられる程の威力に増幅できる。

火杖『フレア』

自作した長杖。炎系のテクニックを特に増幅させる機能を持つ。炎に特化した分、他のテクニックの増幅率は高くない。

技能

テクニク並列起動

テクニクを複数同時に発動できる。現在は最大で12〜15、フォントンドライブ
P D 中は60〜75まで。

ディスク改造起動

独自の挙動に変えてディスクのフォトンアーツP A、テクニックを行使できる。零式と合わせて、式式のようにく式と名付けることが多い。既存の物と違い、他のバージョンを同時に使える。フォントンドライブ

P D

全身のフォトン余すところなく活性化させて、身体能力を倍増させる。武器や防具の性能を上昇させるテクニク、シフタ・デバンドと違い、筋肉と神経なども強化されるので、通常の5倍速く、強く動ける。通常よりも疲れやすくなるが、発動中はレスタを常に自分に掛けているため、肉体的な疲れはない。フォトンマップ

P M

フォトン薄く広げて、周囲を探知する。広げたフォトン常配下に置く必要があるため、広げれば広げる程精密なコントロールが

必要とされる。現在の最大範囲は500m。

アフィン

年齢：16（ハクメイと同年だが、誕生日が遅い）

種族：ニューマン

性別：男

クラス：レンジャー

・ハクメイの元ルームメイト

・童顔。一部の同期からカワイコちゃんと呼ばれてからかわれた過去あり。

・戦闘は苦手で、アークスとしての活動は惑星の調査を主としている。

・他人の探し物を見つけるのが得意。ハクメイと知り合ったのも、ハクメイが探している物をアフィンが見つけたことから始まっている。

・武装にハクメイの手がかかっているが、汎用型をアフィン用に改造しただけなので、出力と変換効率が上がっているのみである。

・アークスになったのは探し物があるから。ただ、その探し物がなんなのかは、ハクメイにも語っていない。

・結婚願望はあまりない。少なくとも今は色恋よりも目的を達成することに集中している。

・性欲は普通。美人を見掛けたら綺麗だなと思うくらい。男子として普通かは怪しい。

技能

フォントンドライブ

P
D

全身のフォトン余すところなく活性化させて、身体能力を倍増させる。武器や防具の性能を上昇させるテクニク、シフタ・デバンドと違い、筋肉と神経なども強化されるので、通常の5倍速く、強く動ける。通常よりも疲れやすくなる。ハクメイのようにレスタを使えないので、使い過ぎるとバテる。

ゼノ

年齢：23

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ハンター（適正はレンジャー）

・アークスの先輩。

・兄貴肌の溢れる男で、初対面にしてハクメイにイケメンと思わせた。

・アークス内でも評判は高く、期待の若手と呼ばれている。

・ハクメイに見覚えがあった？らしい。

・十年前にアークスとしての心得や特殊な技能を伝授してくれた師匠を尊敬している。何故だか顔は思い出せない。

・エコーとは幼馴染。何故こうも根気よく自分に付いてくるのか分からずにいる。

・結婚願望以前に、戦士としてその時を生きることには焦点を当てているので、将来のことは考えていない。

・性欲はほぼ皆無。思春期時代を強くなることに必死なまま過ぎしたので、その手の画像一つ持つてすらいらない。アイツ絶対枯れてるとはエek、某女アークスの談。

技能

フォトンドライブ
P D

全身のフォトン余すところなく活性化させて、身体能力を倍増させる。武器や防具の性能を上昇させるテクニック、シフタ・デバンドと違い、筋肉と神経なども強化されるので、通常の5倍速く、強く動ける。通常よりも疲れやすくなる。ハクメイのようにレスタを使えないので、使い過ぎるとバテる。

フォトンマップ
P M

フォトン層を薄く広げて、周囲を探知する。広げたフォトン層を常に支配下に置く必要があるため、広げれば広げる程精密なコントロールが必要とされる。レスタを使えないので、長時間の使用は出来ず、また範囲も4m限り。

エコー

年齢：23

種族：ニューマン

性別：女

クラス：フォース

- ・ゼノと同期の先輩。
- ・ゼノのデリカシーのない発言を事ある毎に注意する。自分がそれに振り回される時もある。

- ・遅刻癖がある。準備を抜かりなく行うのに、心配性が祟って時間直前に何度も確認してしまう故に。

- ・ゼノと比べて自分の戦士としての力量が劣っている事を自覚しており、少しでも追い付くために隠れて特訓などを行っている。ゼノと同じ技能が使える新人二人を羨ましく思っている。

- ・アークスになった際にゼノから贈られたロッドを、今でも大切に扱っている。

- ・結婚願望は大いにあるが、zある特定の人物が相手以外の未来は考えていない。

- ・性欲は（検閲制限）

シオン

年齢：？

種族：ヒューマン？

性別：女？

- ・謎に包まれた女性。

- ・ハクメイにマターボードなるものを渡す。

- ・ハクメイの探知に引つ掛からず、またハクメイ以外には存在を感じ取られなかった。

- ・どうやらハクメイを知っていて、信頼しているようだが・・・？

【Episode 1】『明日を待つ』
熱血な教え子ができてきた

「確か、この辺だったか？」

後日。

俺は再びショップエリアに来ていた。

（この辺に、俺の同期とかいうレダ……確か紫リーゼントしたお調子者だったかと思うが）

士官学校で同期だったとはいえ、そんなものいちいち覚えてられない。
い。

しかし、その特徴的な頭を見れば遠くからでもすぐに分かる筈――

――ほらいた。

近付いて話し掛ける。

「うっす。確かレダ、だっけ？」

「お、主席サマじゃんか。なあ、聞いてくれよ。オレ、この前のナベリウスで修了任務を受けてたんだけどさ……」

「……………」

聞いてもいないのに語りだした。

まあ元々、こいつに話を聞くために来たっちゃ来たんだが……余程誰かに語りたかったんだろうか。

レダは、右眉の上と鼻の頭に絆創膏を貼り付けた、リーゼントが特徴的なニューマンだ。

見るからにチャラ男って感じなんだが、こいつも生き残ってこられたのか。

「現場で体験したから知ってる。ダーカーの大発生があつたな」
「……ああ。お前もナベリウスで受けてたんだよな、修了任務。すごかったよな、ダーカーの数……」
「ああ……」

結局原因は分からず仕舞いだったが、死亡者が幾人か出た中で、こいつがそのリストに入らなかったのは幸運だったのだろう。

俺？ 俺は実力だし。

ゼノ先輩がいたから楽だったけど、アフィンを担いでもあの場を凌げる自信あるし。

強い個体が現れたなら話は別だったが、そんな話は聞いてないしな。

「ただ……」

「ん？」

レダは、顔を俯かせて言う。

「ただし、あの時、ダーカーの中に人を見た気がするんだ」

「あ？ 人？」

「一緒に居た奴等、パートナーと合流した組の奴等は誰も信じてくれなかったけど、オレは確かに見たんだよ」

人、だと？

ナベリウスには、ダーカー以外にはエネミーとして扱われている原生種の存在しか確認されてない筈だ。

同じアークスだとしたら、お互いが見える距離にいるなら、合流するためには近付くだろう。

それなのに、しかもあんな異常事態の時に、人？

「どんな奴だった？」

「……信じてくれんのかよ？」

「お前と一緒に居て、お前が見たつてのが見えなかったわけじゃないしな」

それに、俺だけに見えて他には見えなかった存在なら、俺も昨日体験した。

「それで？ どんな奴だ」

「女の子、みたいだった……」

「……女の子？」

「あれは夢だったのかな……。いや、それであんなにハッキリ見えるわけがない！ 間違いなくいたんだ、あそこに……」

……とすると、あの女ではないのか？

若くない訳じゃないが、女の子と表現するには些か子供染みてなさすぎる。

かといって大人っぽいかと言われても疑問だが。

「でも……連れて帰っては……」

「……………」

「いや、でも、しょうがねえだろ！ オレ達だって自分の身を守るのに精一杯だったし、オレ一人が言ってることに付き合う訳にはいかなって」

「別に責めてるわけじゃねえし、俺に弁解しても仕方ねえだろ」

「……そ、そうだけだよ」

レダはまた顔を俯かせてしまった。

もしかしたら、その女の子は本当に現実で、そうだとしたらあの危険地帯に一人でいるのを放っておいてしまったのかもしれないと、悔いているのかもしれない。

しかし、他のメンバーの言う事ももつともだ。

全員がその存在を確認したのならともかく、一人が言っている事のために全員を危険に晒す判断はするべきではない。夢や幻の類の線を捨てきれない状況で、救助のために動ける程余裕などなかったのであろうから。

(動けたとしたら、俺とアフィンの組くらいか……………)

だが、実際にあの時その女の子を確認できたのはレダであり、俺達は影も形も見えない。

言ってもしょうがないだろう。

今からでもやれるとしたら、またナベリウスへ行った時に気に掛けるくらいだ。

ダーカーの大発生があったあの地帯で、アークスでもない一般人が一日跨いでも生き残れるとは思えんが。

「君は、新人のアークスかね？」

同じくシヨップエリア。

道を歩いている最中、老獺のアークスに話し掛けられた。

「ええ。昨日ナベリウスで修了任務を終えました」

「そうか。では先日のダーカー大発生も体験しているみたいだな」

ふむ。

新人以外でも、あの話は知れ渡ってるのか。

目の前のご老人は、歴戦の戦士という風体の皺の多い褐色の男だ。長めの白髪を後ろに一本に纏めていて、老体とは思えない程引き締まった体をしている。

「私は長年アークスとして活動してきたが、あそこまでの規模の発生はほとんど聞いたことがなかった」

「……そうなんですか？」

資料は読む方だけど、そういう歴史的な事はあまり詳しく掘り下げないから分らんが。

かなり歳いつてるだろうに、そんな長い間でも稀なことだったのか？

「ああ。しかも、あれ以降断続的に発生するようになっていとも聞く。一体何があったのだろうか……」

「現場の俺にとっては本当に突然で、予兆みたいなのは全く感じませんでした」

「ダーカーとは元来そういうものだ。私も昔は、突如現れたダーカーに慌てふためき」

……話が長くなりそうだったので、適当に聞き流すことにした。

そのおじいちゃんの話は、本当に長かった。

なんでおじいちゃんおばあちゃんって、こう話が長い人ばつかなんだらうね。

ボケてるのか、同じ話が三回目に突入したところで、彼は「そういえば」と言う。

「ダーカーの中に倒れている女の子を見た時、わめき、悔いていた馬鹿者もいたな……」

「……あー」

レダの事か。

「非情な話だが、戦場に犠牲はつきものだ。あいつはいつになったら吹っ切れてくれるのやら……」

「……………」

別に、わめいて悔いることが悪いこととは思わんけどね。

助けられなかった命を「戦場に犠牲はつきものだから」なんて理由で簡単に諦めてしまうような奴が、この先長くやっていけるのか。

戦う理由を持たず、ただ戦うだけの戦士が。

戦う理由を、簡単に諦めてしまえる戦士が。

果たして命の危機に瀕した時、「死にたくない」と思えるものか。

まあ、アイツの事はアイツが決めるといいか。

世話焼く程親しくもねーし。

(それにしても、倒れてた女の子か……)

レダに聞いたときは女の子を見た、としか聞いていなかったが……倒れてた、と。

衰弱してたのか、気絶していたのか。

そうになると、ますます生存は絶望的か。

(ま、どーでもいいか)

別に、俺の知った人でもないしな。

マターボードが少し埋まった。

(……どうやら、俺の行動を反映して自動的にマターってのが埋まっていく仕様のようだな)

俺はショップエリアのベンチに座り、マターボードの検証を行っている。

何のことは無い。あの女の言う通り、マターボードの導きのままについてことだ。

よく分からないままに動く不安はあるが、しかしこのままどういふものかもわからないものをずっと持ち続けられる性質でもない。

検証せずにはいられない。

(アークスはしばらくナベリウスで大量に溢れたダーカーを討伐するよう推奨されてる。俺もこの後ナベリウスに行くが、残りのマターとやらはその道中に集められるだろう)

しかし、集めたところでなんだと言うのか。

まるで宿題としてこういうのをやってきなさいと言われていようなもんだが、宿題ってのは学校の評価を得る為にやるものだ。

物理的に報酬を渡されるものではない。

このマターボードはその上、どういう意味を持つのか全く分からない。

——偶時を拾い集めて、必然と為す。か……)

言葉をそのまま受け取るのであれば。

偶然起こる事を集めて、必ず起こる事へと変える。

偶然ではなく、必然に起こる事へと変える。

可能性を可能性ではなく、絶対へと変える。

(……馬鹿馬鹿しい)

するってえと、なにか。

このマターボードとやらは予言書かなにかだとても？

俺がこのマターつてのを集めていけば、この中にある本来偶然でしか起こり得ない事は、絶対に起こる事に変わるとでも言うのか？

馬鹿馬鹿しい。

馬鹿馬鹿しい、が……。

(だが、俺がこの通りに動いたら、そこにレダと……そーういや名前聞いてなかった。あのじいさんがいたのも事実)

そこでどういう話をされるかはなかったが、その二人に話を聞けというマターがあった。

そして、聞いた二人の話にあった共通点。

(昨日のダーカーの大発生。そこでレダが見た、倒れてたという女の子)

それを、俺が知ったという事実だけがある。

だが俺は生憎、知りもしない奴が知らない場所で死んだところで、嘆き悲しむほどお人好しじゃあない。

愉快だと笑う外道でもないが……その辺は割とドライだと言える。

(まだ生きてるなら探してもやるが、ぶっちゃけ遺留品が見つかるかどうかもわからんってところだな)

スクリーンを閉じる。

さて、討伐ついでに朝カスタマイズしたディスクのお試しと行きま
すかね。
と。

「……………」
「……………」

キラツキラした瞳でこちらを見つめる研修生らしき制服を着た青年と目が合った。

「……………なにか？」

「ハクメイさん、ですよね？」

「あ、うん」

「今期の士官学校で最優秀の成績を修め、主席として名高く」

「あー、うん」

「座学での成績もさることながら、戦闘訓練においてもトップを張り」

「あ？ うん」

「修了任務で、勇猛果敢にもダーカーを相手に立ち向かったという、あの！」

「なんなん？」

公式に出回っている情報を並べられた。

果敢にも云々は……通信が死んでたことを考えるに、アフィン辺りが噂の出所だろう。

技術や技能については秘密だが、それなしでの戦闘能力についてまで隠す必要はないので、アフィンや先輩方にもそう言っている。まさか昨日今日とは思わなんだが。

それを裏付けるのは、自動で記録されているという戦闘データなのだろう。

例えば通信が途絶えようと、アークスが戦ったエネミーやダーカーのデータは各々のデバイスに記録されている。わざわざ人が記録せずとも、自動でデータを収集してくれるというわけだ。

戦闘の様子は通信が無ければ、加えて一方的に繋げてるだけでは見れないから、俺達の技術がバレてる不安はないが。

で、この青年だ。

「申し遅れました！　自分は、アークス研修生のルベルトと言います！」

青年は佇まいを正し、そう自己紹介する。

青い短髪のヒューマン。研修生の帽子を目深に被って目立たないが、中々にイケメンだ。

身長は俺より少し小さいくらいで、アフィンよりは高い感じ。

「先日のダーカー大発生の中、初陣にも関わらずダーカーを多数相手取ったとお聞きし、お話を伺いたいと参上しました!!」

「あー……うん。昨日のデータを見たのか？」

「はい！　士官学校でもお噂は聞いていましたが、先日のことで勇気もある方と知りました！　あ、遅れましたが、アークス就任おめでとうございます！」

こいつちよいちよい遅れてんな……。

「そんなハクメイさんを見込んで、お願いがあります！」

ルベルトは、往来であるにも関わらず、頭を深く下げる。

「ハクメイさん……いえ、先生！　自分を弟子にさせていただけませんか!?!」

「嫌だけど」

すげなく断った。

しかし向こうもめげない。

「そこをなんとか！　不出来で未熟な自分ですが、先生のように勇気

あるアークスになりたいんです!!」

「先生呼びを定着させようとすな。俺じゃなくても、既に第一線で活躍してるアークスとかいるだろ」

「確かにそうです！ ですが、あらゆる武器に精通し、鍛え上げているアークスは過去にも現在にも先生の他にいません！ その弛まぬ努力を積む姿勢こそ、自分が惚れこんだ所なんです！」

「つちやあ……」

「そういう士官学校時代ではそういう感じで通ってたな。」

「ちよくちよくクラスを変えてる体で、色んな武器やテクニックの練習してたっけか。」

「第三世代でもそういうことする奴はいないけど、珍しい程度で済むかと思ったのに。まさかここまでのアクション掛けてくる奴がいるとは。」

「……じゃあ、俺である理由はそれでいいとしよう」

「本当ですか!？」

「だが、お前を弟子にすることで、俺に何のメリットがある?」

「メ、メリット……?」

「熱意は買うが、生憎新人の俺にはお前に何かしら教えてやる程の余裕はないし、あつたとしても顔見知りでもないお前に時間を割くようなお人好しじゃない。それでも弟子にしてくれっつーなら、お前が提示できる何か。それが無いとな」

「む、むむむ……」

ルベルトは、顎に手を添えて考え込む。

「優しくないって?」

馬鹿言え。尊敬される男にはなりたいが、ただ働きなんぞナメられるだけだ。

「知らん奴にこんな申し出されて、二つ返事で受け入れる奴の方が気が知れん。」

「せ、先生が言うならば、雑用でもなんでもやります！」

「マンパワーが欲しくないわけじゃないが、弟子にする面倒抱えるにはちつとも釣り合わんな」

「先生に面倒はおかけしません！ 先生の戦いをモニタリングして頂ければ、そこから見て学びます！ 先生からは何もして頂かなくても構いません！」

「デメリットはほぼ無くなったが、メリットにはならん。ていうか、いい加減先生呼びは——」

「で、では！ 依頼という形でならどうでしょう!?!」
「む」

依頼。

依頼か。

意外と頭は回るんだな。

「……依頼だとして、研修生のお前がどれだけ出せる？」

「そうですね……」

スクリーンをデバイスから呼び出し、何かを打ち込んでいくルベルト。

「出来高として、一体につきこれぐらいで如何でしょうか？」

打ち込みが終わると、こちらにスクリーンを見せてくる。

……想定上限額の三倍ぐらいの値段が表示されていた。

「……お前、これ。研修生なのに、なんでこんな出せんのか？」

「自分、実家から仕送りを貰っていますので！ 自分が自由に使える金額から計算しました！」

くつ。ボンボンか。

うちの施設は年々ガキんちよが増えるから、比例して使える金額が下がる一方だつてのに。

しかし、これは割りの良い仕事だ。金払いはかなりいいし、相手がボンボンなら存分に働いて搾取してやれる。向こうも俺から学べてWin-winだ。

流石にこいつの見てる前で俺の秘密の技術は使えんが。

「……………モニタリングのタイミングは俺任せ。許可がある時だけモニタリングしてよし。報酬は、そのモニタリングしてる間だけ。それでいいなら依頼を受ける」

「十分です！ ありがとうございます、先生！」

クライアントオーダー

「じゃ、後で正式に指名のC Oとして依頼しといてくれ。俺のデバイスは登録しといていいから、依頼が出たらメールよろしく」

「了解しました！ それでは、これからよろしくお願いします！」

キツチリお辞儀をして、ルベルトは去って行った。

小さくなっていくその背に手を振る。

……………正しく嵐のよう奴だったが、良い顧客が出来た。

しかし、何か忘れてるような……………あ。

「先生呼び、訂正させてなかった……………」

これは、どうだろう。

弟子を取ったってことになってしまいうndらうか。

戦いたい一般人と、戦いたくない戦士

「んむ？」

自分が押し切られてしまったという事実には打ちひしがれていると、誰かが話しかけてきた。

「そのかつこ、アークスでしょ？ うわー、いいなー！」

「……誰？」

また知らない人だ。

褐色というわけではないが、白いわけでもない、少し日焼け気味のニューマンの女子だ。

フォトンを感じ取りやすいとかなんとかで耳が長いのが特徴的なニューマンにしてもとりわけ長く、上向いている。耳の先が頭の天辺と並ぶくらいだ。

ロングの茶髪を背中から三つ編みに纏めている。

上半分は黄色く、下は黒いデニムで、アークスらしい服装ではなく、恐らく一般人………結構な巨乳だな。

「あ、ごめんごめん！ わたし、ウルクっていうんだ」

俺のちよい下衆な思考を知ってか知らずか、彼女は明るく自己紹介する。

「昔っからアークスに憧れていたからさ、つい」

「？ 憧れていた？」

……一般人？

いや、アークスを志望するなら、なる前だとしても研修生として、さっきのルベルトのように士官学校の制服を着る筈だ。

彼女は見るからに俺と同年代。

士官学校に入るのであれば、年齢基準はもっと前から満たしてる筈。

それなのにアークスのコスチュームどころか制服すら着用してないってことは……。

「入学時点で蹴られた、か」

「うん。才能がないんだってさ、わたし。フォトンを扱う才能がないんだって」

アークスになるには士官学校に入って訓練を積み、最終的に修了任務を終える必要がある。

個人によって卒業までが長いだけで、中退さえしなければアークスになれる。しかし、その士官学校も誰でも入れるわけではない。

フォトンを感じ取り、コントロールする適性。

フォトンの出力を高める感応力。

これらが基準値に達していない人間は、入学することすら出来ない。

「残念だけど、しょうがないよね。アークスってシビアなところなんだし、無理は言えないもん」

「………確かに。人手不足とはいえ、戦えない奴を戦場に送り出すわけにもいかないしな」

「ま、わたしのことは別にどうでもいいのよ」

切り替え早っ。

「それよりも気になるのは、わたしの友達のこと！」

「友達？」

「あいつ、引つ込み思案で臆病なのに。何をトチ狂ったか、急にアークスになるとか言い始めてさ。そんなもって、実際に才能があつて、一人でアークスになつちやつたからもう大変！」

ひつどい言われようだな……。

ビビリのアフィンだつてそこまで言われたことなかつたぞ。

「一人でやっていけるのかな？ 最近会いにも来ないし……。うーん、ちよつと心配かなあ」

「……で、それを俺に知らせてどうしろと？」

「うん。依頼とかじゃないんだけどさ。そいつを見かけたら、ちよつと気にかけてやってほしいかなつて」

「そう言われても、ただ働きはなー」

「そこをなんとか！ 記憶の片隅に留めとくだけでもいいからさ！」

両手を合わせて、必死に頭を下げてくるウルク。

……聞く限り戦士には向いてなさそうな奴だが、戦えないなりに、そいつの為にこうして頭を下げて回ってるんだらうかね。

………はあ。

「……ちなみに名前は？」

「引き受けてくれるの!？」

「そいつを気に入ったらな。会つてどうするかは俺次第。で？」

「あ、名前はね。テオ」

「テオ」

「テオドールっていうの」

数十分後。

俺はナベリウスに降り立っていた。

いやー、やっぱ転移ってすごいわ。

アークスシップからナベリウスまでって何光年も離れてる筈なのに、キャンプシップであつという間だもんな。

『それでは！ よろしくお願いします、先生!!』

「…………おう」

結局先生呼びは固定なのね。

通信から聞こえてくるルベルトは元気だ。

反比例して俺の元気が萎んでいく程に。

(さて、マターの事もあるが、俺一人が色々隠しながらでも戦えるか確認しないとな)

フォトンドライブ

P DはNG。

並列起動も同じく。

ディスク改造起動も……言い訳は聞くが、面倒だ。

自作武器に関しては、俺が作ったと知られなければいい。

フォトンマップ

P Mは、使つてるとは傍目には分からんし、独り言に気を付ければいいだろう。

(それじゃ、まずは探知つと)

レスタ個別回復を自分に掛け始めると同時に、体内のフォトンを薄く放出する。

支配下に置いたままのそれを限界まで伸ばしていき、ドームのように展開すればP Mの完成だ。

ふむふむ……………。

この二つの反応は……ゼノ先輩とエコー先輩かな。

(……何やってんだあの人達)

周りのエネミーの反応を次々と消していくゼノ先輩は、まあいいだろう。

エコー先輩の方は、ガルフと思われる群れから離れるような感じだった。

離れるつつーか、逃げてるなこれ。

テクニク職とはいえ、こうも全力で逃げる必要があるか？

ま、こっちはゼノ先輩がいるから大丈夫か。

他にもいくつか反応はあるが……気になるのはこいつだな。

この、他のアークスより強い反応。

(エネミーではないな。周りのエネミーらしき反応が消えてるし)

今は囲まれてるようだが、一方向にいるエネミーらしき反応が一度に消えた。

どうやらやたら広範囲の攻撃で一気に蹴散らしてるようで、また結構な数消えた。

普通はこうも多数のエネミーが消し飛んだりはしない。

(相当な火力持ちのアークスだな……。顔を見ておくか)

「スピードレイン！」

带状の衝撃波を五発生み出すP Aが、直線上にいたダガン達を切り裂き、その姿を消していく。

探知を頼りに気になる反応を追いつつ、道中のエネミーを狩っているのだ。

ちなみに今のクラスはハンターとフォース、ということにしてある。

さつき駄目元でサブクラスを申請してみたのだが、士官学校時代に万遍なく訓練していたのが功を奏したらしく、特別早めに許可を頂いたのだ。

努力は俺を裏切らんね、ほんと。

んで、自作の長槍を使ってみてはいるが、問題はなさそうだ。

(光槍『ライトランス』……便利な機能だが、岩場や崖、木なんかで障害物が多いここじゃ、それも十分発揮できるわけじゃないしな)

使うとして、高い位置にいるエネミーを刺すくらいか。

だが、機能を使わずとも十分やれている。

言うなりや自力の確認なのだが、小型のエネミーやダーカーをやる分には問題ないな。

考えながら歩いていくと、反応していたアークスの姿が見えた。

男のようだが、アフィンより小柄なその背に声を掛ける。

「よっす」

「ひ、ひいー!」

「……………」

開口一番ビビられた。

「…………あ、な、なんだ。アークスの人か…………」

振り向いたそいつは、金髪のニューマンだった。

耳は平行に伸びていて、ニューマンとして通常サイズ。それに乗っかるように背高帽が上に伸びていて、低い身長を高く見せているようだ。

服装は、全体的に黒。近接には向かないものなので、恐らくフォースカテクターかだろう。

「……はあ、よかったあ。エネミーかと思いましたよ」

安堵の溜息をつかれる。

「………こいつが、さつきまでバンバンエネミーを消し飛ばしてた奴か？」

気弱そうで、明らかにアークスらしくはない。

ベテランどころか新米のペーパーのようだし、恐らく同期だろう。

「お前、新人のアークスか？俺もついこの前アークスになったばかりだけど、そんなビクつきながらで大丈夫かよ」

普段こういうお節介みみたいなこと言わない俺だが、口出ししてしまった。

あまりにビクつかれるもんだから、つい。

「いや、ぼく、あんまり戦うのは好きじゃなくって、ですね……」

「そりゃまあ……好きって奴の方が希少だろうけどよ」

「アークスになったのも、たまたま適性があったのと、人気があったからそうしただけで……」

「……たまたま適性があった、なんてもんじゃねえだろ。ありや。テクニク職で相手取ったとするなら、テクニクで戦ってたってことだ。」

しかし、並列起動もなしにあの数一度に消し飛ばすとなれば、それだけ一発の威力が必要となる。

そしてこうして目にしてりや分かる。

こいつは……P フォトンアーツ Aやテクニツクの威力を決める、フォトンの感応力が凄まじい。

(が、性格がこれじゃあ、な……。戦士としてやっていけないのかね)
「……正直、怖いことはしたくないんです。なんとかありませんかね
……ならないですよね……はあ……」

一人で問い掛け、一人で自己完結し、一人溜息をつくそいつ。
ネガティブ方向に忙しない奴だなー、おい。

そういや、ウルクに頼まれてた奴も、引っ込み思案で臆病で、その癖才能があるっつー……ん？

「お前、名前は？」

「え？ な、名前ですか？ テオドールですけど……」

おまえかよ。

なあるほどねー。こりや心配になるわけだ。

才能は凄まじいけど、明らかに性格が戦士に向いてねえからな。

さつきみたいに多数を相手取って、多分我武者羅にテクニツクを撃ちまくったんだろうが、それじゃあこの先戦えないだろう。

どうすっかなー。

連れて歩くには、誤射ならぬ誤爆でテクニツクを当てられた時が怖すぎるし。

かといってこのままほつとくのも寝覚めが悪い……やっぱ名前聞くんじやなかったな。

こいつと三人ペアならまだいくらか安心だろうけど……ん？

「おい。ちょっと来い」

「え？ は……はい」

テオドールは歩く俺の背に付いてくる。
素直だなこいつ。

そうしてエネミーとも遭遇せずに短い距離を歩くと、目的の人物を見つけた。

「おつ？ ハクメイか。それと……誰だそいつ？ アフィンとじゃないんだな」

さつきまでエネミー多数を相手取っていた、ゼノ先輩とエコー先輩の二人組だ。

今は落ち着いて、立ち話中のようなだった。

二人に挨拶と、紹介。

「こんにちは先輩。こいつはテオドールっていうらしいです」

「ど、どうも……」

「そつか。奇遇だな、こんなところで会うなんてよ。元気にやってるか？」

いや、まあ奇遇じゃないんですけどね。

探知で近く来てたのに気付いて、それを辿ってきたんですけどね。

テオドールがいるから言わないけど。

「さつき降りてきたばつかですけど、元気に狩ってますよ。アフィンはもうちよい落ち着いたらって」

「そうかい」

そう言うと、ゼノ先輩は頭を搔く。

「こんな森んなかで偶然会ったのも何かの縁ってやつだな。よし、ちよつと手伝わせろ」

「ちよ、ちよつとゼノ！ あたしたちも任務中なんだけど？」

「細かいことは気にするなって」

ゼノ先輩の申し出に、エコー先輩が口を出す。

……もしかして、デート中でしたかね？

ゼノ先輩の方には全くそんな気がなさそうだけでも。

デートのつもりで任務に行くから、恋人より相棒感覚が強くなるんじゃないでしょうか先輩。

「それに、こっちの任務はこっちの任務で、粗方ケリはつけておいた筈だぜ？」

「え………？」

スクリーンを呼び出し、確認していくエコー先輩。

任務の情報は、デバイスに記録された情報を基に確認できるようになっている。

ウーダンを十体討伐しろ、という任務で、五体討伐したら、五体討伐したこと、残り何体討伐すればいいのか。それがデバイスで確認できるのだ。

「……あ、あれ。本当だ。いつのまに？」

「お前が原生生物にビビって逃げ回ってる間にだよ」

「ビ、ビビってなんかない！」

……あの時か。

エコー先輩は拗ねたように言う。

「まったくもう！ 好きにしなよ！」

「よしよし、許可も出た。それじゃ行こうぜハクメイ！」

「……折角のお誘い嬉しいですけど、俺はちよっと一人でどこまでやるかっての確認に来たので、今回はソロで」

「ん？ そっか、そいつぁ残念」

大して気にして無さそうに言うゼノ先輩の傍で、ほっと溜息をつく
エコー先輩。

そんなに二人きりになりたいか。

男であつても邪魔者か。

そして残念ながら、安心するのは早いです。

「代わりに、このテオドールを手伝ってやってくれませんか？」

今まで黙ってたテオドールが、驚いたように俺を見る。

「え？ ほ、……ぼくですか？」

「ん？ そりやいいが、そんな気い遣う必要あるのか？」

「ええ。ちよつとこいつ、あんまりにもビクついてるんで。野垂れ死なれても寝覚めが悪いですし、先輩の方からフォローしてあげた方がいいかと」

「そ、そんな……ぼくの為に先輩の手を煩わせるわけには……いや、でも……先輩がいた方が、僕もなんとか……ああ、ごめんなさい」

「謝んなよ。戦場が怖いのはみんなおんなじだ。うっし！ じゃ、俺がちよいとアークスとしての心構えを伝授してやろうかね」

「お、お手柔らかに、お願いします……」

秘技、人に頼る。

面倒見の良いゼノ先輩なら、ちよいと厄介な後輩であるテオドールもほつとかないだろう。

お節介したいゼノ先輩。テオドールを押し付けたい俺。極力戦いたくないテオドール。見事に三人が立つのだ。

エコー先輩が目に見えて落胆しているが、立つのだ。

「それでは先輩。テオドールをよろしくお願いしますね。俺は探索続
けてるんで」

「おう……ところで、敬つてくれんのはいいが、ちよいと堅っ苦しいな。呼び方、変えてみねえか？」

「え？ うーん……先輩呼びじゃ不満ですか？」

「不満つてわけじゃないが、もつとフレンドリーに」

「むむ………。じゃあ、ゼノさん。エコーさんでどうですか？」

「ま、そんなとこだな。そんじゃハクメイ。お前さんも気を付けろよ」

そうして、二人はテオドールを連れて去って行った。

(まあ、これぐらいやりや寝覚めもいいだろう)

特徴的過ぎる担当官達とエンカウント

「ビィー！」

「ビィー！」

「ビィィィィー！」

俺が見上げる空には、アギニスが三体、円を描いて飛んでいた。ただ飛んでるだけなら気にする事ないんだが……ありや俺を狙ってるな。

どの角度から俺を狙って飛び掛かるか、決めあぐねてるって感じだ。

「ハン。先制していいんってんなら、文字通り飛ぶ鳥落とす勢いでやってやるよ」

今はルベルトもトイレで席を外してるし……あれでいくか。

ライトランスをアイテムパックに仕舞い、新たな武装を取り出す。

「気砲『プレスキャノン』」

自作武器の大砲。

砲口の反対側が膨らんでいるだけの、大した特徴もない緑と赤で彩られた大砲だが、こいつの真価はそっちにはない。

照準をアギニス共の軌道に合わせ、チャージして、フォトンアーツP Aを放つ。

「ディバインランチャー」

爆音は極小。

砲弾は無い。

だが——二拍置いて、アギニス達が吹き飛んだ。

「「ビィアアアアア!!」」

「チツ」

それぞれの方向へと吹き飛んでいくアギニス共を見て、舌打ちを一つ。

二体は直撃したが、一体は爆風で一時的に体勢を崩しただけだな。見立て通りその一体のアギニスは姿勢を整え、こちらへと飛んでくる。

照準を合わせ、もう一度放つ。

同じく砲弾は無いが……直撃だ。

アギニスは断末魔さえ上げる間もなく、吹き飛んだ先の木のシミになった。

「いっちょあがり」

気砲『プレスキャノン』。

見えない砲弾を放つ大砲。

その正体は風のテクニックを組み込んだ自作武器であり、砲弾は気圧そのものだ。

この大砲の膨らんだ部分に風を圧縮して詰め込み、撃ち出す。そして対象と接触した瞬間、フォトンアーツ空気の砲弾が炸裂。通常の砲弾と変わらない威力を生み出し、P Aとなってもそれは変わらない。

マイナス点は特殊弾を撃ち出せない（撃ち出そうとすると、空気の砲弾で無くなってしまう）ことだが……それでも見えない砲弾の利点は大きい。

早寝早起きして、今朝方作った甲斐はあったな。

大部分は出来てたが、風のテクニックのディスクが無かったからな。

「さーて、マターは大体集まったし……討伐はいったん休憩して、ギヤザリングでもしてみつかかな」

展開したP フォトンマップ Mに集中。

ギヤザリング——釣りや採取に良さそうな場所を探す。

「……先客がいるが、ここかな」

なんならちよろつとコツみたいなの聞いてみるか。

基本は士官学校で押さえてるけど、実践は初めてだしな。

昨日の実戦と同じように。

おいそこ。親父ギヤグかよとか言わない。

とりあえずのんびり釣りから始めてみようよ、水場がある場所へと向かう。

探知した通り、そこには先客がいた。

「どもっす」

「や、こんにちは」

釣竿を泉のような小さい水場に垂らすその人は、目が窺えなかった。

耳に掛けているが、中心では繋がっていない色付きのグラスサンを着けているからだ。

ハット帽を被っていて頭頂部もまた窺えず、後頭部は多数の三つ編みで編み込まれている。

全身が赤と黒で構成されたコーデイネイトなんだが……なんか怪しい商売やつてそう。

第一印象で全てを決める気はないが、あまり近寄らない方がいいかもしれない。

しかし、そこは俺。声を掛けた以上はここに居座ってやるとも。

「こんにちは。ここには釣りに？」
「そうだよー。お、なんだか初々しい顔をしているね。もしかして、ちやうどこの前ナベリウスに行っていた、とか？」

軽い感じでそう言われた。

……新人はわかるが、ナベリウスで修了任務を終えたことまでわかるのか。

黙っていると、その人は続ける。

「どうやら凶星みたいだね。じゃあまずは、無事で良かったねと言っておこうか」

「まあ、ダーカー襲撃には驚きましたけども、弱小個体でしたし」

「そういうわけじゃないんだよねえ」

「？」

「いやさ、この前のダーカー大発生時に、救援に向かった有名なチームがあっけなく全滅しちゃったらしくてね。そこから生還したつてのはそれだけで誇れることだよ」

「……全滅？」

「そ、全滅。13人ものチームが、一人残らず。リーダーの右腕だけが発見されたようだよ。あ、比喻表現じゃなくて、文字通りね？」

つまり、残りは死体さえ残らなかったと。

死体を食い荒らされたんだとしても、そんなこと有り得るのか？

いや違う。

そうじゃない。

「しつつかし、解せないのはその全滅だ。熟練のチームで、ただのダーカーに負けるとは思えないんだが……」

そう。全滅ってことだ。

チーム総がかりでも勝てない相手と遭遇したのであれば、逃走に踏み切る筈だ。まともに考えて。

任務は討伐ではなく、救出なのだから。

熟練であればその判断も早かったろう。チームの誰かが殿となつて誰かを逃がす判断だつてするだろう。

にも関わらず、誰一人として逃走に成功せず、全滅させられた。

それは即ち――

(熟練のチーム13人全員が、逃げる間もなく一瞬で命を落とした……?)

そんな攻撃力を持った怪物が、あの場にいたつてののか？

「ま、真実の追求はきつと誰かがやってくれるかな。まずは自身の無事を喜ぶべきだ」

その人が釣竿を振り上げると、糸の先に魚がいた。

それがキャッチされ、バケツに放り込まれると、その人は立ち上がる。

「ただ、小康状態だったダーカーの動きが活発化してきているのも事実。気を付けるに越したことはないね」

『お待たせいたしました、先生！』

「いや、まあギャザリング中だから別に待ってもいいけど」

さっきの赤い人——クロトと言うらしい。——は、俺に釣りのコツを簡単に教えていくと、そのままどこかに行った。

あまり集中せず、のんびんだらりと過ごしながら待つのがいいらしい。

俺としても休憩のついでにやっていることだから、集中力を割かないのは有難い。

それにしても、有名チームを全滅させた怪物か……………。

(探知にはそれらしき反応はなし……。そもそも、アークス側でそんな生体反応が確認されたんなら、ナベリウスは立ち入り禁止区域に指定されて、もつと強いアークス——それこそ六芒均衡が動いたっていい筈だ)

となると、そいつはもうナベリウスにいないのか？

現れたナベリウスに常駐せず、他の惑星を転々としている、と。

(とはいえ、ダーカーだとするならいきなり目の前に現れたっておかしくない。警戒を上げとく必要はあるな)

「ルベルト。まだしばらくはギャザリングしとくから、他の事やっていいぞ。また狩るってなったら呼ぶから」

『了解いたしました！ お気遣い痛み入ります！』

ルベルトとの通信が切れる。

さて、何匹釣れるかなつと。

……………ん？ 誰か来るな。

「……………こんにちは」

声を掛けられた方を向くと、そこにはテクニク職らしい長いコートを着たニューマンの女性がいた。

薄い紫がかった髪で、前髪パツツン、襟首辺りで切り揃えた、所謂

ボブカット。その頭にはヘッドギアが装着されている。

小柄だが、スタイルは普通くらいという、大人しめなイメージがある人だ。

「あ、こんにちは。そちらも釣りで？」

「……いいえ。通り掛かっただけ。……最近、ナベリウスに来るアークスが増えてきているわね。……この前、ダーカーがいっぱい出現して以来、と言うべきかしら」

「んー。まあそうっすね」

確かに、昨日のダーカー大発生によって、ナベリウスに対する任務は増えている。

通常の任務もありはするが、基本的にはダーカーを間引くことが主目的だ。

「……実はこれ、あまり良くない傾向。アークスがいっぱいいるというの、そこが危ないっていうことだから」

……そのアークスでさえ立ち入り禁止に指定される所が一番危ないと思うけどねえ。

まあ、そんな場所はもう滅多にないけども。

「けどま、アークスとしては活動できる場所ってのが明確だからいかもですけどね」

「……私もアークスだけど、出来るなら、アークスとしての活動をしないで済むようにしたい」

その人は、胸にそっと手を当てて言う。

「……それがきつと平和ってことだから」

……平和、か。
そうだったら、俺もなんか違う仕事することになんのかね。
必死こいてなった仕事が、出来たら無い方が良いつてのもの……。
ま、どーでもいいか。

「……自己紹介が遅れたわ。私はマールー。一応、フォース、テクターのクラス担当官」
「お」

担当官。

そのクラスに対して深い理解があり、優れた戦績を叩き出す人が選ばれる者達だ。

クラスに対しての理解が浅い新人に、実地で共に戦うことでクラスに対しての理解を深めさせることを目的とする。

テクニツク職とは思っていたが、まさか担当官だとは。

「……あなたのクラス、聞いてもいいかしら？」

「俺？ 俺は一応ハンターメインで、サブにフォースですけど」

「……そう」

何故だが、ジト目を向けられている気がする。

「……ハンターって、なんていうか、むさ苦しいと思わない？」

「……ええ」

「……いちいち前に出て射線や視界を遮ったりするし、掛け声もうるさいし……」

「いや、掛け声は個人差では……」

「……なにより、何も考えずに突っ走る人が多くて、正直理解不能」

……こうまで言われるとは、ハンターに何の恨みが。

というかそれらの不満点って、他と連携が取れてないだけなんじゃ

……。

いや、よそう。

変な地雷を踏みたくない。

「……その点、フォースは良い。静かに動き、溜めて一撃必殺。とつても効率的」

「……………」

代わりに高速戦闘についていけないのがフォースですけどね。

「…………選ぶのならフォース。覚えておいて損はないわ。じゃあね」

「お、ご同輩か。最近はナベリウスに来るアークスも増えてきているんだな」

マールーさんが去り、魚を三匹程釣り上げていると、新しく人が現れた。

緑髪のポニーテール。前髪を二房だけ垂らした、大柄な男だ。黒い戦闘服に包まれた肉体は鍛え上げられたそれで、ハンタークラスなのが見て取れる。

「こんにちは。さつきも聞きましたけども、一人に出会ったくらいでそう判断するもんすか？」

「この前のダーカー大発生までは、道中で誰かと会うなんてほとんどなかったんだぞ」

「へえ……」

そういうもんか。

「ただ、多くのアークスがいるというのは、危険という事の証左でもある。本来は、誰も来ない状態がベストだな」

……ん？

「ま、オレ達としては飯の食い上げに困ってしまうが、平和で済むなら、その方が良い」

……さつき聞いたこととほぼおんなじなんだけど。

やっぱアークスってその思想が一般的なのかね。

色んな事したいからアークスになった俺が、少数派なんだと思い知らされる。

「……あんたと同じこと言ってた人がいたよ」

「それは気の合うことだな」

うんうん、と頷かれる。

「自己紹介が遅れたな。俺はオーザ。ハンター、ファイターのクラス担当官だ」

「おお」

またも担当官か。

連続で担当官に出会うとは、余程このナベリウスに来ているアークスが多いということなのかね。

「ちなみにお前のクラスを聞かせてもらってもいいか？」

「ハンターがメイン、フォースがサブです」

「うむ、ハンターメインはいいな。ダーカーとの戦いは体力勝負。そうなると、最も有利なのは肉体強化に優れたハンターだ」

正確には、肉体が最も強くなる形にフォトンの体組織を組み替えられた、なのだが。

そこから更に体内のフォトンフォントドライブを流動、活性化させて、肉体の全てを強化するのがP Dだ。

「レンジャーやフォースでは、途中で息切れしてしまい、肝心な時に力を発揮できないぞ」

おっと？

「特にフォースはダメだ！ フォースは！」

おおっとお？

「肝心要のタイミングで、息切れで攻撃できないなんて言語道断」

「ええ……」

「その点ハンターは、武器と己の肉体を頼りに戦う。息切れの心配も無用、安心だ」

その分遠距離攻撃してくる敵に滅法弱いんですがそれは……。

「迷ったらハンター！ 覚えておくといい。それじゃあな」

(担当官同士って仲悪いのだろうか)

オーザさんが去っていき、ギャザリングも程々にして歩きながら、俺はそう考えていた。

自分のクラスに愛着があるのは良いことだが、かといって他のクラスを非難するって、担当官としてどうなんだろうか。

むしろ他のクラスと一緒にどう立ち回るのかということが重要なのではないだろうか。

アークスとしての根幹はそう変わらなさそうだから、争いに発展したりはしないと思うけれど。

(あの人達、現場で遭遇して共闘ってなった時に、ちゃんと連携して戦えんのかね)

クラスなんて一長一短。そこを補い合ってこそその連携だろうに。

ま、考えても仕方ないか。

残りのマターは……ロックベアくらいか。

岩に覆われた外皮を持つ大型エネミーで、並みの攻撃を適当にぶつけてるだけじゃ勝てない。新人アークスの登竜門みたいなやつだが、はてさてどう攻略したものか。

定石通り、岩に覆われてない顔部分を狙って攻撃するのが一番だろうけど。

(つと、誰か来るな)

曲がり角がある地点に辿り着き、その先からアークスらしき反応が探知にかかる。

結構前からこの反応はキャッチしていたが、まさか合流するとは。素通りするのもあれだし、挨拶していくか。

そうして立ち止まっていると、向こう側から人影が現れ――

銃を構えられた。
撃ってきた。

「あつぶなあああ!!?」

横に跳んでギリギリ銃弾を躲した。
後ろ側で樹木に銃痕が刻まれる音。

え!? 実弾!? 実弾撃ってきましたよこの人!?

「誰ですかあ? ……ってなんだあ、アークスじゃないですかあ。
ビックリさせないでくださいよう」

「いや今完全にビックリさせたのそっちだよね!? 驚かせるどころか
お亡くなりにならせるつもりだったよね!」

「リサはね、狙撃手なんです。背後に立たれるのが嫌いなんですよう。
気を付けてくださいねえ」

「真正面に立ってましたけど!」

なんなのこの人話通じない!!

リサと名乗るその人は、黒髪赤眼の女性キャストだ。

キャシールとも言うんだっけ?

病的なまでに白いスキンで、イオニアシリーズ……だったか? の
パーツを一式固めている。それなりに膨らんだ胸部の谷間にネクタイ
らしきものが挟まっていたり、二の腕が晒されていたり、太ももが
バツチリ視界に入ったり、かなり扇情的な格好をしているが、それに
心惹かれないのはキャストのメカメカしたフォームが原因ではない
と思う。

というか、目が怖い。

わざと見開いてるのかとばかりに凝視してくるし、口元に浮かんだ
三日月のような笑みも恐怖心を呼び起こす。

可愛い美少女、美女は種族関係なく愛でる対象だが、この人はお近

づきになりたくない。

「これはこれはどうもすみません！　なんだかさつきから不愉快な感じがしてて、リサ気が立ってたんですよ。よく確認もせずに撃ちやいたくなるくらいに」

「ふ、不愉快な感じ？」

「なんとですかですねえ。誰の視界にも入ってない筈なのに、じーつと見られてるというか、探られているというかあ。見えない何かに身体をまさぐられてるみたいで、とおつてもイライラしてたんですよ」

「……………は、はあ」

背中に冷や汗が滴り落ちる。

この人……………もしかして、俺の探知に気付いてたのか？

俺の支配下にあるフォトンだったとはいえ、俺の操作を受けている以外は大気中のフォトンと変わらないというのに、それを感じ取ってた。

それもフォトンの扱いが他種族に劣るキャストの身で？

どういう勘をしてんだこの人。

「でもお。今のが当たってたたら、あなたがリサが撃つたひと第一号になってたんですねえ？　そういう意味では惜しかったですねえ」

「……………こっちはあなたが俺を撃つたアークス第一号になるところで、非常に危なかったんですが」

ていうか、惜しかったって。

出来るなら人を撃つてみたいと思ってるのかよ。

「これはこれは自己紹介が遅れてしまいましたあ！　ちよつと発散できたのでしちやいますねえ。リサはリサですよ。レンジャーとガンナー、射撃を扱うクラスの担当官なのです」

「ガツデム！」

また担当官！

また担当官ですよ！

担当官の中にまともな方はいらっしやいませんか!?

「あなたはあ、ハンター？ レンジャー？ フォース？」

「あ、つと。俺は」

「まあなんでもいいですかねえ」

……流されてもた。

「さて、ハンターやフォースのみなさんに言わせてみれば、レンジャーは火力が足りないと言われますねえ」

「は、はあ……」

「それはその通りなんですよう。銃はですねえ、一撃必殺とはいかないんですよねえ」

急に始まったレンジャー講義。

俺を新人と見てのことだろうか。

確かに、それはそうだ。

弱い個体の弱点を撃ち抜くというなら話は別だが、基本的に射撃は一発一発の威力が打撃や法撃に見劣りする。近接専門のハンターや、前衛の援護と回復、一部テクニクの射程距離などを加味して中距離での戦闘が主になるフォースなどと違い、オールレンジで戦えるのがレンジャーの強みではあるが、その攻撃は敵を削るという表現がしつくりくる程些細なものだ。

なんだ。

ちゃんとクラスの弱点も考慮してる人ではある——

「でも、それがいいんです。そうじゃないと、いけないんです」

「おや？」

「だってだって、敵は敵ですよ？ 苦しんで苦しんで苦しんで苦しんででもらわないとだめじゃないですかあ」

「おやおや？」

「だから、リサは銃が大好きですねえ。大きな敵も、小さな敵も、分け隔てなく、苦しめられる銃が大好きです」

「……………」

そんな理由でレンジャー選んでる人初めてだわ。

俺も銃使うけど、火力が足りない方がいいなんて初めて聞いたわ。

「…………ドン引きですねえ。でも、リサの言っていること、そんなにおかしなことですかあ？」

「ええ……………」

おかしいと言えば上から下まで全部おかしいけれども。

「それにしても銃って、ほんとうにいいですよねえ……………」

無邪気に、だからこそ悍ましく、うつとりした表情で持っているアサルトライフルを撫でるリサさん。

「感触は残らないし、敵は踊るように倒れていく……………なんともたまらず、ぞくぞくしませんかあ？」

「……………」

「すべてを支配している感じで…………。ああ…………そんなこと話していたらまたやりたくなっちゃいましたよう」

「あ、はい」

殺ると書いてやりたくなっただんですね、はい。

なるべく回り込む形で道を開ける俺。

この俺が自ら道を譲るとは、中々希少なシーンだと言えよう。

「それじゃあ、リサは行ってきます。ごきげんよう、ごきげんよう」

そうして、リサさんは俺が来た道へと消えて行った。

……………。

……………。

……………。

「やっぱ独学が一番だな」

なんでもできる俺スゲーって思つところ。

さて、ロツクベアの搜索を続け——ん？

(…………この大きさは、大型エネミーだな。ファングパンサー達
の速度じゃないから、ロツクベアか)

探知に新たに反応したものに対し、そう判断する。
加えて。

(アークスが二人。交戦中か?)

双子で胸の大きさが極端に違うって、エロゲみたいだよね

「ティアー！ バテてきたから回復してー！ お姉ちゃんもうしんどいよー！」

「分かってるってば！」

わたしはティアー。

今あそこでロックベアと戦いながら騒いでる、バカ姉パティちゃんの双子の妹です。

今のところ致命傷は無いけど、ロックベアの腕を掻い潜るためにタバタ動くから疲れるんじゃないかなあ。

とは言っても、倒れでもしたらわたしもキツイので、とりあえずその背中に向けてタリスを投げる。

直撃直前ぐらいで止まったタリスから、テクニックを発動。

「レスター！」

回復フィールドがタリスから展開される。

フィールド内にいるパティちゃんから歓喜の声。

「ああ、癒される。ありがとってわあああ！」

立ち止まったパティちゃんに、ロックベアの右腕が横薙ぎに振るわれる。

後ろに跳んで、紙一重で躲していた。

着地に失敗して尻餅をついたけど、そこは流石にすぐ立ち上がる。

そのまま走ってわたしの方に来た。

「もーやだー！…なんでこんなおつきくてかったいの相手しなきゃいけないのさー！」

「今日は調子いいね！ 今ならロックベアなんかも楽々倒せる気がする！」とか言つて、パティちゃんがロックベアの生息地に突っ込んでいったからでしょ」

「そだっけ？」

「自分で言ったこと忘れてる……」

本当にどうしてくれようかこの馬鹿姉は。

ただ、なにも倒せないわけじゃあない。

わたしもパティちゃんも、戦闘は専門外とはいえ、もう新人からは卒業したアークスだ。登竜門のロックベアくらい、二人で倒した経験はある。

楽々なわけじゃないけど。

ものすごく苦戦して倒した記憶があるけど。

「それで？ 今度はどうするつもりなの？ パティちゃん」

「えー。あたしもう帰りたいーい」

「まあ逃げるのも選択肢ではあるけどさ」

ロックベアがこっちに向かってのっそのっそと歩いてくる。

正面に見据えながら距離を取るわたし達。

ロックベアは異様に発達した上半身と岩に覆われた外皮を持つけど、それに比べて下半身は虚弱。バランスよく歩いてくるのにだって長い腕を地面に突きながらになる。それだけなら鈍重なエネミーなんだけれど、ロックベアは足の代わりに腕で跳躍してくるのだ。さながら高い高い爆転の如く。

それが結構な距離を取ってくるものだから、迂闊に背中を見せるわけにもいかない。

あの巨体だから森の中に入ればこっちが断然有利だろうけど、ここは広場。ロックベアがロクに動けなくなる森まで引き付けるのは一苦労。

……おいこら。ロックベアだけにロックに動けなくなるとか考えてないからな。

「ロックベアだけに、向こうがロックに動けなくなる所だったら、楽チンなんだけどなー」

バカ姉が考えてた。

なんてやっている間にも、ロックベアはこちらとの距離を詰めようと近付いてくる。

わたし達も後ろに下がるけれど、ちらりと後ろを見てみればそこには壁。

このままだと、壁際に追い詰められる形になる。

「ちよつとバカ姉、決めるなら早くして。倒すなら倒す、逃げるなら逃げるでもいいから」

「うー！ 倒せそうな気がするんだけどなー！ どーしよ——」

「おーい、お二方」

背中側から声が聞こえた。

正確には後ろの壁上の方から。

半身になって声が聞こえた背中にある壁の上を見ると、そこには戦闘服に身を包んだ、黒髪青眼の男性アークスがいた。

「あ！ アークスの人？ 見ない顔だね？ 新人さんかな？」

「パティちゃん。呑気に分析してる場合じゃないから」

「まあ新人っっちゃ新人。ところで」

しゃがんでこちらを見下ろすその人は、わたし達の先にいるロック

ベアを指差す。

「あれ、手間取ってるようなら俺が貰うよ?」
「え?」

それって……あのロックベアを一人で倒すってこと?

あのロックベアとはそれなりに長い時間戦ってきたけど、弱らせるどころかちゃんとしたダメージを与えてもいないから横取りされた気分にはならない。

けれど、新人アークスが一人で相手する敵でもないのだ。

もしかしてそのところわかってなくて突貫しちゃう人?

だとしたら一人で戦わせるわけにはいかないよね。

手助けは有難いけど、せめて一緒に戦うように……。

「助けてくれるの!? ありがとうー! ドカンとやっちゃって!」

「おい、プライドはないのか」

「はいはい。ドカンとやっちゃいますよ」

「あなたも安請け合いないで! わたし達も——」

「まあ見とけて」

わたしの言う事を聞かず、その人は立ち上がって手元に槍を呼び出す。アイテムパックから取り出したのだろう。

使う武器はいつでもどんな場合にも対応できるように携帯しておくのが常識なのに、なんでアイテムパックに——あれ?

あんな槍、アークスにあったっけ?

穂先や柄の区別なく、全体が白く染まった一本槍の先の照準をロックベアに合わせ、彼は突き出す。

「光槍『ライトランス』」

白い槍から光の槍が伸びた。

「うえ!」

槍と同じ太さの光がロックベアに一直線に伸びていき、吸い込まれるように顔部分に刺さった。

ドズウツ、と肉が裂ける音。

「ガアアアアアア!!」

ロックベアが苦悶の雄叫びを上げる。

位置的にあれ、多分目に刺さったよね。

その巨大な両手でロックベアは顔を押しさえる。その前に光の槍はフシユツ、と消えた。

「ま、やっぱ貫通はしないか」

淡々とその結果を確認すると、彼は足元の地面に槍を垂直に刺し込む。

「刺爪『ブラッドクロウ』」

彼の両手に自在槍が呼び出された。

穂先が鉤爪のカーブ部分から針が伸びている、これまた見た事のない自在槍。

鉤爪を掴まんでワイヤーを引き摺り出し、それを地面に刺した槍の柄に巻き付けていく。

「な、なにになに!? 今度はなににするつもりなの!」

「パティちゃん落ち着いて! まずはデバイス付属カメラを用意しな

いとでしょ!」

「撮影はいいから黙ってくんない?」

許可が下りたので呼び出したスクリーン越しに彼を捉え、録画を開始する。

柄全体にギツチリとワイヤーを巻き付けると、彼はその石突部分に右足を掛け、体重を乗せて槍を曲げていく。

しなる槍——ライトランス。

限界が来たと思われるところまでしならせると、左足も石突に飛び乗る。

しなった槍の反動で、彼は天高く飛び上がった。

「飛んだあー!!?」

「静かにしろって言われたでしょ!」

斜め上に飛んでいく彼は、ロックベアの上空に躍り出ると、そこで急停止した。

見ると、彼は自在槍——ブラッドクロウのワイヤーを掴み、逆側に引っ張っていた。

槍の方もそれに合わせて地面から抜け、ワイヤーが彼の手元に戻っていくと、巻き付かれていた槍も手元に戻っていく。

上空にいる彼はそれを掴み取り、二つとも手早くアイテムパックに仕舞った。

(そっか。だから、槍を地面に刺して、ワイヤーを巻き付けてたんだ)

高く飛び上がるために槍の反動を使う必要があるけど、それだと槍は壁の上に置き去りになる。

飛び上がったって、飛び過ぎてロックベアを通り過ぎてもいけない。

だから、自在槍のワイヤーでブレーキを掛けると同時に槍を回収するため。

「剛剣『ブーステッド』」

未だ顔を押しさえて悶えるロックベアの上空で、彼は新たな武器を呼び出す。

かろうじて刃が研がれている程度の身の丈程ある鉄塊だ。見るだけで重いとわかる。恐らくカテゴリとしては大剣だろう。これも見たことは無いけれど。

その大剣のような鉄塊は、峰からブースターを噴射し、彼の身体ごと縦回転を始めた。

さながら大車輪の如く回転する彼は、重力に身を任せてロックベアへと自由落下していく。

頭頂部少し上へと到達したとき、その鉄塊を振り下ろした。

「ツイスターフォール！」

巨大な鉄塊の兜割。

目をやられたロックベアはそれを防御することも出来ず、頭上からそれを受ける。それでも本来なら、ロックベアの岩石が邪魔して、岩に傷をつけるだけだっただろうと思う。それほどまでにロックベアの岩石は硬いのだから。

しかし、その鉄塊は――。

ドカンッ、とその岩石を叩き割った。

鉄塊自体の重量と重力と遠心力とが加わり、垂直に振り下ろされるそれは岩石を叩き割るに飽き足らず、その下の身体をも割っていく。その軌道に逆らわず、ロックベアは遂に頭为天辺から股まで両断されてしまった。

一閃。というにはあまりに荒々しい割砕が地面にまで到達し、小さな地割れを起こしてようやく止まる。

鉄塊から手を離し、腰に差していた青い杖を取り、両断された巨体に向けた。

「バータ」

返り血防止だろうか。

大量の血を噴出しかけていた身体が、断面を氷のテクニクによって凍らされる。

氷柱を走らせてぶつける初級テクニクでそう簡単に凍ることはないのだけれど、割砕され、後は倒れるのみの死体に抵抗がある筈も無い。

右側に一発。左側に続けてもう一発バータが放たれ、ようやくロックベアは重い音を立てて倒れた。

鉄塊——ブーステッドをアイテムパックに仕舞い、彼は一言。

「思ったよかやわかったな」

いやしかし、かなり状況が有利だったとはいえ、こうも簡単に倒せちゃうか。

硬い硬いと噂のロックベアだったが、所詮は岩石の鎧。鉄塊であるブーステッドの重量とブースター起動の遠心力、プラス高所落下の重力とP フオートンアーツ Aの四つが合わさったらこんなもんだろう。流石に一刀両断するとは思わなんだが。

手に持った氷杖『アイス』を肩に担ぎ、ロックベアの状態を確認する。

……うん。完全完璧に死んでるな。

身体を縦に両断されたロックベアは、両側ともピクリとさえ動く様子を見せない。流石に半分に分かれても生きてるような気持ちの悪い奴じゃなかったか。

さて、これでマターはコンプリート。

後はこいつの素材を回収して、あの女にこれを見せて問い詰めるのみだが……、取り分はどうしたもんかね。

とりあえず話し合いをしようと、後ろの二人の方へ振り向いて話し掛ける。

「俺がトドメ刺したけど、コイツ——」

「ありがとうおおおお!!」

二人組の片方が飛びついてきた。

「ぐふおっ!?!」

低空ミサイルと見紛うばかりの突進を腹に受けて、苦悶の声が漏れる。

周囲に敵性反応が無くて完全に油断してた俺は、受け身を取る事も出来ず、為すがままに押し倒された。

芝生に寝転がる形になる俺の胸板で、若干身体を登ってきた彼女にぐりぐりと顔を押し付けられる。

「ほんつとーにありがとうお！ あたし達じゃしんどいと思ってたおつきくてかったいエネミーだったのに、まさか一刀両断しちゃうなんてえ！ 感謝感激雨霞だよ!!」

「ぐ、ぐっふ……」

「こらパティちゃん。助っ人してくれた恩人にダメージ与えてどうするの」

パティと呼ばれた彼女は、もう片方のよく似ている女子に、猫のよ

うに襟首を摘まみ上げられる。

しかしパティは依然として俺を離さず、持ち上げようとする俺まで付いてきて、ちつとも浮かせられない。

「……おいこら。離しなさいっての」

「やだ！ あたしのこの感激を身体で表すには、まだまだ足りてないもんー！」

「もんつて……はあ。ごめんなさい。飽きるまででいいので、このバカ姉に付き合つてあげて」

「いえ、お構いなく……」

なにせポヨポヨは正義ですからね。

ポヨポヨと言うか、ボヨンボヨンですけどね。

昨今のアークス女子界限でも滅多にお目にかかれないサイズを余すことなく押し付けてくれますからね。

大きくなくても押し付けてくれるのは同じくらい嬉しいけど、希少性つてもんがね。

貧乳はステータス、希少価値だというけど、ぶっちゃけこのサイズの巨乳の方が希少価値あると思うの。

しかし顔には出さない。

だって出したら、この極上の感触が離れていってしまうもの。

そうして彼女が飽きるまで、俺は腹上に広がる天国を飽きることなく堪能し、しかし決して顔には出さず、時間にして五分程経つてから二人一緒に立ち上がった。

表情筋が攣るかと思った。

でもごちそうさまでした。

「自己紹介がまだだったね！ あたしはパティちゃんですっ！」

「ティアです」

「二人合わせてパティエンティア！ アークス一の情報屋！ 仲良し美少女姉妹アークスと名高いコンビですよー！」

「へえ」

「名高いって程の活躍はしてないけど、名前だけでも覚えてもらえる
と嬉しいです」

名前を忘れても今日の感触は忘れない。

とは言わない。

どうやら双子の姉妹らしく、彼女達はよく似た顔立ちをしていた。
姉だと言われていたパティの方は、イエローブラウンの髪をゴムで
ツインテールに纏めたニューマンの少女だ。緑を基調とした背中側
の露出が激しい服装を着ていて、その服に包まれた大きく膨らむ胸部
は男の視線を否応なく惹きつける。

……あれがさつきまで俺に押し付けられていたんだな。

明るくハイテンションな性格というのはさつきのやり取りで伝
わったし、彼女の雰囲気もそれを如実に表していると見えよう。

消去法で妹であろうティアは、ブラウンの髪を姉とは違ってヘッド
ギアでツインテールに纏めた、同じくニューマンの少女。姉程ではな
いが二の腕周辺の露出が多い、黄色を基調とした服装で、その胸部は
姉と比べてささやかだ。

いやほんと、姉と比べたらっただけで、普通サイズだとは思うけど
ね。他のパーツがほぼ一致する分、並んだら差が際立つっただけで
ね。

どうやら姉のブレイキ役みたいな役回りのようで、どこことなく苦勞
人な雰囲気を感じる。

そしてどっちも自称に違わず美少女。

双子でタイプ違う美少女が並ぶって、素晴らしい光景だと思わない
か？ 俺は思う。

鑑賞終了。

会話に集中する。

「俺はハクメイ。一応、昨日修了任務を終えた新人アークス。よろし
く」

「ハクメイさん、ですね。改めて、さつきはありがとうございました」
「あたしと同じ年ぐらいなのに、すごかったよねさつきの！　ね！
ね！　さつきの武器って見たことないけど、どうしたの!?!」
「ああ、これ?」

さつきの武器は三つあるのだが、とりあえずブーステッドをアイテムパックから呼び出し、地面に突き刺す。

「ちよいと知り合いに腕の良い武器職人がいるもんでね。その人にオーダーメイドで作ってもらったんだ」

「へー、すっごいなーこれ。ちよつと持ってみてもいい?」

「持てないと思うけど、まあどうぞ」

俺の許可を得て、パティはブーステッドの柄を握り、地面から引き抜こうとする。

が、まあ当然――

「ぬぎぎぎぎぎぎぎぎ……なにこれおつも!?　これ引き抜けたら、あたし伝説の存在になれそうな気がするくらい!」

「何言ってるんだこの姉は」

両手でバーベルを持ち上げるかのようにしても、彼女の膂力ではブーステッドは持ち上がらない。

むしろ重量によって地面にずぶずぶ沈んでいく。

ていうか、女の子がそんなガニ股で持ち上げようとするのはどうなの……?」

「っあー!　だめだー!　あなた、よくこんな振り回せたね!」

「ま、これはちよつとコツがあってね」

「コツ?」

「コツというか、機能だな」

柄から手を離れたパティの代わりに右手で柄を持ち、ブースターへとフォトンを流し込む。

ズドオツ！ と音を立てて、俺達の横へと剣閃を描き、ブーステッドは引き抜けた。

「このブースターを使った遠心力でぶん回す感じ。破壊力は高いけど、小回りは全然利かねえの」

重力に従って刀身がまた地面に刺さる前に、ブーステッドをアイテムパックに仕舞う。

正直言つて、この鉄塊は重過ぎるのでまともに持つことさえ出来ないのだ。

フォントドライン
P D 中は、普通の大剣のように扱うことが出来るのだけれども。

「ほへえ……。こんなので叩かれたら、一溜まりもないね」

「……そんな職人さんの話、聞いたことありませんが」

「まあ、腕は振るいたいけど名は売りたいくない人だな。俺も製作者について話さないことを条件に作ってもらってるから」

という設定である。

「情報屋だつてんなら尚更だ。俺を介しての注文なら受け付けるけど、製作者に紹介は出来ないものと思ってくれ」

「えー？ いいネタになりそうなのになー」

「しようがないでしょ。そういう武器を作れる人がいて、この人越しなら注文できるってだけでも結構なネタだよ？」

「まあ、値段その他は応相談ってことで。そんな多くは一気に捌けないだろうけど」

よしよし。噂は広げられそうだな。

これも俺の金策の一つだ。

何事もまずは金。色んなことをしたい俺にとつちや、金は避けては通れない道なのだ。アイテムショップに用がないとはいえ、金は稼がにや貯まらない。

普段の任務に加えて、素材集めやC クライアントオーダー O、そして武器の特別注文など。勿論俺の時間が取れなくなる程請け負うつもりもないが、かといって新人アークスが懇意にしてるだけの職人に、そこまで殺到することもない。

「ところで、このロックベアはどうする？ この通りだけでも」

「あ、素材なら全部あげるよ。ね、ティア？」

「え。マジ？」

「そうだね。わたし達は全然ダメージ与えてなかったし。元々パティちゃんが暴走しただけで、ロックベアを討伐する気はなかったしね」

「そゆこと！ って、それはバラさない約束でしょティアー！」

「そんな約束した覚えはないけど」

「約束してなくてもお決まり的な！」

じゃれあう双子の姉妹。

それを尻目に、俺は振り向く。

「じゃあ、遠慮なく」

ロックベアの死体に近付き、素材になりそうな部位をアイテムパックから取り出した解体用のナイフで切断していく。

ロックベアの肉は、見た目に似合わず中々の珍味だ。

ゴリラのように発達した上半身は元より、身が少ない下半身も、一匹当たりの量が少ない分、希少価値が付けられる程だ。

閉鎖空間であるアークスシップ故に、惑星から素材を調達することが主流となるシップの乗客達にとっては、そう頻繁に手を付けられない物だと言えよう。

うちの孤児院でも、月に二、三回出るのが精々つてところか。大部分は売って、美味しい部位は俺と孤児院用に確保するか。こっちは秘密だが、ロックベアを覆う岩石には鉱石が含まれている。

アークス側では岩石を提供すればそれを買ってくれるが、正直言って鉱石の価値を考えればぼったくりも良い所だ。抽出を施設任せにするにしても。

俺も一度この岩石を買い取ったことがあったが、この鉱石は金銭的価値に限らず、武器の素材にするにも良い。

そして俺なら、岩石から鉱石を探り当てることも、抽出も、フォトンの応用制御で可能だ。

おお。こいつは当たりだな。前回よりも鉱石の比率が多い。

二人からは俺の身体で見えなくなる角度で、岩石から鉱石を抽出していき、それを順次アイテムパックに仕舞っていく。

「ねえねえハクメイ」

作業している俺の後ろで、パティが俺を呼ぶ声。

「助けてもらったお礼にさ、センパイのあたしがちよいと助言でもしてあげようか？」

「……パティちゃんより全然強いって今さつき証明されたけど」

「うるっさい！ アークスに必要なのは実力じゃないの！ 知識と情報なの！ ね、アナタもそう思うよね？」

「まあ、思うね」

こういう解体の知識や岩石内部の情報がなけりゃ、大分損してるからな。

情報様様。

「まず、あたし達アークスが気を付けなきゃいけないのはダーカーよ

ね！」

片手間に解体と抽出をしながら、パティイの話を聞く。

「めつちやこつち狙ってくるし、原生生物の凶暴性も上げてくるし、放っておいたらタイヘンよ！　ここナベリウスは原生生物があんまり強くないからまだいいけど、他の惑星に……」

「……ごめんなさい。さつきから出来ない姉がぴーちくぱーちくうるさくて。伝聞情報を垂れ流すだけの頭でつかちさんなので、放っておいてあげて」

「君も中々姉に対して辛辣よね」

「あ……でも、ダーカーが危険というのだけは、重要な事実かも……。最近はこちらにも出てくるようになったみたいだし、気を付けて」

正確には、昨日のダーカー大発生から。

あの時大量に出てきた以外にも、今日までに続々と出現して、その数を増やしているらしい。

「頭でつかちとはなにさ!?!　じゃあさ、すつごいアークスって知ってる?　何がすつごいつて?　とにかくなにもかもがすつごいの!」
「翻訳すると、アークスの中で絶対命令権を持つ六人、『六芒均衡』のこと」

「一とか二とかで数えられるあれだろ?」

「そうそれ!　あたしこの前、生で見ちゃったっばいだよね!」
「……なに?」

……六芒均衡が、来ていた?

ここナベリウスに?

「なんかもー、どかーん!　ずばーん!　って感じで、すつごかつたよー!」

「見たと言つても遠めにだから、参考にしないでね。でも、凶抜けた力は本当みたい。仰々しい名前をつけるだけはあるってことね」
「どこから見ても普通っぽい小さい女の子だったのに、すっごいよねー！ アナタもすっごかったけど、あの子はもう、規模からしてすっごいからね！」
「……………」

小さな女の子が六芒均衡、というのも聞いたことが無かったが。六芒均衡がここに出動する程、今回の件を重く受け止めているというのか。

それとも、別件でもあるのか？

「あたしも頑張れば、あんな風になれるのかなあ！」

「絶対無理」

「断言された!？」

やはりこの妹、姉に辛辣だ。

俺、というか多分他の人には丁寧なんだろうけど。

「まあいいや」

「まあいいのかよ」

「さて、六芒均衡繋がりだけど。アナタ、三英雄って知ってる？」

「奇数番の六芒均衡のことだろ？」

「そう！ アークスの中のアークス！ シンボルとも言える三人！」

「補足すると、六芒均衡のうち、更に有名な三人のことね」

「たしかメンバーはレギアスとー、カストラとー、えーつと……………あと一人は……………」

「クラリスクレイス」

「そうそれ！」

長いよなー、クラリスクレイス。

語呂がいいから略す気が起きないけど。

「三英雄は存在自体がシンボルだから、その名前を襲名していくんだって！ 二代目とか、三代目、とか！」

「とはいえ、レギアスは初代そのまま。カスラが二代目、クラリスクレイスは三代目。まだまだ歴史は浅いの」

士官学校の特別教導官としても顔を出していたから、レギアスは知っている。

種族はキヤストだから、機械の身体故に長寿。40年前の大戦争から三英雄と呼ばれながら、今でも第一線で活躍している六芒均衡のリーダーだ。

しかし、カスラ、クラリスクレイスがどんな奴なのかは知らない。歴史が浅いのもあるが、あまり表に出てこないのだ。

「だからあなたも、活躍し続けていれば襲名されるような存在になれるかもね」

「アナタなら、もしかしたら二代目レギアス！ なんてことになるかも！」

「やだよ。それだったら定例なんぞドブに捨てて俺が初代ハクメイになるわ」

「そんな意見は初めて聞いたな……」

「それにしても、襲名ってなんかもう字面がかっこいいよねー！ あたしの名前も……」

「絶対無理」

「断言されたセカンド！」

素材の回収も終わったので、姉妹との会話もそこそこに、帰還することにした。

さて、マターボードとやらは埋め終わったが。

これが一体俺にどんなお導きとやらをしてくれるのかねえ。

約束は守る男だ。なので依頼もきっちりこなさなきゃや気が済まないタイプ。なんだけどさあ……

「貴方に伝えるべき事がある。それはひとつの揺らぎである」

開口一番、そう言われた。

帰還してから採ってきた素材を用いてマイルームで武器の調整や新しい武装の開発に励み、そろそろ寝るかという前に、シオンに会いに来たのである。

こいつとの会話は、理解に時間が掛かるからスムーズに行かない。

「因果が収束を見せている。一つの事象を産み出しつつある。その手で掴めるほどに」

「……………偶時とやらが集まって、必然とやらが生まれそう。つてことか?」

シオンは頷く。

「それは恐らく、運命という概念への冒涇だ。しかし、それこそが私と私達が渴望し、切望したことである」

「あーはいはい。そういうのいいから」

右手を見せつけるようにぶらぶらさせる。

運命とか。

鼻で笑うわ。

「生憎、俺は神を信じてないもんでね。出来る事と、起きた事だけを信じる。運命とか世界の意思とか、そういうのぶっちゃけどーでもいい

んだよ」

「……………」

……？　なんで黙るんだよ。

なんかマズイことでも言ったか？

「……………私は謝罪する」

何故か謝られた。

「曖昧な言葉では貴方達に伝わり難いことを理解せず、失念していた」

「そうかい。これからは気を付けて……………達？」

俺の他に誰かいるか？

ショップエリアは今は今閑散としていて、いるのはショップに常駐している店員ぐらいのものだ。

にも関わらず……………達？

なんで複数形？

「思考を修正し、伝える。これは、私から貴方達への依頼である」

俺の疑問を解消しようと思わず、シオンは言う。

「惑星ナベリウスに向かってほしい」

「……………ナベリウスに？」

「理由は答えない。答えられない。答えは、貴方の未来にのみ存在する」

……………詳しい内容は秘密、報酬は後払いつてか。

ここまで滅茶苦茶な依頼も初めてだ。

しかし彼女は、そこに希薄ながらも切実なる願いを込める。

「私は観測するのみ。観測しか、出来ない」

そう言って、彼女は姿を消した。

キャンプシップから伸びた光線が、宇宙空間に伸びていく。

巨大な円形の空間が生まれ、キャンプシップはそこに飛び込んだ。

ガラスが割れるように空間が割れ、膨大な光に照らされる。それでもなお、キャンプシップは進んでいく。

そしてすぐにまた宇宙空間が広がる。

キャンプシップが飛んでいく先には、緑に包まれた惑星ナベリウスが見えた。

「……はあ」

溜息を一つ。

シオンとの会話の翌日、俺は惑星ナベリウスへと向かっていた。

あの怪しい女の怪しい依頼を受けて、である。

「あんな無茶苦茶な依頼、断ってもよかつたつつーのに。なんで受けちゃうかな俺は……」

頼まれたら断らない性格なわけではなく、嫌ならはつきりと嫌という俺である。NOと言えるアークスだ。

だというのに、シオンの切実さに押されて、今こうして報酬も分からない依頼を遂行しようとしているのである。

自分に嫌気が差す。

というか、あいつと話すとどこにも調子が狂うよな。

全てを見透かしてるみたいで、そのくせ自己評価は低いというか。観測しかできない。

それしか出来ない自分の無力さを嘆いてるような。

「ま、いいか。これでこのマターボードとかいうやつのも正体分かると思えば」

キャンプシップがナベリウス上空に到着する。

後はこのテレプールに飛び込めば、ナベリウスの地上に降り立つ。

シオン以外の依頼は、ルベルトのしか受けていないし、また素材を集めて一儲けするとしますか。

両手で頬を叩いて、気合を注入。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

階段を降りてから走り、テレプールの海へと飛び込む。

全身が浸かるように入って行けば、後は転移を開始するのみ――

――運命は、変化する。

視界がブラックアウトした。

眼前に広がるのは、これで三度目のナベリウスの緑。原生種の鳴き声や、澄み渡った空気の匂いも変わらない。

(……なんだったんだ、今のは)

転移した時に、シオンの声が聞こえた。

しかもその瞬間、今までの転移には無かった、視界のブラックアウト。

それに、この光景。

同じナベリウスにしたって、見覚えがあり過ぎるような……。

「……い。おい、相棒！ どーしたんだよ、ぼーつとして？」

「……え？」

声が聞こえた隣を見れば、そこには。

連れてきた覚えのないアフィンがいた。

「……アフィン？」

「……ほんとにどうしたんだよ相棒」

「いや、お前なんで……転移場所が被ったのか？ にしたってなんでこんな近くに……」

「なんでって……はっはーん。わかったぜ」

アフィンは、俺の混乱する様を面白がるように。

こう言った。

「修了任務だしな、緊張してんだろ？」

「……………は？」

「わかるわかる、すげーよくわかるよ。気楽に……ってのは無理かもだけど、力を合わせてがんばろーぜ、相棒」

「いや、おいおい何言ってるんだよ」

頭を振る。

修了任務？

これから？

「修了任務なんて、ついこの前、二日前に終わったところだろ？ 俺達はもうアークス。二回も受けるなんて聞いたことねえよ」

「？ お前こそ何言ってるんだよ。おれ達はまだ訓練生で、これからアークスになるために修了任務を受けたんだろ？ おれと相棒の二人でさ」

「だって、ほら。マグだってここに」

右肩上の宙を見る。

何も無かった。

「っ!!？」

「マグ？ ってあれか。正規アークスに支給されるっていう」

アフィンの言葉を無視して、デバイスからスクリーンを呼び出す。アイテムパックの中身は、デバイスから確認できる仕様だ。そうでなければ、中に何が入ってるのかが分からなくなる。カテゴリ別に分けることも可能で、なんならアークスシップのビジフォンにある、アイテムを大量に保管するための倉庫へと直接繋ぐことも可能だ。

本来なら倉庫へと送る事しか出来ないが、俺の改造が入ったそれは倉庫からアイテムを取り出す事も出来る。加えて倉庫の容量も無制限。カテゴリ別に分けるくらいしか整理の必要がないのだ。

持ち歩く物は今の所アイテムパックの分で事足りるから倉庫の出

番は素材の保管くらいだが、今はそれはどうでもいい。

マグは、アイテムパックの中にあつた。

俺の右肩上に浮いてないだけで、無くなったわけではないようだ。しかし、それ以上の問題が発生、発覚した。

スクリーン右上にある、時刻表示。

「……おい。どういうことだよ……」

「相棒？」

そこに表示された日付と時間は。

修了任務開始直後のそれだった。

アフィンには転移酔いしたと言って、一旦離れたところに来た。木に寄り掛かって座り込む。

「……状況を整理しよう」

現在時刻。

二日前の修了任務開始直後。

持ち物。

俺が持っていたアイテムパックそのまま。人。

俺の隣に、一緒にキャンプシップに乗った覚えのないアフィン。場所。

修了任務の時に、アフィンと降下した場所そのまま。

これらを繋ぎ合わせて出てくる答えは。

「……俺の状態や持ち物はそのままに、二日前にまで時間が巻き戻った？」

直感的に頭に浮かんだ答えをそのまま口にしてみた。

……ハン。

有り得ねー。

座標を特定すればアイテム使って空間転移だって可能なアークスの技術だって、四次元の干渉には届かなかつた。

それが急に俺の身に起こったって？

有り得る筈がない。

だが――。

「だったら、この反応の無さはなんだよ……?」

さつきからP フotonマップ Mを展開しているが、そこには原生種の反応が掛かるのみ。

ダーカーの反応は一つもない。

昨日あつた筈の探索では、どこ行っても最低10体はいたというのに。

「昨日今日であの数のダーカー達が全滅、なんてのは絶対にない。六芒均衡が全員動いたって無理だ」

それこそ、惑星ごとぶつた斬るくらいじゃなきや。

そんなことが出来るなら、わざわざ大勢のアークスをナベリウスに送るなんてことしない。

「心当たりと言えば、あのシオンって奴以外にはない。転移の時に聞こえた声も、あいつのだったからな」

くそ。何が観測することしか出来ない、だよ。
こんなこと出来る奴が、なんであんな自虐的になってんだよ。
腹立つ。

「……いや、これがマターボードって奴の導きなのか？」

時間が巻き戻ったのであれば無い筈のマターボードは、確かにデバ
イス内にある。

マターボード。

偶時を拾い集め、必然と為す。

「マターを集めれば、時間逆行を起こすことさえ可能、だってか」

いや、可能というのは違うか。

俺は今一度修了任務を繰り返したいなどと思っではない。
めんどい作業を無意味にやること程苦痛なものはないと思っっている。
しかも、もしこれから起こることも同じだと言うのなら、あのダー
カー大発生まで起こるのだ。ゼノさん達に会えたのは僥倖だったが、
あんなの一度でたくさんだ。

にも関わらずシオン、或いはこのマターボードはこの時間にまで、
俺を巻き戻させた。

どちらが巻き戻したにせよ、ここに来たのはシオンの依頼があつて
こそ。ならば、これはシオンの意思ということだ。

「つまりシオンは、この時間のこのナベリウスで、俺に何かをさせよ
うって魂胆だっただけか」

……よし。

口に出しながら考えを纏めることで、頭の中は整理できた。
落ち着いて考えよう。

あいつは、俺がこのナベリウスに来ることだけを依頼し、それ以上

は何も言わなかった。ただ時間逆行をさせたいだけなら、俺はここで帰ってもいい。しかし、もし一方通行だと、過去に飛べても未来に飛べず、元の時間に戻れないとするならば、それを考えると修了任務を放棄するわけにはいかない。せつかく苦勞してアークスになったというのに、ここでめんどくさがつてそれが無かったことになるなんてのは耐えられない。

シオンの狙いが何なのかも気になる。

……スタンスは決まったな。

アフィンのところへと戻る。

俺が近付いてきたことに気付いたアフィンは、声を掛けてきた。

「お、相棒。もういいのか?」

「ああ、なんとか落ち着いたよ」

「まさか相棒が転移酔いなんてな!。それで? これからどうする?」

「指定ポイントまで真つ直ぐ進む」

「え? 討伐はいいのかよ?」

「道中で遭遇する分で十分だろ。さっさと行って、さっさと任務完了しちまおうぜ」

「それには同意するけどさ………つておい! 待てつて相棒! おれを置いていくなよ!」

過去の時間で前と違う行動をすることで、世界が歪むとか言われるが。

そんなこと知るか。

記憶を頼りに楽しんで、正面突破だ。

案の定、原生種は道中で指定討伐数を達成した。

アフィンが銃で動き回るガルフを狩っていく隣で、俺は逃げていくナヴ・ラツピーをフォイエっていく。

遠距離からバツタバツタと薙ぎ倒す感じだ。

「相棒。最初は近接で感触を覚えたいって言ってたけど、それはいいのか？」

「いーんだよ。考えてみりゃ、安全迅速に修了任務達成することに比べりゃ、感触なんて何時でも覚えられるようなもん、後回しにしてもなんの問題もねえだろ」

「そつか。まあ、俺もその方が安心できるし、いつか」

本当はもう感触は覚えてるから、必要ないだけなんだけどな。

アフィンには、時間遡行したことは言っていない。

どうやら記憶がそのままなのは俺だけのようで、アフィンの記憶は修了任務の時のものだからだ。そんな状態で「実は俺、未来から来たんだ」とか言ったら、こいつのことだから修了任務を中断してでも俺をメデイカルセンターに連れて行くことだろう。

そんな馬鹿馬鹿しいことで修了任務を中断するわけにはいかない。

そうして労力は最低限に、前回ダーカー大発生が起きた時に俺達がいた広場までやってきた。

立ち止まり、通信に集中する。

「さて、どうなるか……」

「ん、相棒？ そんなに通信を気にして、どうかしたのか？」

場所は前回と同じだが、寄り道しなかった分、前よりもずっと早い時間に辿り着いた。

普通に考えれば、前の時間通りに緊急回線が入って、俺達の前にダーカーが姿を見せる筈だ。

だが、ここに来たことが引き金になるのなら、緊急回線が入るのは

警報が鳴った。

「な、なんだあ!？」

「……場所優先っつか」

突然の警報に騒ぐアフィンの横で、聞こえない程度に呟く。
続く管理官の声。

『管制より、ナベリウスに寄港中のアークス各員へ緊急連絡！ 惑星ナベリウスにてコードD発令！ フォトン係数が危険域に達しています！ 繰り返します。惑星ナベリウスにてコードDが発令！ 空間浸食を観測、出現します！』

「お、おい相棒！ あれ！」

アフィンが指差す先に、赤黒い靄のような何かを伴って、地面からダーカーが湧き出す。

……出てくると分かってりや、こども驚かないもんなのか。

『ダーカー出現を観測！ 空間許容限界を超えています！』

「こいつらが……ダーカー？ アークスの敵で、宇宙の敵で……全てを喰らい尽くすもの」

隣のアフィンが、怯えたようにそいつらを見る。

「なんでだよ！ どうしてだよ！ ナベリウスにはいない筈だろ!？」

前回と同じ連絡に、アフィンの台詞。……再現性高えっつか、そのままなんだな。

ダガンの数も、前と同じ。
さっさと片付けて、この先でゼノさんと合流するか。
前と同じように、アフィンに声を掛ける。

「アファイ」

……助けて

「ン……あ？」

声が、聞こえた。

女の子が、小さく囁くように。

まるで直接、頭に響くように。

十字路の、右側を見る。

声の方向なんて分からない響き方だったのに、何故かそっち側だと
確信していた。

……まさか。

「お、おい相棒！ どこ見てるんだよ！ 今は目の前のこいつらをな
んとかしなきゃ——」

「火杖『フレア』」

「だって……え？」

「フォイエ・並列起動12」

12個の爆炎をダガンの群れに向けて放つ。
フレアによって増幅された爆炎が連鎖爆発を起こすによって、群れ
を余すことなく呑み込む爆発が起こった。

黒煙が晴れた時、ダガン達が全てその姿を消していた。

「あ、相棒?」

「アフィン。予定変更だ」

「え? あ、そ、そりやこうなったら予定も何もないけど、どうするんだよ?」

「こつちに行くぞ」

俺は、十字路の右側を指差す。

「こつち? って、そつちは元々の指定ポイントじゃないんだろ? そつちになんかあるのか?」

「……声が聞こえた」

「え? こ、声が? それ、助けを呼ぶ声だったら、大事だよな」

……アフィンには聞こえなかったか。

俺の気のせいかもしれないが……もし。

もし、だ。

もし今の声が、レダが言っていた『女の子』の声だとするなら。戦えない一般人が、この先で助けを求めているとするなら——

(くっそ……)

一人、悪態をつく。

(助けに行かなきゃ、後味悪いだろうが……!)

ハクメイとアフィンが、不穏な助けを呼ぶ声の方へ、十字路の右側

へと走る。

その数分後のことである。

彼等がいた十字路を左側へと進んだ奥地にて、とあるアークス達が戦闘していた。

「思ってたよりも多いじゃねえか」

「リーダー。どうしますか？」

「予定通りだ。ここで分散して、新人達の救援に向かえ。討伐は後回し、人命を最優先にな」

キャンプシップより降り立ったその場所で、ダーカー達を殲滅しながら落ち着いて会話をするアークス達。

彼等は、アークス内でも有名所であるチーム『ブラックレパンド』のメンバーだ。

黒人の男を筆頭に総勢13名のアークスがおり、チームとしては長い戦歴を持つ、熟練のアークス達で固められたチームだ。一人一人の戦闘力は元より、短くない時間を共に過ごした彼等の連携は、六芒均衡をして目を見張るものがあるとさえ言われる。

彼等自身も、13人が揃って勝てない敵などいないという自負があった。

実際に戦歴を遡ってみれば、チーム全員が揃った戦いで敗走したなどという記録は残っていない。実力の高いアークスでも手古摺るような大型エネミーや、強力なダーカーが相手であっても。

ゆくゆくは、13人の力でもって六芒均衡さえも超えるチームになれるのではとさえ。

しかし。

彼等の道は、ここで突如潰えることになる。

「了解です。それでは——ん？」

命令を受けたサブリーダーが、訝し気な声を発する。

それを聞き、全員がサブリーダーを見る。

「どうした？」

「いや、その……リーダー。あれ」

見ていた全員が、サブリーダーが指差す方へと視線を移す。

そこに、いた。

仮面を着けた、アークスのようでアークスでないような男が。こちらへと歩いてきていた。

「……なんだ、お前は」

リーダーの不審を孕んだ声に、全員が各々の武器を構える。

数多くの戦場を潜り抜けてきた彼等には、相手の実力を測るなどお手の物だ。

戦場において最も大切なのは、実力の見極め。

リーダーがそれを信条にして、時に戦い、時に備え、時に逃げてきたからこそ、彼等は長く戦い抜き、生き抜いてきたのだ。

そのリーダーをして、実力の測れない何か。

何かは、仮面によって表情は窺えず、服装も一切肌を見せない、礼服のような黒々としたものだ。

「答えろ。お前は……何者だ」

「新人か？ 仮面を外して、顔を見せろ」

彼等は、間違った考えをしていた。

リーダーである黒人は、不審だったが故に実力を測れなかったのではない。
次元が違い過ぎるからこそ、その力の底が見えなかったのだと。

その一つの不正解が、彼等の命運を決した。

「……だ」

「ん？ 今なんと」

男は、仮面でくぐもった声でこう言う。

「……邪魔だ」

「ん？」

ゼノと別れ、キャンプシップで合流地点を目指すエコー。

ナベリウス上空を、特に襲撃もなく穏やかに飛ぶ彼女の耳に、地響きのような何かが聞こえた。

地上での戦闘音にしてはやけに大きいな、と思い、彼女は窓際に立つ。

「……なにあれ」

窓から見えた光景に、エコーは思わずそう呟く。

「あんな大きなクレーター、ナベリウスには無かったよね……？」

その日、チーム『ブラックレパンド』は壊滅した。

死体は一人として残らず、クレーターの傍に、リーダーのものであろう黒い右腕が残されているのみ。

アークスの公式上ではダーカーとの戦闘中に命を落としたものとされているが、その右腕を発見したアークスはこう述べたという。

『あれをやった奴は、怪物だ』と。

気味の悪い男と突然バトった

走る。

俺とアフィンで、声の聞こえた方へと。

途中道が分かれていても後で合流するような、一本道と言える道程だったので、迷うことは無い。

遭遇するダーカーも走りながらテクニクで消し去る。

普段の俺なら考えられないハイペースだ。

「相棒！」

その隣で、文句も言わずに並走するアフィン。

当の本人である俺でさえ半信半疑だと言うのに、助けを求める声が聞こえたという言葉を信じて付いてきているのだ。

凶抜けたお人好しだと言えよう。

或いは、それ程までに今の俺が切羽詰まっているのか。

「探知はどうだ!? ダーカー以外になんか反応あったか!?!」

「ダーカーと争ってる原生種しかいねえよ! だが、こっちだ! 多分!」

「わかった!」

そこでわかったと言えるお前、すごいと思うよ。

正面に見えた岩を回り道せずに飛び越える。

立ち塞がった土砂崩れもスピードを落とさずにテクニクで吹き飛ばす。

(くそ……俺の探知範囲は500m。こんだけ走ってて、まだそれに引っ掛からねえのか?)

その個体から漏れ出る内蔵フォトン量の大小を量れるP Mだが、フォトンマップどれだけ小さかろうと大気中のフォトンと違う反応であれば、その違和感をキヤッチ出来る。

しかし、今の今まで範囲を最大限に広げて、その隅々まで注意を払っても、未だ人間らしき反応がない。

ここまで来ても見つからないなら、声が聞こえる筈など無いと言うのに。

なんで俺は奥地を目指して走ってんだか。

(それも、この引っ張ってくるみたいな感覚のせいだ)

声は途切れたのに、まるで俺の手を引いて導くかのような感覚。

その気になればそれを振り払うことだって出来るだろう。

だが、まずその気にならない。

俺がそれを望んでいるかのような気さえしてくるのだ。

(あー腹立つ。こういう訳のわかんないものに振り回されるの嫌いなんだよな)

出来る事と、起きた事だけを信じる。それは変わらない。

だから、これはこれで事実として受け止めよう。

問題はその中身があまりに不明瞭で気持ち悪いことだ。

シオンといい、今の俺といい、この感覚といい。

誰かに操られているようなものにも関わらず、何故か全くそんな気がしてこない。

帰ったら、あの女をきつちり問い詰めなきや……。

「ん？」

「相棒？ 見つかったか？」

走りながら首を傾げた俺に、アフィンは聞く。

「いや、確かに新しい反応だが……これは違うな。普通にアークスの二人組だ」

「アークス？ それって、訓練生か？」

「それも違う。片方は普通ってのも違う。こいつは、………強いな」

もう片方は一般のアークスと変わらないが、強い方はあのゼノさんと同等以上だ。

アークスロビーに行つて分かったが、ゼノさんは他のアークスと一線を画している。フォトドライフ P Dを使わずとも、だ。つまり、それと同等以上と言うことは、この反応もまた、他のアークスとは一線を画した存在だという事になる。

(けど、なんだ？ この禍々しい感じは。純粹悪のダーカーとは違う、ドロドロした気味の悪さ——つ!!?)

その時。

俺達の後ろから、また新しい反応。

さつきのとさえ比べ物にならない、とてつもなく大きく、悍ましい反応が。

俺達に急速接近していた。

(なん、だよこのスピード……!!? 四足歩行の原生種どころか、キャンプシップだつてこんなに速くねえぞ!!?)

「アフィン！ 隠れるぞ！」

「え？ き、急にどうしたんだよ!?!」

「ヤバい奴が近付いてきてる!! このままじゃ、接敵することに——」

最後まで言えなかった。

そして、立ち止まざるを得なかった。
目の前に現れたから。
俺達の後ろから疾風を伴って通り過ぎ、そいつが。

仮面の男が、俺達に相對していた。

「……おいおいおいおい。なんだよあいつ……なんか気味悪い」

アフィンが及び腰になってそう言う。

気味が悪い、なんてものじゃない。

こいつ……底が見えない。

レギアスを見た時だって、ここまでの底知れなさは感じなかった。

「人間……だよな？ でもなんだ、これ……」

「……アフィン。絶対にコイツとは戦うな」

「え？」

「コイツ……間違いなく、六芒均衡より強い」

「は、はあ!？」

驚愕の聲が上がる。

それはそうだろう。今俺が言ったことは、アークスの象徴たる六芒均衡よりも、目の前のこの仮面の男の方が強いということなのだから。

仮面の男は、急ブレーキを掛けて 片手を地面につけた体勢だ。

そこから、ゆっくりと立ち上がろうとしている。

「俺が直接知ってる六芒均衡はリーダーのレギアスだけだが、レギアスが六人揃ってもコイツに勝てる気がしない。それだけ、コイツは底が見えない」

「ど、どうすんだよそんな奴!? 俺等だけで勝てるわけないじゃんか!?!」

「どうするかって? 決まってるんだろ……」

フレアを取り出し、構える。

同時にP フォントンドライブ Dを発動。

フォイエを最大並列起動数、60発起動。

全弾着弾目標——仮面の男。

「三十六計逃げるに如かず!!」

発射した。

着弾を確認しようともせず、アフィンのいる左側へと走る。

「うひいー!」

アフィンもそれに連れ立って左側に走った。

勿論、あんな化物クラスの反応を持つ奴をこんなので倒せるなんて思っていない。だが着弾さえすれば、フォイエの爆炎と、その後の黒煙で目くらましくらいは出来る筈だ。その間に身を隠して、あいつをやり過ごす。

まともに相対しようなんて思っちゃいけない。

何よりも命を優先。

果たして俺のフォイエ60発は、上下左右から仮面の男へと襲い掛かり——。

「……ナ・グランツ、局所展開」

その全てが。

突如出現した光膜のカーブに逆らわず、仮面の男の直前で上空へと

曲がっていった。

「はあ!?!」

軌道が曲がって天高く打ち上げられたフォイエ全弾は、上空で巨大な爆発を起こす。

俺が予想していた結果は叶うことなく、俺達と仮面の男の視界は暗れたまま。

(なんだよ今の!? ナ・グランツ!? あれは、光のドーム内で光線弾を反射させて攻撃する上級テクニクだろうがよ!?!)

俺の驚きを意にも介さず、仮面の男は武器を出現させる。

まるでダーカーを出現させるかのようには、禍々しく。

一見すれば、フォトンで構成された刀身が青ではなく紫であること以外、何の変哲もないコートエッジ。

それを持って、仮面の男はこちらへと向かってくる。

一歩で回り込まれた。

「え?..」

先行していたアフィンの前に出現した仮面の男は、呆けた隙を見計らって腹部に回し蹴りを叩き込む。

「ぐああっ!」

「アフィン!」

蹴飛ばされたアフィンは、その先にあつた木に激突して、その動きを止める。

木にしても細くはない樹木が、大きく揺れた。

その結果を確認し、俺へと向かってくる仮面の男。

「……殺す」

「くそっ！ なんなんだテメエはぁー！！」

アイテムパックからブーステッドを呼び出す。

フォトンアーツ
掴んだ瞬間に、P Aを発動した。

「ノヴァストライク!!」

身体を基点に横回転するP A。フォトンアーツ

前にロックベアに使ったツイスターフォールとは縦と横の違いがあるが、P Dでブーステッドを振り回せる今なら、重力がなくともそれを塗り替えて更に上回る程の威力。ブースターも起動したそれならば、ロックベアであつても両断が縦から横に変わるだけだろうが。

ガキンツと。

鉄同士が衝突したような音を立てて。

左手で止められた。

「うっそだろお前!!」

ロックベアを割砕したあの時の一撃以上の威力だぞ!?

どういう皮膚の硬さを——くっ!

左手でブーステッドを受け止めたまま、右に一回転して、右手に持ったコートエッジを薙いでくる。

俺の首を狙ったそれを、しゃがんで避けた。

髪の毛が一部斬られたような感覚。

紙一重ならぬ、髪一重。

ブーステッドをアイテムパックに仕舞い、新しい武装を呼び出す。

「エレキ!!」

電撃を纏った双小剣。それをクロスさせ、打ち下ろしてきたコートエッジを両手の剣で受け止めた。

こっちの手が痺れてくるような重い一撃だった。

だが……次に痺れるのはためえだ!

エレキにフォトンを流し込み、電撃を増幅させる。

大型エネミーでさえスタンさせるであろう最大出力だ!

「……………」

(……………おいおいおい。効いてねえのかよ!?)

電撃にも耐性ある身体とかどうしたら——いや、違う。

コイツ、全身を覆うようにフォトンを展開してやがるのか!

その鎧が、電撃を受け流して地面にまで電撃を逃がしてる。

そうか、くそ! さつきブーステッドを素手で受け止めたのも、この鎧があつたからか!

「ぐがつ!?!」

腹を押すように蹴られた。

さつきのアフィンのような回し蹴り程ではないようだが、それでも胃の中の物が逆流しそうなヤクザキック。後ろにあつた壁に激突させられる。

壁と衝撃のサンドイッチをされた。

「がつ……………く、そつたれがあ!」

痛みを振り切り、すぐさま立ち上がった。
が、うつ伏せに倒れる。

「く、う……！」

くそ、が……。

こんなところで……こんな訳の分からないまま、終われるかよ……

！

俺はまだ、何にも――

その時。
意識が一度途切れた。

『……これで、彼女は苦しみの連鎖を離れ、安らぎを得る』

――え？

『【深遠なる闇】も、消えて果てる』

――誰だ、お前は？

『ああ、長かったな……』

――俺は今、誰だ？

『……』とでも、長かった……』

——俺は今、何を想って、泣いて……？

「……っ!？」

意識が戻ってくる。
痛む身体と、それに広がる土と草の感触。
顔を上げれば、そこには仮面の男が。

(なんだ、今は……？)

まるで自分が別の誰かになっていたかのような、そんな感覚だった。

俺の知らない誰かの記憶を、追体験したような。
夢の中で誰かになっているような感覚を、リアルに味わったかのような……。

「……っ!？」

仮面の男は、左手で頭を押さえていた。

しかし頭を振って、何かを振り払うような仕草をすると、左手を空に掲げた。

「……ぐ、おお……!？」

ヤバイ。

何をするつもりか分からねえが、このままだと確実に死ぬことだけは分かる。

あの左手。

掲げた先に、何かヤバイものが集まろうとしている。

(立てよ……！　こんなところで、死ぬるわけねえだろうが……！)
「……『塵^カへと^タ——」

その時。

俺の後ろから、仮面の男へと何かが飛来してきた。

「!?」

「っ！」

何かを集めようとしていた仮面の男はそれを中断し、飛来してきたものをコートエッジで受け止める。

その飛来してきたものは、人だった。

巨漢と言える、大柄の男。青い髪をオールバックに纏めた、鋼拳を装備した黒いコートの男だ。

(コイツ、さっきの……！)

「おいおいおい……気紛れでも、たまには任務に来てみるもんだなあ。面白えことになってるじゃねえか」

仮面の男が右手の鋼拳を弾く。

首を薙ごうと振るうが、躲す。

大柄の男が左のフック。躲される。

大上段から振り下ろされたコートエッジと、右拳の鋼拳が鏝迫り合

いになる。

「うまそうな獲物が二匹も同時に……くふ、くふふっ！ ふはははははっ！」

その男は、感じる禍々しさそのままに、狂おしく笑った。

(……二匹?)

気味悪い男のおかわりとかいららないんですけど……

「……おいシーナ。こいつらは誰だ。どこのどいつだ。さつさと調べろ」

「はい……」

「！」

大柄の男が呼び掛けた先、俺の後ろに立っていたのは、声からして少女だった。

今は地面に伏せているから姿はわからんが……、さつきこの男と一緒に居たアークスだ。

仮面の男との戦闘で気付かなかったが、もうここまで近付いてきたのか。

しかし、一体何を頼りに……？

(あ、そうか。あの時打ち上げられたフォイエ)

信号弾というわけではないが、上空のあの爆発は遠くからでも見えた筈だ。

探知範囲内に入っていたこの二人なら、尚更。

それで異常を察知したと。

「……？？」

スクリーンを呼び出してアークス内の情報を探っているらしくつた、シーナと呼ばれた少女から首を傾げたような気配。

「……あの、ゲッテムハルト様。そちらの方の情報、どこにありません」

「何？」

その言葉に、思わずシーナの方を振り向いた、ゲツテムハルトと呼ばれた大柄な男。

仮面の男はその隙を逃さず、鋼拳を弾いて罅迫り合いを解除した。

「ちいッー！」

苛立たし気にゲツテムハルトは裏拳を繰り出すが、バックステップで逃れる仮面の男。

そして、仮面の男はそのままひとつ飛びに跳躍して、森の中へと消えて行った。

「……ちっ、逃げやがったか。中々楽しめそうだったってのに」

興が冷めたようにそう言う。

あの野郎は……やっぱり速いな。もう探知範囲外に消えやがった。装備した鋼拳を懐に仕舞うゲツテムハルト。

「っ、次から次へと、なんなんだよ一体……」

「……アフィン。大丈夫だったか？」

「あ、ああ。なんとか。相棒こそ大丈夫か？」

「こつちもなんとか、回復してきたってところだ」

横側に蹴飛ばされたアフィンは、腹を押さえながらこちらに歩み寄ってくる。

俺も、レスタによる自己回復もあつてなんとか身体を起こした。

……くそ。あんなヤクザキック一発で、すぐには立てなくなるのか。どういう脚力してやがんだ。

こちらに歩み寄ってくるゲツテムハルトと、その後ろに控えるような位置に歩くシーナ。

「よオ、そのオマエ」

「はッ、はい!？」

「テメエじゃねえよ！ 黙って端っこで震えてろ！」

呼びかけられ、素っ頓狂な声を上げるアフィンに、容赦ない罵声。ゲツテムハルトは、顔の左半分のほとんどに刺青を彫ったヒューマンだった。

筋肉の塊と言える肉体に、目と目の間を通るよう、左から右下がりにつけられた傷跡。まさに野性味溢れる男だと言えよう。

そして、シーナと呼ばれた少女。

こちらはかなり小柄で、ゲツテムハルトはおろか俺達と比べてもかなり小さいニューマンだ。

身体の各パーツは身長と釣り合わないそれだったが、それも目元を覆う程に伸びた緑の前髪のせいで根暗なイメージを作り上げてしま

う。
高速戦闘に向かないような大きな帽子からして、恐らくテクニク職だ。

「オマエだ、オマエ。今のヤツ、オマエを狙ってたよなあ？ あいつは何だ、ナニモンだ？」

「……その前に、先にありがとうって言っとくよ」

素直にそう言う。

実際、この男の横槍がなければ、確実に俺は死んでいただろう。

あの感じからして、死体さえ残ったか怪しい。

……命令口調のコイツに感謝するのは癩だが。ものすごい癩だが。それでも恩知らずではいたくない。

「んなことはどーでもいい！ 聞かれたことだけに答える！」

「……アイツに関しちや、俺の方が聞きたいくらいだよ」

「わからないってか？ しらばつくれても、いいコトはねえぞ？」

「しらばつくれるも何も、俺に分かるのはアイツが何故か俺に殺意を向けてきたこと。あと、半端じゃない強さだつてことだ。あんたも相手が、あの野郎は六芒均衡よりも強い。それだけだ」

「……………」

訝し気に俺を見るゲツテムハルト。

「つたく。俺は男に見られる趣味なんかねえんだよ。」

美少女を気付かれない程度で舐め回すように見る主義だ。

「…………ふん、その様子だと本当に知らねエみてエだな」

それでもなお、俺を見てくるゲツテムハルト。

「雰囲気はイイ感じだが…………弱い。オマエとやるのは、まだ早そうだな」

「…………そりゃ、あいつと比べりやそうだろうよ」

…………くつそ。

見下されてるつて分かってるのに、あのザマじゃ何も言えねえ。

「それにしても、六芒の野郎共より強い、ねえ…………くふふっ」

堪え切れないという風に笑うゲツテムハルト。

まるで、極上のごちそうを見つけた肉食獣かのようだ。

コイツの醸し出す雰囲気、余計にそうさせる。

「…………信じられないかもしれないけど、本当なんです。相棒の見立てだと、あのレギアスより強いって」

「ああ、それに関しちや疑ってねエよ。あの仮面野郎は、六芒なんぞよりよっぽど強い。弱つててあれなら、尚更なア」

「……………は？」

弱、つてた……………？

あの男が……………？

「気付いてなかったのか？ 手加減してたわけじゃねエが、ありや相当でかく戦った後だ。恐らく、あの野郎と同じくらい強エヤツとな」
「そ、そんな……………それじゃあ、あんな奴がもう一人いるってことに……………」

「そオだ。あそこまでうまそうなヤツが、もう一人いる。考えただけで涎が止まらなくなるだろオがよ。クハハハツ！」

楽しそうに、狂おしそうに嗤うゲツテムハルト。

コイツ……………おかしいとは思っちゃいたが、想像以上の戦闘狂だな。あんな奴が二人もいるとわかって、笑うとか。

リサさんも狂ってると言えば狂ってるが、コイツはベクトルの違う狂い方だ。

ゲツテムハルトはひとしきり笑うと、背中を見せて歩いていく。

「帰るぞ、シーナ！ とろとろすんな！」

「はい、ゲツテムハルト様」

乱暴な物言いに嫌な顔一つせず、シーナは答える。

その背を追う前に、こちらへと一礼。

「……………それでは、ハクメイ様。失礼いたします」

……………さつき調べた時に知ったのか。

向こうはあんななのに、礼儀正しい奴だ。

過剰なまでに。

「ああ、じゃあな」

それを聞き届け、二人は去って行った。
訪れる静寂。

「……はあ、なんなんだよ一体。なんかどつと疲れちまった。世界つて広いんだなあ、相棒」

「……ああ」

アフィンの言葉に、頷く俺。

俺達も再び、声の主を探しに歩いていく。

(……負けた)

今まで常勝無敗というわけじゃない俺だが、それでもここまで完膚なきまでに負けたのは初めてだ。

屈辱。

歯を噛み砕いてしまいかねない程の怒りが込み上げてくる。

(あの仮面野郎……。この屈辱は、いつか億倍にして返してやらあ)

静かに激しく、俺の胸の中で炎が渦巻いていた。

疲労故に、俺達の行軍速度はスローペースになっていた。

それでもこうして休憩せずに歩いているのは、未だに俺を引っ張るような感覚が続いているからだろう。

道行く中で立ち塞がるドーカー達は、テクニックで消し飛ばしている。

八つ当たり気味に。

こうして発散していかないと落ち着かないのが情けなくて、余計にあの仮面野郎に対する怒りが込み上げてくる。

「……はあ」

「相棒、どうだ？」

「だーめだ。探知には何の反応もない」

目一杯拡げて、細心の注意を払っても、未だにそれらしき反応を捉えることが出来ない。

本当にあんな声が聞こえたのか。

ただの錯覚だったんじゃないかと、台無しなこと思いつくようになってくるくらいだ。

「こうなると、むしろ俺の探知より、お前の感覚に頼った方がいいかもな。探し物は得意だろ？」

「そう言われたって、相棒の探知で見つからない奴を俺がどうやって——ん？」

こちらもこちらで辺りを見回していたアフィンが、唐突に動きを止める。

何かを見つけたように。

「お、おい相棒！ あそこ！ 人が倒れてるぞ!!」

「マジか!？」

駄目元で言ってみただけなのに、もう見つけたのかよ！

アフィンが指差す方向に走っていく。

確かによく見れば、草叢の方に人間の足のようなものがちらりと見

える。

背の高い草叢を掻き分けていくと、そこには――。

白い装束を身に纏った、白い髪の少女がうつ伏せに倒れていた。

「……………誰だ？」

「女の子？ アークス、って感じではないよな。大丈夫なのか、その子。なんで、こんなところに……………」

アフィンが状態を確認しようと近付く。
が。

バチイッ！ と。

弾かれた。

「なっ!？」

「うわっ!」

アフィンの手が、電撃を纏った何かに弾かれていた。

電撃自体は静電気にも満たないようだったが、突然のことに思わず下がるアフィン。

……………なんだこりゃ？

「な、なんだよ。この子の周りに、見えない何かが……………」

「……………結界だな」

「結界？」

「ああ。どうやらフォトンで形作られた結界だ。多分この子が俺の探知に引っかけからなかったのも、これが探知を阻害してたからだ。現に今も、俺の探知の中じゃこの子はいないことになってる」

いないというか、大気中のフォトンと反応が変わらないようにされている。と言えればいいか。

……こうしているとシオンを思い出すが、あれは探知に関わらず、気配が希薄だった。

この子は気配はそのまま。探知に反応しないだけになっている。彼女は意識を失っているようで、生きている感じはするが、衰弱してはいるようだ。

「阻害って、なんでそんなこと……。まるで相棒に見つかってほしくないみたいにな」

「それもあるだろうが、主な理由はこの子を守る役目だろう。さつきみたいに外敵を弾くように、な」

「それじゃあ、どうするんだ？ このままじゃ保護も出来ないよな」
「……まあ、問題ないだろう」

今度は俺が、結界に手を翳す。

「俺がこの結界を解除する。多分攻撃すりや割れるんだろうが、そうするとこの子が危ないからな」

「そっか。気を付けろよ？ いきなりビリッと来るからな」
「お前と同じへマするかよ」

さて、まずはこの結界の解析からだな。

結界に触れて、内部情報を探――

『待ってたわ、ハクメイ』

「はっ。」

結界が消えた。

「……………」

「？ 相棒？」

割れるとか、そのまま消える感じじゃない。

まるで、俺の中に吸い込まれるようにして消えた。

いや、それ以前に、なんだ？

誰だ？ 今の声は。

(シオンとも違う。助けてと言っていた、恐らくこの子の声とも違う。
別の女の声)

それも、俺の事を知っていた。

だが俺には、全く聞き覚えの無い声。

「相棒？ 相棒ってば」

「……………結界は消えた」

アフィンにそう言い、倒れる女の子の前で膝を折る。

呼吸はしている。心拍も問題ない。

だが、早く連れて帰った方がいいだろう。

念の為にここで一応軽く調べておいた方がいい。

そう思い、うつ伏せの彼女を抱え起こす。

「この子は俺が背負っていくから、お前は援護を――」

そして顔を見た瞬間。

言葉が途切れた。

「……………相棒？」

「……………」

何この子めっさ可愛いんだけど。

色々あったが、全てを許そう。だって可愛いから

幾らか幼さを感じるあどけない寝顔。

同じ人間なのかと疑いたくなる華奢な身体。

透き通るようで、しかし確かに生命を感じるきめ細かな乳白色の肌。

年相応よりも発達していて、尚且つ成熟しきっていないが故に更なる可能性を感じる各部位。

大きな髪飾りによって二つに結び分かれた、陽の光を反射する繊細で艶のある、白く美しい絹のような髪。

芸術作品と言えよう。

それもシオンのように無機質な人形の如き美貌ではなく、人間として、少女として、未完成故に完成された美しさである。

「……………ふう」

呑んでいた息を吐き出した。

落ちて着こう。

俺がここで自分を忘れてたら、アークスシップへの帰還と救出はどうする。

本音を言えばその閉じられた瞳を開かせて、可愛らしいであろう声を聞きたいところだが、そんな場合じゃない。

起こそうにも起こせないみたいだし。

どうやら眠っているというよりも意識を失っているという方が正しいらしく、目を覚ます気配はない。

身体の方は特に異常はないが……、こんなところで寝かせているわけにはいかないだろう。

膝を折る形で抱えていた少女を背中に抱え直し、立ち上がる。

所謂おんぶだ。

安定させるため、フォトンの光輪で俺と少女の腰を囲い、縛る。テクニックとはまた別のフォトン行使であるため拘束力は弱い、暴れるエネミーを縛るわけじゃないから問題はないだろう。

「待たせたな。んじや行くか」

「おう。それにしても、珍しいな相棒。いつもなら救助で人を抱えたりするのは俺任せで、援護する方に回るのに」

「まあたまには。今日はもうあんまり動き回りたくねーし、この状態でもテクニックは撃てるしな」

「……女の子抱えて感触を楽しみたいとか、思っていないよな？」

「こんな時に思う訳ねーだろ馬鹿だな」

「嘘つく時の顔になってんぞ」

相棒ってこれだから厄介。

いや、俺は正しい判断をしている。

救助訓練などではアフィン任せにしているが、本来両手が塞がって高速戦闘が出来なくてもテクニックを使って戦える俺がこういう役回りをした方が効率的なのは確かだ。ただ、訓練中にそうした場合、テクニックの並列起動が公に晒される可能性が高い。かといってそれを封じたまま人を背負って戦うのもめんどいからに過ぎない。

俺は状況を鑑みて、正しく判断した。
至って真面目だ。

背中に幸せそのものと言える感触が広がっているが、真面目なのだ。

「まあいいか。救助するんだから、抱えなきゃいけないのは変わりないし。それより、これからどうする？」

「そうだな……。急ぐ用事はもうないとはいえさっさと帰りたいとこだが、肝心のキャンプシップがどこにあるか」

「おう。ここにいたかルーキー共」

アフィンと予定を話し合っていると、新しく声が聞こえた。
そこにいたのは、あの時と同じくゼノさん。

……ダーカーと戦ってる最中でなかったとはいえ、こんな奥地まで
来ても救援に来るのはゼノさんなのか。

「なんだってこんなところまで……ん？ 抱えてるのは、要救護人か
？ ならいいか」

「救援に来てくれたんですね！ 良かった、助かった……」

「あー……うーん。なんつーか、思ったより数がいるな、これ。正直
すっげえ予想外」

あの時と同じように、二人のやり取りが交わされる。

その後の事も、まさに前回の焼き直しだった。

ゼノさんと俺達も戦うことになり、ゼノさんが俺に見覚えがあるよ
うな気がすると言ったり、イケメンなこと言ったり、P フォントドライブ Dを披露さ

れたり、師匠さんについて語り合ったり、P フォントブラスト Bを披露されたり、
キャンプシップに戻ってからはエコーさんと出会ったり、目の前で痴
話喧嘩を繰り広げられたり、口約束の秘匿をお願いしたり。

まるで初めて起こったことのように演技するのは大変だった。

大きく違うのは——俺の背中に抱えたこの子だろう。

強いて言えば要救護者を抱えた俺と前回よりも疲労していたア
フィンに代わって、ゼノさんに戦闘を頼ることになったのもあるが。

(あとは、あの狂人とそのお付きみたいな。そして……仮面野郎)

壁は高い。

一番高くに見ていた六芒均衡よりも、天辺が見えない程高く。
しかし、乗り越えねばならない。

でなければ俺は、あの男に刻まれた屈辱に苛まれて生きていくこと
になる。

(そんな情けない生き方で、最強最高のアークスなんてお笑い種だ)

「ハクメイ。貴方にまずは、感謝を」

前回と同じように三人と別れて、メデイカルセンターに少女を預けた後、そのまま俺はシオンに会いに来ていた。

俺に起こった様々な現象について、問い質すために。

いつもの場所で、シオンは当たり前のようにいた。

そして、この言葉である。

「偶発事象の優位改変が確認され、新たな状況へと進行した」

「……………」

まあた小難しいこと言いやがって。

「状況よりも、事象の説明を求めるといった表情をしているようだが、その認識で正しいか？」

「……………分かってんじやねえか。今こそ質問に答えてもらおうか」

そう言って、聞きたいことを一気に聞く。

問い詰めるように。

「あの時間遡行は、お前の仕業か？ 何故前回は聞こえなかった、聞こえる筈のない声が今回は聞こえた？ あの仮面野郎は何者だ？ あの子は何者だ？ あの結界を張っていた、あの声の女は誰だ？ お前は、何がしたくて俺をあの時間に飛ばした？」

「……貴方の疑問は、妥当だと判断する」

俺の問いを受け、シオンは言う。

「だが、ここに正確な認知は必要ないと認識する」

「……あ？」

「貴方は、多くのものを救う機会を持つと。それだけを把握しておけば、事足りる」

「……………」

「いや、説明が十全でない。正しくない。貴方を納得させるだけの言葉を、今の私は学習し得ていない……」

……学習し得ていないってなんだよ。

説明できないから許して、ってか？

ガキの言い訳じゃねえんだぞ。

「だから、私は謝罪する。未だに信用を得るに足らない私を」

不愉快さを隠そうともしない俺に、シオンは顔を伏せる。

ずっと同じ調子で喋るから、気持ちが込められているのが判断できさない。

しかし、嘘は言っていないとわかる。

何故かはわからない。

わからないまま、信用できってしまう自分が……わからない。

「そして、それでも貴方に頼る私を、私は謝罪する」

「……ハン」

頼る、ね。

少なくとも、あの仮面野郎に追い詰めさせて俺を甚振ろうってつもりじゃなかったわけだ。

「ひとまずは許してやるよ。どんなつもりでも、あの子を助けられたのは事実。美少女の損失は世界の損失だからな」

「……新たなマターボードが産まれた」

いや、なんとか言えよ。

コイツにそれを求めるのも酷な気もするけど。

「それはつまり、新規偶発事象への介入が可能になったことを意味する」

「……まだあんなことやらせようってか」

「私の後悔は未だ続く。貴方がそれを払う標となることを願っている」

そう言っつて、シオンは姿を消した。

同時に——ブラックアウト。

「！……こいつは……」

暗転した世界から、また同じ光景へと視界が切り替わる。

まさかと思い、デバイスを呼び出して、日付と時間を確認した。

「……戻ってきたってか。一方通行じゃなかったってわけだ」

そこには、修了任務から二日後の日付が表示されている。

つまり時間遡行する前の時間だ。

ナベリウスを一日探索したことが無かったことになるわけではないよう、安心した。

（問題は、逆に時間遡行した時の事が無かったことになってないかだが——）

その時、通信から呼び出しが入った。
呼び出し先は、メディカルセンター。
それを確認し、通信に出ると、女性の声が聞こえてくる。

『ハクメイさんですか？ 私、メディカルセンター看護官のフィリアと申します』

「フィリアさんですね。どうしました？」

『あなたがナベリウスにて保護した女性が、つい先程目を覚ました』

タイムリーだな。

どうやらあの時の事も起こったことになっているらしい。

俺の感覚ではついさっきのことだが、実際は丸二日眠っていたことになるのか。

外傷もなく、内側も問題なかった筈だが……結構かかったんだな。

『ですが、あの……』

「ん？」

『……とにかく、メディカルセンターへ一度来て頂けますか？』

……なんだ？

ひとまずメディカルセンターへ向かうことにした。

「ハクメイさんですね？ お待ちしていました」

白いナース服に身を包んだその人、フィリアさんは俺を見て安心したように言う。

フィリアさんは、ウェーブの掛かった髪を胸元まで垂らした、赤髪の女性だ。

看護官と言うだけあって面倒見の良さそうな雰囲気がある。特筆するほどではないがスタイルも良い方で、多分骨抜きにされている男の患者も多いように思う。

「すいませんね、待たせてしまつて」

「とんでもありません。それで、保護された子なのですが、ほとんど喋る事もなくて……」

困つたように横を向くフィリアさんの視線の先に、彼女はいた。

発見した時に閉じられていた瞳は、紅い。

白い髪や衣装も相まって、まるでウサギのようだ。

宝石のようなその瞳でこちらを見据え、彼女は口を開く。

「……ハクメイ」

「……え？」

「……」

「え……名前教えたんですか？」

「いや……」

そんな筈はない。

発見した時には、彼女は意識を手放していた。

それから運んでいる間も目を覚ました様子はなかったし、預けてからも今の今までずっと眠っていた筈だ。

……もし、時間遡行した後の修了任務を終えた翌日に、俺が秘密裏

に彼女に会いに行き、彼女がその時目を覚ましていたなら話は別だが。

そんな記憶は俺にはないし、わざわざそんなことするとも思えない。

「……頭の中に、聞こえてきた」

何故か確信を持った風に、彼女はそう言う。

「うーん……」

………運んでる間に、ちよつとだけ目を覚まして、俺の名前を聞いて、すぐにまた寝た、とかか？

他に辻褄の合いようがないが……。

(滅茶苦茶に考えるとしたら………あの時の声)

まあ、それはいいか。

「……わたしは、マトイ」

「マトイ、ね」

良い名前だ。

鈴の音のように聞き心地の良い声をしている、彼女らしく可愛らしい名前と言えよう。

早速その名前でデータベースにアクセスを掛けているフィリアさんだが、結果は芳しくなかったようだった。

「データベースに一致件数……なし。少なくとも、アクセス内に登録情報はありませんね」

「アクセスでもなけりや、アクセスシップに乗っていた一般人でもな

い、か。どこかの星の原生民ですか？」

「……でも、生体パターンはアークスみたいだったのに……」

スクリーンを閉じて、フィリアさんはマトイに問い掛ける。

「ねえ、マトイちゃん。あなた、どこから来たのかしら？ どうしてあの星にいたの？」

「……う………。……ハクメイ」

かなり優しい声で問い掛けていた筈だが、何故かマトイは怯えたように俺の傍へ寄ってきた。

「あ、ああと、怖がらせちゃった？ ごめんなさい、他意は無いの」「いやあ、怖がる要素あったか？ 大丈夫だって、マトイ。答えたくないなら答えたくないでいいから」

「……ん」

きゅつ、と。

俺の手首を掴まむように服を握るマトイ。

ぎゃんかわ。

「貴方に懐いている感じ……刷り込みみたいですね」

「まるで俺が無理くり懐かせたみたいな言い方やめてくれませんか？」

「冗談ですよ。貴方は、彼女に心当たりとか、ありますか？」

「うーん。俺結構記憶力に自信ありますが、覚えはないですね……」

美少女なら尚更。

しかし俺の記憶内にはノーヒットである。

「ふうむ……知己でもないとなると、わからないことだらけですね」

考え込むフィリアさんだが、やがてマトイを真正面から見据えた。

「でも、放ってはおけません」

……看護官として、つだけじゃないな。

生来のお人好しってやつなのだろう。

視線を俺へと動かし、言う。

「ハクメイさんはアークスとしての活動がありますから、ずっとここにはいられませんし……。あの、この子のお世話、私に任せてもらっていいですか？」

「んー。俺は是非お願いしたいところですけど……マトイもそれでいいか？」

「……………」

何も言わず、こくりと頷く。

「何かあったら、すぐ貴方に連絡しますから」

「ええ。俺も時間あったら来ますから。じゃあな、マトイ」

「あ……あの……………」

「ん？」

マトイは、顔を俯かせて言う。

俺ではない何かに、怯えるように。

「怖い感じが、するの……。……気を付けてね」

「……………ああ」

……怖い感じ、ね。

そいつは果たして、ダーカーの事か。

それとも、この腐った組織の事か。

どっちにせよ――

(あの仮面野郎より恐ろしいことなんざ、そうそうねえだろうがな)

同じ頃。

とあるアークスが、自分宛てに届いたメールを見て、一人呟いていた。

メールの内容は、あるチーム発足の件について。

そしてリーダーは――同期の主席卒業生。

「ハクメイさん、ですか……。学校でも遠くから見たことしかないですけど、どんな人なんでしょう」

キャラ設定

ハクメイ

年齢：17

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ハンター／フォース（オールラウンダー）

・主人公。

・女の子大好き。可愛いことは世界で一番偉いことだと考えている。

・さらりと嘘をついたり隠し事をするタイプ。隠すのが上手いが、アフィン相手だと結構頻繁にバレる。

・自分でも嫌になる程根に持つ性格。一度受けた屈辱は清算するまで忘れない。

武装

光槍『ライトランス』

自作した長槍。フォトンを流し込むことで、槍と同じ太さの光の槍が伸びる。射程距離は流し込んだフォトン量で変わる。貫通力はそれほど高くない。

刺爪『ブラッドクロウ』

自作した自在爪。鉤爪に針が生えたような形をしているが、詳細な機能は不明。

気砲『プレスキャノン』

自作した大砲。気圧を砲弾に見立てて、見えない砲弾を放つことが出来る。特殊弾を放つことは出来ない。

氷杖『アイス』

自作した長杖。フレアの氷テクニク版。

マトイ

年齢：18？

種族：ヒューマン？（原生民の可能性があるため）

性別：女

・謎の少女。

・ハクメイの名前を知っていた。ハクメイには見覚えがないようだが……？

・ハクメイ以外の人間に怯えている。

・容姿をハクメイに気に入られている。知り合ったばかりなので、性格を気に入るかはこれから。

テオドール

年齢：16

種族：ニューマン

性別：男

クラス：フォース

・ハクメイと同期の、おどおどした少年。

・戦闘に消極的だが、フォトン感応力はハクメイが目を見張る程のものを持っている。

・アークスとして戦う以外の才能を持たないために、アークスになつたと語る。

・ウルクは友達。それ以上の感情は……？

ウルク

年齢：16

種族：ニューマン

性別：女

・一般市民の快活な少女。

・アークスに憧れているが、フォトンを扱う才能がないため、なれずじまい。

・性格的に向いていないのに、才能があつたがためにアークスになつたテオドールを心配している。

・テオドールのことは愛称として「テオ」と呼んでいる。
・ハクメイやその他のアークスに、テオドールを気に掛けてほしいと頭を下げ回っている。

パティ

年齢：17

種族：ニューマン

性別：女

クラス：ファイター

・アークス一の情報屋「パティエンティア」を名乗る、双子の姉妹の片割れ。

・明るくハイテンションな性格。勢いについていけず、面倒くさがられることもしばしば。

・姉であるが、妹のティアの方がしつかりしている。が、それにコンプレックスを抱いていたりはしない。だって仲良しだから。

・自身の凶悪ボディに無自覚。

・ハクメイはいずれ大物になると見ている。根拠はない。

ティア

年齢：17

種族：ニューマン

性別：女

クラス：テクター

・アークス一の情報屋「パティエンティア」を（姉が勝手に）名乗る、双子の姉妹の片割れ。

・物腰丁寧で、落ち着いた性格。姉に対してのみ、辛辣な言葉が飛ぶ。

・姉が無鉄砲なこともあり、しつかり者に育った。かといって、姉を面倒だとは思っても疎ましく思ったことはない。だって仲良しだから。

・スタイルは普通くらい。貧しくありません。姉がデカすぎるだけなんです。

・姉にも秘密だが、ロックベアを割砕したハクメイの姿にちよつときめいていたりする。

オーザ

年齢：21

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ハンター／ファイター

- ・ハンター、ファイタークラスの担当官。
- ・ハンター至上主義。他のクラス、特にフォースは批判対象。
- ・フォースは肝心な時に息切れするクラスだと評価している。
- ・強い肉体によつて、疲れ知らずで常に戦えることを美点としている。

マールー

年齢：21

種族：ニューマン

性別：女

クラス：フォース／テクター

- ・フォース、テクタークラスの担当官。
- ・フォース至上主義。ハンターは批判対象。レンジャーについては不明。

- ・ハンターを暑苦しいと評価している。
- ・狙い澄ました一撃必殺でスマートに戦うことを美点としている。

リサ

年齢：？

種族：キヤスト

性別：女

クラス：レンジャー／ガンナー

- ・レンジャー、ガンナークラスの担当官。

・他二人のようにクラス至上主義というわけではない。ただ、自分が銃をこよなく愛しているだけである。

・じわじわと苦しめて殺すのが好き。

・見目麗しいと評価されてなお、ハクメイに肝を冷やさせた別の意味での強者^{つわもの}。

・探知をしていたのがハクメイだったことには薄々感付いていたが、黙っている。間違えて撃ってしまったことの詫びのつもり。

ルベルト

年齢：16

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：レンジャー（志望。まだ正規のアークスではない）

・研修生の青年。

・ハクメイを先生と呼び、慕っている。様々なクラスを扱い、初陣でダーカー相手に一步も退かなかったハクメイを努力の先達者だと思っている。

・ハクメイからルベルトへの評価は「暑苦しさ95：爽やかさ3：憎たらしさ2」である。

・ハクメイがロッククベアを割碎した時には、通信の向こうで滂沱の涙を流していた。暑苦しい。

フィリア

年齢：？

種族：ヒューマン

性別：女

・メデイカルセンターに勤める看護官。

・甲斐甲斐しい性格が人気を呼び、少なくとも数の男性アークスから人知れず好意を寄せられている。忙しさからか、あまりそういうことを考えていたりなどはしない。

・マトイの面倒を見ることにした。検査を嫌がるので大変と言えば

大変。

ゲツテムハルト

年齢：28

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ファイター

- ・ 大柄なアークス。顔にゼノとは左右対称の傷跡がある。
- ・ 強い存在と戦うことを目的として動いている。
- ・ ハクメイに「強いが、ドロドロとした不愉快な感じ」と評されている。

・ 当面は仮面の男とまた戦う為に、シーナと共に捜索中。ハクメイは育つまで待つことにしている。

メルフォンシーナ

年齢：18

種族：ニューマン

性別：女

クラス：テクター／フォース

- ・ 小柄なアークス。前髪が目元を覆う程に伸びているのが特徴。
- ・ ゲツテムハルトに付き従っている。
- ・ ハクメイに「過剰なまでに丁寧」と評されている。

仮面の男

年齢：？

種族：？

性別：男

クラス：ハンター？

- ・ アークスのような男。
- ・ ハクメイを殺そうとした。
- ・ 熟練チーム『ブラックレパンド』を壊滅させた張本人。

・チームを壊滅させた何かをハクメイにはすぐに使わなかったようだが、果たしてその理由は……？

・正体、目的、共に謎に包まれた男。

・ハクメイ、ゲツテムハルトの双方に、「六芒均衡よりよっぽど強い」と評されている。

『E p i s o d e 1 | 2』 『不測の予測が見せるもの』

記録とは塗り替えられるために存在している

オラクル。

それは宇宙を自由に旅する巨大な船団。

その中で、わたし達アークスはフォトンという力を操る事ができる者の宿命として、そして、この星々と生まれてくる命の為に、各々の胸の内にある正義に従い、宇宙を蝕む存在『ダーカー』と戦っていた。わたしはあの頃、わたしから全てを奪ったダーカーを殲滅するために存在していた。

あなたに導かれたのは、その美しいフォトンに……引き寄せられたのかもしれない。

誰よりも自分勝手に、意地悪で、強欲なあなたに。

サポートパートナーというものがある。

文字通り、アークスを支援する相棒サポートのような存在、と考えていい。姿ナリはアークスのようなものだが、身長が小さく、平均的なアークスの半分から三分の一くらいしかない。

主な役割は、アークスが任務に出ている隙にしがちなマイルームの生活における身の回りの世話。炊事洗濯掃除なんでもござれだ。

そして驚くべきことに、サポートパートナーは戦えるのだ。

アークスと同じようにフォトンを探り、武器を扱って、ドーカを殲滅することが出来る。

じゃあそのサポートパートナーを大量に作ってドーカ殺しとけば、アークス何もしなくていいじゃん。と考えるだろうが、そう簡単にはいかないのが世の常。

サポートパートナーは、作るのに時間が掛かるのだ。

マネキンのような素体さえあれば、後は外見のデータをアークスが個人個人で好きなように設定していけば出来上がりなのだが、その素体を作るまでが長い。ドーカにやられる数より量産する数の方が多し、なんて体制になるには、まだまだアークスの技術は発展途上というわけだ。加えて言うなれば、サポートパートナーはアークスに比べて弱い。フォトンを探ることに關しては一般のアークスとそう変わらないのだが、戦闘の勘や肉体的成長に關して、機械であるサポートパートナーは及ばないのだ。

キャストも機械の身体ではあるが、人格や感情を伴っていないサポートパートナーとはまた別物である。というか、キャストって元は別の種族が機械の身体に改造された存在だし。純粋な機械であるサポートパートナーとは違って、元々ヒューマンやニューマンなどといった肉体を持っていたのだ。20年くらい前に突然生まれ始めたデューマンは、最近過ぎてキャストにするにも足踏みしているところだろう。

デューマンとは、ヒューマンに角が生え、身体に紋様が浮かんだ、オッドアイの種族だ。

まだまだ馴染み深いと言えるような歴史は無いのと、その特徴によって敬遠されがち。しかし、アークスになれる人員を輩出する比率は、他種族が3割にも満たないのに対して、デューマンは実に10割。希望すればその全員がアークスになれる優秀な種族である。

話を戻すか。

で、サポートパートナーなのだが。

「おはようございます、ハクメイ様」

マトイと出会った翌日。

いや……三日後なのか？ でも時間遡行した時、マトイはずっと寝てたし。わからん。

とにかく、申請していたサポートパートナーがマイルームに届いたのだ。

外見はアークスが個人個人で好きに設定できると言ったが、大半のアークスはオススメセットをそのまま、もしくははちよろつと改造していくのがほとんどだ。それで過ごしてみても気に入らなければ、順次変えていくという手法を取るのだが。

俺は始めから凝った。

凝りに凝りまくった。

アークスになる前から設計を繰り返し、実際に設定する時にも微調整して試行錯誤し、設定する声も多分一生分くらいの声を聴き、一番気に入るものを選んだ。

イメージは、従者。

サポートパートナーらしく俺に付き従い、命令を忠実に実行する、完璧な女従者だ。

え？ 当たり前のように女だなんて？ そりゃそうだ。ちっちゃくて愛でられるサポートパートナーを、何が悲しくて男にしなきゃいけない。

種族はヒューマン。髪はストレートロングの黒。瞳の色はエメラルド。顔つきは鋭くも柔らかくもなく。身体つきは豊かだが、スラっとした面も忘れずにバランスよく。

素体名『ハルカ』。

それが俺のサポートパートナーである。

「サポートパートナー『ハルカ』、只今ご到着いたしました。本日よりハクメイ様のサポートをさせていただきます」

「……ああ。よろしく頼むよ」

起床し、俺の枕元に立つハルカの頭を撫でる。

「お前にはこれから存分に働いてもらわなきゃいけないからな」

「お任せください。私はサポートパートナー。貴方様のお役に立つところこそ、唯一の喜びです」

……そういう風にオラクルに設計されてるっただけなんだがな。

まあいいさ。

これからはその言葉通りになる。

「早速ですが、ハクメイ様にメールが届いています」

「メール？」

「ハクメイさん、よく来てくれました！」

俺は、シヨップエリアにて一人の管理官に呼び出されていた。

美人のお姉さん、である。

赤い髪を七三分けにして、後ろで編み込み状に纏めていて、職務に真面目感がありありと出ている。かといって近寄り難い感じはなく、むしろ柔らかい雰囲気だ。胸の大きさは並くらいだが、スタイルは良い方。

マトイを見た時程の衝撃はやってこないが、間違いなく俺が出会った中で上位に位置する女性だと言える。

そんな美女が、姿勢を正して俺を待っていた。

なんつって、待ち合わせは俺だけじゃないんだけども。

「初めまして。確かセラファイさん、でしたっけ」
「はい。アークス管理官のセラファイと申します」

ぺこりと一礼される。

「メールでもお伝えしたかと思いますが、あなたにアークス本部より、チームを組んでの特例が発令されました。そして、そのチームのリーダーをあなたにお願いしたいのです」

「特例、ねえ。なんだって本部様が、新人アークスの俺に目を付けたんだか」

「あなたは士官学校時代より、様々なクラスを扱って戦うとお聞きしています。これから新技術を導入するにあたって、ハクメイさんのように枠に囚われない方が適任なのだと思えます」

「……新技術」

新技術。

そう、新技術なのだ。

アークスが開発したという新技術を、俺がいの一番に扱えるというのだ。

試験的な導入とは聞いているが、アークスがそれを扱うということ
は、その活動に役立つ何かだろう。

どういったものはまだ聞いていない。

開けてビツクリのプレゼント待ちってことだ。

「きつとあなたなら、チームをまとめ、任務を成功させてくれると信じていますよ」

「ま、やったことはありませんがね。頑張りますよつと」

俺のことをどれだけ知っているのやら。セラファイさんは期待を込めてそう言う。

で、今回俺の部下という形で、チームメンバーがこれからやってく

るというのだ。

俺が申請していたチームとは違い、新技術の為のお試しチームとのこと。

どんな奴かは聞いていないが……俺のチーム発足の予行演習と思つて、ちつとの間面倒見ますかね。

「では早速ですが、共に戦うアークスを紹介させていただきませうね。ジエネちゃん！」

セラファイさんが遠くにいる誰かを呼ぶ。

俺もそちらの方を見てみた。

その誰かはセラファイさんの声に気付いた様子で、こちらに走ってくる。

シルエットがどんどん明確になり——つて、え。ちよつとなにあれ。

この距離でもわかるくらいの揺れ方なんですけども。

「ハクメイさん！ 初めまして」

「……………」

「わたし、ジエネって言います。よろしくお願いします」

礼儀正しく、ぺこりと頭を下げる少女。

凄まじかった。

可愛さも凄まじいけど、それ以上にある特定部位が凄まじかった。

少女——ジエネは、俺と同期らしき、同じ年くらいのアークスだ。金髪のツインテール。それに前髪と左のテールに一房ずつ緑のメッシュが掛かっている。髪飾りにヘッドギアを着けていて、キツネの耳のようにも見える。瞳の色は海のようなサファイア。顔立ちはほんわかとしていて、優しい印象。服装は白の面積を多めに、緑と黒の部分も所々にある、スカートの丈が非常に短いものだ。背中には

羽根のようなマントを着けていて、足と腕には保護具のような黒いガードを着けている。

で、だ。

その胸部が凄まじかった。

何が凄まじいって、サイズがだ。

俺が出会ってきた女ベスト1のサイズは一昨日に会ったパティだったのだが、その記録が今日塗り替えられてしまった。

いやほんと、なんつー大きさだよ。

しかも俺と同じ年くらいってことは、これがまだ成長する余地を残してることだろ？

末恐ろしい。

「あなたの噂は聞いていました。主席卒業者の、すっごく優秀なアークスだって。共に宇宙の平和の為に戦えるなんて、とっても嬉しいです！」

俺の視線にまるで気付いた様子は無く、ジエネは笑ってそう言う。

……こんな兵器みたいな凶悪ボディなのに、無防備過ぎませんかねえ。

しかしそんな思考はおくびにも出さず、俺は落ち着いて挨拶をする。

「おう、よろしくな。別にそんなかしこまんなくてもいいぜ。俺もジエネって呼び捨てにするし」

「ありがとうございますー！」

笑顔で応えられるが、敬語は変わらない。

多分その口調で染み付いてしまっているんだろう。それなら別に無理に変えることもない。

「一緒に頑張りましょうね。優しそうな人でよかったです」

「……………」

その優しそうな人に割とグスイ視線を向けられてたんですが、大丈夫かこの子。

黙っていると、ジエネは俺の方に両手を差し伸べてくる。

「？」

「これからよろしくお願いします、の握手です！」

「ああ、そゆこと」

両手だったからなんだと思ったわ。

差し出された右手を右手で掴み、握手を交わす。

！ ……こいつはまた、凄まじいな。

握手した俺の右手を包み込むように、ジエネが左手を――

「…………あれ？」

「ん？ ジエネ？」

「……………あの。もしかして、どこかで会った事ありますか？」

「はっ？」

何を言つとるのかこの子は。

そんな逆ナンテクみたいなこと言っても、俺には全く心当たりないぞ。

「さっき初めましてって言われた通り、これが初対面だけど？ なん
かあったか？」

「いえ、その……手を握った時、なんだかとても懐かしい感じがして
……。気のせいでしょうか？」

「んー……悪いが、俺には全く覚えがないな」

なんならこんなに柔らかい手、初めて握ったまである。

「おほん」

置いてけぼりにされてたセラファイさんが、一つ咳払い。
握手を解く俺達。

セラファイさんに向き直ると、彼女はにこやかに笑う。

「きつとお二人なら、いいチームになれると思いますよ」

皮肉とかはなかった。

心からそう言ってる感じ……逆に気恥ずかしいなおい。

「早速ですが、チームを組むにあたり、お二人の適性をテストさせてください」

「テスト、ですか」

「はい。ナベリウスの森林エリアにて、原生種……と行きたいところですが、未だ大発生の余波があるのでダーカーを一定数討伐してきてください。その戦闘データより、適性を見させていただきます」

「了解です」

本来なら原生種の討伐でテストしたかったんだろうが、ダーカーが溢れてるしな。

……そういや今更だけど。

なんでこの人、旧式の管理官制服着てるんだろ。

「そんじゃ行くか、ジエネ」

「はい！ 張り切っていきましょー！」

と意気込んでみても、そのまま任務と言う訳にはいかないのので、一度解散して準備してから出発ということになった。

俺は早々に準備を終えたので、集合場所であるゲートエリアに先に到着。

さて、どうやって時間を潰そうか……。

「お」

メデイカルセンター前に行くと、マトイがいた。

「おつす」

「あ……ハクメイ」

声を掛けると、マトイはこちらに気付いた。

……ジエネも大概だったが、マトイもマトイで際どい恰好してるよな。

ジエネの服装は、上部分は布面積自体は多いもののピツチリしてて胸のラインが一目瞭然。下のスカートは一度風が吹けばめくれてしまいそうな危うさがあった。

対してマトイは、胸の中心に穴が開いていて下側の谷間が露出する形。腰より下に至ってはインナーが丸見えだ。水着だから恥ずかしくないもん、の法則なのだろうか。腕部分はぶかぶかの袖に包まれているから布面積は多い方だと錯覚しがちだが、大事な部分だけ露出していて、逆に際どい恰好に思える。

「えつと……あのう……」

「ん？ どした？」

「う、ええと……その……がんばって、ね」

「？ まあ確かにこれから任務だけでも」

「……あ、違った。違うの。先に、ありがとう、だった」

胸に手を当て、マトイは言う。

「ありがとう、ハクメイ。わたしを助けてくれて……」

……助けた。

助けた、か。

不思議だよな、全く。

時間遡行する前にそれっぽい話を聞いてた時は、どうでもいいかと思ってたのに。

助けてって、聞こえる筈の無い声を聞いてからは、そりやあもう必死に助けに走って。

途中あの仮面野郎に襲われようと、搜索を止めずに。

訳の分からない何かに導かれて、こうしてこいつを助けたのだ。

今こうしてみれば可愛い可愛いマトイを助けられてよかったと思えるが、そんなの知らない時点であんな必死だったなんて、普段の俺からすりや考えられないことだ。

助けを呼ぶ声の方に向かってても、あんなハイペースで走る事はなかったろうに。

仮面野郎に襲われた後、少し休憩を挟むくらいはしたろうに。

「まず、それを言わなきゃいけないのに……。ごめんなさい……。遅くなってる」

「……………気にすんな。礼はちゃんと受け取ったからよ」

言葉と、目の保養的な意味で。

目に入れても痛くない可愛さとはこのことだろう。

言わないけど。

一部は目に毒だけでも。

「それと、お前を見つけた功労者のアフィンにも礼言つとけよ。あの金髪のニューマン……って言って分かるか？」

「……うん」

ありや。

領きはしたが、なんだか気が進まないご様子。

助けたのはアフィンだっておんなじなんだが、俺と何が違うのかね？

「マトイちゃん」

話していると、フィリアさんの呼ぶ声。

マトイを見つけると、そちらに向かって歩いてくる。

「あ………」

「あ、ハクメイさんも一緒にでしたか。これから任務ですか？」

「ええ。ちよいと待ち合わせしてるところでしてね。待ってる間にマトイを見かけたもんで」

「そうでしたか。マトイちゃんはこれから検査があるので。では、行きましようか」

「………」

「？ マトイ？」

「……行ってくるね。……行ってらっしゃい」

「お？ おう」

マトイは黙ってフィリアさんの背へと付いて行き、メディカルセンタ―へと去って行った。

俺にはちやんと言葉を返したが、フィリアさんにはろくな言葉を返さなかったな。

気が進まないのかね、検査。

まあ進んで検査されたいってのも訳が分からんが。

「つと、来たみたいだな」

ちようど入れ違いになる形で、ジエネがゲートエリアへやってきた。

俺を見つけ、駆けてくるジエネ。

「お待ちせしました！ 退屈していませんでしたか？」

「うんにゃ。ちようど話終わったところ。タイミング的には良かったよ」

「……話？ 誰とですか？」

「ま、それは終わった後にな」

さて、お試しチームの出動と行きますか。

なんかすこぶる元気なのがあつつ!?

「ふーん。ジエネはファイターの両剣使いなわけだ」

「はい。ハクメイさんはあらゆるクラスを扱うと聞きましたが、今回はどんなクラスに?」

「俺はまあ、ファイターメインで、サブにテクターだな」

「え? もうサブクラスを解禁してもらったんですか?」

「俺のクラスを万遍なく扱う姿勢が評価されたとかなんとかな。今回みたいな特例なんでも来るが、こういう特権は悪かねえ」

「すごいです!」

「ふふん! そうであろう!」

俺とジエネはナベリウスに来ていた。

シップから惑星までの移動は、めんどいので省く。キャンプシップで二人きりだからって、何かするでも起こるでもなかったしな。

「セラファイさん。ダーカーの反応はどんな感じですか?」

本当は300m先に行つたところでダーカーが群れてるのは捉えてるが、それを口に出すわけにもいかない。

ちなみにルベルトとの通信は繋いである。

ジエネが同行する以上、晒してはいけない事項は通信の有無に関わらず晒してはいけないのだ。そんな状態で切り替えるのも面倒だし、ずつつけっぱなしで行こうと思っている。ちなみにジエネには、ルベルトの依頼の旨は話してあるので、問題なし。

セラファイさんは、通信の先で俺の問いに応えた。

『はい! このままの道をまっすぐに突き進んだ先に、ダーカーの反

応があります。強力な反応はありませんが、数は多数。気を付けてください！』

「この先に……ダーカーが」

隣のジエネが、右手に持った両剣をぎゅつと握り締める。

「ダーカーと戦うのは初めてか？」

「……はい。この前、ナベリウスでダーカー大発生があつたことは知っています。でも、わたしは別の惑星で修了任務を終えたので、ダーカーと遭遇することはありませんでした」

「ふーん」

「ハクメイさんは、現場にいたんですね？　ダーカー……宇宙の敵は、どうでしたか？」

……この様子だとダーカーに何か思う所があるようだな。

差し詰め、両親をダーカーに殺されたつてとこか。

アークスになるつてので、そういう奴は多いからなあ。

「ま、宇宙の敵って言われんのも納得つて感じだな」

思想も知性も本能もなく。

ただ何かを浸食して、アークスを滅ぼす為だけに作られたような、純粹な害悪。

「強さ的には原生種とそう変わらんから、気負いすんな。なんなら最初は見学してたっていいぞ」

「いえ、そんな！　わたしだつて一人前のアークスになったんです！

ダーカーを倒して、宇宙の平和を守るために！」

「そりゃ重畳」

アフィンと違って気後れした様子はないし、ちゃんと戦えそうか

な。さて、それじゃあちゃんと連携を取っていく形でいきますか。

武器の装備は……………ダガーとタリスの組み合わせでいくか。並列起動を使えないから自作タリスは効果を十全に発揮できないだろうが、この前程度の個体なら問題ないだろう。右手でエレキを逆手に持ち、左手に自作武器のタリス、分具『スプラッシュ』を持つ。

(…………?)

「ハクメイさん、どうかしましたか？」

「…………いや、なんでもない」

心に浮かんだ疑問を打ち消し、前を見据える。そろそろダーカーの群れと接触する筈だ。戦闘前の打ち合わせはこころへんでした方がよい。

「俺が群れの上空にタリスを投げたら、戦闘開始だ。まずはジエネ、お前が突っ込め。その後ろを俺がカバーする」

「はいー!」

本来ならリーダーの俺が特攻するべきと思うだろう。

だが、ジエネの実力は見ておきたいし、チーム戦なのだから全体を把握しながら戦いたい。その為のスプラッシュだ。気後れするようなら下がらせてもよかったけどな。

目に見えてきたダーカーの群れ。

ダガンが五体。カルターゴが一、プリアーダが二、か。

さて、あの凄まじいものを持っているジエネだが……………戦闘は如何程のものか。

お手並み拝見といきますか。

「すうー…………」

ダーカーを見つけ、深呼吸をするジエネ。

吸った息を吐きだし、両剣をぐっと握った。

「……行けます！」

「じゃあ始めるぞ！」

ジエネの返事を合図に、俺はスプラッシュを群れの上空に投げた。

ハクメイさんがタリスを投げたのを確認して、わたしはダガンに向かって走った。

ダガンを含めたダーカー達が、わたしに気付いて、一斉にこちらに意識を向けてくる。

（ダーカー……宇宙の敵）

わたしの両親は、アークスシップの市街地エリアに攻め込んできたダーカーに殺された。

優しい両親だった。父も母も。

戦う力はなくても、みんなの平和を守る為に、日々研究をする。そんな二人だった。

でも、殺された。

まだ小さかったわたしを残して、二人共。

だからわたしは――

（わたしと同じ想いをする誰かを、少しでも減らす為に……！）

ダーカーが戦闘態勢を整えるのを待たず、跳んだ。

一番近くのダガンが着地点になるようにして、フォトンアーツ P Aを発動する。

「サプライズダנקー！」

ダガンに向けて、剣を振り下ろした。

兜割によって縦に両断されるダガン。それに留まらず、フォトンアーツ P Aによつて生み出された衝撃波が周りにいたダガン四体とカルターゴにも襲い掛かる。

衝撃波を受けただけでは倒せなかつたけれど、仰け反りはした。その隙に二歩踏み込んで、ダガン一体にフォトンアーツ P A。

「シザーエッジー！」

打ち上げの一撃で、ダガンを真上へと斬り上げる。

重力に従つて落ちてくるのを、続く二撃の斬り上げで迎えて、ダガンは四つに分断。その姿を消す。

そして、目の前にはカルターゴ。

このまま攻め込みたいけど……。

(カルターゴは、正面からの攻撃に強いダーカー。羽根は硬くて、ロクにダメージを与えられない)

それでも力押し出来る人がいない訳じゃないけど、わたしはそうじゃない。

背中に回り込んで、コアを攻撃するのがセオリー。けど、今カルターゴの右に二体、左に一体、ダガンが控えている。

(こうなったら左のダガンを倒して、カルターゴの背中に回り込むしか………っ！)

背中から、気配。

振り向くとそこには、プリアーダが地面スレスレを飛んで、わたしに突進してきていた。

上空にいたプリアーダが急降下して、攻撃を……!?!
今からじゃ、防御が間に合わない。

「っ！」

来たる衝撃を予期して、思わず目を瞑ってしまった。

……けど、衝撃はやってこず。

代わりに、ゾンっと。

蟲を突き刺した音が耳に響いた。

「ボサつとすんな！」

「ハクメイさん！」

声を聞いて、目を開くと、そこにはハクメイさんがプリアーダの脳天を逆手に持ったダガーで突き刺した姿が。

最初に見た時から電気を帯びていたそのダガーは、次の瞬間には一際強い電撃を生み出し、プリアーダを感電させた。

全身に電撃を流されて、消えていくプリアーダ。

地面にまで刺していたダガーを引き抜いて、ハクメイさんは構え直す。

そして、わたしの後ろにいる、塔のような身体の上で光線を準備しているカルターゴを睨んだ。

ジエネが突っ込んだ時、二体いるプリアーダの内一体、俺が今刺し

殺した奴とは違う奴は、ダガンエッグを産み出していた。

それが地面に落ちる前に、スプラッシュの機能を使つて撃ち落とすてやった。

スプラッシュは、拡散するタリス。

投げた後の操作によつて、俺が望む数、最大10個までに分かれるのだ。分かれた後に飛んでいく方向も、俺が遠隔操作可能。今回はそれによつて分かれたタリスがダガンエッグに傷をつけた。

それだけの攻撃でエネミーを倒すようなものではないが、ダガンエッグは地面に刺されればエル・ダガンを産み出してしまふものの、エッグの状態なら少しの傷で霧散してしまう。なので、主に射撃を扱うクラスはひとまずダガンエッグを狙つて撃ち落とすのがセオリーだ。

その後、ジエネに向かつて走りつつ、ダガンエッグを産み出したプリアーダに、ゾンデで雷を落とす。

これで倒せはしないが、地面には落ちていく。

もう一体のプリアーダはジエネに突進しようとしていたので、後ろからエレキを振り上げ、脳天に突き刺してやった。

「ボサつとすんなー！」

「ハクメイさん！」

まったく、安心すんのはまだ早えだろうが。

電撃をお見舞いして、引き抜いたエレキを構え直すと、カルターゴがジエネの後ろで光線を放つ準備をしている。

振り向き、避けるのは間に合わないか見たのか、ジエネはダブルセイバーを前に構えて、防御の体勢に入る。

カルターゴから遂に、光線が放たれようとしているが。

「ザン！」

カルターゴの後ろに停滞させていたスプラッシュの破片から、風の刃を飛ばした。

「ギイツ!？」

風の刃でコアを傷付けられ、カルターゴの光線が霧散した。

スプラッシュは分散しようと、導具としての機能は生きている。今回は分散させた時に、ダガンエッグを撃ち落とした分とは別に、カルターゴの背面に位置するようにスプラッシュの破片を飛ばし、停滞させていた。

こういう操作を演算して管理しなきゃいけないから、扱うのは難しい。しかし、使いこなせば便利なものだ。

(が、まあ倒せねえよな)

姿を消さないカルターゴを見据えつつ、その右に走る。

「左のダガンをやれ！」

「っ、はい！」

「レイジングワルツ！」

ジエネに指令を飛ばしつつ、フォトンアーツ P Aを発動。

弾丸のように直進して、ダガン一体を斬り上げる。

霧散したダガンの隣で、もう一体のダガンが足を振るって、その爪で空中の俺を攻撃しようとしてくるが、その足を横に蹴飛ばす。

バランスを崩されたダガンの目の前に着地し、前足二本を纏めて斬り落として、その身体をコアごと踏み潰す。

左右の守りを失ったカルターゴの背後に回り込むと、反対からジエネが同じように回り込んできていた。

どうやら同時に終わったらしい。

ジエネが両手を振り上げる。

「たあつ！」

ジエネがカルターゴのコアに向けてダブルセイバーを振り下ろすのに合わせて、俺も振り上げるようにコアを切り裂いた。

二つの斬撃をコアに受けたカルターゴは、鳴き声を上げる間もなく霧散していく。

残ったのはプリアーダ一体だが……見ると、地面からそう飛び上がってもいないにも関わらず、プリアーダは攻撃の体勢だった。

プリアーダの遠距離攻撃として、ダガンエツグを産み出す場所と同じ腹の先端から毒液を吐き出すものがある。

見るからにそれをやる姿勢。

近距離戦をやりたくないのはわかるが……。

「そんな高さでやってもしょうがねえだろうに。所詮は虫か」

空いた左手を向ける。

プリアーダが毒液を吐き出すのに合わせ、テクニックを発動。

「メギド」

闇の球体が左手から放たれた。

弾速は遅いが、相殺が目的だから問題なし。

球体と毒液が正面からぶつかり、じゅわつと溶けるような音を残して双方消えていく。

お互いの攻撃が消え、晴れた視界の先でプリアーダを確認すると、ジエネはダブルセイバーを投擲した。

「デッドリーアーチャー！」

回転しながら飛んでいくダブルセイバーがプリアーダに直撃した。

一度だけでは飽き足らず、プリアーダがいる場所で回転を続け、その身体を微塵に切り裂いていく。
やがてその身体が霧散したのを確認して、ダブルセイバーはジエネの手元に戻ってきた。

「お掃除完了っつと」

『こんなに息がぴったりだなんて、すごいです!』

ダーカーの群れを片付けて、一時小休止する俺達に、セラフィさんからの通信が聞こえてくる。

『お二人のチームワーク、バツチリでしたよ!』

「はあ……っ、はあ……よかった、です……っ!」

「まあなんとかなるもんですね」

……なにかなっただはいいが、ジエネがちよいと疲れ過ぎだな。

あんな凄まじいもの抱えてるんだから、それも仕方ない……か。しかし、それにしちや……。

ジエネは息を整えつつ、こちらに話し掛けてくる。

「ハクメイさん。フォローしてくれて、ありがとうございます。助かりました」

「お礼は受け取るが、お前さつき目え瞑ったな?」
「うっ」

「前衛に立ってて視界を自ら塞ぐのは自殺行為。今回はフォロー出来

「たからいいが、今後の課題だな」
「……はい」

しよぼん、と顔を俯かせるジエネ。
落ち込ませたようだが、死なれるよりはいいだろう。
だろうが……フォローしとくか。

「ま、カルターゴに正面から攻撃していかなかったのはよし、だ。ちやんと勉強してんのな」

「あ……はい！　ありがとうございます！　わたしも、あなたみたいにもっと……」

「俺みたいにもっと？」

「あ、な、なんでもないです！」

「中途半端に切るなー、おい」

さて、ダーカーの反応は捉えてるから、今度はそつちに……つて。セラファイさんの案内なしで目標捕捉してたら不自然か。俺も慣れないとな。

セラファイさんが補足するまでは、ジエネももうちよい落ち着いてつて、ん？

「ジエネ、右手」

「え？　あ」

ジエネの右手の甲は、少し血が滲んでいた。

本人も気付いていなかったようだから、小さい傷のようである。

……俺が見ている内では傷付いてなかったようだし、あの時にでもダガンの爪が掠めたか？

「いつの間に……で、でもこれぐらい大丈夫です。放っておいても」
「レスタ」

問答無用で回復フィールドを展開。

ジェネの右手の傷が、小さいのもあってたちまちに塞がっていく。

「あ」

「そういう遠慮、ほんつといらない」

「で、でも……」

「回復薬使うなら話は別だが、一回テクニクを使うくらいで勿体無いとかないから」

「……はい。ごめんなさい」

右手を左手で包み込み、きゅつと抱きしめるジェネ。

なんでごめんって謝つといて嬉しそうな顔してるのか。

うーむ。

わからん。

(………ん?)

探知に高速接近反応。

前の仮面野郎とは違う何かのようだが、こちらに向かってかなりの速度で走ってきていた。

いや……これ、一直線だよな。

まさか、飛んできてるのか？

この距離を、これだけの速度で？

「セラファイさん、何か反応ありますか？」

『え？ いえ、特にはないようですが……あ！ これは！』
「？」

果たして、その何かは目の前に現れた。

俺とジェネの前で、シユタツと。

砲弾のように飛んできて、何事もなかったように着地した。男だ。

燃えるような赤をトレードマークにしたアークスの戦闘服に身を包んだ、狼のように蒼い髪を逆立てた野性味溢れるヒューマンの男だった。

「ふははははははははっ！」

立ち上がったと思ったら、急に笑い出した。

「え？ え？ え？」

困惑するジエネ。

「そこな行き交うアークスの君達！ そう、君達だ、君達！」

「はあ」

「見たところ、何かお困りの様子だな！」

「は？」

「だが安心していい！ オレが来たからにはもう解決だ！ さあ、なんでも言ってみたまえ！」

ええ……いやそう言われても。

なんだかあつつ苦しい男だな。

悪い奴ではなさそうなんだが、善意の押し売りってやつだろうか。

「あの……わたし達、特に困ってることはないです」

「いやいやまさかそんなそんな……え、本当にない？」

「は、はい。ないです」

「うーん……まいったな。こうノリが悪いのは想定してないぞ。こりゃ出直しかな」

まあ強いて言うなら、俺が女の子の扱いに困っていたっちゃいたが……この男に言っても無駄だろう。

……それにしても、この強い反応。それにあのシンボル……まさか。

「あんたは？」

「あ、オレ？ オレはヒューイ。アークス六芒均衡の六をやってるの」
「ろ、六芒均衡!?! 六芒均衡って、あの!?!」

「そうそう。あの偉い連中の一人」

驚愕の声を上げるジエネ。

やっぱりか。

小さいが、胸に花卉のマークがあった。そこには数字の6がオラクル文字で描かれている。六芒均衡が他のアークスと見分けをつける為に、コスチュームに着けるのだそうだ。

……威厳的なのはこれっぽっちも感じないが、感じる強さは本物だ。

マークがなくとも、只者でないことくらいは分かる。

「そう見えないってよく言われるけど、実際なっちゃまったもんは仕方がないんだよ。ほぼ強制だし」

「は、はあ……」

六芒均衡は、アークス上層部に見初められるか、六芒均衡に推薦されるかで成ることが出来る。

団体か個人かの違いはあるが、どちらにせよ成るに相応しい強さを見せなければ、成る事は出来ない。

つまり、それだけの実力を有しているということだ。

創世器は装備していないようだが、恐らくアイテムパックに仕舞っているのだろう。

「……ま、オレのやる事は変わらずいつも通り、人助けにあっちこっち！ それだけだから、文句もないさ！」

「それでいいのか六芒均衡」

「いいともさっ！ しかし、君は肝が据わってて面白い奴だな！ みたいずれ会おう！ それではっ！」

そう言つて、ヒューイは一度しゃがみ込むと、跳躍した。

跳躍。

そう、跳躍で。

一瞬にして遥か彼方まで消えて行つたのだ。

「わあ……ただのジャンプで、すごい飛んで行っちゃいました。あれが、六芒均衡。アークス最強の六人、なんですね」

「まあ、四は長期空席。残り五人も、俺はレギアスと今のヒューイしか知らんけどな」

「……わたしも、いずれあんな風に強くなれるでしょうか？」

「それは知らんが」

あつという間に探知範囲から外れたヒューイの姿を見送り、俺は言う。

「少なくとも俺は、六芒均衡を超えていくつもりだぜ？」

「……………はい！ わたしも、そのつもりで強くなります！」

才能なんて要は楽できるかどうかに過ぎない

『これで二人のバトルの適性試験を終了します。お疲れ様でした！』

通信からセラフィさんの労い。

ヒューイとの遭遇の後、幾度かの戦闘をした。ジエネは何度か危ない場面があったが、どれも俺のフォロー出来る範囲。結果的に俺達はほとんど傷を負わずに試験を終了したのである。

まあ大抵の怪我なら俺が治せるし。

ジエネを見る。

「はあ……っ、はあ……っ、はあ……」

セラフィさんに返事も出来ない程に息も絶え絶えだった。

怪我とかはないが、体力の回復となると継続的か集中的な回復が必要になるからなあ。

これから帰還だから、その必要もないが。

「うし、じゃあ帰るか。お疲れさん」

「はあ……は、はい。お疲れ様でした」

アイテムバックからテレパイプを呼び出し、足元に放ってテレポーターを出す。転移装置さえまともに動きゃ、これ一つで降りてきたキャンプシップに戻る代物だ。

テレポーターを起動して、元のキャンプシップへと転移する。

シップの中の狭い空間に戻ってきたことを確認し、真ん中辺りに座って、書き物を始めた。

少し遅れて、ジエネも転移してくる。

「それでは、帰りましょう……？　ハクメイさん。何を書いているんですか？」

「ま、日誌ってやつだな」

「日誌、ですか？」

「俺がチームを作る時は、こうやって一日の出来事を紙に書き留めることを義務付けようと思つてな。当番制で。簡単に言えばメンバー間の交換日記みたいなもんだ」

「交換日記……」

「データ入力の方がいいかもしれんが、紙媒体の方が秘匿性も保存性もあつたりするしな。ま、今回はお試しチームだが、本当に作るチームに向けての練習……」

「じいー……」

「……」

めっちゃキラキラした瞳で見てるんですがこの子。

如何にも「交換日記っていうの、わたし憧れてたんです！」っていう顔だ。

女の子はそういうの好きそうだなもんなあ。

ああ、もう。

可愛いなあ、ほんとに。

「……今日の分はお前が書くか？」

「いいんですか!？」

パアツと、花が開くように満面の笑みを浮かべるジエネ。

いいも何も。

ダメって言ったら泣きかねんくらいの期待感だったぞ。

それはそれで見てみたい気もするが、笑ってもらった方が俺も気分が良い。

日誌をジエネに渡す。

白紙の本を買って、それにタイトル『チーム日誌』って書いただけ

だから、今消すようなものは書いていない。

「ありがとうございます！ 今日の思い出、沢山書いてきますね！」
「次に書く俺のプレッシャーになるから、二言三言くらいにしといてくれない？」

キャンプシップで開いていた反省会（と言ってもジェネから俺に言う事は無かったので、ジェネの反省点を上げる会だった）を終え、俺達はゲートエリアに帰還した。

一つ伸びをする。

あー、そういやゼノさんもここでこうやって伸びしてたっけ。

「ハクメイさん。今日は、ありがとうございます。おかげでいつもよりのびのびと戦えました」

「ま、俺も前衛と組んだのはほとんど無かったから新鮮だったよ。アフィンレンジャーだし」

「アフィン、さんですか？」

「俺の元ルームメイトな。金髪のニューマンなんだが、まあその内会うこともあるだろ」

さてと……マトイは検査終わったかね。

「これから出発前に話してた奴の様子見に行くけど、ジェネはどうする？」

「そうですね。それじゃあ」

「ハクメイ！」

ジエネの言葉を遮るように、呼ぶ声。
見れば、メデイカルセンターの方からマトイが走ってきていた。
今までにない程に活発な様子だ。
俺達の目の前で立ち止まるマトイ。

「おかえりなさい。大丈夫？ 怪我とか……」
「？ おう、ただいま？」

俺の身体を隅々までチェックするように見た後、隣のジエネを認識すると、マトイは黙ってしまった。

ジエネもジエネで若干固まった様子。
？ なんぞ？

「う……えっと……」
「……………か」
「か？」
「可愛いです……………」

……………ほう。
話分かるじゃないか。
ジエネはキラキラした瞳で、おどおどしているマトイを眺める。
そんな様子も愛らしいのだろう。悶えるように身体をくねらせ始めた。
男がやったらアレな絵面だが、美少女がやればそんな姿も可愛いものだ。

「あ、あの！ わたし、ジエネって言います。あなたはマトイちゃん、
でいいでしょうか？」
「うう……………」

少し興奮気味の自己紹介をするジェネに怯えるように、マトイは俺の背に隠れてしまった。

横から少し顔を覗かせる体勢。

「あ……怖がらせてしまったでしょうか？」

「気にすんな。看護官のフィリアさんにもこうだし、お前が特別怖いってわけじゃねえよ」

「？でも、ハクメイさんにはそうじゃないみたいですよ？」

「俺もその辺不思議でな。マトイ。こっちはジェネつつて、今日から俺がリーダーやるお試しチームのメンバー。見た目通りの人畜無害だから、噛み付いたりしないって」

「そうですよー。わたし、怖くありません。がうがうじゃなくてわんわんです」

「う……」

ジェネの必死の怖くないアピールも功を奏せず、マトイは警戒を解こうとしない。

回り込もうとするジェネだが、マトイもそれに合わせて俺を盾にするように回る。

再び回り込んでも、マトイも合わせて動く。

そんなのを繰り返して、俺の周りを二人がぐるぐる回る形になった。

なんだこれ。

やがていたちごっこが終わり、ジェネは残念そうに言う。

「うう………。しょんぼりです」

「んー。マトイも保護されて一週間経ってないし、時間が経てば警戒も解けてくると思うけどなー」

「保護？」

「ああ。ダーカー大発生の時にナベリウスで倒れてるのを、俺ともう一人で救助したんだよ。だからアークスシップの住民じゃなし」

「ええ!? だ、大丈夫だったんですか!？」

「保護した時は衰弱してたみたいだけど、今はこの通り」

「ほっ。良かったあ……」

自分のことのように安堵の息を吐くジエネ。

ジエネといいフィリアさんといい、第一印象で無害ってわかるだろうに。なんでマトイは警戒してんだかね。

俺には親鳥のように懐いているのに。

悪い気はしないけれども。

「その……大丈夫?」

「ん?」

俺の腕にしがみつくマトイが言う。

「余計な心配なら、ごめん……。でも、あなたはいつも戦ってて不安だったから……」

「ふうん?」

だから帰ってきた時、あんなに駆けてきたわけか。

しかし……いつも?

俺、そう言われる程マトイと会ってから長い間戦ってるか?

「わたし、待つだけしかできないから。……だから、心配だけは、させてほしい。やりたいことがあるのはいいことだ、って聞いたけど……無理をしちゃ、ダメだよ?」

「……心配は有難いが、それだけじゃちつと寂しいな」

マトイの頭に手を置き、柔らかな髪を撫でる。

「今度は土産でも持ってくるから、期待もしといてくれ」

「……うん。ありがとう。……でもほんとに、無理はしちゃダメだからね?」

それじゃあ、と言って、マトイはメデイカルセンターへと戻る。向こうの方でフィリアさんが待っていた。多分、外出出来る時間が限られてるのだろう。

その背を見送り、ジエネは感慨深く溜息を吐いた。

「可愛い女の子でした……。……出来ればお友達になりたかったですけど、またの機会にですな」
「そうしてくれ。流石にこのシップで味方が俺一人って思ってるのも、マトイとしちゃ辛いだろう」

次点でフィリアさんくらいか。

「さて。試験終わったら次の指令まで自由だそうだし、今日の所はお疲れさんだな」

「はい。お疲れ様でした!」

「おおっ、いいところに!」

「おん?」

「ちよいと一つ教えてほしいことがあるんだけど、いいかな?」

シヨップエリアに行くと、ウルクからそう声を掛けられた。

相変わらずの活発さ、快活さだ。

パティとはまた違うタイプである。

まあそれはいい。

「今は暇だから良いけど、なんか用か？」

「うん。ぶっちゃけ、フォトンを使うってどういう感じだったりするの？」

「感じ？」

「生地を練るような感じ？ 流水を抑えるような感じ？ んー、えーっと……」

フォトンの扱い、か。

それらとは違う感じなのだが……しかし。

「この前、才能ないから云々って言ってなかったか？」

「……いやさ、なんか感覚的にでもわかれば、わたしにも使えるようになったりしないかなーって……」

……ああ、そういう。

要は、諦めきれないと。

それもそうか。

才能ないから諦めろって言われて、そう簡単に諦めるようには見えねえもんな。

簡単に捨てられる程、アークスの魅力は安くねえもんな。

『あ、こ、こんにちは……。お元気そう……。ですね』

『あの……すみません。質問なんですけど、どうやったらエネミーと戦わずに済むと思います？』

『アークスをやめる……っていうのは確かにそうなんですけど、でも、ぼくにはこれしかなくて……。他には何も出来なかったけど、何故かアークスになれる適性だけはあったみたいで……』

『……ほんとうに、他のことは何も出来ないんで、アークスのままでなんとかエネミーと戦わずに……』

『……わかってます。そんなの無理、ですよ……。すみませんでした、失礼します』

さつき会ったテオドルだって、そう言ってたからな。

才能に満ち溢れようと、戦闘に消極的なテオドルだって。戦いたくないテオドルだって、アークスを捨てられないくらいに。

「……ああいや、気にしないで。他の人もみんな、なんとなく使ってるって言ってたしね」

俺が黙っているのを答えあぐねていると見たのか、ウルクはそう言う。

「多分、その「なんとなく」がわからないってのが、才能がないってことなんだと思う。……うー、残念だなあ。とーっても残念」

「……才能、ね」

嫌な言葉だ。

所詮そんなの、楽しんで強くなれるかどうかに過ぎないのに。諦めて逃げる口実に容易く使う。

出来ない奴が妬んで気軽に吐く。

積み重ねた苦勞を知らず。

「まー、ぐちぐち言ってもしよーがないよね。わたしはわたしで、別に出来ることを探しますか」

「……フオトンは」

「え？」

「フォトンとは、大気中に漂う目に見えない粒子。それは知ってるな？」

「え、そりゃあ、うん。知ってるよ」

「肉体を構成する為に、体内にもフォトンが存在する。それも？」

「うん」

「この体内フォトンとは、意識で操作できる」

翳すように、右手を胸の高さへ持ち上げる。

ウルクはその手を、首を傾げながら見ていた。

突然何を言い出すんだと思っっているだろう。

俺もそうだ。

何を突然教授なんか始めてるんだか。

続けて言う。

「人間ってのは普段、自分の身体を隅々まで意識なんかしてない。でも、例えば右手。これを見ながら動かせば、当然意識はそこに向く。この意識があるところに、体内のフォトンは集まってる」

「……そうなの？」

「教科書に載ってるようなことじゃないけどな」

どころか、これを知ってるアークスなんて俺くらいだろう。

じゃなきゃ俺の技術なんざもっと流出してる筈だ。

「体内フォトンが集まった場所から、大気中のフォトンに干渉が出来る。そうしてアークスはテクニックを扱う。法撃武器を扱う時はその干渉を補助したり、増幅したりする。打撃武器は体内フォトンで武器に流して、大気中のフォトンを集めてそのままぶつける。射撃武器は弾丸に形を変えて、撃ち出す」

「ほうほう」

「ま、要はイメージだな」

掌に大気中の光子を集める。

集まって圧縮された光子は、可視化する。

それ程までに高密度の光子を見れるのは稀だが、俺に掛かれればありふれたものに早変わりだ。

「ああ、湧いて出るやつね」ぐらいの気軽さで。

そうして、俺の右手には手の平サイズの光子の球体が浮かび上がっていた。

驚き、見惚れたような顔でそれを見るウルク。

「綺麗……」

「意識して、体内光子が集まった場所から、イメージを大気中の光子に伝播させる。こうする場合は、大気中の光子に干渉して「俺の掌に集まれ」と念じた。イメージが電気信号となって、頭から意識している場所に向かって走り、そこからその信号を体外に送る。これが光子を扱うってことだ」

球体を霧散させた。

「光子の適性、扱う力なんてのは、イメージ次第でどうにでもなる」

「イメージ、か。……じゃあ、才能がないってどういうこと？」

「才能ってのは、これの規模。光子感応力のことだ。こればかりはどうしようもない。使つてりや増えてくもんだが、それも微々たるもんだ」

「え……」

「そこいくとお前は、最低ランク。才能ないってなら、それはそうなんだろう」

目を見開き、その後顔を沈ませるウルク。

ショックだろう。それはそうだ。

何も教えてもらえず、ただ才能がないと言われるより、光子を

確かに扱う俺に、理詰めで才能がないと言われるのは。

しかし現実は変わらない。

平均的なアークスのフォトン感応力に比べて、ウルクのそれは非常に小さい規模。

テオドールともなれば、比べるのも烏滸がましい。

「が」

が、しかしだ。

「俺が言ったことやっても、絶対に無理。なんて言える程じゃない」

絶対に無理、と言えるような人間も、いないことはない。

だが、ウルクはそうじゃない。

やった結果駄目かもしれないが、やる前から駄目と決まったわけでもない。

「……ほんと？」

「ほんとかどうかは、やってみるしかねえよ。駄目でも責任は取らん」

ウルクに背中を向けて、去っていく俺。

全く。最近らしくないことばっかすんな。

なんで会って二度目の奴にこんな助言してんだか。

……あ。言い忘れてた。

「レッスン料はお前が稼いでからでいいよ」

「お金取るの!?!」

そらそらよ。

女に花を贈るって、理想を押し付けるみたいであんま喜ばれないかと思ってたが、案外そうでもないらしい

翌日。

俺はショップエリアに来ていた。

用は……まあディスクの買い漁りかな。

ルベルトのオーダーを受けてると、金にどんどん余裕が出てきてるからな。孤児院に幾らか送っててもお釣りが十分過ぎるくらい。良い金ヅルだ。メセタヅルとも言う。

……近接クラスは、ある程度買えそうかな。射撃クラスは今の所、PAを必要とする感じじゃないし。テクニックは欲しいが、属性は揃ったから応用は利くし。となると、優先順位的には……。

「あつ、いたいた！」

「お?」

悩んでいると、声を掛けられた。

「やつほー! アークス一の情報屋! 『パティエンティア』のパティちゃんですよー!」

「パティ、とティアか」

「わたし達、情報屋とは名ばかりで、正直パティちゃんがただ喋りたいだけだよね」

「そんなことないよ! 情報を提供する相手は選んでもん! 今はアナタと専属契約!」

「断ることの出来ない一方的な押し付けでごめんなさい。飽きるまでは付き合っただけ」

「謝ることねえよ」

双子の美少女が向こうから話しかけてくるとか、むしろこっちがお礼を言いたいくらいだ。

飽きるまでと言わず、どんどん付き合わせてほしい。

「つて、ん？ 専属契約？」

「そーそー！ なんかみんな、あたしの話全然聞いてくれなくてさー？ 情報提供しようにも受け取ろうとしてくれないの」

「なので、この前のあなたの武器を作ってた人への製作依頼の情報も回らず仕舞い。うちの姉がごめんなさい」

「あたしのせい!?!」

ありや。ダメだったか。

まあいいか。元々金策の一つ程度だったし、ルベルトっていう予定外のメセタヅルが出来たから、一つや二つ無くなったところで問題なし。

しかし……なんつーかあれだな。

マトイといい、ジエネといい、フィリアさんといい、セラファイさんといい、この二人といい、ついに俺にもモテ期が来たか？ 士官学校時代はあまりピンと来るのが周りにいなくて、アフィンと一緒に恋愛模様を眺めてる方が楽しいくらいに出会いが無かったからな。

ん？ エコーさん？ あれは既にゼノさんの女みたいなもんだからノーカン。

他人の女を奪う気はこれっぽっちもない。

寝取りはニヤウである。

同じ理由でウルクもシーナと呼ばれていた少女もノー。

マールーさんは、なんとというか……近接クラスも扱う俺には取っ付きづらいというか。

リサさんは………なんかもう色んな意味でアカン。

(出会いがあつたところでものに出来なきや、モテてるとは言い難いんだがな)

オラクルの結婚制度は、割とゆるふわだ。

何よりも結婚して子を産み、人口増加に貢献するのが第一。

流星に自分の意思を決定できると判断される年齢に達していないような子供はダメだが、遺伝子さえあれば同性でもオラクルの技術で子を成すことが出来るし、ハーレムでも逆ハーレムでも、ちゃんとやることやつて子を産んでいけるのなら問題はない。

制度的にはオーケーでも、実際にハーレムを構築できるような魅力を発揮出来るような奴がほとんどいないから、一般的とは言い難いけど。

俺？ 俺はまあ強欲だから、そういう願望がないわけではないよ。

ただまあ、ものにしたいたい女が複数いるからハーレムを作るのと、ハーレムを作りたいから女を囲うのとじゃ、意味合いが全然違うと思うのよね。

好きでもない女と結婚したところで、負担なだけだと思うし。

アークスシップっていう閉鎖空間で何故そんなことが出来るのかと言うと、言つてしまえば出来るのではなく、そうしなければならぬのだ。

なにせ元あつた人口の多くは、ダーカーの襲撃によつて削減されてしまったのだから。

むしろ出生率よりもダーカーの襲撃による減少率の方が高いから、試験管ベイビーなんでもんが出回る程に。

40年前の大戦争と10年前のダーカー大規模襲撃で大幅に人口が減少して、その後は襲撃が比較的落ち着いていたから、なんとか出生率に回復の兆しが見えていた。が、ナベリウスの大発生以来、各惑星でダーカーの発生率が上昇してるようだし、これからはオラクル側の婚活の後押しがより一層強くなるかもしれん。今のところは襲撃もないようだが、それも今の内だろう。

「今回はどんな話が聞きたいの？ アレの話？ コレの話？」

「どれの話？」

「いーよいーよ、何でも聞いてよ！ おねーさんが何でも答えちゃうからー！」

大きな胸をどんと張り、パティは言う。

それを尻目にしながら、ティアは俺の傍に近寄り、小声で話してくる。

「ごめんなさい。どうも、パティちゃんがあなたを気に入ってしまったみたいなの」

「え、そうなん？」

「たぶん、前の機会にきちんと話を聞いてくれたから、かな？」

そいつは光栄だが、女の子、それもパティのような美少女が話しかけてきて、それを聞かないとか、有り得るのか？

いるとしたら、同じ男の風上にも置けん。

風下に流されて、そのまま谷底にでも落ちればいい。

「心配しないで。情報は私が調べたから確かだし、見返りも要求しないから」

「そりゃ有難いが……情報屋としていいのか？」

「さつきも言ったように、パティちゃんが喋りたいだけだから。パティちゃんのハイテンションは……まあ、諦めてほしいかな」

「え、可愛くない？」

「……そう言ってくれるあなたは、貴重だと思う」

今までの苦労を吐き出すように、溜息をつくティア。

双子の美少女姉妹なんだから胸を張ればいいのに。

「むっ、ティアと二人でナイショ話？ あたしも混ぜてよー！」

パーティが割り込むようにずずいっと、顔を俺とティアの間に差し込んでくる。

「混ぜるも何も、新しい情報の話をすればいいじゃない」

「うーん、そうだなあ……。あ、こういうのがあるよ。危険のアークスの話ー」

「危険なアークス？」

「アークスって一口に言うけど、みんながみんな、正義の味方ってわけでもないんだよねー」

「そらまあ、そうだわな」

かくいう俺も、正義の味方とかじゃ全然ないし。

正義？ 何それ？ 食べるの？

「戦い大好き！ 敵味方関係ない！ ってテンションのチームや、いちいち難癖つけてくるチームとか！ むー！ なんだか思い出すだけで腹が立ってきたなあ！」

「パーティちゃんの私怨はさておき……。アークスの大多数は規律を守り、正しい行いをする人達よ。ただ、組織の肥大化に伴って、一部が徐々に腐敗してきているの。性格よりも、力が求められる世界だし、仕方がなくもあるんだけどね」

「一部、ねえ……」

まあ、一部と言えば一部か。

「しつこいやつはほんとしつこいから、目をつけられたりすると面倒だよー！ 気を付けてねー！」

「……………」

脳裏に浮かぶのは、ゲツテムハルト。

あの仮面野郎を相手にして、楽しめそうだとか抜かしてた狂人。そして、「お前とやるのは、まだ早そうだな」という言葉。

(目をつけられるってんなら、もう手遅れだよなあ……)

仮面野郎に夢中で俺の事は忘れてる事を願っておこう。

所変わって、ナベリウス。

オーダーを受けて、俺とジエネは緑豊かなこの惑星を歩いていた。

「……………」

隣を歩くジエネの顔は、暗い。

さっきの話を聞いてからというものの、ずっとこの調子だ。

別に自分がどうこうする話でもないのに、な。

「やっぱ、気になるか？ さっきの話」

「……………はい。まさかマトイちゃんが……………その……………記憶喪失、だつたなんて」

「記憶喪失、か」

メデイカルセンターの検査の結果、マトイは「記憶障害」だと診断された。

世の常識や言葉など、一般的なものにはなんら問題はない。ただ、自分と自分の周り。自己的なことは全く覚えていなかった。

霞が掛かったようなそれを思い出そうとすると、頭に痛みが走る。

実際にその様子を本人と話して見て見たが、拒絶反応でも起こしているようだった。

覚えてたのは、自分と、俺の名前だけ。

(覚えてた……てのが、おかしいんだよなあ)

ナベリウスで救助する以前に、俺とマトイに面識はない。

「救助の時に俺の名前を聞いていたのだとしても、それを「覚えていた」と表現するのは違和感がある。

俺がもつと幼い頃に出会っていたから、俺が覚えていないだけと考えるのが一般的だろうが、それはないだろう。

俺に関しちや、それはない。

そもそもマトイは俺と同年代。あつたとしたところで、マトイだけが覚えてるのは疑問点だ。

(となると、面識はなくとも、資料を読んだ事があるとか、そんな所か?)

だが――

『あなたの名前だけ覚えてたから……縫ってしまって、迷惑だよなあ……』

そんなことねえよって言っても、気を遣わせたと思われてしまった。

実際にそんなことないんだけどな。

マトイみたいな美少女で、しかも良い子に懐かれてて、悪い気など起こりようもない。

それは、まあ今後の課題として。

(資料で読んでただけの存在を覚えてる。縫りつく。そう考えるのも

おかしいよなあ……)

どう考えても矛盾が生まれる。

前提条件からして間違ってるような……ピースが欠けたままパズルを組もうとしてるかのような。

(……ま、これ以上考えても仕方ないか)

情報が足りないのに想像だけ膨らませても、仮説しか生まれない。

そうすることで備えられることもあるが、今回の場合はそうじゃない。なにせ、事は本人の問題なのだ。何かしてやろうと考えても、その手伝いしかしてやれない。

俺はそう割り切ってしまうが……ジエネはそうじゃないのだから。

「記憶がない、って……どんな気持ちなんでしょう」

隣を歩くジエネが言う。

「記憶を失くす程のことが、マトイちゃんにあつたなんて……」

「可哀想、か？」

「………はい。マトイちゃん、あんなに良い子なのに」

トラウマのようなものかもしれない、とフィリアさんは語っていた。

記憶を閉ざしてしまう程の辛い出来事があつたから、思い出せないし、思い出そうとすれば頭痛がする。

そうじゃない可能性もあるが、原因を知らない以上、それ以上はどうとも言えない。

もしかすると。

そう考えただけで、ジエネは自分が痛いかのような顔をしているの

だ。

「マトイちゃんは必ず思い出すって言ってましたけど……、もしかしたら、思い出さない方がいいのかも」

「……そんなん」

タタタン！ つと。

銃声がした。

「ひゃわあ!!？」

「おっと」

ジエネは大袈裟なくらいに驚いていたが、俺は前から捕捉していたので、大したリアクションは取らなかった。

あ、しまった。探知は秘密なんだから、もっと驚いた方が良かったか？

音の発生源の方を見る。

案の定、そこにはリサさんがいた。

「ふふっ、びっくりしましたかあ？ ごめんなさい、今のは冗談ですよお」

「び、びび、びっくりしました……ア、アークスの人ですか？」

「どうも、こんちわ」

「ああ、そちらはともかく、あなたは驚いてませんねえ。やっぱり気付かれちゃいましたか」

前回と同じく、赤い瞳を爛々と輝かせているリサさん。

本当に当てる気はなかったらしく銃口は明後日の方を向いているが、しかし死角から銃声が聞こえたらそら驚くだろう。

「えつとお……どちら様でしょうか……？」

ちよつと引き攣り気味のジエネが問う。

「この人はリサさん。レンジャー・ガンナーのクラス担当官で、見ての通りクレイジーなお人だ」

「クレイジーとは失礼ですねえ。確かにリサは狂ってますが」

「自分で自分を狂ってるって言う人が言っても説得力ないですし、この前迷いなく俺に銃弾撃ってきた人が言いますか？」

「あれはただのうっかりですよ。ひとを撃つたら怒られてしまいました。でも、撃つたことないのはひとだけなんですよねえ。どんな風になるんでしょうねえ」

ジエネが一步下がった。

俺は二歩下がった。

「もしも、ダーカーがひとの肉体を乗っ取って襲い掛かってきたりしたら、それは撃つてもよさそうですねえ」

「え……う？」

「んー……………」

いや、まあ。

確かに撃つてはいいだろうけど。

リサさんは小首を傾げながら続ける。

「原生生物だってなんだって、乗っ取られたら倒すしかないんですから、それがひとになっても同じですよねえ。そうなったら敵というわけですし、撃つても問題なさそうですねえ。やってみたいですねえ、ふふふっ」

「そ、そんな……でも」

「もしもそういうのを見かけたら、ぜひぜひ教えてくださいねえ。では、ではではでは」

ジエネの小さな反論も耳に入らず、リサさんはひらひらと手を振って去って行った。

その背中が見えなくなってから、ジエネは言う。
小さく零すように。

「……ダーカーに浸食されたら、それが人でも……倒さなきゃいけないんでしょうか？」

「まあ、そうだろうな」

「っ……！」

「つつても、アークスが浸食されることなんざそうそうねえだろ。溜まる因子は浄化するし、最悪コールドスリープで集中浄化する技術もあるんだからな」

「……でも、アークスじゃない人は」

「アークスシップに現れたらすぐにアークスが駆けつけて、アークスが対応する。それじゃなきゃ、浸食じゃなくてそのまま殺されるだけだろ」

あまり愉快な話じゃないだろう。

俺みたいに他人はどうでもいい奴ではなく、ジエネは優しい奴だから。

「それが嫌なら、お前が守れば？」

「……はい！」

決意を新たにしたような、ジエネの返答。

まあ、笑顔ってわけじゃないが……沈んだ顔よりはマシか。

……まさかこれを狙って、あんな性質の悪い冗談かましたわけじゃないだろうな。

(本気だとしたら、無闇矢鱈に関わらん方が良いと思うけどね……)

人型のダーカー。
ダークフアルスなんて、ロクでもないもんに関わるのは。

用事を済ませて、シップに帰還。

「えー、マトイー。マトイはおらんかねー」

「マトイちゃん。いませんかー?」

迷子を探すようにマトイを呼びながら、ゲートエリアをジエネと共に練り歩く。

まあある意味迷子と言えるかな。

記憶の。

なんてことを考えてると、メデイカルセンターの方からマトイが駆けってくる。

やっぱりそっちな。呼んだりせずに直行しときやよかったかな。

「おかえりなさい。どうしたの? ハクメ、イ……」

「マトイちゃん。ただいまです」

ジエネの姿を見て、固まってしまうマトイ。

周り見なさ過ぎだろ。

「……こんにちは」

「あう……その、ですね」

淡々と告げられた挨拶に戸惑うジエネ。
ふむり。

俺はフィリアさんに預けるつもりだったが、ここで直接渡してもいいかな。

「ジエネ。あれ、あれ」

「あ、はい。それじゃあ、ハクメイさんから」

「え?」

「いや、なんで俺から。渡すのはお前への警戒心解こうってのが主目的だろうがよ」

「こういう時、男の人から渡した方が、女の子は嬉しいものなんです。わたしはおまけでもいいですから」

「……何の話をしてるの?」

「あー、その、な……」

訝し気に首を傾げるマトイ。

渡す、かあ。でもなー、なんかなー。

そもそもこういうの「女はこれ渡しときや喜ぶもんだろ?」みたい
に適当な奴だと思われそうだしなあ。

とはいえ、今更それ言ったら無駄足を踏んだことになるしな。

ジエネの「絶対大丈夫ですっ」って言葉を信じてみることにするか。

「マトイ」

「?」

「はい、これ」

アイテムパックから、花束を取り出した。

「え………?」

急に現れた花束に驚いたのか、マトイはさつきとは違う形で固ま

る。

いや。常識的なことは知ってるって言うたから、アイテムパックは知ってるか。とすると、急に花束渡されて戸惑ってるって感じかな。

抱えた花束を渡すと、マトイは表情を固めて花束を凝視しながら、両手を差し出して受け取る。

「……………」

「あー、あれだ。昨日言ってたお土産。ナベリウスでお前が喜びそうなもんつてのが、これくらいしか浮かばなくてな」

まあ本当は、フィリアさんの依頼で摘んできたのだが。

記憶喪失の人間は、失くした記憶の中で出会った人、物を見て、触れることで、記憶を取り戻すこともある。それこそ本当に些細なことでも。

なので、倒れていたナベリウスに生えている花を見て、何か思い出すのではないかと思ったフィリアさんが、俺に依頼してきたというわけだ。

そこでジエネも同行させて、ジエネからも花を渡すことでマトイの警戒心を和らげることができているのではないかと思い、誘った。

で、ジエネが「贈るなら、花束にしたらいいと思います！」と言うので、ジエネの選別を乗り越えたこの黄色い花の束を持ってきたというわけだ。

花束用の袋も買って、ジエネの指導の下、束ねてきたわけだが……さて、反応は如何に。

「…………ハクメイ」

「ん？」

「ありがとう…………。…………すごく、すごく嬉しい」

「…………お、おう」

やつべ……。

今のはにかんだ笑顔、可愛すぎか。

赤らめた頬も、花束をきゅつと抱き締める仕草も、俺の心を掴んで離さない。

萌えを超えて蕩けそう。

そんなマトイの頭に、花の冠が添えられる。

「！……これ」

「わたしからは、お花の冠です！ マトイちゃんに似合うと思つて」

俺の花束とは違う、色とりどりの花の冠。

ジエネは花の扱いに関して俺より上だ。

俺も作ってみようかと思つたが、どう頑張つてもジエネのより不格好だったし。

添えられた花の冠を、マトイは見上げる。

「……可愛い」

「えへへ。それが似合うマトイちゃんも、可愛いですよ？」

嘘偽りなく、満面の笑みでジエネは言う。

実際にジエネの作った花の冠は、マトイに似合っていた。

どういう色で、どういう配分で作れば、マトイに一番似合うか。真剣に悩んでたからな。その甲斐あったというものだろう。

「喜んでもらえたら、嬉しいなって。どう、でしょうか？」

「……あの」

「はー」

「……ありがとう」

「……！ はい！ どういたしましてー！」

おお、今度は敬語じゃなかった。

俺の時とはちよつと見劣りするが、ちゃんと喜んでるのが分かるくらいには感情が出てた。

「どうですか、ハクメイさん！ 言った通り、お花は喜んでもらえました！」

「んー、でも女の子なら誰しもってわけじゃないだろ？」

「何を言っているんですか！ ハクメイさんみたいにカッコいい男の人から花束を贈られるのは、全乙女の夢です！」

「やだ！ 女の子から外見褒められるの初めて！ すごい嬉しい！」

「え!? そうなんですか!?!」

「素で驚かれると余計照れる！」

「ハクメイは……カッコいいよ？」

「褒め殺される!!」

新技術のお披露目と、ちっちゃいメンバー

「よつす。マトイ」

「あ、ハクメイ。またお話に来てくれたのかな？ それはとっても嬉しいよ」

この前花を贈ってからというもの、マトイは少しだけ明るくなった。

まだ何か遠慮がちなところは抜けていないが、話し方もスムーズになってきたと言えるだろう。

記憶の方はさっぱりだったようだが……摘んできた甲斐はあったというものだ。

悔り難し、花パワー。

全面的に信じるわけじゃないが、今後女に贈る物の優先度を上げておこう。

「わたし、他の人と話すのがあんまり得意じゃないし……というより、ちよつと怖くて……」

「怖い？」

「フィリアさんは、何かトラウマでもあるのかも、って言ってたけど、詳しくはわからない」

ふむ。怖い、か。

アークスの誰かと何かがあつて、記憶を閉ざしてしまつたのか。そうすると、頭を打つたとかの物理的なショックではなく、心因的なショックなのかもしれないな。

物理的だとアークスがマトイを攻撃して、その衝撃で記憶喪失とかになつてしまう。

それは困る。

犯人を見つけ出さなきゃ気が済まなくなる。

こんなに可愛いマトイを傷付けた奴に地獄を見せてやらなきゃ、他の事に集中できない。

とはいえ、見つけた時は外傷なんてなかったしな……。

「……でも、なんでだろう。あなたとなら、大丈夫。普通に話せる。うん」

内側で黒いことを考える俺に、マトイは柔らかく微笑む。

「だから、別にいいんだ。わたし、何も覚えてないけど、安心して話せる相手がいるから、いい」

「……そーかい。あ、そうだ。ジエネとはどうだ？ 仲良くやれそう？」

「うん。やっぱりちよつと怖いけど、他の人よりちゃんと話せそう。ジエネちゃん、良い子だし」

「ちゃん？」

「あ、その……マトイちゃんって呼ばれてるから、わたしもそうした方がいいかなって。だめ、かな？」

「……それは本人に聞いた方が良いな」

多分喜び過ぎて抱き付かれるのだろう。

目に浮かぶ。

「セラフィさん、今回の任務は三人チームだと聞きました。あともう一人は……？」

シヨップエリアに呼び出され、俺とジエネ、セラファイさんが三人集まっていた。

このエリアに備え付けられているテーブルを挟んで、俺とジエネが隣り合い、セラファイさんが向かい合う形で椅子に座っている。

「もちろんご紹介させて頂きませんが、その前に。お二人にチップについて説明しようかと思えます」

「チップ、ですか？」

「例の新技术、ってやつですかい？」

「はい。まず、これがチップです」

セラファイさんはテーブルの上に、正方形のカードのような物を二つ置く。

左のそれ——チップには、モノメイトが描かれ、右のチップにはナヴ・ラツピーが描かれていた。

ふむ。

これだけ見りゃ、ただのカードゲームのカードだけど。

「このチップの中にはそれぞれ、モノメイトとナヴ・ラツピーが入っています」

「入っています？」

「はい。あ、もちろんエネミーが出てきたりはしませんよ？ モノメイトは出てきませんが」

そう言っつて、セラファイさんがモノメイトが描かれたチップを人差し指でタップすると、そのチップの中からモノメイトが出てきた。

明らかに中にそれが入るような大きさじゃないのに。

モノメイトが出てくると合わせて、入っていたチップからモノメイトの絵が消える。

「わ！ チップからモノメイトが!？」

「……小さいアイテムパック、みたいなもんですかね？」

「ええ。本来のアイテムパックの積載量を減らす為に、こうしてチップの中に入れていくことで小さく納め、アークスの皆様がより多くの荷物を運べるように、というのがチップ開発の始まりです」

成程。確かにモノメイトと言えどこれだけの小ささに納まれば、アイテムパックの中身は節約できるな。

アイテムパックの積載量は、中に入っている物の大きさで決まる。武器や回復薬、素材その他諸々を考えると、精々50個かそこらでとところだ。大金を払えば特別にその容量を拡張することも出来るが、そうするアークスは極めて少ない。しかし、実際問題手持ちの回復薬が無くなったことが原因で息絶えたアークスもいる。ならば、袋の容量を増やすより、入れる物を小さくした方がいいのでは？ と考えたわけだ。

容量無限の倉庫を持つて俺には無用の長物だが。

まあ不自然に多くの物を取り出せてしまうと目をつけられるから、その辺はいいかな。

「しかしチップの研究を進めていく内に、このチップにエネミーを入れることが可能になりました」

「で、捕獲したナヴ・ラッピーを入れてみたのがこれと」

「お話が早いですね。その通りです。これはモノメイトのように、出てくることはありません」

セラファイさんがナヴ・ラッピーが描かれたチップをタップするが、モノメイトのように出てくることはない。

「中の物が取り出せなくなっているチップを、サポートチップ。出し入れ自由のチップをアクティブチップと分けています」

「なるなる。それで、エネミーを入れたサポートチップの恩恵は？」

隣のジエネがちんぷんかんぷんと言う顔をしているが、そんなに難しい話か？

セラファイさんがデバイスからスクリーンを呼び出し、少しばかり操作すると、俺とジエネにメールが届く。

「お二人に今お送りしたソフトを登録していただければ、装備パレットが使えるようになります。まずはご登録ください」

「装備、パレット？」

「実際に見て頂いた方が早いかと」

そう言われ、ジエネはメールを開き、登録を進める。

……………解析してみたが、問題なさそうだな。

簡単に登録を済ませる。

すると、スクリーンに空欄が五つ浮かんだ画面が映った。

「これは？」

「それが装備パレットです。これに、先程のサポートチップを入れま
す」

セラファイさんが俺のスクリーンの空欄の一つに、サポートチップを差し込む。すると、差し込まれた先から吸い込まれていくようにチップが消えていく。

完全にその姿を消すと、空欄が浮かんでいた場所に、先程のチップと同じくナヴ・ラツピーが描かれていた。

「これで、ハクメイさんの装備パレットに、ナヴ・ラツピーのサポートチップが登録出来ました」

「登録して、どうなるんです？」

「なんと、登録したサポートチップの中に入っているエネミーから、その力を一部引き出すことが出来るのです！」

「ほう」

「ええ!？」

驚くジエネ。

確かに、ほんの少しだが身体が強くなった感じがする。

体内フォトンの量も増えているし……フォトン感応力も僅かだが大きくなっているな。

こいつはいい。

思わず笑みが零れてしまったのを手で隠し、質問を重ねる。

「一部ってことは、全部じゃないんですね」

「ええ。エネミーのエネルギーをアークスのエネルギーに変える、そのエネルギー変換を行う上での変換効率。あとは単純に技術不足です」

「でも、中に入っているエネミーが強ければ、その分変わるエネルギーも大きくなって、アークス自身も強くなれる」

「その代わり、強いエネミーを入れておけるだけの強力なチップを生産する必要があります。強いチップ程生産コストも増えるので、強さと数は反比例すると思っただけでください。そのエネミーをチップ化するのも一苦労ですから……」

単純に大型エネミーを捕獲・チップ化させて、登録で強化ー！　つてわけにもいかないってことか。

となると、まずは量産されてるチップで弱い個体をチップ化させていって、このパレットを埋めていく方が先決か。

「えつと……つまり、どういうことでしょうか？」

「これにチップを登録させるときや強くなれるってこと」

「す、すこいですー！」

めつちや簡潔に述べた俺の結論を聞いて、ジエネは目を輝かせた。

「そう思っ頂いて結構です。それでは、これをどうぞ」

そう言っセラファイさんは、懐から新しくチップを取り出す。
今度は赤髪の子供が描かれていた。

……子供？

「クレイモアのウエポノイドチップです」

「ウエポノイド？」

ジエネが首を傾げると――

「ったあー……！」

「ひゃあ!!」

「おおぅ!？」

触れてもいないチップから、何かか声を上げながら出てきた。

「よっしやあー！ ようやくオレの出番だぜー……っ！」

「……なんだこいつ」

チップに描かれていた子供がそのまま出てきた。

いや……子供にしても小さすぎる。

サイズ的にはサポートパートナーより頭一つ分小さいくらい。そのサイズに子供の身体を縮めたという感じか。

赤い短髪に、橙色のくりつとした瞳。左頬には黒い絆創膏を張っている。そして、両耳を覆い隠すようにギアを着けていた。

服装は白と灰色のTシャツに、袖が短い黄色いジャケットを着て、

ズボンは黒い短パンだ。

全体的にやんちゃな男の子ってコーデだ。

しかし一番気になるのは背中に生えているような形で剣、クレイモアの翼があることだ。

それが羽根としての役割を果たしているとは思えないが、とにかくそいつの身体は浮いていた。

一見すれば妖精のような何かである。

「アークス二名、ウエポノイド一名編成の、合計三名チームで動いてもらいます」

「その、ウエポノイドって？」

「ウエポノイドは武器のチップ化研究に生まれました。クレイモアをチップ化する過程で生まれたのが、こちらです」

「つまり、武器が擬人化したと」

「そういうことです。人格を持ち、アークスに協力的であることから、その有用性が認められています。今回のチーム編成にウエポノイドが選ばれたのも、そのためなんですよ」

そりやまた、すごいことしてくれるね。

ふふん、と何故かドヤ顔で浮いているウエポノイドは、とてもサポートパートナーのように心持たない機械生命体には見えない。

ここまでいくと、正に命を作ったと言える程だ。

「オレ、モアっていうんだ！ ふだんはこのチップの中にいるんだ！よろしくなっ！」

「わたしの名前は、ジエネと言います。よろしくお願いします！」

「試験チームのリーダー、ハクメイだ」

「なーんだ、リーダーいるのかよ。オレもリーダーやりたかったなあ……」

「そんなナリでよく言えたもんだなおい」

「ちっちゃくないやい！」

明らかにちっちゃい身体で憤慨するモア。

「ま、とりあえずよろしく。アークス新技術の結晶なんだ。期待しとくぜ」

「へへん！ 期待しててくれよな！」

チヨロイなあこいつ。

とりあえずモアの小さい手を包む形で握手を交わす。

(……………?)

「このチーム編成で、行動を共にして頂きたいと思います」

「おう！ おれが入ったからにはもう安心だぜ！」

「頑張りましょう！」

おー！ と右手を天に突き出す二人。

仲良くなりそうだ。

波長が似てるのだろう。

「あ！ そうだ！ 新しい仲間が出来た事、マトイちゃんにも報告しなきゃです！」

「マトイ？ ってだれ？」

「あー、まあこれから会いに行くみたいだから」

「マトイちゃん。こちら、新しくわたし達の試験チームに入ったモアです」

「よろしくな！」

「よ、よろしく……」

セラファイさんと別れて、ゲートエリア。

メデイカルセンター前にて、再びマトイと会っていた。

「モア。こっちは、わたしのお友達のマトイちゃんです。えっと……
いい、ですよね？」

「だそうだが？」

「えっと、うん。わたしとジエネちゃんは、お友達」

「~~~~~っ！」

「わあ!？」

予想通り、喜びで感極まったジエネに抱き付かれるマトイ。

いやー。美少女同士が仲良くしてるのは、見ててほっこりするね。

類ずりまで始めたジエネに困ってこちらに助けを求めるマトイの
視線を受け流し、モアに話し掛ける。

「保護対象でメデイカルセンター通いのマトイだが、まあ仲良くして
やってくれ。最初俺にしか心開かなかったからな」

「分かったってば！」

「いじわるー！」

さて、紹介も済んだし。モアの実力を測りにまたナベリウスに行き
ますかね。

モアの実力と対照的な組み合わせ

サポートチップの中身が出し入れ出来ないようになってるのは、エネミーを持ち運んで出してしまいう危険を防ぐ為らしい。

それが故意であれそうでなかれ、無駄に危険性を広げるのは避けたい。なので、オラクル側でサポートチップにエネミーを入れた以降、アークス達の出し入れを制限することで、そのチップの使い道を限らせるといわけだ。

だが、ウエポノイドチップはウエポノイドの出し入れを制限していない。

どころかウエポノイドの意思でチップの中を出入り自由になっている程だ。

これは武器が擬人化した姿であるウエポノイド自身に人格が備わり、アークスに協力的であるからこそ。エネミーは出してしまえばチップ化させていたアークスと敵対するだろうが、ウエポノイドは自分の意思でアークスに協力しているのだ。故にチップの制限も必要ないのである。

ちなみにウエポノイドチップは、サポートチップと同じように、装備パレットに登録することでウエポノイドの力を一部引き出すことが出来るそうだ。エネルギーの変換効率やエネミーのものよりいいらしく、ウエポノイドがエネミーより弱くても、そのエネミーのチップよりウエポノイドのチップの方がアークスを強化することもあるという。

加えて、ウエポノイドもアークスと同じように戦う事が出来る。

体内フォトンの量もフォトン感応力も総じてアークスの平均より劣るそうだが、あくまで平均。中には下手なアークスより強いウエポノイドもいるとのこと。

擬人化した武器がどうやって戦うのかと思ったが、モアはその手に

クレイモアを呼び出した。どうやらウエポノイドは、基になった武器を手にして戦うらしい。流石に元のクレイモアそのままだとモアの身体に合わなすぎるので、モアが持てるサイズのクレイモアだった。が。

で、今な。

早速ナベリウスに降りて、モアの戦闘能力を確認する為にエネミーと戦闘を行ったのだが。

「……ふ、ふん！ たいした、たいしたことないなっ！」

「……………」

「……モア？ あれ？ モア？」

戦闘が終わった時、モアはチップの中に入って俺の装備パレットに収まっていた。

……そりやたかだかガルフが三体程度だから、大したことなかったんだが。

「ジエネ。ここだよ、ここ」

「ど、どうしてチップの中に隠れてるんですか？」

「ふはあっ!!! か、かくれてなんかないやいっ！」

チップの中から出てきて、モアは反論する。

「ちよ、ちよっと一休みしてたんだ！ 子どもだからな！ ベ、べつに怖かったとかそういうわけじゃないんだ、から……………」

「当然です！ そんなこと思ってますよ。共に戦う仲間に、臆病者なんかいるはずないじゃないですか！」

「……………」

「……うう！ そ、そんな、キラキラした目で見ないでくれれば！」

「そうだな！ 俺達みんな勇気ある戦士だもんな！」

「リーダーはわかってて言ってるだろ!!」

まあ、こんな調子なわけだ。

降りてすぐの内は勇んで前を歩いていたモアだが、ガルフが茂みから襲い掛かってきた時はすかさずチップの中に入りやがった。

ガルフ三体はジェネが一体、俺が二体を間髪入れずに狩ったが、モアの戦績は0である。

一応微力ながら俺の強化は為されたので足を引つ張つたわけじゃないが、これじゃあ何の為にナベリウスに降りてきたのか。

「マトイが言つてたとーりだな。いじわるだ、リーダーは」

「そらすまんね」

ちなみにモアの俺に対する呼び方はリーダーで決まった。

最初呼び捨てだったが、なんかムカついたので変えさせ、かといつてかしくまってさん付けで呼ばれても気持ち悪かったので、敬いつつさん付けにならない呼び方である。

ジェネも俺の呼び方を考えてたようだが、名前を呼ぶのは変えてほしくないところだ。

「さて、気を取り直して先に進みますかね」

「はい。セラファイさん、ここから凍土エリアまではどれくらいでしょうか？」

『まだまだですね。方向は間違つていませんが、相当な奥地になります』

今回の探索は、モアの諸々の確認の他に、ナベリウスの森林エリアから凍土エリアまでに行動範囲を広げる為のものだ。

ナベリウスの惑星全体の気候は滅茶苦茶で、暖かな森林エリアと凍てつく凍土エリアとが山を隔てて存在している。凍土エリアはまだ俺達が行ったことはないが、一面雪景色で、吹雪くこともあると聞く。森林エリアのど真ん中からそこを目指し、辿り着いて幾らか探索したら帰還する。森林に慣れつつ、凍土を目指すというわけだ。

わけなんだが……。

「……………はあ」

「なんかしつつけくさいな、リーダー。なんかあったのか？」

「湿気の臭い漂ってる？ 俺から」

「そ、そんなことないですよ！ モア！ 根も葉もないこと言っちゃだめです！」

「うえ？ オレ、なんかまちがったか？」

「悪気0なら、言葉選びを間違ったよ」

まあ辛気臭いのだったら、俺も認める。

認めざるを得ない。

これから先を歩くのを思うと、気が重くなるからだ。

何せ、このまま行くとゲツテムハルトと遭遇するからだ。

お付きのシーナとやらとも一緒のようだから幾らか緩和されてるようなもんだが、一本道だから逃れることも出来ないしなあ。

やだなあ。

嫌いなんだよなあ、アイツ。

「ん？」

また新たな反応。

このスピードと大きさ……あいつか。

「？ リーダー、立ち止まってどうしたんだ？」

「モア、そこで止まっつけ。踏まれるぞ」

「踏まれる？」

俺の方を見ながら先に進んでいたモアが立ち止まる、というか飛び止まると同時に、その目の前に着地した。

ヒューイが。

前回と同じように遠方から一ツ跳びでやってきた。

「うわあああああ!!」

急に空から目の前に着地したヒューイに悲鳴を上げ、モアはこっちに慌てふためきながら飛んでくる。

そのまま俺のデバイスのチップの中に入った。

……こいつ、この先ちゃんと戦えるのかな。

武器の強化に使うグライダーを与えればウエポノイドは強くなるそうだが、戦闘性能以前に肝っ玉が小さすぎると思うの。

これから経験を積み重ねて成長するのを期待するしかないか。

「ふははははははははは！　そこな行き交うアークスの君達！」

「は、はいっ」

「オレの名はヒューイ！　六芒均衡の六をやっている！」

……この前も聞いたけど。

「……ん、んん？　何故だ、君達とは会ったことあるようないな、そんな違和感を覚える。会ったっけ？」

「つい一昨日」

「まあ、細かいことは気にしない！　それよりも人助けだ人助け！　何か困っていることはないか！」

流すなや。

会った奴全員の顔を覚えろとか言わんけどさ。

困ったことかー。

この先にいるゲツテムハルトを追っ払ってきてくれって言ったら、聞いてくれんのかね。

「六芒均衡になっても、オレには人助けぐらいしかできないし、他にや

ることもないしな！」

「そうなんですか？」

「六芒均衡と言ってもそんなもんだ！ 結局やれることは人一人のもの！ 両手に余る事は何もできない！」

「そらそうだろうが、そんなこと声高々に言われても……」

この男の平常運転とはいえ、胸を張り過ぎだろう。

まー、六芒均衡になったから部下を持たなければいけないってわけじゃないしな。そもそも六芒均衡自体が、一のレギアスをリーダーとした一つのチーム。六芒均衡じゃない奴に命令は出来るけど、指揮下に置く置かないは自由だ。アークス一斉参加の大規模任務でもありや話は別だが、んなもん十年前の大襲撃からめつきりだしな。

「力の強さで六芒均衡に選ばれるのは、生存率が高いかどうかを見てるわけだ！ 士気向上の旗印というわけだ！ うん！」

「成程……そうなんですね」

「お前ちゃんと士官学校出たの？」

「むっ、困っているフォトンを感じた！」

ヒューイは彼方の方角を見る。

困っているフォトンって何？

「それでは、オレは行く！ また会おう！」

そうしてまた一足飛びで、ヒューイは去って言った。

「まさしく嵐のような奴だな……モア、もう行ったぞ」

「ぶはあっ！ す、すっげーうるさい奴だったってば……」

「そ、そうかもしれないですけど……でもいい人だと思いますよ？」

「空回ってる節はあるけどなあ」

「なあなあ、エネミー以外にも、ダーカーってやつもいるんだろ？　どんな奴なんだ？」

もうすぐあんにやろうと遭遇するという所で、モアがそう聞いてきた。

「モアは、ダーカーを知らないんですか？」

「ウエポノイドって事前に予習とかしないわけ？」

「う、うっさいな！　教えてくれなかったんだから、しよーがないだろ！」

「では、わたしが教えてあげますね！」

怒るモアを置いて、ジエネの講座が始まる。

六芒均衡の体制についてもさつき勉強してたようなジエネだが、果たしてダーカーに対してはどれだけ知識があるやら。

「エネミーには、さつき戦った原生種だけでなく、ダーカーと呼ばれるものがあります。ダーカーというのは、宇宙のいろんなところにどこからともなく現れるのです！」

「ふんふん」

「ダーカーは生き物にも機械にも浸食して、悪さをします。だから、アークスだけじゃなくって、全ての生物にとって良くない存在なんです」

「ほー」

昨日パティエンティアにも「とーっても大事な情報」と言われて話

をしたが、ジエネもちゃんと勉強してるようだ。

ダーカーに浸食され悪さされた、凶暴化させられた生物は通称「浸食種」「ブーストエネミー」と呼ばれる。ダーカーの卵である浸食核が体のどこかに寄生しているのが特徴だ。生物が自らの身体を傷付けない為に、普段から無意識に掛けている身体的リミッターを外したのか、その力は強い。と聞いているが、その辺りのメカニズムは詳しく解明されていない。

そもそも、内側に溜まった筈のダーカー因子の塊である浸食核が、何故外側に出てくるのか。

その辺も含めて謎が多い。

「そしてーっ！」

キリっとした表情でジエネは語る。

「ダーカーを倒すことが出来るのは、フォトンを扱うことが出来る、アークスだけなんです！ だから、この星や生き物を守るためにも、わたし達アークスはダーカーと戦うんです！」

「アークスってかっこいいなー！ すげー！」

「……あー」

キヤツキヤとはしやぐ二人の隣で、俺は遠い目をしていた。

ついに来てしまったか。

やだなー。

「んん……？ あア、お前か」

道の先の曲がり角から、シーナを伴ってゲツテムハルトが現れた。

前と会った時と変わらず、デカイ凶体で気持ち悪い感じだ。

いや、前と違って機嫌が良くないか？ この前はあの仮面を見つけて楽しそうだったからな。

俺達の姿を見て、訝しげな眼をする。

「あ、初めまして！ アークスの方ですね？ ジェネって言います」

「おれ、モアっていうんだ！ よろしくな！」

「……………」

「……ハッ！」

挨拶する二人を一瞥して鼻で笑った後、ゲツテムハルトは俺を見た。

「こんな雑魚共を連れてるたア、笑わせるな。テメエもゼノと同じ甘ちゃんか？」

「なっ！」

「な、なんだとー！」

……ゼノさんと知り合いなのか。

俺とは違う方向で合わなそうな組み合わせだが、聞く限りでも仲悪そうだな。

憤慨してゲツテムハルトに食って掛かろうとしていたモアの頭を摘まむ。

「な、なんだよリーダー！」

「やーめとけて。殴り掛かったら雑魚だって認めるようなもんだぞ？」

「うぐぐぐ……」

「えっと、ガツテムハルトオだっけ？」

「最初と最後を間違えてんじやねエ。ゲツテムハルトだ」

「あつそ。ゲツテムでいいや。で、何の用？ ゲツテム」

「……クソムカツク野郎だが、まだお前に用はねエよ。喰ってもつまらんしな」

まだと言わず永遠に用無しであってほしい。

「そんな雑魚共にかまけて、俺を焦らしてんじゃねエよ」

ゲツテムハル……いいや。ゲツテムはモアとジエネの二人を指差す。

「弱いヤツに価値はねエ。居る意味もねエ。唾棄すべき存在だ。それを無闇に守ろうとするヤツもな」

「……………」

「よく覚えておけよ。この時勢、この状況において、頼りになるのは己の力のみだぜ？ 甘ちゃんなごっこ遊びにかぶれてるんじゃねエぞ？」

「……………」

「ああ？」

「どうして、そんなこと言うんですか？」

ジエネがゲツテムに問い掛ける。

一歩前に出て。

この男の狂いを感じたのか、足を震わせながらも。

「アークスは、みんなを……宇宙の平和を守る為に戦う戦士です。なのに、誰かを守ることを、そんな風に言うなんて」

「ハッ！」

一笑に付して、言う。

「俺に口答えしてエなら、まずテメエがコイツに守られなくてもいいようになってからにするんだな」

「……………」

「……………行くぞ、シーナ」

「はい、ゲツテムハルト様」

俺達の横を通り過ぎていく二人。

(?)

なんだ？

今、急激にコイツを殴りたくなっただが。

コイツは確かにムカつくが、ジエネに対する言葉も、俺が怒る要素ではないし。

湧き上がる衝動を押さえ、通り過ぎる二人を見送る。

モアは怒りが収まらないのか、黙ってゲツテムを睨んでいた。ジエネは俯いたまま。

ようやく行ってくれるかと思っただが、シーナだけが途中で立ち止まり、こちらを振り向く。

「……唐突な無礼をお詫びします」

「無礼なのは分かってるんだ」

「ですが、ゲツテムハルト様に対して、貴方様のように振舞う方は初めてです。食って掛かるか目を合わせないようにするかのどちらかでしたのに、逆に挑発するとは」

「一応命の恩人だけど、感謝する気がサラサラに溶けちゃったしな。そう思っとけ、シーナ……だったか」

「正しくは、メルフォンシーナと申します」

「そらまた長い名前——？」

……くっそ。訳が分からん。

なんで今度はコイツを哀れんでるんだ？

「？　どうか、されましたか？」

「……うんにゃ。なんでもない。早く行かないと、ゲツテムに怒られ

るんでねえの?」

「……それもそうですね。それでは、失礼致します」

俺達に一礼して、シーナ。メルフォンシーナはゲツテムを追って、去っていく。

メルフォンシーナ、ね。

そらシーナって略されるわけだ。

かといって、あんにやろうと同じ略し方もムカつくし……なんか呼び名でも考えとくか。

「……………」

「さて、ああいうアークスもいるって知れたところで、先に進むか」

「うん……。アークスっていつても、いいやつばっかじゃないんだな」

「人間千も万も集まれりや、狂人の一人や二人出てくるもんだよ。悪い奴ばっかでないだけ上等だ」

「だーから、何度言えばわかるのよ! それじゃなくて、こっち先!

二度手間になっちゃったでしょ!」

「うつせーな、どうだっついていいだろ! 両方とも終わったんだからよ!」

「いつもいつもそんなことじゃ効率が悪いって言ってるの!」

「へいへいわかりました! すいませんでしたー! ていうか、元はと言えばお前が思いっきり依頼内容勘違いしてたせいだろうが!」

「うわ、自分で「まあ気にすんなよ」とかキザったらしい台詞吐いておいてすぐに翻意とか、かつこ悪っ!」

「キザとかいうな! さっきまで泣きそうな顔してたくせに!」

「そつ、それは言わないでよ！ ……間違えちゃったのは事実なんだし」

「あのなあ、俺は別にそんなことを責めたりしないっての。ガキの頃からの付き合いなんだから、わかるだろ？」

「……わかつてる、けど、ゼノのお荷物になるのは、いやだし……」

「……………」

「……………」

ゼノさんとエコーさんがいた。

二人共が黙った空間を俺達三人が眺めていると、ゼノさんがこちらに気付く。

「……あ。……ハクメイ」

「……あ」

「……………」

「……さ、さあ、エコー！ 任務の続きと行こうじゃないか！」

「そ、そうね、任務残ってるもんね！ 効率悪いやり方してるし、急いで終わらせないとね！」

「そうだな！ 誰かさんが勘違いしてなければ、もつと早く終わってたけどな！」

何故蒸し返すのか。

「……ねえ、ゼノ」

「……おい、エコー」

そうしてまた口論を始める先輩二人。

「……………はあ」

強くなりたい、その理由は

バカツプル先輩s'を横目に歩いて、途中戦闘を交えていく。
今はフォンガルフをリーダーにしたガルフの群れとの戦闘中だ。

「てやつ！」

モアが振るったクレイモアが、ジエネが仰け反らせたフォンガルフの牙を数本、根元から切り取る。

今回はモアにも参戦させた。

群れを見つけた時はまた俺のデバイスに隠れようとしたが、そうはさせず、強制的に外で戦わせることにしたのである。

実力を試しに来たのに、本人が戦わなかったら本末転倒だし。

作戦としては、俺が多数を相手取り、ジエネとモアのコンビでリーダーを狩る形だ。今もジエネが作った隙をモアが突いていつている。戦闘前はガキンチョらしくビクついていたが、いざ戦闘になって攻撃する時は、ガキンチョらしく思い切りがいい。つっても威力は全然だけどな。

小型とはいえ、大剣のクレイモアでフォンガルフの牙数本ってどうよ。顎割るくらい出来ないかね。

「ガアアッ！」

俺が相手をしてる奴等の内一匹が、俺からターゲットをズラし、先に二人を倒してリーダーに助太刀しようと襲い掛かろうとするが。

「ゾンデール」

磁場を発生させるテクニックで周りのガルフ共と一緒に引き寄せ

る。

集まったガルフに押し潰されないように上に跳び、二人に襲い掛かろうと跳んでいたガルフの尻尾を掴む。

「つれないことすんなよな」

集まった地点の真横に着地し、そのままガルフを振り回して、ガルフ共に上から叩きつけた。

右手に持っていたエレキを仕舞い、フレアを呼び出す。

密集したガルフ共に並列起動のフォイエを——喰らわせようとして、思い留まり、普通にチャージして放つ。

「フォイエ」

叩き潰したガルフ共に放つ。

「フォイエ」

放つ。

「フォイエ」

放つ。

「フォイエ」

放つ。

「フォイエ」

放つ。

「フォーイーエ」

放つ。

消し炭になったので終わり。

やれやれ。時々制限かかってんの忘れそうになるな。気を付けな
いと。

二人の方も終わってたようで、こちらに歩み寄ってくる。

ゴルフとフォンゴルフの違いがあるとはいえ、集団相手にした俺と
個体を相手にした二人が同じなのは、ジエネには防御に専念しても
らったからだ。

二人のフォーメーションとしては、ジエネが前で敵の攻撃を防ぎ、
隙が出来たところを後ろのモアが攻撃する、というもので、役割を完
全に分けることでそちらに専念できるようにしたのだ。この実験で
モアの攻撃力を確かめると同時に、防御が疎かになりがちなジエネの
特訓にもなる。

「お疲れさん」

「……………ふうっ！ はあ……………はあ……………」

ジエネから返事はなく、息も絶え絶えだった。

……………攻撃せずに防御だけでもこれか。

傷自体は大したことないんだが、な……………。

「なあジエネ、大丈夫かよ？ すっげーしんどそうだけどさ……………」

「……………」

「リーダーも心配だよな！ なっ!!」

「え？ ああ、うん」

「なんでちよつととまどいぎみなんだってば」

「すみま……………せん。……………っ、こんなんじゃない……………ダメなのに……………」

息を整えながら、ジエネは言う。

「フォトンの扱いが……下手で……、いつも途中でバテちゃうんです……」

「？ 扱いが下手……？」

「……………」

まあ。

それはしゃーないと言うべきなんだが。

「こんなんじや、ダメなのに。早く立派なアークスにならなきや……」

両剣——コートダブリスの柄をジエネは強く握る。

強く、強く。

噛み締めるかのように。

「誰かに、守られる存在じゃなくて……」

『逃げるんだ……。どうか、お前だけでも生きてくれ、ジエネ……』

「みんなを、守れるように……なりたいんです」

(……………はあ)

やれやれ。

間違いなくさっきのゲツテム野郎の言葉を気にしてるな。

あんな奴気にしてもしよーがないだろーに。

「……………おい、リーダー！」

「はい、リーダー」

「リーダーならこういうときに、がつんとかっこよく、はげましてやれよー！」

「えー俺え？」

「嫌がんなってばー！」

いや、別に嫌がってるわけじゃないが……………そういうのは言い出しっぺの法則ってのがね？

とはいえモアに任せても不安だし。俺から言わせてもらうか。

「ジエネ」

「は……………はい……………」

「てら」

足払い。

「はわあっ!?!」

俺の足に逆らわず足を払われ、横にずっこけようとするジエネの腕を掴み、倒れるのを防ぐ。

組体操みたいに斜め45度になったまま、ジエネが問い掛けてきた。

「な、なにを……………」

「足元がお留守だぞ、ジエネ」
「え？」

ぽかんとした顔のジエネを、引っ張り上げて立たせる。

「お前があんにやろうに言われたこと気にして、焦って強くなろうとしてんのは、分かってる」

「！そ、そんなことは……」

「ないって？」

「……ない、こともない、です……」

まあ気持ちはわからんでもないけどな。

実力不足なのは分かってたろうし、加えて戦闘ですぐバテる点もある。戦闘技術は一般くらいだが、継続戦闘が出来ないのはアークスとしては痛い。

ムカつくが、心底ムカつくが、実力は確かにあるゲツテムからすりゃ、弱いのは確かだろう。

が、それだけだ。

「そうやって上ばっか見上げて、急いで力を得たって、強くなったとは言わん」

「……そう、ですね。焦っても、すぐに強くなれるわけじゃないですよね」

「ああ。そんな隙だらけの力なんざ、格下に足掬われて終わりだ」

事実、そういう奴等の足を掬い上げて、俺はのし上がってきた。

「あのゲツテム野郎に言い返したきや、しつかり土台を固めた力で強くなれ。これでもリーダーだし、そんなぐらい待ってやるさ」

「……ハクメイさん」

「そうなりや俺も安心して楽できるし」

「……最後のはぜったいいらなかつたつてば」

「うるせーぞ足手纏い筆頭」

「な、なんだとこんにやろー!」

「ふふっ」

腕をぐるぐる回して突貫してくるモアの額で指で押さえてると、そのやり取りがおかしかったのか、ジエネが零すように笑う。

ちゃんと息も整え、姿勢も整え、ぺこりと頭を下げてきた。

「ありがとうございます! おかげで、ちよつと元気出てきました」

「そらよーござんした」

「ったく! 世話のやける二人だぜっ! おーい、さっさといくぞー!
! ついてこーい!」

とか言いながら一人先に飛んでいくモア。

「あ! モア! 一人で先に行ったら危ないですよー!」

「うわあああああああー!」

「あーあ、言わんこつちやない」

「言ってる場合じゃないです! 早く助けないと!」

全く、世話の焼けるガキンチョだ。

「わあー!」

草原のような地帯を抜け、森林の奥深く、山にほど近いエリアに辿

り着く。

この近くの山を抜ければ、凍土エリアに到着だ。

かといって、山を登って降りるわけではない。この先にある山を突き抜ける洞窟を潜っていく予定だ。

木漏れ日が差し込む森林を歩きながら、ジエネは感嘆の息を吐く。

「ナベリウスの森林は、いつ来ても美しいですね！ そうだ。モア、はぐれて迷子にならないようにしてください」

「なっ！ なっ！ オレ、そんなに子どもじゃないやいっ！」

「あれ？ さっきは子どもだって自分で言ってたのに……」

「都合のいいガキンチョだこと」

「なっ、ば、ばかにしたなあー!!？」

さてさて、目的の洞窟までもうすぐってところだが、その前に。

「セラフィさん。この先の敵性反応はどうですか？」

「くぬっ、くぬっ！ リーダー避けんなってば!!」

「モア！ さっきから思ってたけど、すぐに暴力に訴えるのは良くないです！ 乱暴な男の子は嫌われちゃいますよ！」

『えっと……』

「ああ、この二人は無視していいんで」

『はあ……それでは敵性反応ですが、この先に大型エネミーが二体います』

大型エネミー、か。

それも二体ってことは……。

「フアングパンサー、パンシーの共棲エネミーですか」

『はい。周囲にエネミーの反応が見られないことから、恐らくこの二体の縄張りなのだと思います』

「なあなあ。ダーカーじゃないなら、無理に倒さなくてもいいんだろ

？」

「そうですね……。なんとかやり過ぎせないでしょうか？」

「別に俺はそれでもいいが……」

ただ、探知にかかるこの反応は、なあ……。

洞窟前に屯する共棲エネミーは、俺としても初めて感じる反応だ。しかし、それでもわかる。

この反応は、ダーカーのものだ。

『……いいえ。出来たら討伐していただきたいと思えます』

『どうしてですか？』

『この二体は……恐らく浸食されています』

「え……？ 浸、食……？」

「し、しんしよくって、ダーカーにしんしよくされたってことだよな？」

「他にないだろう？」

『放置しておく、原生種の生態系が狂ってしまう恐れがあります』

原生種達は各々の食物連鎖で生態系が成り立っていて、普段であればそれが狂う程死滅するようなことはない。一体が捕食できる数には限界があるのだから。

しかしそれを狂わせるのが、ダーカーとその浸食。

生きる為に捕食するのではなく、ただ殺戮する生物へと変える。

散った命をただ無駄にする。

それを未然に防ぎ、生態系保全を為すのもアークスの仕事だ。

『浸食種——ブーストエネミーは、通常よりも凶暴で手強い敵となります。十分注意してください』

「セラフィさん、オレがふたりを守ってやるから、安心していいってばっ！」

「!! わ、わたしだって頑張ります！」

『……………』

「……………」

『ハクメイさん。……頑張ってください』

俺だけにそう言ったセラフィさんは、きつと間違っていないだろう。

(さーて、どうしたもんか)

もうすぐ共棲エネミー達と遭遇するということまで歩きながら、俺は思考する。

(PDは見た目の変化はないけど、身体能力がいきなりズバツと変わったらバレるだろうし、並列起動もノー。探知はリサさんと違って、傍で使ってるのにこの二人は気付く様子もない。オリジナルディスクは……この二人なら自作武器と一緒に言い訳利きそうだが)

ちなみに自作武器についてはパーティエンテアと同じように、隠れた職人(架空)から製作依頼を出して作ってもらってるように言ってる。

尊敬と羨望の眼差しで見られただけで、疑いの目は欠片も無かった。

……悪いことではないけど、纯粹過ぎてハクメイさんは心配です。

(クラス制限もあることになってるから、武器も使えるものが限られてくる)

ウオンド系の自作武器はまだ無いから、使える武器は四つ。

電剣『エレキ』。

回炎『パイロソーサー』。

冷拳『フロスト』。

分具『スプラッシュ』。

(まあ向こう次第だが、この四つでも全部使うかは分かんがね)

『みなさん！ 浸食された共棲エネミーと間もなく遭遇します！ 十分警戒してください！』

問題は、二体いるということだ。

こちらは二人——あ、モアがいるから三人か。一応——で戦う。数の上なら三対二だが、そもそも大型エネミーは複数人のアークスが集って一体相手にするのが基本だ。数で劣るなんて以ての外。互角でもこちらが新人だらけじゃ無謀と言える。

俺はまあ、この前のロックベアと縄張りを争う程度の個体なら、やれるだろうとは思う。

しかし、ジエネ。

戦闘能力は一般アークス程度のジエネは、どうしたものか。

「ジエネ。モアのチップは、お前に移しておく」

「は、はい」

「モア。戦う間はチップの中でジエネのサポート。チャンスがあればお前もチップから出て、刺しに行くつもりでいけ」

「わ、わかったってば」

セラフィさんからの通信を聞いて、二人の顔に緊張が走る。

とりあえずはこれでいい。

気休め程度だが、モアのサポートでジエネも強くなる。

後は、どう立ち回るかだ。

「！ 二人共、止まれ」

木々が途切れ、広い所に出ると言う手前で、手を二人の前に翳し、止める。

隠れる、という合図を出し、俺と一緒に二人も隠れる。

モアはチップの中に入り、ジェネのデバイスに収まった。

「？ あー！」

『あ、あれ……だよな？』

草が生い茂る広場の真ん中。

そこに聳え立つ二本の大樹。

その上に、いた。

「フアングパンサー、フアングパンシー……」

こめかみに浸食核が植え付けられた、巨大な紫色の豹が一匹ずつ。俺達が隠れる木々を見下ろしていた。

V S 森林を駆る雌雄爪獣

俺とジエネは、それぞれ別々の木の陰で息を潜めていた。

奴等の見分け方としては、鬣が大きく広がってる方がフアングパンサー、鬣が身体を張っている方がフアングパンシー、という具合だ。

フアングパンサーとフアングパンシーの両体に、動きはない。だが、たまたまではなく、明らかにこちら側を意識していた。

(こちらに気付いている……のは確かだとして、動かないのは様子を窺ってるだけか。はたまた正確な位置を掴めてないのか)

気付かれたのはこの際仕方ないでしょう。

問題はその後どうするか。

「向こうが正確な位置を掴めてないなら好都合だが……確かめるか。ジエネを見る。」

ジエネもこちらを見た。

「……………」

「!……………」

言葉なく、ただ左手で持ったタリスをジエネとは反対側に向けて下に振る。ジエネはそれを見て頷いた。

これは事前に決めたサインの一つ。

「俺がこっちに向けてスプラッシュを投げるから、お前はそこで様子を見てろ」という意味を持つ。上に振れば「投げると同時に敵に突っ込め」。上下に振れば「俺と同じ方向に走れ」。他には……まあそれは今度でいいか。

考えたサインを全部話したらモアと一緒に頭を抱えていたので、とりあえずこれは覚えとけと厳選したサインの一部だが、これはちゃん

と覚えてたようだ。首を傾げたら後でお仕置きのもりだったが、この分ならそれもなしかな。

そんじや……始めるとするか。

スプラッシュを投げて、離れた場所にある木々の間に停滞させる。

(……ザン！)

声なく、テクニックを発動。

PAとテクニックは、声に出さずとも発動は可能だ。声に出した方がそれに応える周囲のフォトンも反応し、より威力を高められるだけに過ぎない。

今回は威力どうこうではなく、向こうがこちらをどう捉えているかを確かめるために放ったものだ。声を出して位置を捉えられたら元も子もない。

スプラッシュも、向こうからは軌道が見えないように投げた。

これで奴等が俺達を正確に捉えていないなら、スプラッシュの方向に行く筈。そこを横から突いてやるつもりだが、果たして……？

風の刃が片方——ファングパンシーへと向かっていく。それを見据えてファングパンシーは、俺達の方へと跳んできた。

(チィ！ 見つかったか！)

「散開！」

「はい！」

俺は左に、ジエネは右に跳ぶ。ファングパンシーが突撃と同時に繰り出した爪が、俺達が隠れていた木々に深い爪痕を付けた。

両断とはいかなかったが、爪痕の深さに耐えきれず、木々は倒れていく。

(なんでバレた？ ……臭いか？ それとも、ブーストエネミーの特徴か？)

ダーカーはアークスに強く反応するそうだから、その名残が侵食された個体にも出たのかもしれないが。

(考えるのは後！)

着地と同時に、反転。ファングパンシーに向かって走る。

ジエネも少し遅れて、敵に向かっていった。

チラリと、ファングパンサーの方を見る。

奴は未だ大樹の上で傍観の姿勢。

この共棲エネミー達は、一方が最初に獲物と戦い、消耗してきた途中からもう片方が参戦してくるのが狩りのスタイルなのだと言料で読んだことがある。ブーストエネミーとなっても、それは残っているのか。

「エレキ！」

スプラッシュを仕舞い、エレキを呼び出して両手に持つ。

ファングパンシー……めんどくせえ。パンシーは俺の方へと向いて、木々を引き裂いた右前足とは逆の左前足を振り上げて、迎撃の体勢を取る。

俺を引き裂いてから、向こうから見て左から来るジエネを迎え撃とうって腹か。

引き裂かれた木々達が大きな音を立てて倒れる。

迫る左前足。

地面を這う横薙ぎの爪に対して俺は――

「メギドー！」

踏み込んだ足からテクニクを発動し、爆風で跳んだ。

「グア!？」

跳躍の余地なく飛び上がった俺に反応できる筈もなく、パンシーの爪は空を切る。何の手応えもなく振るった前足に引つ張られ、パンシーの姿勢は崩れた。

その隙を見逃すほど甘くはない。

「シユートポルカ!」

身体のひねりと回転を利用した3連の斬り上げを繰り出した。

一撃目は牙の中で一番鋭い犬歯を左側一つ。

二撃目は左目。

三撃目は左耳を半分切り裂いた。

急所を斬られたパンシーから悲鳴が上がる。

その頭を蹴り、横に跳躍。

「ジェネ! そいつの相手してろよ!」

「はー!」

着地し、走る俺の背で、更に肉を裂く音。

向かう先は、パンサーが上から見下ろしている大樹。

走りながら俺はアイテムパックから、球状のものを取り出し、大樹に乗るパンサーの更に上に向かって投げる。

「?」

それを見送り、パンサーは首を傾げる。

が、すぐに興味を失ったのか、俺の方に意識を戻した。

大樹に辿り着いた後も勢いを失わないように、大樹の周囲を回るように走る。その途中で大樹と大樹の間にスプラッシュを投げ、分離さ

せて停滞させるのも忘れない。

大樹の上空で投げた勢いを失い、重力に従って落ちようとする球。それに向かって、テクニックを発動。

「グランツ」

小さな光の矢が六つ、球に刺さり、球が弾ける。

そして、中に入っていた液体が降り注いだ。

「フオイエー！」

「?! ギャオオー！」

下から迫る俺が放った爆炎と、上から降ってくる液体のヤバさを、獣の本能が感じ取ったのか。

パンサーはすかさず、パンシーがいた大樹に跳び移る構えを見せる。

想定通りに。

「獣の考えることは単純で読みやすいなあ！」

走る勢いそのままに、俺は分離させたスプラッシュの破片、その一番低いものに飛び掛かった。

とはいえ、俺の跳躍だけで届くような高さではない。

しかし、届かせる方法がある。

正確には届かせるテクニックがある。

「ゾンデイル・式式！」

一番近くの破片に、俺を引き寄せ。

破片に到達したと同時に解除。続けて最寄りの破片にゾンデイル・式式。

到達と同時に解除し、最寄りの破片でもう一度発動。
その手順を繰り返していき、やっとこさ到達する。
パンシーと同じ高さ、同じ地点に。

「!? バアア!!」

「うお!？」

横つ面に現れた俺に、パンサーは身体の捻りだけで爪を振るってきた。

咄嗟にエレキで防御したが、受けきれず胸に浅くない爪痕を一文字に刻まれる。

同時に、パンシーに向かっていた勢いも殺され、飛ばされそうになる……が。

「クツソ！ ゾンデール・式式！」

身体を捻ってくる直前に投げて、パンシーの首に張り付けたスプラッシュに、もう一度俺を引き寄せた。

両足で首を固める。

そうこうしてる内に、飛び移ろうとしていた大樹までもうすぐという所に来ていた。

勿論これについても考えてある。

さつき投げたのと同じ球体を、その大樹に向かって投げる、と同時に。

「ファイエ」

その後を追うように、爆炎。

大樹の幹の上面に球体が叩きつけられ、中の液体が飛び散る。

その液体に爆炎が触れ。

一気に燃え上がった。

「!?」

もうわかると思うが、この液体の正体は油だ。

中でも特に引火性が高い、俺特注の油。それを風船のようにすぐ破れる球体に詰め込んだもの。

こんな森林だらけの地帯でぶちまけて引火しようものなら山火事待ったなしだが、この原野は広い。この大樹が燃え上がって横倒れになろうと、他の木に燃え移る心配がない。原野に生えている草も疎らで、連鎖的に木まで燃えることはないのだ。

そして、パンシー。浸食されようと獣の本能には逆らえないのか、火に対する恐怖が尋常じゃない。

立てる場所が一瞬にして燃え上がる火で埋め尽くされた大樹に着地し、燃え移る前に跳んだ。

どこを目標にしてるわけでもない、ただ火から逃れる為の跳躍。中空から重力に従って落ちようとしているパンシーに、俺は笑った。

多分凶悪な笑みだったろう。

「ダメだなあ。そこは多少燃え移っても、俺を振り落とさなきゃ」

目の前にあった右目に、エレキを突き刺した。

『お、おいおい！ あれ、大丈夫なのかよ!?!』

『周囲に燃え移ることはないので、山火事になる心配はありません！』

ですが、倒木に注意してください！』

片目片耳を切り裂かれたフアングパンシーが我武者羅に振るってくる爪を、後ろに跳んで躲しつつ、わたしはモアとセラフィさんの言葉を聞いていました。

少しだけ視線をズラして見れば、二つ並んだ背の高い大樹の上部分、枝葉が燃え上がっています。

轟々と。

「っ……い！」

わたしはそれを見ていませんが、ハクメイさんが火をつけたのだと思われず。

他に火をつけられるようなものは考えられません。

けど……どうしてハクメイさんは、この美しい自然の一つに、火をつけてしまえるのでしょうか。

頭が良くて注意深いハクメイさんだから、きっと間違っ、ではない。故意に火をつけたのだと思います。

一体、どうして——

『ジエネー！』

「っ！」

目と鼻の先にフアングパンシーの腕が迫っていました。咄嗟に剣を構えて防ぎましたが、体重差は覆せません。薙ぎ払う腕の勢いに逆らえず、横っ飛びに飛ばされます。

「うああっ！」

地面に二回バウンドし、背中を強く打ちつけました。

受け身を取る事も出来ず、地面に身体をガリガリと削られ、ようや

く止まります。

『ジエネー！ 大丈夫かよ!?』

「……………っ、い、た……………!」

なんて、こと……………。

戦闘中に考え事して、ダメージを受けるなんて……………。

こんなんじや、強くなるのを待ってもらおうどころじやない。

強くなれない。みんなを、守れない。

わたしはずっと、弱いまま……………?」

(そんなの……………嫌、です……………!)

手をついて。

ふらついて。

力を振り絞って。

なんとか、立ち上がりました。

顔を上げた先には、こちらに向かってくるファングパンシー。

(わたしは……………強くなるんです!)

「カマイタチ!」

(お、ダブルセイバーのギアか)

既に死体となったパンサーの上から降りる。

ほんと、しつこい奴だった。

右目を突き刺して、左目も切り裂いて、突き出た顎も上から下まで貫いて、それでもまーだ暴れやがるからな。

最後には頭にエレキを突き刺して、でも頭蓋骨に邪魔されて貫けなかったから、引き抜いて逆側から刺して、そのまま墜落して地面がエレキを押すようにして、ようやく頭を貫いて絶命した。

落ちながらやったんだから、俺も器用だよな。しかも墜落の衝撃はパンサーを下敷きにして逃れたし。

流石俺。

さて、次の仕込みの為に奔走しますか。

ジエネだが……今しがた向かってくるパンサーに対抗して、ダブルセイバーのギア、『カマイタチ』を使ったところだ。

多くのクラスには、ギアと呼ばれるものがある。武器の特徴、クラス武器の特性を發揮する為のもので、ジエネのダブルセイバーのギアは『カマイタチ』と言う。

カマイタチは、僅かの時間だが自分の周囲につむじ風の如き斬撃を纏わせるようなもので、近付いた敵をスパツと切り裂く。

(とはいえ、カマイタチ自体の攻撃力は低いし、射程範囲も狭いから、本人の攻撃に追撃する用のもんだ)

弱小エネミーならともかく、あの巨体相手じゃカマイタチもお構いなしに攻撃してくる。防御も期待できないだろう。

それが分からないジエネじゃない。……うん、ない。きつと。

つまり、今度は攻撃を当ててやるって心構えの表れってことだ。

(相手してるとは言ったが、時間稼ぎしときや良かったんだけどな)

俺ならともかく、新人が一人で相手するようなエネミーじゃないし。

多少なりとも攻撃は加えられていたようだが、その代わりに本人もダメージを受けたようだ。

そうこう考えている内に目的の場所に辿り着く。
大樹の根本に。

(ま、いいか。ここまで来りゃ、俺らの勝ちほぼ決まりだ)

フアングパンシーが右前足を振り上げて跳んでくる。

ここまで戦って、大体の攻撃パターンはわかってきました。

こうして前足を振り上げた時は、そのまま振り下ろして来るか、地面を這うように薙ぎ払ってくるか、のどちらかです。

四足歩行の生物は、足が速い分、身体の伸びた部分が足か頭か尻尾かだから、人間の腕のように自由でいられない。だから、攻撃もいくら人間より制限される。

前足での攻撃が終わった後、体勢を整える為に一度地面に足をつく必要がある、振った足を途中で曲げることもない。

短い時間でしたが、ハクメイさんが教授してくれたことです。

フアングパンシーは右の前足を振り上げた。

ならわたしは。

(右斜め前！)

フアングパンシーから見て左上に、わたしは跳びました。

そちら側はハクメイさんに目を潰され、死角となった場所です。

振り下ろした腕を空振りしたフアングパンシーはわたしを見失い、硬直します。

その隙を、逃してはいけない。

左のこめかみに埋め込まれた浸食核を、わたしは跳躍した身体を捻

り、回転斬りの要領で切り裂きました。卵のような核が両断され、内側から黒い靄が溢れたのを横目に、更に回転。首の頸動脈の上にある皮を斬りました。

フアングパンシーの皮が分厚く、頸動脈に届きませんでした。カマイタチが加える追撃が頸動脈に傷をつけます。

耳をつんざくような獣の悲鳴。

それに顔を顰めつつ、フアングパンシーの後ろに着地します。

あれ以上の追撃はカマイタチがフアングパンシーの皮膚を薄く切るのみでしたが——致命傷を与えた。

後はこのまま、倒れるのを待つだけ——

「ゾンデイル・式式」

急に身体が引っ張られました。

「え!?!」

何にも掴まれていないのに、身体が勝手にフアングパンシーとは逆方向に引っ張られていきます。

混乱に陥るわたしの眼前を、フアングパンシーの後ろ足が通り過ぎました。

「っ!?!」

頸動脈を切られても、まだ!?

手負いの獣は恐ろしいとは聞きますけれど、あんなにすぐ反撃してくるなんて……!

油断した自分に歯噛みしますが、それと同時にわたしを引っ張る力は止まりました。

いえ、止まってはいません。

目的の場所に辿り着いただけで、そこからわたしを動かそうとせず

に尚も引つ張り続けます。

振り向いてそれを確認すると、わたしの腰に破片がくつついていました。

「……これって」

『リーダーのタリスだってば』

つまり、リーダーのタリスがわたしを引つ張り上げたということでしょうか？

疑問を解決する前にフアングパンシーと戦うのが先、と結論付けて、正面を見据えます。

が、それは大きな音によって遮られました。

メキメキメキと、木が壊されていくような音です。

『……何の音だ？』

「？　なんででしょう？」

音のする方へと視線を向けます。

そこでは。

枝葉が燃え盛る大樹が、倒れようとしていました。

『えわあああああ!?!』

モアが叫ぶのに対して、わたしは呆然としていました。

その大樹がわたしの方に倒れようとしているからではありません。

大樹はフアングパンシーに向かって倒れようとしていて、わたし達には被害が及ばないようになっています。火が付いた大樹が倒れようとしている光景は迫力満点なものありますが、それ以上に。

燃え盛る炎は大樹の枝葉に付いています。幹には火が回っていない

いのです。

なのに倒れようとしているのは、大樹が切り倒されたからでした。それも、倒れる方向が定まるように調整して。

「!? バアア!!」

フアングパンシーは危険を感じ取ったのか、その場からすぐに退避します。

ですが……片目も片耳も潰され、頸動脈を斬られた身体では、そう遠くへは逃げられません。本来の速度が出せず、まるで歩いているような足取りで、それでもなんとかその場に倒れてフアングパンシーを潰そうとしていた大樹から逃れます。

しかしそこに、もう片方の大樹が倒れて。

フアングパンシーを炎で包みました。

「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

逃げた先に倒れてきた大樹の炎に焼かれて、フアングパンシーは断末魔をあげます。

火元の大樹から必死に逃れ、身体をゴロゴロ転がそうと、その炎はまるで衰えることなく。むしろ勢いを増して、獣を焼く臭いを辺りに撒き散らしていく。

次第に抵抗する力も弱くなり。

一時は大きくなった断末魔も、段々と音が弱くしていった。

その姿は……浸食されてダーカーとなってしまうもののそれとは思えませんでした。

「そろそろいいかな」

「あ……」

やがて身動きもしなくなったフアングパンシーを見届けていると、

見た事のない両剣を手にしたハクメイさんが隣に立っていました。

大樹の枝葉の上空に向かって、ボールのような物を投げ、それに向かってテクニック・グランツを放つと、光の矢が刺さったボールが弾け、中から何かが大樹に向かって降り注ぎました。

「こ……粉？」

「おう。居住区にある消火器にも使われてる粉でな。半端な水よか断然消火の効率が良い」

重たい音を立てて大樹の火をあつという間に覆ってしまった粉塵は風に乗ってこちらにも運ばれてきますが、ハクメイさんは風を巻き起こしてそれをやり過ごします。

風のテクニックの応用だとハクメイさんは言いますが、わたしのアークス歴が短いとはいえ、こんな使い方をする人は初めて見ました。

粉はファンングパンシーの炎をも消しましたが、その身体が再び起き上がる事はありませんでした。

「で、で、でつかかった……！」

「あ、危なかった、ですね……！　ペチャンコにされるかと、思いました……」

「まあどつちかつつーとペチャンコにしてやったのは俺の方だが」

モアがデバイスから出てきて、腰が抜けたように座り込む二人を尻目に、粉塗れになったファンングパンシーに近寄る。

探知じゃ生死までは分からないが、生きてる気配は感じない。近付

「シミュレーション、ね」

粉の下は黒焦げになっていたので、観察も終わりにして、二人の所へ戻る。

ふむ。ちつと傷付いちまったし、モノメイト飲んどくか。

これくらいはレスタでも行けるが、動き回って結構疲れたし。

「ほんとはデツカイのをコテンパンにして、そんで頭の上に乗ってやるつもりだったんだ！　なのになさっ！　リーダーがバーンってやってダーン！　ってやるからさっ!!」

「ついで姿を出さなかった癖によく言うわコイツ……」

「モアってやつぱり、まだまだ子供なんですな……ふふふ！」

「なあっ!!　ば、ばかにしたなあー！」

ぶんすか怒るモアだが、ジエネに言われたのを気にしてか、手を上げるようなことはなかった。

「そーだりーダー。ここまでする必要あったのかよ？」

ピシッとモアが指差すのは、枝葉が焼け落ち、切り倒された大樹二つ。

ジエネもそれを見て「あ……」と漏れ出たような声を出し、悲壮気味な顔をする。

「まあ、言い訳はせんよ。大樹を焼いて、切り落とす。それが俺が咄嗟に考えた、一番安全に勝つ方法だった。そもそも勝てないと思ったんなら、挑もうとしなかったからな」

「そりゃ、そーかもだけどさー……」

「……………」

「別にお前が弱いからとかじゃないぞ、ジエネ」

「え!?!　な、なんで分かったんです!?!」

「わっかかりやすいんだよお前……」

ジエネの視線は、俺の胸の傷に注がれている。

モノメイトで血は止まりつつあるが、傷は傷だ。

総合的に見りや自分の方が傷が多い癖に、他人の傷ばっか心配しやがって。

「俺一人でも、俺と同じくらいの実力がある奴がもう一人いても、同じ方法とったぞ俺は。そうしなきゃ勝てないわけじゃないが、さつきも言ったように一番安全だからそうした。そんだけだ」

「そう、ですか……」

「ほら。回復するぞ」

息は整ったものの、未だ地面にへたり込むジエネに、回復を掛ける。疲れも幾分か取れたし、これぐらいならすぐ終わるだろう。

ああ、そうだ。

「よくやったな」

「……………え？」

「正直、あそこまで戦ってられるとは思ってなかった。時間稼ぎで十分だったが、期待以上だったよ」

人を褒め慣れてるわけじゃないが、こういう事はちゃんと褒めてやらないと、良い上司とは言えん。

俺がいつもフォローしてるお蔭だと思って、停滞されても困る。

それに、一応本心の言葉だ。

「……………！」

「……………ほら。治療終わったぞ」

喜色に染まっていくジエネの顔を見ながら、立ち上がる。

うーむ。なんか気恥ずかしいな。

「リーダー！ おれは？ おれは？」

「お前はあれサイズでもちやんと戦えるようになったら褒めてやるよ」

「ぐうっ！ つ、次はやってやるってば！」

「……ふふー！」

ぞいつと鼻息荒くなっているモアの横で、ジエネが立ち上がる。

「なんだか、嬉しいです。人に褒められるってことって、あんまりないですから」

「そう？」

「はい。でも、特別嬉しいのは、強いあなただから……ハクさんだからだと思います」

「そりやよー……ハクさん？」

「あ、えつと……その、渾名、です。ずっと考えてたんですけど、一番しっくりのがハクさんで……」

もじもじと、ジエネは指を絡ませる。

……ほう。

ハクさん、か。

そんな風と呼ばれたことはないが、成程。呼ばれると中々しっくりくるもんだな。

「いいとおもうぜつ。呼びやすいしな」

「ああ、俺もそれでいい」

「あ、ありがとうございます！」

「ただしモア、テメーはダメだ」

「なんでだってば!?!」

ジエネの俺に対する呼び方が変わったところで、俺達は先に進むことにした。

足早に帰宅帰宅う

わたしは、クエストカウンターという設備の前まで来ていた。

以前ハクメイと話していた、アフィンさんという人に、お礼を言う為に。

クエストカウンターはわたしがいつもいるメデイカルセンターからも見える場所なので、そんなに遠出するわけじゃない。だというのに、フィリアさんはメデイカルセンターを離れる時は一言言っただけで帰って来ない。ハクメイが帰ってきて、それを迎えに行った時も、勝手にどこかに行かないでくださいって怒られた。心配してくれるのは有難いけど、あの人ちよつと過保護過ぎないかな。

怖い感じは、まだそこら中にある。

何度か話した人は少しだけ、大丈夫になったけど……ハクメイくらいに話せるのはいない。

(……ハクメイ)

今もきつと、危ない所で闘っているあの人を思い浮かべる。

戦うこと自体はあまり苦にしていないうるけど、危ない目に遭ったらつて、いつも心配。

ジエネちゃんやモアくんもいるけれど、ハクメイはあまり頼りにしていないみたい。

でも、ジエネちゃんのこととは将来性に期待してるって言った。

よくわからないけど、ハクメイの力になってくれたらいいな。

そう心の中で願ってる内に、クエストカウンターの受付に話し掛けようとしていたアフィンさんの元に辿り着く。

「おっ、確かマトイだったな。どうした？」

「……あ、う」

や、やっぱりスムーズに話せない……。

ハクメイの昔からの友達って聞いてるから、ちよつとは大丈夫だと思っただのに。

「あ、もしかして相棒にちゃんとお礼言つとけつて言われて来たとかか？」

「あ、……はい」

困っていると、アフィンさんは察したように言う。

「あの、どうして」

「んー。相棒ってさ、そういうのキツチリしておかないと気が済まないタイプでな。自分にも他人にも」

「そう、なんですか」

「別に礼なんていらなないのにな」

……この人は、知ってるんだ。

ハクメイの、わたしが知らないところ。

昔からの友達と、会ったばかりのわたしとじゃ、それは当然だろうと思うけど。

なんだか、ちよつと羨ましい。

「おれのごとは、相棒から聞いているのか？」

「えつと……一番最初にわたしを発見してくれた人だつて、聞いてます」

「つて言つても、足先がチラツと見えただけで、ちゃんと発見したとは言い難いんだけどな。でも、無事でよかつたよ。あの辺、ダーカーがうろついてて危ないところだつたからさ」

ダーカー。

あらゆる生物を喰らい尽くす存在。

アークスの不倶戴天の敵。

ハクメイの、敵。

(……なんで、ダーカーって聞いただけでこんなに胸がざわつくんだろう)

ハクメイは強い人だとジエネちゃんに聞いているから、簡単にやられてしまうなんて思っていない。

私自身も、ハクメイなら大丈夫って信じてる。

なら、このざわつきはなんなんだろう。

「どうした?」

「……なんでも、ないです」

心配そうに声を掛けるアフィンさんに、そう答える。

「そっか。でも、なんかあったら言ってくれていいからな。まあ、相棒が気に入ってるみたいだから、心配はないと思うけど」

「……気に入ってる、ですか?」

「おう。相棒さ、優しい奴って思ってるだろう?」

「……優しいです」

少し、ムツとした言い方になってしまった。

失礼かもしれないけど、まるでハクメイが優しくないみたいなの言い方だったから。

倒れていたわたしを助けてくれて、その後も様子を見に来てくれるハクメイが優しくなかったら、誰が優しいと言うんだろう。

「まあ優しいけど、それって気に入った相手にだけなんだよな」

「え？」

「気に入らない奴にはすっげーぶすつとした顔してるし、どうでもいい奴はとことんどうでもいいってスタンス。お蔭様で士官学校時代も俺以外に友達出来なかつたんだよなあ」

「……ハクメイが」

誰にでも優しいってわけじゃ、ないんだ。

ジエネちゃんも優しい人だつて言ってたから、てっきり根っこからそういう人なんだと。

「そこ行くと相棒、マトイのことはすっげー気に入ってるみたいだからさ。仲良くしてやってくれよ。あいつ、ああ見えて構ってちゃんだから」

「か、構ってちゃん……」

……全然そんなイメージないけど。

むしろ構われる側だと思ってた。

ほんと、わたし何も知らないんだなあ……。

「あの、今ハクメイさんと仰いましたか？」

わたし達の会話に入る横槍。

アフィンさんが話し掛けようとしていたクエストカウンターの人の隣、そこに立つ赤髪の美人さんからの声だった。

「？ あなたは？」

「申し遅れました。私、ハクメイさんがリーダーを務める試験チームの担当官、セラファイと申します」

礼儀正しく、ペこりと頭を下げるセラファイさん。

試験チームって確か、モアくんみたいなウエポノイドっていうのと

チームを組むっていう、ハクメイが言ってたのだけ。

その担当官ってことは、今ハクメイ達をモニターしてるのはこの人ってことかな。

「あの、ハクメイ達は大丈夫でしようか？」

心配が先駆けて、様子を聞く。

セラファイさんはそれに、にっこりと笑って答える。

「心配ないですよ。先程もナベリウスの共棲エネミーと戦闘になりましたが、怪我も軽度で勝利しましたから」

「け、怪我したんですか!?!」

「あー！ いえ！ ほんとに！ 本当に軽度ですから！ その場の手当で治る程度のもんですから!!」

「……マトイって、ほんとと相棒のことになると目の色変わるっていうか」

『———というわけですので、マトイさんを安心させる為にも気を付けて帰還してください』

「気を付けるも何も今から帰るところですけど……」

ていうか心配させたのあんたじゃねえかよ。

共棲エネミー共をぶっ倒した後、俺達は洞窟の暗闇を歩くことになった。

光源はマグの照明機能があったから確保できたが、それ以外が全く見えない。そんな中でも俺は探知があるから問題なかったが、他二人

は僅かばかりの光源に頼り切るしかなく、それ以上に二人揃って暗闇が苦手だった。

モアが強がっていたが、何か物音がするとすぐさまチップに入ろうとしやがる。しかし、度胸付けということもあってチップに入るのは禁止した。恨みがましい目で見られたが、自分の影にビビると俺の頭に乗る始末。こいつほんと大丈夫かね？

ジェネは入った時から俺の腕にひつついていた。当然そのスイカさんは俺の腕に押し当てられる訳だが、モアのように強がれさえしないくらいにガクブル涙目だったので、指摘するのはやめた。決して感触が惜しかったからではない。例え今日の戦闘を忘れることがあってもこの感触は忘れないけれど、ないのだ。

そんな風にビビり二人にひつつかれて、特に何事もなく数十キロ。遂に俺達はナベリウス森林エリアを抜け、凍土エリアへと辿り着いたのである。

後はテレパイプに乗っかって帰還するのみだが。

「やっやっやっや、やっやっやっやっやっやっやっやっや」

「す、すすすす、すっごいさぶさですすねねねね。ここ、凍っちゃい、そうううですすす」

「その名の通りってやつかね」

二人が言うように、凍土エリアは寒冷極まる凍り付いた大地だった。

辺り一面見渡してみても、雪の白か、氷の透明しか色がない。天候は雲のかからない晴れだというのにこれだとは、曇ったり吹雪いたりしたらどんなものやら。

しっかし、山を隔ててるとはいえ数十キロでこうも気候が変わるとは。惑星の神秘ってのは凄まじいものだね。

さつきまで感じてた女体の神秘程じゃないけどね。

イカンイカン。こういうのは帰ってからにしないと。

「んじや、さつきと帰るか。凍土エリアも一目見れたことだしな」
「そそそ、そうだなな！ おお、おおおれはまだまだへへへっ
ちやらららただけどどどど!!」

「そういう強がりはやちゃんと喋れるようになってからにしてくれる
?」

「ふう……ふう……はあ……。ぼ、防寒着が必要ですね。このまま
の格好だと、探索にも支障が出ちゃいます」

「んー。まあそうだな」

「?」

「いいいいいから早く早く!」

「さつきの強がりはやめたん?」

モアが急かすので、とりあえずテレパイプを出す。

足早に乗り上げ、キャンプシップで温まりながら俺達は帰還した。

「おかえりなさい!」

アークスシップに戻ってすぐ、マトイが駆けつけてきた。

他に目もくれず俺の元へとやってきて、俺の身体を隅々まで見渡し
てくる。

「……なんで?」

「大丈夫? 傷跡残ってない? 怪我したって聞いたから、心配した
んだよ?」

「セラファイさんか……」

あの程度の怪我をわざわざ伝えたのか……。

「あ！ 服が破れてる！ もしかして、これ？ 大丈夫？ 痛くない？」

「あー、まあ傷付けられた時はともかく、今はなんともないから」

事実、俺の胸の傷は完全に塞がっていて、痛みも痒みもない。

とはいえ服につけられた穴までは塞がらないので（塞げるけど、普通は塞げないので）この戦闘服は修復の必要があるから、とりあえず替えのやつ買つとかないとな。

それにしても、同じく今は完全に塞がって綺麗な身だとしても一応ジエネも怪我してたんだが、そっちには目もくれないのね。

お互い友達と認識した筈だが、まだまだ優先度は俺の方が高いらしい。

「そつか。よかった……」

「えっと、ただいまです。マトイちゃん」

「あ、ジエネちゃん。おかえりなさい」

マトイの勢いにちよつと気後れした風なジエネに、今気付いたという風なマトイ。

この辺はスムーズになってきたんだよな。前は他の奴相手だと相槌ばかりだったらしいが。

『はい、わかりました』『そうなんですな』『わかりました。それでは、そのように……』とかなんとか。

どこの事務員だつっー話だよ。

んで、モアは……。

「なーマトイ。勝手にメデイカルセンター離れてていいのカー？」

「あ、モアくん。大丈夫だよ。今度はフィリアさんにもちゃんと話したから」

「こっちは割りと最初からスムーズ。
ジエネはちよつとジエラってる顔だ。」

「そーういやマトイ。ちゃんとアフィンにお礼言ったか?」

「……うん。なんか。あの人は、お礼なんかいいって言ってたけど」
「言いそー。ならいいか」

「おれい?」

「ああ。マトイを発見した時に一緒にいた奴だからな。何もせずに恩知らずと思われんのもと思って」

まああいつは気にしないの一択だろうが、お礼に行った方が評価は上がるだろう。

記憶もなく、会ったばかりの俺に縋りつくような状況だ。俺にとっても信用のおけるあいつくらいには心を開いておいた方がいい筈だ。

「んでこれからだが、とりあえず呼び出しがあるまでは自由ってことで。ジエネ。お前はしっかり休養取れよ」

「ええっ!? わ、わたし、まだまだ頑張れますよ!?!」

「強がったところでバッテバッテなのはわかってんだ。疲れを残したまま任務に出ても足手纏い。肝に銘じなさい」

「……はーい」

「んー、おれはどうすつかな?」

「……あの、あのさ……。ちよつとだけ、お願いがあるんだけど……」
「んあ?」

悩むモアを横目に、控えめに声を上げたマトイを見る。

「迷惑じゃなければ、色々な星の話聞かせてほしいの」

「星の話?」

「迷惑なんてこと全然ないですけど、どうしてです?」

「もしかしたら、それで何か思い出すかもしれない……。それに、みんながどういう星でどういう体験をしたのか、興味あるんだ。ここだと、検査ばかりで気が滅入っちゃうし」
「ふむ。つつても、俺等もまだナベリウス以外には行ったことないしな」

「ナベリウスの話でも……うん。聞きたいな。ナベリウスでのことも、あんまり覚えてないから」
「そーかい」

まあ発見された星とはいえ、ずっと倒れてたしな。

この前の花じゃ何も思い出さなかったようだが、それ以外の何かで思い出す切っ掛けにはなるかもしれんし。

日記を見せるでもいいが、俺達の口からも聞きたいんだろう。

ナベリウスで経験したことと言えば、そうだな……。

「ナベリウスにはまず、岩石に覆われた大熊と紫色のでっかい豹がいます」

「……くまさん？ に、ひょう？」

「なんでまずそれなんだってば……」

「ナベリウスは緑がいっぱい溢れてて、きれいな花が沢山咲いているところがあるんです。空気も澄んでいて、とても気持ちのいいところなんですよ」

「あ、お花ってこの前の？」

「はい！ マトイチちゃんがナベリウスに降りられるようになったら、一緒にお花畑に行きたいですね」

「そっか。……うん。いつかみんなで行けたらいいな」

「それにさそれにさ！ こーんなすっげーでっかい木だってあるんだぜ！」

「おっきい木？」

「ああ。俺が燃やしたやつね」

「ちよつとリーダー黙ってろってば！」

その後特に思い出すことはなかったそうだが、マトイの楽しそうな顔は可愛いからよしとしよう。

所変わって。

シヨップエリアに一人で来てみた。

(が、いないか)

全くあのシオンめ。

質問はいつでも受け入れるつつつてたくせに、基本的にお前が用あるときにしかいねえじゃねえかよ。

ブーストエネミーについての資料も、ロクな物がないし。それはまたなんか考えるところとして。

「どうすっかなー……」

ジエネはともかく、俺は今回疲労溜まってないから、早めに寝るのもなー。

なんてぼやいていると。

「お、ハクメイ」

「あ、ゼノさん」

「奇遇だな、こんな所で」

一人で散歩している様子のゼノさんと出会った。

「あれ？ エコーさんは？」

「いねーよ？ 今は俺一人、つつーか、俺がいるのにエコーがいなくちゃ変か？」

「変ですネ」

「即答かよ」

「なんつーか、俺の認識じゃ二人はもうセットなんですよネ。パティエンティアが片割れいなかったら何かあったのかの勘繰りますし」

「ああ。あの情報屋姉妹だつー？ まあ俺もエコーも長い付き合いだけだよ、お互い一人になりたい時くらいあんだろ」

ぶつちやけると、ゼノさんがどこ行こうとエコーさんの方について回ってるイメージですけどね。

お互いナベリウスで鉢合った時の事には触れない。

わざわざ話題に上げたくないだろうし、この人相手にからかっても効果薄そうだし。

「ナベリウスでの任務は終わったんです？」

「おう。そういや聞いたぜ？ 新チーム結成して、リーダーやってるんだってな」

「まー試験チームの試験的運用ですから、俺が作ったチームとは言い難いですけどねー」

今回の試験は一応の成功を見た。

モアと任務を共にすることで、ウエポノイドがアークスに友好的、協力的であることの証明。その第一段階は今回果たされたので、これから徐々にウエポノイドがアークス内に浸透していくとのことだ。実力はまあ……個体差があるってことで。

まだ俺達試験チームの運用は続くそうだが、それもいつまでやら。

「確かウエポノイド……だったか。お前さんも、何かと色々押し付

けられていきそうなスタートになっちまったな」

「押し付けられたって本気で嫌だったら断固拒否しますけど」

「そうか？」

「ええ。今回は中々面白そうなものだったんで受け入れただけです」

「そりや良かった。けど、困った事があつたら遠慮すんなよ？ 後輩を助けるのが先輩の務め、だからな」

「それも師匠の教え、ですかい？」

「おう。俺の今の生き方は師匠あつてのもの。そう言っても過言じゃないぜ」

「じゃー早速、お願いしたいことがあるんですけど」

「うん？」

首を傾げるゼノさんに、言う。

「時間あるようなら、この後模擬戦してくれませんか？ 今の俺が、アークスとしてどの程度なのかを推し量りたいので」

ニューマンの長耳のメリットがフォトンを感じしやすいただけだと思っただか

「いやあ……」

唸った。

よもやよもやだ。

まさか――

「まさかこうも完敗するとはなあ……」

「なーにが完敗だこんちきしょうめ……」

アークスの訓練施設、VRルームの一つ。

正方形に区画されたフィールドと真ん中で、俺は大の字に倒れていた。

顔を少し起こせば立っているゼノさんが見えるだろうが、今は顔を上げる気にならない。

いやほんと、驕ってたつもりはないんだけどね。

「攻撃を受け止めようとしたら電撃が流れてるわ。分裂したタリスからテクニクが雨霰のように飛んでくるわ。そのタリスに引つ張られるわ。砲弾が見えないわ。槍が伸びるわ。そもそも本人の動きも新人のものじゃないわ……。お前さん、正直言って戦い方がえげつねえよ」

「PフォトンドライブDも使ったそれら全部を出し切って、結果がこうだから完敗なんですけどね……」

まさかどれ一つとしてクリティカルヒットしないとは思わなかった。掠る程度なら何度かあったが、その都度カウンター貰ったし。自己回復が出来ないゼノさんだから持久戦は無いと見てはいたが、息も

つかせぬ攻防で回復間に合わねえし。俺の弱点も速攻見切られたし。けどまあ、あの仮面野郎とは違って、すつきりした負けだ。

悔しい事には悔しいが、黒い気持ちが湧くようなことは全然ない。それに……感じた差が仮面野郎程じゃない。

なんてのは言わないけどな。

「……なあ、ハクメイ」

「はい？」

徐々に回復して言ってるが、まだ立つ気にならるので、倒れたまま返事をする。

「お前さんから見て、俺は何に見える？　ちやんと、ハンターに見えるか？」

「ん？　ああ」

そのことか。

なんだ。大して気にしてないと思ってたんだが。

「心配せずとも、あんだだけ動かれてレンジャーにや見えませんよ」

「！……気付いてたのか？」

「ええ、まあ」

俺達第三世代と違って、ゼノさんはクラス適性が先天的に決まっている第二世代だ。

ゼノさんのクラス特化傾向は、完全にレンジャー向き。

武器はガンスラッシュで、あらゆるクラスで扱えるものだとはいえ、その戦い方は近接のそれだ。

だが。

「最初に会った時の射撃……あ、いや。ゼノさんの戦闘を見るに、ハン

ター出身のガンスラツシユ使いにしては、妙に中・遠距離の射撃の腕が良いと思つたんですよ。元が近接のガンスラツシユは、狙いなんか気にせずとりあえずぶつ放す傾向ですけど、先輩は違う。狙いを定めようって時にはしっかりと定めてた。だから、元はレンジャーなのかなって」

「まいったな……そこまで見切られてたのか」

……まあ本当は、調べさせてもらったわけだが。

流石にそれは言えない。

信用出来る出来ない以前に、知らずの内に調べられてるって気味悪いと思うし。

「お前さんの読み通り、俺の適性はレンジャーなんだよ。今は無理言つてハンターやってるが、やっぱ向いてないクラスってのはきつついもんだな。何にでもなれるお前さんが、少しばかり妬ましいぜ」

「そつかー。向いてないクラスの人にやられたのか俺はー」

「……ま、ないものねだりしても仕方がないからな。俺は俺に出来ることをやっていくさ」

無視られた。

ちよつとシヨック。

まー俺も言つててめんどくせえ奴だと思つたけど。

回復してきたので、起き上がる。

「ふう……。ゼノさんも、あれだけ動けるようになるまで向いてないクラスでやってきた経緯はあるんでしょうけどね。それでもレンジャーの方が強いってんなら、戻した方が良いと思いますよ。拘りで死んだら元も子もないですし」

「へッ、俺もそう思うよ」

自嘲気味に、ゼノさんは笑う。

「けど、それじゃ守れないものがある。だから俺は、ハンターじゃない
といけないんだ」

「そうですかい」

それがゼノさんの『欲』なら。

そうまでしてでも貫きたいなら、俺がどうこう言う話じゃない。

「……あー、駄目だな。なんだかお前さんと話してると、愚痴ばかり
言っちゃまう。すまん」

「気にしないでいいですよ。俺も気にしないですし」

さてと、そろそろ休みますかね。

これ以上なんかしても明日以降に響くし。

「それじゃあゼノさん。模擬戦ありがとうでした。今日の所はこれ
で」

「おう。これからもしっかり励めよ」

後輩がテレポーターに乗ってVRルームから出たのを確認して、ゼ
ノは一人呟いた。

「しかし、何なんだろうな。この懐かしい感じはよ」

出会った時から感じていたものだったが。

模擬戦と言って、ハクメイの全力を受け止めてからは、より一層強

くなつた。

「いや。なんか別の懐かしさも感じるようになった、だな……。どこ
だったっけか」

先程の戦いを思い返す。

槍を持った時。

鉄塊のような大剣を振り回していた時。

タリスを投げた時。

こちらの攻撃を回避する時。

大砲を構えた時。

電撃が流れる剣を片手に持った時――

「あ」

思い至り、ゼノは掌をぼん、と叩いた。

「そーいや、あの構え方があいつと同じなのか」

ま、偶然なんだろうけどな。と。

ゼノはそのことを頭から追いやることにした。

翌日。

俺はショップエリアに来ていた。

「さーて、ブーストエネミーについてはどうすっかね」

一応その辺を研究している機関もあるそうだが、公開している資料は昨日一通り見た。

全く使えないことだけがわかった。

士官学校時代に習う事の域を出てないというか……俺の求める情報がかかれていなかったのである。

(ま、どこまで本当のことを公開してるのかもわかんねーからな。それっぽいこと書いてても信用できんのだが)

情報が無いのなら、調べる手立てを作ればいい。

しかし、自分で一から十まで調べる程の余裕も関心もない。そもそも「ちよつと気になっただけ」なのだから、情報がないならそれでいいやとなってきたるのが本心だ。まだ探してるだけ、俺はまだ粘り強い方だろう。

(エネミーに関する研究者っぽい奴のCクライアントオーダー Oでも探して、その伝手で調べさせるか？ 部署に所属していても研究は個人でやる奴もい

るし、自分の研究が出来ればいいってんなら都合がいいが――

「先生！ せんせーい！」

アホみたいにうるさい声に思考を遮られた。

「……ルベルトか」

「はい！ ルベルトです、先生！」

こいつのテンションの高さ、ヒューイに次ぐな。

ルベルトは俺の目の前にまで駆け足でやってくる。

「先生！ 本日は改めて、お礼に参りました！」

「お礼？」

「はい！ 先生のお蔭で、士官学校のレポートが捗りそうです！」

「あー。そーいやあつたなそんなん」

アークスの士官学校では、アークスの活動、またはアークスシップの運営について役立つようなレポートを、一人一つ仕上げる課題がある。

学校の入学から卒業までには最低でも二年かかるのだが、一年間過ごした後にはレポートの提出を求められる。このレポートが完成し、合格印を貰えるかどうかによって卒業できるかどうかが決まるのだ。まあ、貰えたからって他の単位が足りなかつたら卒業出来ないけど。

その研究の為に、研修生がアークスに依頼をすることもざらにある。ほとんどは元々ある資料の情報を基に作るが。

懐かしいなー。

俺は髪の毛の薄い教官に段々と自然に生えてくる育毛剤の開発レポートを提出して、技術的な事は露見しないままに合格印貰ったわけ。

「で、俺のデータを基にレポートを仕上げたいと」

「はい！ 自分はエネミーの弱点や破壊できる部位についての調査を、レポートに纏めようと考えています。そのことも考えて先生の戦闘を見ていましたが、先生は流石です！ エネミーの弱点を素早く見切り、的確に突いていく！ 鮮やかなお手並みでした！ なので、データを参考にさせて頂きたいと思ひまして！」

「まーそれはいいんだけど——あ」

「？ どうかしましたか？」

そうか。

そういう方法もあるのか。

「なあルベルト。確か似通ったテーマがあつたら協力して研究できるように、研修生同士はお互いの研究テーマをキーワードで検索できる

ようになつてたよな?」

「え? はい。そうですけれど」

「そんじゃ、ちよつち調べてくれや」

「何をでしよう?」

わたしの名前はロツティ。

アークス研修生の一人です。

現在、課題であるレポートを作ろうと考えているのですが……。

(やっぱり、ダメだなあ……わたし)

ブーストエネミー。

ダーカーに浸食されたエネミーについて調査するのが、わたしの研究テーマです。

今ある資料を見るだけでは完成は目指せないレポートを完成させる為に、わたしはCOとしてアークスの皆さんに依頼を出したいと考えています。ですが、アークスの方に直接話し掛けて、依頼をお願いする。そのアクションが引込み思案のわたしには出来ず、受けてくれそうなアークスの方に声を掛けようとして、でも出来なくて、もう五日になります。

話し掛けられたとしても、通常より凶暴になつているブーストエネミーの調査を、引き受けてもらえるのか。そんな考えばかりが堂々巡りします。

「……研究テーマ、変えるべきなのかなあ」

シヨップエリアの椅子に腰掛けて、溜息をついて、一人呟きます。別に、この研究じやなきや卒業できないわけじゃない。

でもわたしは、この研究がしたいと思った。

その研究結果をアークスの役に……お兄ちゃんの役に立てたいと思っただ。

わたしの実家は、裕福でも貧しくもない、一般的な家庭です。

わたしと兄、両親の四大家族。

その兄はアークスの任に就き、特殊な任務で家があるシップから別のシップに移り、それからはほとんど会っていません。

随分前に急に結婚したなんて話をメールで送ってきたものですか、その時は家族総出で押し掛けに行きました。

後、子供が出来た旨もメールで送ってきたので、孫が出来た両親共々、姪っ子と甥っ子の顔を見に行きました。

それっきり、会っていません。

けれど、兄の為にも、その家庭を守る為にも、わたしの研究で役に立てたら。

そう考えてこの研究テーマを考えましたが……それに拘って卒業出来なかったら、お笑い種だね。

仕方が無いんです。

わたしも早く一人前のアークスになって、家族を守るようになりたいんですから。

だから、この研究はそうなってから、自分の力で完成させて。

今は出来る研究を――。

「もしもし?」

「ひゃわあ!」

跳ねました。

突然声を掛けられてビックリしたとはいえ、これは恥ずかしいです。

「は、はい！ な、なんででしょうか!？」

それを隠したい一心で、用件を尋ね、その人の顔を見ます。

「そんな声を荒げんでも……ま、いいや。ちよいと研究テーマについて話があるんだが」

初対面のその男の人は。

なんだか不思議な感じがしました。

いやー。驚き桃の木山椒の木つてやつかね。

とりあえずエネミー関連なら儲けもの程度に考えてたというのに、ルベルトにブーストエネミーに関連する研究テーマについて調べてもらったら、まさにジャストミートでその研究があったとは。

しかもそれが掛け値なしに美少女。

金の工面以外でもこういう方向に役立つとはな。将来本気で弟子にしてやってもいいかもしれん。

まあ今は、この子だ。

「まずは、初めましてかな」

彼女とはテーブルを挟んで向かいの椅子に腰掛ける。

「は、初めまして」

ガツチガチに緊張しているご様子。

男と話すのに慣れてないのか。まあ積極的に話すタイプにも見えんしな。

ロツティとデータにあったこの子は、青髪を腰辺りにまで伸ばした、ニューマンの少女だ。

長耳はテオドルのと同じく横に伸びているタイプ。

士官学校の研修生、女子制服に豊かなその身を包んだロツティは、内気なのか引っ込み思案なのか。その幼さが残る顔を俯かせ、目線が前髪で見えなくなっている。

うーむ。

拒絶されてる感じはないと思いたいが、突然話し掛けてきた男相手に最初からオープンにされても、逆に心配になるしな。

ジェネに大きく足りないのはそこだ。

マトイは事情が事情だから仕方ない面もあるが。

「俺はハクメイってんだ。この前アークスになったばっかの新人だが、よろしく」

「ロ、ロツティです……」

「それは知ってる。プロフィールは見せてもらったからな」

「あ、あの……わたしのこと……。それにわたしの研究テーマ、どうして……」

「あー、ちよいと研修生に知り合いがいてな。その伝手で検索した」

「け、検索、ですか」

「ああ。ブーストエネミーについてな」

ロツティはますます顔を強張らせる。

自分の事は知られているのに、相手の事は知らない。そんな心境からだろう。

ロツティの研究テーマはブーストエネミーについての調査。正に俺が欲していた情報、それを調べるものだ。

その研究成果を見せてもらえれば、俺がデータを検証する手間が省ける。

しかし、流石にタダで見せてもらえるなどとは思っていないし、そもそも研究が進まなければ話にならないので。

「サンプルを俺が狩るって形で研究協力しようと思うが、どうだ？」

協力者としてレポートに関係すれば、見せろと言われても嫌とは言えまい。

研究内容として戦闘の様子も見させてほしいとのことだが、ルベルトと同じ対応にすればなんら問題はない。

協力の形について細かく伝え終わると、ロツティは逆に尋ねてくる。

「あ、あの」

「ん？」

「……どうして、協力してくれるんですか？」

んー？ 下心があるって思われてる？

まあ全く無いと言えば嘘になる。

男なら浅い深いは置いといて、美少女とは良好な関係を築きたい気持ちは分かるだろう。

ただし俺はナンパ男とは思われたくないので、数撃ちや当たる方針で目についた女を誘うなんてことはしない。

デートだとかなんやらは、深い関係になってからだ。

それまでの過程を楽しまずになんとする。

「強いて言うなら、知的好奇心を満たすくらいか。この前戦ったブーストエネミーに妙な反応があったから、それが何なのかってな」

嘘ではないので、そう言っておく。

「……………」

「ま、一応依頼って形で受け持つから、報酬は用意しとけよ。どのブーストエネミーのデータが欲しいってなったら、その都度変えるでいいから」

ルベルトはボンボンだから一体につきなんちゃらだったが、それを一般化するつもりもない。

納得出来る金額なら、それでいい。

あいつとは違ってこっちは研究のことだから、欲しいデータも変わってくるしな。

「と、そんな感じでやっていこうと思うが、どうだ？」

「わ、わかりました」

研究に光明が見えた歓喜故か、長耳をびこびこ動かしつつ、ロツティは手を差し伸べてくる。

こうやって感情が耳にも出てくるの、ニューマン女子の可愛いところだよなあ。

ウルクとかの上に伸びてるタイプはあんまりそういうの出てこないんだけど。

ロツティの手を取り、握手を交わす。

「これからよろしくお願いします。先輩」

「おう、よろしくな。ロツティ」

先輩、か。

良い響きだ。

なんでその様子を撮影してないんだお前は！（理不尽）

「お」

「あ」

ロツティと協力関係を結んだ後。

シヨップエリアを彷徨っていると、ゼノさんとエンカウントした。よく会うなあ。

「昨日ぶりですね。こんにちは」

「おう。奇遇だな、こんな所で」

そう言われる程奇遇と言えるような場所じゃないけど。

「ゼノさんはこんなところで何を？」

「俺？ 俺はまあ、待ちぼうげだよ。エコーの奴がまーた寝坊しやがってな」

「常習犯みたいな口ぶりですね」

「常習犯なんだよ。すぐ行くから待ってるって連絡は来たが、あれからどれだけ経つやら……」

「あらー……」

「ま、もう慣れたけどな」

そう言えるゼノさんはほんと、イケメンやな。

俺だったら何かトラブルでも起こったのかと連絡入れて、それでも返答がないようなら迎えに行くけどな。待ち合わせに来なかったら。

エコーさんは何をしているのだろう。

まさかゼノさんに一番綺麗な姿を見てほしいとかで、シャワー浴びてたりとかないだろうな。

「そういや、ハクメイ。お前 クライアントオーダー C Oとかはちゃんとして受けてるか？」

「ええ。やっぱ任務の報酬だけじゃ立ち行かなくなるんで」

ロツティの研究協力も、先程正式にオーダーとして受けたところだ。

報酬は一般の研修生が出せる程度。

あの内気な後輩は危険なブーストエネミーと戦うのに、と申し訳なさそうにしていたが、そもそも金目的で受けたわけじゃないのだ。向こうが気にすることではない。そう伝えると、ロツティの長耳は嬉しそうに跳ねていた。

可愛い後輩である。

ま、それは置いていて。

「もつとも、資金面では大きく出してくれるオーダーがあるんで、そんな数受けてないんですけどね」

「そっか。そーゆー太客は大事だぞ。大切にしとけ」
「ういっす」

「けど、もつと色々なオーダー受けてもいいと思うぞ？　なんかあった時に伝手が色々あると便利だし、何よりお前さんのアークスとしての評価も上がる」

「まー評価上げより地力底上げと装備整えたいんですけど」

「ハハ、確かにな」

「しかし伝手か……。アークスに関しちやゼノさんがいるからそんな困ってないんですが、そうなるかと学者方面ですかね」

「お、嬉しい事言ってくれるな。学者か……。それなら、こういうのどうだ？」

ゼノさんはデバイスを開き、とあるオーダーを引つ張り出す。

COは、アークス全員が見れるように掲示板に張り出されるオーダーもある。

アークスや、アークスの研究者など、アークスに関わる仕事をしている人間にしか使うことは出来ず、研修生であるロツティもこの掲示板に張り出すことは出来ない。研修生のCOは、直接話して依頼を受けてもらうことも学習してもらおうという狙いもあるらしい。なんなんだろうね、そのコミュニケーション障キラー。

掲示板から引つ張り出されたであろうその画面を見ると、依頼人の欄には『ロジオ』とあった。

「……ナベリウスの地質調査？」

「待ってる間の暇つぶしに、良さそうなオーダーを探してたら見つけてな。なんで今更ナベリウスのデータなんか欲しいのわかんねえけど、手早く終わる上に、報酬も上々。簡単なやつだから、受けてみたらどうだ？」

「ほうほう。でもゼノさん。俺に譲っていいんですか？」

「俺はこーゆる調査みたいな依頼は苦手だな……。エコーにはいいかもしれないねえが」

「まあ俺は偏見ないんですけど……」

しかし、凍土エリアもか。

この前入ったばかりでエネミーとの実戦経験はないんだが、まあいけるだろう。

どの大型エネミーを狩れってわけでもないし。

「それじゃ、早速受けてみますね」

「おう。頑張れよ」

ゼノさんに手を振り、ロジオのところへ行くことにする。

あの人、いつまで待ちぼうけされるんだろうな。

「ども」

「え……。あ、アークスの方、ですか？」

同じくシヨップエリア。

オーダーで指定された場所に来た。

学者と聞いていたが、成程。確かに学者然としている。

ロジオは丸眼鏡をかけたヒューマンで、緑のスーツを着ている男だ。多少もじやつとしている灰色気味の髪は、あまり手入れしていないからなのか。中肉中背で、俺より少し低いくらいの身長。恐る恐るといった風に、ロジオは尋ねてくる。

「も、もしかして依頼を受けてくれる、とか？」

「そのもしかしてでっす」

「あ、ありがとうございます！ いや、本当に助かります！」

顔を輝かせて、ロジオは何度も頭を下げてくる。

うーむ。

別にブ男ってわけじゃないけど、やっぱりさっきのロツティの笑顔とは天と地の差よな。

こういうところ美少女って卑怯だと思うわ。

「まーとりあえず、ナベリウスの調査って聞いたけど」

「はい。学者として惑星の成り立ちなどを調べているのですが……。ナベリウスの情報だけは少ないんです」

「んむ？」

「アークスの誰もが最初に行く惑星だし、もっと情報があると思っていたんですが、不思議ですよねえ……」

「……………」

いや。不思議、なのではない。

怪しい。

ナベリウスは今発見されている中でも、エネミーの平均的な強さが低いことからアークスが実戦に慣れる為に通い詰めることの多い惑星だ。ダーカー大発生の影響で優先調査対象となった今の時期なら、尚更。発見されてからの歴史も浅いなんてことはない筈。

その情報が少ないということは……アークス側が『隠している』としか考えられない。

だが、何の為に？

ヒューイや、パティが見た小さい女の子の六芒均衡がナベリウスに來ているのも、それが関係してるのか？

「あ、すみません。つい興奮して……私、ロジオと言います」

「あ、うん。俺はハクメイだ。よろしく」

「ハクメイさん。私からの依頼内容は単純です。惑星ナベリウスの地質調査、それだけなんです。成り立ちが気になるというか、正直カンのようなものなんです。どうしても調べてみたくて。他のアークスさんに頼もうとしても、調べ尽くされたナベリウスということ、あまりいい返事をもらえませんでした」

「で、駄目元で掲示板に載せてみたよ」

「そしてそこに來てくれたのが、ハクメイさん！ 貴方なんです！」

それにしてもこの学者テンションアゲアゲである。

遂に調査をすることが出来るのが嬉しいのだろう。

まあ、自分で行こうにもアークスの付き添い無しじゃ、ダーカー共に浸食してくださいと言っても言ってるようなもんだしな。

「お願いします！ 時間のある時で構いませんので！」

「まー今は暇だから別にいいけど、凍土エリアに入るって話だったな？ 今んとこ踏み入った回数がほぼ0だけど、そこんところは問題ない？」

「問題ありません。ですが、初のエリアということでしたら十分に気を付けてください。常に命は最優先、ですから」

「森林エリアの方は？」

「そちらのデータも調査して頂きたいと思いますが……、まずはより情報が少ない凍土エリアから、と」

「ふむ」

ナベリウスにはもう一つ、遺跡エリアというものがあるが、そっちはいいのかな。

まあ、その辺は追々でいいか。

凍土エリアの更に奥地にある、森林エリア程でなくとも緑が生い茂っている遺跡地帯なのだが、流石に凍土エリアからあそこまで行くのはめんどい。

詳しい依頼内容を再確認し、早速キャンプシップでナベリウスの凍土エリアに向かうことにする。

(ジエネとモアは……いいか。俺だけでパパッと終わらせちまおう)

「マートイちゃん♪」

「あ……ジエネちゃん、……に、モアくん」

「おっす！ 元気にしてたか？」

わたしは、モアと一緒にメデイカルセンター前で屯するマートイちゃ

んに会いに来ました。

わたし達の姿を見てマトイちゃんは、わたし達の周りをきよろきよろと見回して、ちよつとだけ肩を落とします。

ふふふ。

本当にハクさんに懐いてるんですね、マトイちゃんってば。

「……ハクメイは？」

「リーダーなら、自由行動って言ってどっか行ってるってば」

「そうなんだ……」

「わたし達は今日、お買い物しようと思ってるんですけど……マトイちゃんもどうでしょうか？」

「……ううん、ここで待ってる」

うーん。ハクさんに懐いているのはいいんですけど……ハクさんがいないとちよつと距離があるようで、寂しいです。

ハクさんがいる時のマトイちゃんは笑顔が多くて、表情がコロコロ変わってるんです。それがすつごく可愛くて……。でも、今は強張った顔をしています。ここには怖いことなんて無いんですけど、記憶喪失のマトイちゃんがそれを心から信じられるようになるまでは時間が掛かるかもしれません。

それまでは、わたしも頑張ってマトイちゃんの力になりたいです。なんてたって、わたしはマトイちゃんのお友達なんですからね。

「待ってるのはいいけどさー、マトイはここで何してるんだ？」

「わたしは……ちよつと観察中」

「観察？ 誰をですか？」

「誰をつて訳じゃなくて、みんなを」

視線をロビーの方、たくさんの方が行き交う場所に向けてマトイちゃんは言います。

「ごこは、とっても面白いね。すごいっぱいの、たくさんの人がいる。誰一人として同じじゃない」

「? 変なヤツだな。そんなの当たり前じゃんか」

「うん、そうだよね……。でも、なんでだろう」

少し遠い目をするマトイちゃん。

自分でも不思議そうに、言います。

「わたしが微かに覚えてる場面だと、みんな同じ顔をしてたような……?」

「?」

同じ、顔……?」

どういうことでしょうか?」

「みんなが家族のところはずっといたとか、でしょうか……?」

「それどういうところだったば……」

「……思い出せないだけ、かな。気にしすぎてもよくないって言われてるし、気にしないことにする」

「そうだな! ところでさ、マトイ。観察って面白いのか?」

「……うん。わたし、色々な人と話すのはまだちよつと苦手だけど……みんなの顔を見るのは好き。楽しい。なんだか、元気が湧いてくる。そんな感じがするんだ」

「そっかー。よくわかんないけど、それって良いことだよな?」

「ですね! 元気なのが一番です! あ、そうだ。ね、マトイちゃん」

「うん?」

マトイちゃんの両手を取ります。

少しだけビクツてされましたけど、へこたれずにその両手をわたしのほっぺに。

マトイちゃんの小さい手がわたしの顔を包み込むようにして、マト

イちゃんの瞳を覗き込みます。

「わたしの顔は、好きですか？」

「う、うん……」

「……えへへへへへ」

「ジエネ、にやけすぎだつてば……」

だつてだつて、マトイちゃんが好きだつて言ってくれたんです。

士官学校でも仲のいい人がいなかったわけじゃないですけど、お友達と呼べるような人はいなかったんです。そんなわたしの、数少ない可愛いお友達。そんなマトイちゃんに好きつて言つて貰えて、心躍らないわけじゃないじゃないですか。

外見ですけど、それでもです。

「わたしも、マトイちゃんの事好きですよ。特にハクさんと一緒にいるとニコニコしてて、とつても可愛いんです」

「な、なんだか恥ずかしいな……あれ？ ハクさん？」

「リーダーのことです。マトイちゃんもそう呼びますか？」

「う、ううん。わたしはいいかな。ジエネちゃんの呼び方だし、わたしはハクメイつて呼んでる方がしっくり来るから……」

「それはいいけどさ、ジエネ？　いつまでマトイとにらめっこしてるつもりだよ？」

わたし達とマトイちゃんは、こんな風に少しずつ仲良くなつていつています。

ハクさんがいる時程笑顔は見せてくれないですけど……、マトイちゃんもちよつとずつ心を開いてくれています。

いつかもつと仲良くなって、女の子同士でたくさんの遊びがしたいな。

不気味なダーカー。不穏なる影

『ハクメイさん。聞こえていますか？ 私です。ロジオです』
「聞こえてるぞっと」

ナベリウスの凍土エリアに降り立ち、通信機に耳を傾ける。

今回はセラフィさんではなく、ロジオの指示に従って探索を行う。そして奥地へと辿り着いたら、採掘機を転送して地質データを取ってくる算段だ。

地図データは持っているが、現在地の把握はサポート無いとキツイからな。

地図と見比べながら探索するだけなら問題ないが、戦闘しながら長距離を移動したりすると、広い惑星じゃすぐ迷子だ。

『改めて、依頼を受けて頂いてありがとうございます。データはこちらで取得しているので、ハクメイさんはとりあえず奥地まで進んでください。道が険しいので、お気をつけて』
「おうよ」

ロジオの言う通り、凍土エリアの道は森林エリアに比べて凹凸が激しく、道が険しい。

背の高い岩が散らばっているだけでなく、それが雪に覆われて見分けがつきにくくなっているのが原因だろう。

モアは飛んでるからいいが、ジエネだったらすつ転ぶかもしれんな。注意しないと。

凍土エリアにいる原生種は、毛皮に覆われた小さい雪男風のイエーデ、それがロックベア級に成長したキング・イエーデ。凍土に適応したタイプの狼のガルフル、その群れのボスであるフォンガルフル。イエーデと同じく毛皮に覆われたゾウのマルモス、そしてキング・イ

エーデと同じくそのマルモスが成長したデ・マルモス。そして、森林にいた共棲エネミーの凍土版、スノウパンシー、スノウパンサー。ファンングパンサーとファンングパンシーが紫の体毛に黄色の鬣だったのに対して、この二体は水色の体毛に青い鬣を持っているらしい。

そのほとんどが、森林エリアの原生種が凍土エリアに適応するようになっただけの個体なので、森林の時と同じように対処すれば問題ないだろう。

「さてと、奥地を目指して真つ直ぐゴーと行きますか」

『はい。……ところで、ハクメイさん』

「ん？」

『防寒具を着けていないようですけれど……その、寒くはないのでしょうか？』

「ああ。そのことか」

俺は今、森林エリアの時と変わらない戦闘服である。

いくらかの温度変化には適応できるとはいえ、気温マイナス一桁、酷い時は二桁にまでなるこの凍土エリア。ジエネとモアがああだったように、防寒具が無いと相当厳しい環境だろう。先程言った対処も、普通ならばこの寒さのせいで実力を発揮できず、森林の時とは違った環境に苦戦を強いられるだろう。

普通ならば。

しかし俺は普通ではないので。

「ま、ちよつとしたテクニクの応用みたいなもんだ」

『はあ……。応用、ですか』

「道すがら話してやってもいいが、それよか奥地に急いでくれた方がお前も……お？」

話しながら、左右に分かれる岐路に着いたところで。

その交差点で、空間から突然現れる形でダーカーが現れた。

上空に、プリアーダが二体。

「っ」

アイテムパックからエレキとスプラッシュを呼び出す。
構えて、相手の出方を窺うが……。

「――」

プリアーダは俺を認識し。
興味なさげに、俺から視線を外した。

「あ？」

二体揃って、俺から見て左の岐路へと飛んでいく。
振り返りもせずに飛んでいく様子を見送り、俺も構えを解いた。

「……………」

『今のデータは……ダーカー、ですか？ アークスを見つけたら襲ってくる資料にはあるのですが……』
「……俺の事はきっちり認識してた。けど、今はそれどころじゃないって感じだったな」

不倶戴天の敵同士であるアークスを認識して尚、それより優先順位が高い何かを遂行しようと……？

『何かを探していたんでしょうか……？』

「……なんでそう思うんだ？」

『あ、いえ。ただの勘というか、思い付きで言ってみただけです。お気になさらず』

「勘、ね」

この男、中々勘が当たりそうだからな。案外馬鹿に出来ないかもしれん。

探していた、か。

この近くの反応は原生種とダーカーのものしか感じないから、傷付いたアークスの追撃って訳じゃないな。

『……なんだか不気味です。お節介かもしれませんが、十分注意して進んでください』

「ああ……しかし、探していたとすると何をだろうな？」

『さあ……。探していたといえ、このところダーカーが何かを探しているという噂がありましたね？』

「そうなのか？」

『はい。ナベリウスだけでなく、他の惑星でもそのような動きを見せるダーカーがいたと、アークス間で話しているのを聞きました。今のがそうなのでしょうか？』

「ふむ……」

そう言われても、判断する材料がない。

アークスとしてはダーカーを討伐する為に追走するべきかもしれないが……俺としては依頼優先で行きたい。

とりあえず俺はダーカーが向かった方とは真逆の、岐路の右側へと向かった。

この辺りはイエーデの群生地、というよりは縄張りだったようだ。襲ってきたので撃退。

キング・イエーデも出てきたが、変わらず撃退していく。
え？ その描写はって？

向かってくるその頭から油をぶっかけて焼いただけだけど、わざわざ語るほどのこと？

いやーよく燃えたよ。毛皮だから。

一、二体くらいは焼かずにその毛皮を剥いでやったけど。

『この辺りなら、データの収集場所として申し分ないと思います』

奥地へと辿り着くと、ロジオから通信。

イエーデばかりだった反応も今は無くなり、周囲にエネミーの反応はない。

この分なら、採取も問題なく行えるかな。

『お手数ですが、指示する各所のデータを収集してもらえますか？』

「おう。パパッと終わらせちまうか」

ロジオの指示に従い、ポイント地点へと向かう。俺が近くに来たら、その場にロジオが採掘機を転送。採掘機を操作して、データを収集していく。

……操作方法は士官学校で習うけど、これモアはちゃんと操作できるのかね。

一般基準でも複雑ではないんだが、初見だと苦労しそうだし……。なんで押しとくだけで採掘できるようにしなかったのか。転送とかの技術は生み出すのに、謎だ。

なんて考えながらも、手は休ませず、あつという間にデータ収集が終わる。

「うっし。こんなところか」

『ハクメイさん、聞こえますか？ 私の欲しかったデータは一通り集まりました』

「そらどーも」

思った通りパパッと終わっちゃったな。
これである報酬なんだから、いい仕事だ。

『とはいえ、途中に現れたダーカーについては一切不明です。動向を探っても見たいですが、情報が無ければ危険ですし、無理はよくありませんよね……』

「無理、とは思わんが、まあ地質学者にや関係なさそうだろ。専門が違うんだし」

『それはそうですが……。ともあれ、なんとも気持ち悪いですがまずは何事もなく調査が終わった事をよしとしましょう。そう、何よりもまず、貴方が無事で良かったです』

「心配性なやつぢやな……」

まあ現場の危険度は非戦闘員には計り知れないし、たかが地質調査とナメてかかる気もないんだが……。その辺が原因で命を落とす奴もいたんだろうな。

新人が死ぬのって、強いエネミーに出くわしたことより弱いエネミーに囲まれてつてのが多いしな。新人特有のイキリが表に出て、雑魚を狩ってる内に良い気になって周りを見ない傾向があるんだとか。そういう意味じゃ、上には上がいるんだと思いき知らされた仮面野郎との遭遇は僥倖だったのかもな。

感謝する気はこれっぽっちもないが。

いずれアイツより強くなつて、今度は俺が苦汁をペロペロ舐めさせてやるが。

「さて、帰りますか」

探知範囲内に反応がないのを確認し、俺はテレパイプでキャンプシップに戻った。

「……………」

そしてその姿を、ハクメイの探知範囲外から眺める影があった。半径500m、その更に遠くから見ているにも関わらず、影はハクメイの姿を事細かに捉えている。テレパイプに乗り、転送によつて姿を消すのを確認し、その影も振り返り、どこかへと消えていった。

——その手に、白い杖のような何かを持って。

「万事において、全てを選ぶことは不可能。光陰の後を見定めた諦念も必要である」

「……………最近姿を見せないと思つたら、これか」

アークスシップに戻り、ロジオから報酬を受け取り、モノメイトの補充でもしようかとショップエリアをふらついていたら、シオンが話しかけてきた。

何が切っ掛けで現れてるんだか、こいつは。

……………まあ、大方マターボードとやらなんだろうけどな。

このところは見ていなかったので気紛れのように見てみたが、知ら

ずの内にマターが埋まっていたらしい。

ロジオのオーダーもその一つで、それを終えたから現れたってところか？

「事象は蝶の羽が如く揺らぎ、流転する。時として不意になる事もある。だが、それは決して無為ではない」

「んー……バタフライエフェクトってやつか？」

西で蝶が羽搏くことで起こした風が、東で竜巻となつて現れる。

過去起こした小さな出来事が、未来に大きな影響を及ぼす、というものだ。

「貴方は迷わないでほしい。その為に、私と私達が居る。その為だけに、私は居る」

「前もそれ聞いたけどさー……おまえ以外に誰かいるように見えないんだけど？ 俺には見えない誰かでもいるの？」

などと話していると。

「あれ？ ハクさん？」

「ん？」

「リーダー？ こんなところで何してるんだ？」

ジエネとモアが横合いから現れた。

ふむ。

疲れた様子はないし、きつちり休んでるようでよし。

今は買い物中ってところかね。

「特に何してるってわけでもねーよ。そういやモア。お前にやったグラインダー、ちゃんと使ってるか？」

「バツチリだつてば！ これでもう足手纏いなんて言わせないかな

！」

「はいはい。期待しとくよ。泥船に乗ったつもりで」

「大船に乗ったつもりでいろよ!!」

「ふふ。頑張りましょうね、モア! ところで……」

ジェネは、俺から視線を外し。

こう言った。

「こちらの方は、どなたでしようか？」

……は？

枯れた刀匠の頼み事

シオンの出で立ちとは、ハッキリ言つて異様だ。

研究員がショップエリアで立ち歩くくらいは珍しいことじゃないが、白衣を常に着ているような奴など、それこそ部屋に籠りつきりで研究に没頭しているような変わり者くらい。それだけならまだ珍しいくらいで済むが、シオンの持つ雰囲気がそうはさせない。変わり者どころか、浮世離れた、人とは何か違つたとさえ錯覚する異質さを感じさせるのだ。

それがこんなショップエリアのど真ん中に立っついても誰も気に留めないのは……俺以外の誰にも彼女の姿が見えていない故だ。

周囲の様子を探つても、彼女に視線を合わせた人間は過去誰一人いなかった。

そう。いなかったのだ。

「……どんな奴が見えてる？」

「？」

「？ リーダーもジエネもなにいつてんだ？」

……モアには見えていない、か。

ジエネは首を傾げながらも、シオンにしつかりと焦点を合わせている。

「なにつてモア、そちらの白衣の女性ですよ。眼鏡かけて、黒髪の」

「……………」

「……そんなやつ、どこにいるんだ？」

やはり、シオンが見えているか。

しかしこりやどういふことだ？

そう考え、ご本人に聞こうとシオンを見る。
シオンはジエネを見ていた。

「……赦翼の鳥」

「あ？」

「はい？」

「今はまだ、雛鳥の如く、小さな羽。しかし、何時しか貴方を天高く飛翔させる、大いなる翼となるだろう」

……シャヨクの鳥？

ジエネが、大いなる翼？

「翼？ あの、それってどういう……？」

「……事象は変遷を見せ、未だ遠き道ながら全ては確然へと近付いている」

「あの、ですから……」

「貴方の行動が全てを決めるということ。私が表現するのはただそれだけ。……迂遠な言葉を謝罪する」

「やめとけやめとけ。こうなったら、こいつ聞きやしないから」

「なーなー。二人して何の話してるんだってば」

「私と私達が今言えるのはここまでであり、これからもここまでであることは自明である」

聞き出せることはこれ以上ないってか。

なんなんだろうな、こいつ。

味方なのか、敵なのか。

俺の疑問も見通して尚、という顔で、シオンは続ける。

「……だから、私は願う。貴方の掴む未来が、一縷を掴んだものであることを」

そう言つて、シオンは姿を消した。

「あれ？ ……なんだったんでしよう？」

「こつちが聞きてーよ！ なんだ二人して！」

「ハクさんも見えてたんですよね？ 誰なんですか？」

「さあ？ 不定期に現れてポエムっぽい事垂れ流す不審者？」

「なんだそれ!? そんなヤツいたのか!？」

「うーん。でもなんだか、不思議な感じというか……」

しかし、こいつが大いなる翼、か。

他の奴とは違うのは分かつてるが……シオンはジエネの何を見て
そう言つたんだかね。

二人はどうやら買い物中だったらしい。

俺も暇が出来たので、二人の買い物に付き合うことにした。

「なー、結局二人がいった奴ってなんだったんだ？」

「まーだ言つてんのか。ただの不審者だつったろ」

「そ、それで片付けるのは可哀想ですよ……」

二人が使うマントを見繕うが、果たしてモアのサイズに合うものがあるだろうか。

もうコイツハンカチでいいんじゃないね？

適当なこと考えるが、スカーフがそれっぽくなりそうだったので、
それにする。

会計を済ませると、ジエネが首を傾げた。

「あれ？ ハクさんの分は買わないんです？」
「この前行った感じじゃ、必要なさそうだし」
「マジか！ あんな寒いのに平気なのかよ……」
「そう言うならお前も半袖短パンとかやめれ……」

ジエネはまあ……肌色面積減らしても逆にエロい！ とかなりそ
うだから別にいいが。

「はい！ アークス一の情報屋、パティちゃんですよー！ 本日も
絶賛営業中！」
「ひゃわあっ!？」
「おわあ!？」
「まーた脈絡ないなー」

というわけで横合いから突然パティエンティアが現れた。
素っ頓狂な声を上げる二人を余所に、ティアのツツコミ。

「その割に大した情報を掴んでこれなかったのは誰？」
「過去は振り返らない！」
「振り向きつつ言うなし」
「あの、こちらは……？」
「自己紹介の通り、情報屋の美少女双子姉妹ですと」
「いやあ照れますなー！ お二人さんはデート中!? これはまさかの
スキャンダル！」
「そんなアイドルじゃあるまいし……」
「デ、デートなんてそんな……」
「だとしたらこんなお邪魔虫連れてこねーよ」

モアの背中を掴み、二人の眼前に差し出す。

「ちよ、おいリーダー！ おれの扱いなんか雑だぞ！」

「おおっ！ なにこのちっちゃい男の子！ なんか飛んでるし！」

「ちっちゃくないやい！」

「これって確か、ウエポノイドですよ？ 最近実戦投入されたって
いう」

「こんなんでも、全く戦えないってわけじゃねーからな。他の奴がど
うかは知らんが」

「そういえばハクメイさんは、ウエポノイド試験のチームリーダーを
担当しているって……。 主席とはいえ、新人アークスのハクメイさん
がオラクルに貢献してるって言うのに、うちの姉と来たら……」

「ああでも、休憩スペースでのんびりしているおじいさんと仲良
くなったりしたんだよ！」

露骨に話題逸らしたな。

モアの身体を両手で揉みくちやにしつつ、パティは続ける。

「昔は武器とか作ってたんだって！ なんかすごいよねー！ かつこ
いい！！」

「……それは多分、かの有名な刀匠ジグだね」

「あれ？ 一緒にいなかったのか？」

「私もパティちゃんと一日ずっと一緒なわけじゃないですから。 あん
まりイメージ沸かないでしょうけど。 とうかパティちゃん。 情報
屋名乗ってるくせになんで知らないの？」

「興味ないから！」

「……あつそ」

「言い切っちゃったよ……」

ジグ、か。

俺も武器製作に携わる身だから、その名に聞き覚えはある。

ある、のだが。

「刀匠ジグ。四十年ぐらい前から武器製作一筋の頑固な堅物さん。でも、最近はからつきし。その手が作った武器はいずれ『創世器』にも至るだろうと言われていたのに、もったいない」

古参のアークスの代名詞と言える、四十年前の大戦争の経験者。その時代では轟いていた名も、今では威光を感じさせないと言ったところか。

そんな今でも、六芒均衡の持つ創世器のメンテナンスは行っているそうだが……。

「ソーセージ？　ですか？」

「グツと格落としてんじやねーよ」

「……『創世器』ってなんだっけ？　最初に作ったソードとかだっけ？」

「そう、採算度外視のプロトタイプ。桁違いの性能で扱い切れないからってデチューンしたのが、今ある武器の二元」

「へー、そんなの作れちゃうんだ！　すごいおじいさんだったんだねあのおじいさん！」

「いや、あの人は作ってないからね。パティちゃんは少しぐらい人の話を聞いてね……」

呆れて物も言えない風のティア。

「細かいことは気にしない！　そっかー、そんなにすごい人なら、あたし用の武器とか作ってもらおうかなー」

「だから今はやる気がなくて……」

「それとも、あなたが作る？　あたし用の武器ー」

「なんで試してる風なんだ……」

「ええっ!?　リーダー、武器も作れるのか!?!」

「そうだったんですか!?!」

「いや、作ってるのはその人じゃないって……ボケが多いと大変だな」

お疲れ様です。

「確か、ここらにいるって話だったな」

「はい。休憩スペースにいる、黒くて厳ついキャストがそうだって言っていましたけど……」

暴投球が的を射たような言動をするパティとティアの背中を見送った後、俺達は刀匠ジグに会いに行くことにした。

今がどうであれ、有名人の居所が知れば一目見ておきたいと考えるのが人間だろう。

俺としてもかの刀匠の技が盗めればいい……とまでは期待しないが、大戦争の影の立役者に実際に会ってみたい。

そんなことを考えつつ、ショップエリアの休憩スペースを歩き回っている。

「ん？ あれじゃねえか？」

モアがそう言っ指差す先には、成程。確かに黒くて厳ついキャストがいた。

黒を基本色とした中に赤い線が走っている、アングリフ・シリーズのパーツで出来た機械の男は、休憩スペースにあるテーブルの椅子に腰掛けて、茶を飲むでもなく（機械体のキャストだが、食品を食すことも、その栄養素を動力に変換させることも出来る）、ただただ黄昏れていると言った様相だ。

なんか……仕事も趣味もなくて暇を持て余している大人みたいだ

な……。

遠くから見ててもしょうがないので、そのテーブルに近付いて話し掛ける。

「ごんち」

「……なんじやお主は。儂を笑いにでも来たのか？」

「……………」

食い気味に決めつけられた。

「こりやあ重症だぜ。」

「ふん。好きに笑え。この刀匠ジグ、齢七十五にして既に枯れたようだ」

「あ、あの！ わたし達、笑いに来たなんて酷い事は考えてませんよ！

ただ、あの刀匠さんがどんな人なのか、気になっただけで……」

「む、それはすまんろう。だが、燃えカスのようになった儂を見ても、面白くもなんともないじやろうて……」

ジエネのフォローも功を奏せず、ジグさんは再び遠い目（か？ 男キヤスト相手の表情変化はわからん）で頬杖をつく。

「燃えんのだ……。かつては泉のように湧いてきていた創造心というもの、奮い立たん」

「はあ……」

「四十年前の決戦時は心震えた……十年前の死闘もそうだ！ 大規模な戦いは情熱を掻き立てる。だが、戦線の鎮静化を受けて、儂の情熱も冷めていった……」

要するに、平和の弊害ってやつか。

今でもダーカーの襲撃はあるが、ゼノさんによると十年前までに比べりや可愛いもんだそう。四十年前の大戦頃になると、経験してい

るだけで箔がつく程。まあ経験してても、キャストを除けば第一線を退いたおじいちゃんおばあちゃんだらけだ。

このところダーカーの被害は右肩上がりだそうだが、それを見て可愛いもんだと言われている以上、まるでお話にならないのだろう。

(だから安全だつて考えんのも、お粗末な話なんだがな……)

「武器を手掛けたい気持ちはあるが、中途半端な物は作りたくない。これは、職人の矜持じゃ」

「まー、俺の知り合いもそういう時期はあったんで、理解はありますけど」

ほんと、こういうのはいきなりどうこうなるもんじゃないしな。

俺の場合はとにかく作って作って、全ては完成に至る為の中途なのだと自分に言って聞かせたものだ。

今でもその中途。

完成は、創世器を超える事だからな。

「……すまんの。愚痴に付き合わせた。お主には、何故か話しやすくてな」

「気にしないでくださいや。俺も気にしないんで」

「愚痴ついでに、一ついいか？ もし、僕の情熱を滾らせるような何かを見つけたら、持ってきてほしい」

「何か？ ですかい？」

「インスピレーションを刺激するような、そう、刺激的な何かを、の」
「勿論ですよ！ 困ったときはお任せあれ！ です！」

「おれも！ 頑張つてなんか探してやるからな！」

「……………」

考える前に二人が引き受けてしまった。

ここで「めんどい」って俺が断ったら、俺が空気読めない奴みたいだし、黙つとくか。

本気で嫌なわけでもないし、まあついであってことで。

「おお、そうかそうか。頼まれてくれるか」

「お、そうだリーダー！ リーダーの持つてる武器なら珍しいやつだし、いいんじゃないか？」

「えー。これで刺激が来るとは思えないけど……」

言いつつ、とりあえずエレキを取り出して、テーブルに置いてみる。他にも、ブーステッドみたいな置くだけでテーブルが壊れそうなやつは除いて、自作武器の一式をテーブルの上に広げていく。

創世器を日頃からメンテして目が肥えてるだろう刀匠相手じゃ、大したやつでもないと思うが……。

「ふむ……」

テーブルに並べられた自作武器を見て、手に取ったり、ギミックを俺に確認したりしていたが、やがてジグさんはそれらをテーブルに置く。

「発想は面白いと思うが……儂の刺激にはなれんようじゃ。すまんの」

「いえいえ、面白いって評価だけでも嬉しいですよ。俺も、製作者も」

「しかし、解さんの……」

首を傾げつつ、ジグさんは言う。

「解せない？」

「見たところ武器毎に様々な機能を付加しているようじゃが……その作りを武器の威力を底上げするのに回せば、攻撃力向上は可能な筈じゃ。この武器の製作者は、何を思ってそうしなかつたのか……」

「……………」

「？ ハクさん？」

「……なんでもねえよ。それじゃジグさん、またなんか見つけたら尋ねますんで」

「うむ。待っておるぞ」

二人を伴って、ジグさんの元から去っていく。

……成程。熱が冷めようと、流星は刀匠つてところか。

それにしても、インスピレーションを刺激するような何か、か。

あの人相手じゃ、それこそアークスでも行方知れずの創世器でもない
いと無理そうだが。

（二人が）震える凍土で武器探し

刀匠と会った翌日。

早速俺達はお眼鏡に合う武器を探そう、ということでは凍土エリアに来ていた。

武器探しに何故惑星に降りるのか、なんて疑問があるだろう。

説明すると、エネミーを倒すことで、そのエネミーが武器を落とすことがあるからだ。

エネミーにアークスが殺される、あるいはアークスが廃棄することで放置された武器の破片、もしくは丸ごとを捕食された時。その武器がエネミーの肉体の中で残存し続け、エネミーの細胞を取り込むなどして変化し、アークスがエネミーを倒した時にその武器が形となって出てくることもある。大概元以下の武器になるだが、稀に元よりも良質な武器として変化することもあるのだ。攻撃した武器が影響を与える事もあってか、倒した武器と同系統の物が比較的多く出るらしい。

これが、俗に言う「レアドロ」というものだ。

このレアドロ目当てに、わざと惑星に武器を放棄して、エネミーが捕食してレアドロになって出てくることを狙うアークスもいるとのことだ。

捕食するエネミーが強ければ強い程、その細胞を取り込んで現れる武器も強くなる可能性も大きくなるというものだが、言ってしまうえば買える武器を元手により強い武器を狙うギャンブルのようなものだ。弱くなるだけならまだしも、他のアークスがそれを掠め取ってしまうば目も当てられない。それもあって発信機を取り付けて捕食させることもあるそうだが……その発信機もエネミーに捕食されて信号が変化してしまうわけで。更に稀に、アークスが倒す事によってそのエネミーの身体を変質させ、武器やユニットとなって形を成す事もあるとのこと。俺はまだお目にかかった事は無いが、それはそれは奇妙な

体験だそうだと。

長くなった。

とにかく俺達三人は凍土エリアへと降り立ったわけだが。

「マント着けてもそれかお前等」

「さ、さ、さむすぎだつてば！」

「いいい今更ですけど、ウエポノイドも……寒さを感じるんですね。うう……ぎ、ぎむい……グスッ！」

この有様だ。

確かに前回来た時よりも気温は低下してるようだが……これじゃあマントを買った意味が……。

値が張るし動きも阻害されるから敬遠したが、毛皮のマントにすべきだったかね。

「ジエネはいいじゃんか！ オレなんか、半そで！ 半ズボン！ だぞ！」

「だからやめれとあれほど……」

「そ、そうですけど……すごく寒いですよ！ あ、マントの中に一緒に入りますか？」

「ええっ!? い、いや、いい！ いい！ 大丈夫だぜ！」

せつかくの誘いに、モアは拒否反応。

全く、これだから中途半端に成長してる子供は。ジエネと言えどそんな誘いしてくれるのなんて、お前ぐらいの年が限界だぜ？

「お前等、ジグさんのお眼鏡に適う武器を探すつて約束したのはそつちなんだから、気張って探せよな」

「が、がんばるけど……寒すぎるっ。うううう……まつ毛が凍るぜ」

「寒いと言うと寒くなると、聞いたことがあります。寒くないと言えばきつと……！」

「このレベルの寒さは、気持ちのもちようとかそういうんじゃないと思うってば……っ」

「……そうでしょうか？ モアは、寒さに弱いんですね」

自分の事は棚に上げて、再びマントを開いて内側へと誘うジエネ。

「やっぱり、わたしのマントの中に入りませんか？ 少しはあつたかいですよ？」

「いや、いいってば！ は、恥ずかしいだろ！ オレだって、男の子なんだからなっ!!」

「ふーん。お前も一応反応するものはあるんだ」

「？」

「どういう意味だってば！ っていうか！」

ズビシっ！ と俺を指差すモア。それはもう、そのまま俺の目玉に突き刺さんばかりの勢いである。

「なんでリーダーは涼しい顔してるんだってば!? マントも何も着けてないのに!!」

「あ、今更？」

マント買った時にも平気だって言ったのに、その時は強がりだとも思っただのかね。

この前のロジオの時もそうだが、俺は森林エリアと変わらず、戦闘服一つのみである。防寒着のマントを着けてもガクブルの二人には、俺がなんともなさそうなのが不思議なのだろう。

うーん。

まあ、これくらいは言ってもいいか。

森林の共棲エネミー共相手した時に、粉末だらけになりたくないから風のテクニツクの応用も見せたことあるしな。

「テクニックを上手く使いりや、体温の調節ぐらいなんてことねえよ。この場合だと炎のテクニックを着火しない程度の威力で展開して、ちよつと温かいフオトンを纏ってる感じだな。逆に暑い時は、氷のテクニックを展開して涼しくなる」

「ええ!? そんなことが出来るんですか!?!」

「なんかうさんくさいってば……ガマンしてるだけじゃないのか?」

「別に疑うのは勝手だが。……確かめるには、俺にくつつくしかないんだよなあ」

ちよつとした悪戯心でそう言ってみる。

さつきもモアをマントの内側に誘うようなジエネだが、流石にこんな誘いに乗るとは思っていない。とはいえ、そろそろ俺も煩惱に塗れた男なのだと思い出してもらいたいところだ。無防備なのは可愛さだが、度が過ぎると危なっかしいだけだ。ジエネみたいな男を惑わす爆弾ボディなら、尚更。試験チームとはいえ、せつかく美少女と知り合つた訳だし? 酷い目に合わされるのは胸糞悪い。

さて、ジエネはどんな感じで拒否するか――

「そうなんですか? それじゃあ、失礼しますね」

「え」

「オレも!」

モアが頭に乗つてきた。

それはいい。どうでも。

ジエネが背中から抱き付いてきた。

「……………」

「ふわあああ……あつたかいですう……」

「すつげー! 湯たんぽみたいだぞリーダー!」

ぽかぽかあつたまつてる二人。

……もし、ハクさんは何を言っているやうか。

とりあえずこの事は日誌で注意しといて、自発的に離れるのを願うか。

うん。ほんと、背中感触が惜しいとかじゃないから。順位付ける気ないってか付けようもないけど、マトイとは違った幸せな感触だけど、全然ないんだからね!!

「……んじゃ、そろそろ動くか」

非常に身動きの取り辛い状況で、俺は引き摺るように歩き出した。

「戦って動いたら、さいしよよりはマシになったってやつだ!」

エネミーと遭遇したので、流石に離れて戦闘。

おのれ愚物共が。

ガルフル共の戦闘は、問題なく楽勝だった。モアもグラインダーとつぎ込んだ甲斐あってパワーアップしてるらしく、ガルフル相手で一対一ならなんとか戦えるようになる程になっていた。複数になると俺の方に飛んでくるが。

ジエネの方もとりあえず身体もあつまってきたよう形で、俺にまた抱き付く自体にはならなかった。

武器を仕舞い、再び歩き始める。

「チームで一番の寒がりだが、ウエポノイドのモアだなんて、少し不思議な話ですね」

「ふしぎなんかじゃないぜ! 寒さも感じるし、つかれたら眠くなる。

お腹も空くし、ご飯だって食べる。オレはいちばん、お肉が好きだ！
につくー！」

「ええ？ ウエポノイドって、ご飯も食べるんですか？」

「ほーん。グラインダーが食料って訳でもないのか」

「チップから離れられないだけで、そんなにふたりと変わらねーぜ！」

ウエポノイドとそのチップはセットでなくてはならないらしく、あまり離れすぎるとウエポノイドの人格が抜けて、抜け殻のようになってしまいうらしい。

再びチップに近寄れば人格も戻るが、それまでは完全無防備。その間にエネミーに攻撃を受けるなどしないように、ウエポノイドとチップが一定距離離れると、その場所を座標にして転送されるようにしてあるようだ。

チップがフリーの状態ならチップがウエポノイドの元に。アークスがチップをスロットに装備している状態ならウエポノイドがアークスの元に。

今はジエネのスロットに装備しているので、ジエネとモアとが離れすぎるとモアがジエネの元に転送される仕組みなのだ。と言っても、近くに、ではなくチップの中に、であるが。

「ほおおー！ 不思議ですね。わたし、気になってたことがあるのですが……」

「んー？」

「ウエポノイドって、どういう仕組みでチップ化して生まれるんです？」

「!! え、え？ ええ、いや、……えーつとー！」

『ジエネちゃん。実は私達も、詳しいメカニズムは解明できていません。ウエポノイドへの聞き取り調査も行いましたが、詳しく説明できるものはいませんでした』

通信からセラフィさんの声。

「オレも、なんで動けるのかとか……ゼーんぜん分からねーんだ！」

「これも、宇宙の神秘なんでしょうか……！ うーん……！」

「ははは！ そうかもなっ！」

「……………」

……ま、いいか。

特別興味があるわけでもないし。

頭を悩ませるジエネがすっ転んで、考え事は後回しにしようとなつたところで、再び探索開始。

「モアはお肉が好きだそうですね、ハクさんは好きな食べ物とかあるんです？」

「ん？ 意外と甘党」

「ええっ!? 意外です！」

「自分で意外って言うなよな……」

「でも、わたしも甘い物が大好きなので分かります。士官学校時代の学食は、いっつもデザートを付けちゃうくらいなんです」

「懐かしいなー。プレミアムデーとかで、でっかいパフエが出てきたこともあったっけか。バカ高えけど、つつい頼んどじまうんだよな」

「はい！ ……でも、カロリーが溜まりやすい体質なので、すぐ身体が重くなっちゃうんです……………。ウエストはそんなに変わらないのに、不思議ですよね？」

「ああ、うん…………」

「お、おれも！ 甘くて美味しいの好きだぜ！ お菓子とか止まんなくなるよなー！」

「そして虫歯になってドリルでチユイーンされると…………」

「モア！ 菌磨きはきちんとしなきゃダメですよ！」

「してるってば！ 勝手に決めつけんな！」

「ほんとかあ？ 虫歯菌は潜んでたりするから、溜まりに溜まって一気にドツガアンと歯を——」

ドツガアン!!! と。

遠くから、地面に響く程の爆発音が轟いた。

「おっ。」

「うわああ!?!」

「きゃっ!?! ば、爆発!?!」

びつくりこいた二人を横目に、近くだけを探っていた探知を目一杯
拡げる。

……ふむ。アークスとダーカーの反応だな。

遠めに集団のダーカー共と、デカい力を持つてるアークスが一人。
ついでにその近くで隠れてるアークスが一人。

「……先に進むなら、ちよつと待った方がいいわよ。まあ、進みたいん
なら止めないけど」

んで、今俺達に近寄ってきた奴が一人。

高台に上っていたらしきそいつは、俺達の傍まで軽快に降り立ち、
何事もなかったように忠告してきた。

「うえ?」

「お、女の子?」

そいつ——見るからに小柄で年下と見受けられる少女は、この凍
土には似つかわしくない、どころか森林エリアの気候でも目に付く程
の軽装だった。所々小さなオシヤレがしてあるのは年頃の女の子ら
しくはあるが、しかしアークスとしては珍しいものだろう。

銀色と言えばいいか、灰色と言えばいいか。言い方悪く言えば鼠色
の髪は、ポニーテールにして尚、太腿にまで届く程の長さ。

顔立ちから見ると、勝気な性格をしていそうだ。属性をつけるなら

確実にツンデレ枠になるだろう。

「で、でも今の爆発……大型エネミーと戦ってる音なら、助けに行かないとー!」

「心配せんでも、ありやアークスだよ。周りのエネミー共を吹っ飛ばしてるだけだ」

「? なんでそんなのわかんだよ?」

「分かるから」

「適当な受け答えね……。心配せずとも、多分すぐ飽きて帰るから」
「飽きる!?!」

話してる間にも、爆発音は続く。

嫌な感じはしないからその点は安心だが、反応の大きさからしてこりや六芒均衡だな。この前パーティが言ってた小さい女の子の、ってやつか?

細かく的確に、なんて気はこれっぽっちもないらしく、明らかにオーバーな範囲を吹き飛ばしているようだ。テオドルも相当だったが、ここまで豪快だとエネミーの掃討より周囲の地形変化の方が目につきそう……。あ、隠れてたアークスが吹っ飛ばされた。

うーむ。

一度その顔を拝んどきたいとこだが、巻き添え喰らうのも嫌だしなー。

「ふわぁ、すごい音です……」

「アークスだったら、明らかにやり過ぎだつてば……」

「全く。制御って言葉を知らないのかしらね、あのおばかさん。まあ、あたしには関係ないけど」

呆れたように言う少女。

その言葉を合図にというわけでもないが、向こうのエネミー反応は全部消え、そのアークスもどこかへと消えていくようだった。

「……音が止んだわ。もう進んでいいんじゃない？ それじゃね」

少女はそう言い残し、軽快な動きでその場を後にした。

「あ！ ……行っちゃいました。お名前、聞けませんでした」

「なんだ、アイツ。関係ないって言うのに口出ししたりさ」

「さあ？ 悪ぶりたい年頃なんじゃね？」

「さっきのじいちゃん、なんかいいヤツだったな！」

「ジャンさん、でしたね。ジグさんの為に武器を探す人、わたし達以外にいたんですね」

あれからも歩く続けること数時間。まあ分かっていたことだが、武器探し自体はさっぱりだった。

先程は、前に会ったガングロじいさんと遭遇した。俺達と同じく、ジグさんの情熱を取り戻す武器を探しているとのこと。

俺としてはこんな凍土を歩き回ってエネミー共を狩り尽くしたところでそんな御大層なモンが入るとは思っちゃいないが、主目的はこの二人と共にこの凍土エリアの地形とエネミーとの戦闘に慣れることだ。武器探しはあくまでついでのだが、この二人はそうではないらしい。

さて、何時頃帰還にこぎつけるか……。

「お」

そう考えながら歩いてしていると、視界の先にメルフォンシーナの姿を見つけた。

「あ……ハクメイ様、ジエネ様、モア様、こんにちは」

向こうも俺達に気付き、ペこりとお辞儀する。

この二人まで様付けとは、極まってる感じだな。

「あ、こんにちは」

「あーっ！ お、お前は……！」

そう言つて、バツ、バツ、と周囲を見渡すモア。

まるで天敵の姿を探す被捕食生物だが、俺も探知が無かったらそうなつてたのかね。

まあ、あいつに会いたくない気持ちは分からんでもない。

「……警戒せずとも、今日はゲツテムハルト様はいらっしゃいませんよ」

「な、なんだそっかあ……」

「正しく言えば、私が置いていかれました……よくあることです」

「ええっ!? そんな、酷い……」

はーん。

あの野郎ならやりかねないとは思うが、こいつもいつも付いて行けるわけじゃないのね。

んで、こいつもそいつを探してこんなところまで来てんのか。

「特に用件はありませんので、私はこれで失礼いたします」

二人が何か言う前にそう言つて、メルフォンシーナは踵を返す。

「……あまり私と話をしていると、貴方様がたも不幸になってしましますから……」

「え？」

「……………」

呆気にとられている二人を横目にメルフォンシーナは足早に去っていった。

その姿が見えなくなったところで、モアが言う。

「なんだあいつ……。なんか、すごく悲しそうな声してたな……」

「不幸になってしまう……。なんて、そんな、自分が疫病神みたいに」

「さーてね。何を思っただのゲツテム野郎に付いて行ってんだか、そこ含めて謎だらけのやつだよ」

「？ リーダー、なんか怒ってるのか？」

「？ なんで俺が？」

「いや、なんか……。怒ってるみたいだから、怒ってるのかなって」「んー……。？」

……自己分析してみりゃ、成程。確かにちよつとイラついているみたいだ。

だが、それが何に対してなのかが分からん。

今のやり取りじゃあメルフォンシーナに対して、としかない筈なのだが、しかしどうしてか、それはない気がする。

前もあつたなこんなの。

ああ、全く。厄介な主従コンビだこと。

「……ま、気にしてても仕方ないし。さっさと次に——」

「あ、ああっ！ 相棒、ちようどいいところに！ おれの話聞いてくれ！」

と。

パニックだったアフィンがいきなり現れた。
大分長い距離を走ってきたのか、かなり息切れしている。

「なんだよアフィン。そんな慌てて」

「相棒？ リーダー、こいつ誰？」

「……あ、もしかして、この前言ってたアフィンさんですか？ 初めまして！ わたし、ジエネって言います！ ハクさんには、いつもいつもお世話になってます」

「あ、こちらこそ……じゃなくて！ さつきさ、凍土の奥の方で見たんだよ！」

「見た？」

要領を得ないなあ。探してた人が見つかったんなら、そう言えば――

「この前の、あの仮面の奴だよ！」

「!!」

「?」

仮面野郎が……!?

くそっ……森林で感じ取れなかったからもういないと思ってたが、凍土エリアに行動範囲を移したのか!?

探知範囲にはいないようだが、あいつのスピードを考えると範囲外から一気に迫ってくる可能性もある。今こうして話している間に、いきなり目の前に現れてもおかしくないのだ。

あいつはマジで会いたくない奴1位だからな……。2位がゲツテム。

「……どんな様子だった？ 遠くから見ただろうし、分からないなら分からないでいいが……」

「なんか、何かを探してきよろきよろしてるみたいだった！ この前

も狙ってきたし、もしかしたら相棒を探してるのかも……」

「チツ、全く俺が何したってんだ」

「とにかく、この奥に行くんならお前も気を付けろよ！　じゃあ、俺は帰るから！」

そう言つてアフィンは慌てたままテレパイプを呼び出し、転送によつてキャンプシップに帰つて行つた。

テレパイプはすぐに消える。

相当焦つて出発したな……ま、気持ちは分かる。

「なんだ？　次から次へと……。ま、いいか！　よつしやリーダー！」

「それじゃ早速——」

「ああ、俺達も帰るぞ」

「出発……つてええ！　帰んのかよ！」

「どうしたんです？　そんなにその、仮面の人に会いたくないんですか？」

「会いたくないね。心から会いたくない。会いたくなさで言えばゲツテムをぶつちぎってる」

「そ、そんなに嫌な奴なのか？」

「嫌っつーかマジでヤバイ奴なんだよ。この前もいきなり殺されかけたし」

「「ええ!？」」

とにかくあの野郎に遭遇しない為に、俺達もテレパイプを呼び出してキャンプシップに帰還することにした。

もうちよつと、こう……予兆的なのをさあ……

「なんていうか……意外です。ハクさんにも怖いものがあつたんですね」

「実物を見たことないから意外だと言えるんだよ。あれは恐怖心を忘れててもそれを思い出させるヤバさだ。モアだったら漏らすまである」

「漏らすかつ!!」

アークスシップに帰還し、ゲートエリアを歩く俺達。

さて、逃げ帰るように戻ってきたが、この後どうすつかなあ。

とりあえずテレパイプでも買い足しとくか。

「俺はちよつとシヨップエリアに行つてくるけど、お前等は どうする？」

「わたしは、マトイちゃんに会いに行きますね！ もっともつと仲良くなりたいですー！」

「おれはセラフィさんのとこ。今日はもうなんもないだろ？」

「そうだな。とりあえず今日は凍土エリアに行きたくねーし。他の惑星も、もうちよいお前等が戦闘に慣れてからだな」

ナベリウスでの任務が多くなっているとはいえ、アークスが赴く惑星はそれだけではない。かといって慣れていないエネミーを相手にするには、ちよいと経験値が足らんのだ。ジエネはこれでもアークスとしての訓練を積んでるだろうが、モアはそうじゃない。ま、俺からしたらどっちも初心者だが。

言うて俺もあんま偉そうなことも言えんか。

ゼノさんにはボロ負けしたし、仮面野郎には戦う気も起きない。

あいつと打ち合ったゲツテムも相当だろうし……ムカつくけどな。

「んじや、買い物終わったら俺もマトイに会いに行くわ。また後でな」
「はい。きつと、マトイちゃんもハクさんを待ってると思いますよ」
「そんじやなー！」

三人それぞれ向かう所に向かい、分かれる。

俺もゲートエリアからショップエリアへと転送するテレポーターに向かい、ショップエリアを目指す。

テレポーターに乗り、転送が開始された所で、呟いた。

「さてと、他に買うような物は——」

ブラックアウト。

「そしてここに来てくれたのが、ハクメイさん！ 貴方なんです！」
（——ん？）

視界が開けると、目の前には興奮した様子のロジオがいた。

場所は……目指してた通りにショップエリア。だが、転送される地点ではない。転送事故が起こったにしては、何事も無さすぎる。

そもそも、いきなり転送された俺にいきなり興奮気味に話し掛ける程、ロジオは精神障害が起きてる奴でもない。

いや、そうじゃない。

そもそも、というなら本当にそもそも。

ロジオとこの様子と言葉に覚えがあり過ぎた。

「お願いします！ 時間のある時で構いませんので！」

「……………」

「…………あの、やはり駄目でしょうか？」

「…………ああ、いや。依頼は受けるよ。ちよつと他に考えることがあつただけ」

「あ、ありがとうございます！」

「森林エリアは後回しで、情報がより少ない凍土の方に、でいいんだよな？」

「はい。これから言おうと思っていたのですが…………話が早くて助かります」

(そりや一度した話だしな)

マターボードを開く。

シオンから渡されたそれは、全て埋まっていた。

(…………結論。まーた時間転移したわけね)

二回目とはいえ、俺も落ち着いたものだ。

ロジオからはマターボードは見えていないが、何も言わずディスプレイを投影させた俺に首を傾げている。

が、それに構うのは後だ。

…………前回の時間転移では、あいつ自身もマトイの救出が目的だったと考えて。今回も何か目的、時間を巻き戻してまでやりたい事がある筈だ。

あの時は、ナベリウスの広場から伸びた三つの道の内、真つ直ぐ進んだのが転移前。右に曲がったのが転移後。

いわば運命の分岐点と言えるあの場所で、右に曲がった時にマトイの救出が達成された。

ならば、今回この時間、この場所に転移させて、元の時間までに分岐があるとするなら――

「なあ、ロジオ」

「はい。なんででしょうか？」

「調査に俺以外の奴連れて行くけど、それは問題ないか？」

「勿論です。ご協力して頂ける方が多ければ、それだけ調査も捗りま
すし、貴方も安全でしょうから」

「それはどうかね」

「あーいたいた」

日誌にはこの辺でマトイと話してたとか書いてたから来てみたが
……もの見事にドンピシャである。

メデイカルセンター前には、にやけ顔を押しさえながらくねくねして
るジエネと、その前でちよつち困ってる風のマトイ。そしてその横で
呆れた視線を向けるモア。

傍目から見たら「なんだこれ」状態である。

日誌でも何が起こったのか訳わからん感じだったが……まあいい
か。可愛いし。

声を掛けに行く。

「おーいお前らー」

「あ、ハクメイ」

俺を見つけ、マトイは喜色満面という顔をする。

もー、愛い奴め。

とてとてと俺の傍に近寄るマトイ。ジエネもようやく俺に気付い

たように、俺に挨拶する。

「こんにちは、ハクさん。今日はどうしたんです？ あ！ わたしはちゃんとお休みしてますからね！」

「それなんだがな……ちと依頼を受けたんだが、それにお前らも連れて行こうと思って。作業自体は簡単だし、かるーく経験させよう」と

「依頼？」

「ああ、凍土エリアで」

「ええっ!? マジかよ、なんの準備もしてねえぞ!」

「そう言うと思って、ほれ。用意しといてあるから」

ジエネ用の毛皮のマントと、モア用の毛皮のスカーフを取り出す。

これに加えて暖を取る用の薪とかもアイテムパックに仕舞ってあるが……まあこれは帰還できなくなるような緊急用だ。出番がないのを祈っておく。

火種はフォイエればいとして、燃やす物がないと焚火も出来ないからな。

それぞれ渡して、依頼内容について話していると、マトイが横から話しかけてくる。

「……なんだか、用意周到だね。そんなに寒いのか？ 凍土エリアっていうところ」

「そうですね……。一面真っ白！ 氷と雪の銀世界！ とっても幻想的！ なのはいいんですけど……」

「寒すぎて凍るかと思っただけ……。でも、こんなにもこもこのマントがあれば、それもかいけつだな！」

「……………」

フラグが立った。

そんな気がする。

「うう、なんだか聞いてるだけで寒いね……。みんな、気を付けてね？」

「は、はい！ よーし！ 頑張りますよ！」

「よっしゃー！ そんなじゃ、しゅっぱーっ！」

「おー」

三人揃ってマトイから元気をもらったので、ゲートへと向かう。

……さて、とりあえずこの二人は連れて行く形にはした。

あと気になる事と言えば……あれだよな。

「うん、知ってた」

「さ、さ、さむすぎだってば！」

「いいい今更ですけど、ウエポノイドも……寒さを感じるんですね。うう……ざ、ざむい……グスツ！」

いやほんと、焼き直しみたいなやり取りだわ。

時間が巻き戻ってるんだから、当たり前前っちゃ当たり前前んだけどね。

結局毛皮にしたのは無駄だったか。まあ、そこまで目くじら立てる事でもないか。

「ジエネはいいじゃんか！ オレなんか、半そで！ 半ズボン！ だぞー！」

「そ、そうですね……すごく寒いですよ！ あ」

「一緒にマントの中に入るってのは無しな」

「ええっ!? なんて分かったんですか!？」

「お前の考えぐらい俺にはお見通しだよ。たく、一応モアにも反応するものはあるんだから、下手にそういうことするとモアがお前で色を覚えちまうぞ?。」

「? 色なら、モアにも分かりますよね? ほら、あの雪の色が白です」

「そんなの見りや分かるってば……」

「マジかこいつ……」

結構ストレートに言ったつもりなのに、この程度の言い回しに首を傾げるのか。

うーむ。

多分だけど、周りの奴からそれとなく注意を促されてもこんな感じで流しちやったんじゃねえのかな。

ジェネの両親は幼い頃に死んでしまったと聞いたが。その後育てた奴、どんな教育してんだ。

『……あの、よろしいでしょうか?』

「あーすまんすまん。通信は届いてるぜ、ロジオ」

『改めて、依頼を受けて頂いてありがとうございます。データはこちらで取得していますので、みなさんはそのまま奥地まで進んでください。道が険しいので、お気をつけて』

「おうよ」

「が、がんばるけど……寒すぎるっ。うううう……まつ毛が凍るぜ」
「寒いと言うと寒くなると、聞いたことがあります。寒くないと言えばきつと……」

「このレベルの寒さは、気持ちのもちようとかそういうんじゃないと思うってば……っ」

「……そうでしょうか? モアは、寒さに弱いんですね」

「だからってやっぱマントに入るってのも無しな」

「あう。やっぱり、ハクさんにはなんでもお見通しなんですネ……」

まあ未来から来たんだから当然っちゃ当然だ。

さて、そろそろあのダーカー達と遭遇した分岐路だが……これ以上話すと体温調節のテクニック応用について話すことになる。別にそれを話すのは構わないが、その後くつつかれる——のは、非常に惜しいが、ここで急に立ち止まるのも不自然だしなあ。

そう悩んでる内に、分岐路に辿り着く。

「ていうかリーダーは——ん？」

何かを言い出そうとしたモアだったが、目先の空間が歪んだのを見て、言葉を止める。

そうして、前回と同じようにプリアーダが二体姿を現した。

「！ダーカー！」

ジエネが両剣を構える。モアもクレイモアをその手に持ち、俺もポーズとしてエレキを呼び出す。

が、やはり前回と同じく、その二体は俺達をしっかりと認識しながらも、興味なさげに視線を外し、俺達から見て左側への道へと消えて行った。

「あれ？」

「飛んでつちまったぞ？　なんでだ？」

「ふむ……」

こいつらを連れても結果は変わらず、か。

探知反応も前回と変わりなし。ロジオの言ってた通り、何かを探してるのかね？

ロジオから通信が届く。

『今のデータは……ダーカー、ですか？ アークスを見つけたら襲ってくる資料にはあるのですが……』

「はい。わたし達に気付かなかったわけじゃないです」

「けどなんか……それどころじゃないって感じだった。なんか探してたのかな？」

「ああ、お前もそう思うか」

「ってことは、リーダーもか？」

「ま、ただの勘だけど」

「……あの、追ってみませんか？」

おずおずと、ジエネがそう提案する。

「なんだか気になります。もしかしたら、他のアークスの人を追ってるのかも……」

「げえっ!? それだったらヤバイじゃんか！ 助けに行かないと！」

まあ、こう言うだろうとは思ってた。

ジエネの言う可能性は低だろうが、しかしこの時間に転移した以上、放っておくにはこの事象はあまりにも不自然だ。

「ま、俺はそれでいいけどよ。ロジオはいいか？ 依頼は後回しになっちまうが」

『いえ。可能性と言えど、人命には代えられません。予定地点とズレてもデータは取れますので、お構いなく』

この辺は俺が自分一人で納得してたから提案も何もしなかったが、ロジオはジエネの提案に反対はしなかった。

「それでは、行きましょうー」

そうして俺達は、ダーカー達が向かった岐路の左側へと向かった。

身体を温めるといふ目的もあつて、少しハイペースで先に進む。

ダーカー達も余所見をしていてファーストアタックを楽に仕掛けられる。攻撃すれば反撃はされるが、しかしかなり楽に倒すことが出来た。

しかし、ジエネの息は上がっていた。

「っ、はあ……、はあ……」

「なあリーダー。ジエネがちよつと疲れてきてるつてばー！」

「へ、平気……です。これくらい……」

「疲れた援軍が来たつて、助けられる側は安心できねえだろ。歩きながらでいいから、レーションとモノメイトくらいとつとけ」

「うう……」

平気つて言つてるのに……とでも言いたげなジエネの視線を受けつつ、少しペースを落として歩く。

レーションはアークスの携行品の一つで、栄養補給用のアイテムだ。

ベジタブルレーション、ミートレーションなど、味と栄養素がそれぞれ違う種類があるが、食感はゼリーみたいなもの。腹は膨れるが、食つた感じはしないだろう。

とはいえ職業柄、呑気に料理を食べてる場合でもない時はあるので、仕方ない。

レーションとモノメイトを交互に口にするジエネを見ながら、思考に入る。

(さて、ここで一つ考えてみるか。シオンの目的について)

まずは前回の時間転移と、今回の時間転移を照らし合わせてみよう。

場所はエリアが違えど、同じナベリウスの地。それに前回はキャンシップから降り立った時に起きたが、今回はアークスシップ内で時間転移が起こった。どちらもテレポーターでの転移中によるブラックアウトでだ。戻る時に転移はなかったが、ブラックアウトは同じく起こっている。

前回は十字路がある広場でダークカーの発生が起こり、その時間こえた声と、引つ張られる感覚に従った結果、仮面野郎と遭遇し、マトイを救出するに至った。

今回は聞こえる声も、引つ張られる感覚もない。しかし不自然な行動をするダークカーを追って、今ここに至る。

そもそも、何故マターボードが埋まった？

今回は集めようと思つて集めたわけではなく、こいつらとチームとして行動してたらいつの間にか埋まっていたのだ。

意識的かどうかは関係ない、のか？

時間転移する前に来た時と、時間転移した後では、俺が持っている情報に違いがあったのは確か。今回もそうだとすれば、持っている情報はなんだ？

メルフォンシーナがゲツテムハルトに日常的に置いて行かれる事。疫病神のような発言。ポニテの少女。小さい六芒均衡。ジエネにもシオンが見える。モアには見えない。数日後には凍土エリアに仮面野郎がうろついてるらしい。ジグさんは情熱を取り戻せるような武器を探して――

(……まさか、創世器か?)

創世器。

六芒均衡に選ばれたアークスが振るう武器の名称だが、しかしここ

で一つ考えてみよう。アークスでトップの實力を持つ六人から六芒均衡が選ばれるが、ならそれが持つ創世器は六本しかないのか？

答えは「ノー」である。

例えばレギアスの『世果』ヨソハテ。まずレギアス以外に扱えるかが疑問だが、これを扱えるハンタークラスでなければ六芒の一を継ぐ事は出来ない。しかし、クラスによって限定されるならば、それは純粋なトップ6内にいるとは言えないだろう。俺達第三世代はともかく、第二以前の世代はゼノさんのように無理でもしなければクラスを変えることは出来ないのだから。

だから正解は、『創世器は六本だけではない』。

かといって無限にあるわけでもないし、ある程度限定することはあるだろう。知られているのは六本だけだが、アークス側の事情で秘匿されている創世器もあると考えられる。しかし、大昔に作られたのだ。この前も言ったように、戦死した創世器持ちが落とした創世器が、行方知れずという可能性だつてある筈だ。

そして、数多の武器を手掛け、六芒均衡の創世器のメンテナンスを引き受け、その目を肥えに肥やしたジグさん相手では、並大抵の武器で情熱を取り戻すなど不可能。考えられる可能性としては、それくらいしか思いつかない。

……しかし、創世器か。

それっぽい力など感じないし、例えばそれを探して六芒均衡がナベリウスに来てるのだとしたら、人知れず回収したいにはあまりにも人選が酷い。

暑苦しく人助けに奔走するヒューイはもとより。小さい方も、目立ちたくないにはあまりにも戦闘が派手だ。他を隠す為の篝火のようなものだとしても、同じナベリウスに来るよりは他の惑星に派遣する方が効果は高い。

第一、創世器持ちが戦死するような場所に、新人の俺達が向かって

——その時。

音が聞こえた。

「……………ん？」

思わず、足を止める。

……………なんだ、今のは。

『ハクメイさん、どうされましたか？』

通信のロジオからの声。勿論これではない。

「いや、なんか変な音が聞こえてきてよ」

『音、ですか？ いえ、こちらのデータには何も検出されていませんが……………』

「え？ 聞こえませんでしたか？」

「？ 二人とも、何言ってるんだ？ オレにはなんも聞こえてねーってば」

ロジオとモアには聞こえず。

俺とジエネには聞こえた。

……………この組み合わせって。

「……………ジエネ。お前には聞こえたのか？」

「あ、はい。なんだか、キーンっていう、変な音が」

「で、モアには聞こえなかったと」

「そうだぜ」

「……………」

やはり、シオンを認識してた組と、認識できなかった組か。

となるとこの音は、シオンのものと同系統の何か……………？ それと

も、シオン自身……？

『あ、ああっ！… みなさん！… あれを見てください！…』

一人思考に耽る俺の耳に、ロジオの通信が響く。

俺達が進む先にある、凍土の崖に囲まれた広場のような、その中心を見る。

そこには、宙に浮いた結晶体のようなものがあつた。

「……なんだ？　ありゃ」

『なんででしょうか。人工物……みたいですね』

一人でゆっくり回転をするそれに、近付いていく。

危険なものを感じないが、どう考えても怪しい物体だ。だというのに、何の警戒もなく俺はそれの目前に立つ。

音がもう一度鳴る。

鼓動を、感じた。

俺のものではない。その結晶体に、生命を感じたのだ。

『アークスの残留物……？　……にしては不自然な気がします』

「でも、なんかキレーだな！　しんぴてき、って言うのか？」

「はい。でも、なんででしょう。この感じ……」

「……………」

後ろで喋る二人に目もくれない。

俺はその結晶体に手を伸ばす。

表面に硬い感触は無く、どころか手は何の抵抗もなく沈んでいった。

そして、その更に中心にある何かを掴む。

結晶体が、一際強く輝いた。

「わっ！」

光はほんの一瞬で消え、それに合わせて結晶体も消える。

俺の手にあるのは、一本の杖だった。

「……………」

持ち手であろう場所は白い帯を渦巻き状に伸ばし、片方は途中で折れ、片方は花卉が開いたような装飾を付けた場所から渦が広がり、そしてまた途中で折れたような、どう考えても壊れた形である。

創世器のような凄まじい力は、感じない。

お目当ての創世器でなくてガツカリ——という気は、何故か起きなかった。

『パラメータ的には、武器でしょうか？ それにしては、形がおかしい……………。壊れているのでしょうか？』
「こんな武器、見たことないって。壊れてるにしろさ」
「……………」

ジエネだけは何も言わず、俺の隣に来て、その杖を眺める。

「ジエネ？」

「……………なんでしよう、これ。見覚えは無い筈なのに、なんだか、すごく懐かしい……………初めてハクさんと会った時みたいな……………」

その時。

「ツ!!？」

バツ、と後ろを振り返る。
そこには。

剣を構えた仮面野郎がいた。

生死を賭けた凍土撤退戦

「ジェネ!!」

「え?」

ボケつとしてるジェネの腰を、杖を持った右手とは逆の左腕で抱き、その場から飛び退く。

一瞬遅れて、俺がいた地点に剣が振り降ろされた。

ジェネごと、ではないが、確実に俺は殺しにかかってきていた。

「あ、ありがとうございます……!」

『お二人共、大丈夫ですか!? その人は……?』

「うわあ! な、なんだお前え!」

(クソツ!! これに気を取られて探知を切っちゃまった!! つか、こんな時からもうこのエリアに来てたのかよ!?)

こいつがここにいるのは数日後だと思ってたから、ルートを外れる行為でも安心だと思ってたのに!

モアは慌てながらも俺達の方に飛んでくる。

ジェネもようやく状況を理解したようで、急いで両剣を構える。

どうする……? 俺達三人で掛かったところで、こいつに勝てるビジョンが全く浮かばねえ。テレパイプで逃げるにしても、隙が無けりゃ起動も出来ないし、出来ても出発するまでに乗り込んでこられたらおしまいだ。となると、いったん逃げて隠れるしかないか……? いや! そもそもこいつをどうやって撒くっつーんだよ!?

「な、なんですかあなたは!? いきなり襲い掛かってくるなんて……!」

虚勢を張るようなジエネの疑問に応えず、仮面野郎は言う。

「それを離せ……」

「あ……う？」

それ以上は何も言わず、仮面野郎が迫る。

杖をアイテムパックに仕舞って、エレキを呼び出し、その斬撃を受け止めようと構えたが――

「！」

その俺の前に人が立ち塞がり、仮面野郎の斬撃を弾く。
俺の隣に立つジエネではなく、勿論モアでもない。

「ゼノさん！」

「危ない所だったな、ハクメイ！」

「いやもうほんと、危ない所でした！ マジ怖いですコイツ！」

「え、え？」

救援に来たのは、ゼノさんだった。

目まぐるしく動く状況に、ジエネは？マーク。

ゼノさんの隣には、エコーさんも立っている。

「な、なんだよ次から次へと！」

「モア！ お前はちよつとチップの中に入ってろ！」

「ええっ!? わ、分かったけど、大丈夫なのか!？」

「お前が外に出てる方が大丈夫じゃない！」

「っ！ が、がんばれよな！ 二人とも！」

一瞬悔し気な顔を見せるモアだが、今はそれに構ってられない。

大人しくジエネの持つチップの中に入っていくモアを見届け、視線

を仮面野郎に移す。

ゼノさんと向かい合わせで、お互い大剣を構えている形だ。

「二人は、なんでここに？」

「喉けた手前、気になってな。追いかけてきてみたんだが、こりやどうなってるんだ？」

「俺にやばい奴に目え付けられたくらいしか分かりませんよ」

「……その人、アークスなの？」

「そういうの調べるのはお前の役割だろ」

「あ……ええっと」

ゼノさんの言葉を受けて、デバイスからスクリーンを呼び出すエコーさん。

前回のメルフォンシーナと同じ動作だが、結果はやはり……。

「全件検索、完了。該当するデータ……なし。なしってどういうこと！」

「おい、お前！……どこのどいつだ！ 所属を言え！」

「……………」

仮面野郎は何も言わない。

「ちえつ、無視かよ！ スカした仮面してやがるし、なんだかいけ好かんヤツだな、お前！」

啖呵を切るゼノさんだが、その身体は俺達の方へとすり足でズレている。

……ああ、そういう感じか。

となるとルートは……あっちか。

それに気付いているのかいないのか、仮面野郎はその啖呵に応える。

「邪魔をするなら、殺す……」

「……はー、退く気はなさそうだな。なら、力尽くでもご退場願うぜ！」

そう言つて、ゼノさんは身体を捻じり、大剣を力いっぱい引き絞る。その様子を見て、俺は右手でジエネの腰を再び掴む。

「えっ？」

きよとんとするジエネ。その目先で、ゼノさんはPフオトンアーツAを発動。

「ライジングエッジ！」

その場で掬い上げるように剣を振るつた。

地面にある雪を巻き込んで。

結果。

「！」

仮面野郎とその周囲は、雪の粉塵に覆われて見えなくなる。

そしてすぐさま俺達側に反転。同時に俺は左腕でジエネの膝も抱え、ジエネの右脇を俺の左肩に抱える、所謂お姫様抱っここの状態になる。

ゼノさんも武器を背中に担ぎ、呆気にとられているエコーさんを、運ぶ方は楽だが運ばれる方が腹部を圧迫される抱え方、お米様抱っこという米俵を運ぶような状態に。

その状態で俺達は、右斜め後ろの方へと走り出す。

「よし！ 逃げるぞー！」

「イエッサー！」

「はあっ!? ちょっと、威勢よく『ご退場願うぜ!』とか言っつて逃げるわけ!」

「あんなヤツ相手にんなこと出来るか!! いいから逃げるんだよ!!」

「ハ、ハクさん!? わ、わたしは自分で走れますから!」

「緊急なんだから我慢しろ! 初お姫様抱っこが俺でもな!」

「いえ、それは……」

「いいから掴まっつてろ!」

「は、はい!」

素直に俺の首に手を回して抱き締めるジエネ。余裕があれば色々あれなあれだが、そんなこと言っつてる場合じゃない。

目前に崖の壁が迫るが、俺達は勢いを殺さず、同時に発動させた。

「フォトンドライブ P D !!」

体内フォトンの活性化で肉体を強化し、その場からジャンプ。

4 mはあつた崖の上まで跳び、降り立つ。

「ええ!」

抱えたジエネから驚く声。

人一人抱えて大ジャンプなんて、通常状態じゃ無理なのは分かって
いるだろう。これでジエネ、ひいてはモアにも P フォトンドライブ D がバレた。が、
命には代えられない。今は一刻も早くあいつから逃げるのが先決だ。

跳んだ先は向こう側へと滑り落ちる坂となっているが、俺達は迷いなくそこに踏み出した。

滑走によってスピードを上げて、どんどん仮面野郎から遠ざかる。突き出た岩もジャンプ台にするか、避けるかの二択だ。ブレーキ無しで環境最悪のスキー場みたいなものだが、この程度は危険の内には入らない。

「スピード緩められないが、下ろすぞ。出来るな？」

「は、はい」

「……この気遣いがゼノに出来たら……」

ゼノさんはエコーさんを離す気はないようだが、俺はこの滑走ならスピードに差も出ないと判断し、一声かけてからジエネを下ろす。

雪を巻き上げながらとはいえ、かなり急な勾配の坂だ。バランス取りながら滑るのは困難だが、前衛クラスのジエネなら問題ないだろう。

一目散に下へ下へと滑っていく俺達に、ゼノさんの声。

「いいか！ 下まで降りて、テレパイプを起動しても大丈夫なようならすぐに撤退するぞ！ 転移が終わった時点で出発するから、そのつもりでいろ！」

「……………」

仮面の男は、巻き上げられた雪の粉塵を風のテクニクで吹き飛ばしていた。

しかし、その視界には誰もいない。

流石の判断だと言えよう。

ほんの刹那でも彼等の判断が遅れていれば、仮面の男の前から逃げる事は出来なかった筈だ。

だが、もしもこれで逃げられたと判断しているなら、認識が甘いとか言いようがない。

逃げた先は捕捉している。

既に相当な距離を離されているのにも関わらず、仮面の男はゆつたりした動作で、剣を持っていない左手を地面につけた。

「……『揺れる地盤グラランドシェイカーよ荒々しく』」

地震が起こった。

「ぬあっ!?!」

「きやあ!?!」

「うおおっ!?!」

「ううわっ!?!」

四者四様の驚きと共に、全員の身体が宙に浮く。

重力に従って再び地面と接触しようと、その揺れで再び宙へと投げ出される。姿勢など保てる筈も無く、身体のそこかしこが地面とぶつかった。幸いにも雪のクッションで痛みはない。

ゼノさんに抱えられていたエコーさんは更に悲惨な状態……ということはなく、ゼノさんがガッツリ抱き締めて地面と接触しそうになる度にその盾となっていた。

「くそっ! 何もこんな時に来なくていいだろうが、自然災害さんよお!!」

滑り落ちて、宙に投げ出され、地面に打ちつけられ。その繰り返し度か繰り返された後、ようやく地震は収まった。

しばらく転がされていた俺達だったが、なんとか姿勢を立て直す。

「な、なんとか収まりましたね……」

「……おいジエネ。まさか一安心なんて言わないよな」

「え？」

「山での地震で恐ろしいのは……むしろこの後だぞ」

森林の山なら、土砂崩れ。

雪山なら――

俺達の遙か後ろの方で、遠いが大きい音がする。

ゼノさんにお米様抱っこされなおしたエコーさんだけが、後ろだけを見ていた。そして、叫ぶ。

「う、嘘でしょ!? 雪崩え!!」

チラリとだけ後ろを見れば、白雪の大瀑布が俺達を呑み込まんと、遠くから迫っていた。

ちつくしよお! 仮面野郎と自然災害のダブルアタックとか、最悪の想定してても想定外だろうがよ!

滑り落ちていく先に切り立った崖。その着地点に大きな雪の絨毯、広場が見えてくる。

どうする? このまま滑っていけば先に広場には着けるだろうが、雪崩は止まっちゃくれない。

横に逃げるには雪崩の範囲が広過ぎる。俺とエコーさんが炎のテクニク使ったところで焼け石に水だ。何かを盾にして堰き止めようなんて思える規模でもない。

となると――

「ハクメイ! もっかい全力で走るぞ! その嬢ちゃんを抱えろ!」

「そ、そんなんで逃げ切れるの!?!」

「他に思いつかねえんだよ! 妙案があるなら教えてくれ!」

「なんもないんでそれに賭けます！ ジエネ！ 背中に跳び乗れ！」
「は、はいー！」

再びお姫様抱っこするような余裕も無いのでそう命じて、素直に応じるジエネ。

俺の首に腕を回してぎゅうつと抱き付いてくる。

決して離れないように。

そうして俺達は、切り立った崖からジャンプ台の如く飛び立つ。

「うわあああああ!!！」

滑っている側が見えないエコーさんが悲鳴を上げる。急に飛び立つたように見えるからだろう。

その悲鳴と迫りくる雪崩をBGMに、俺達は重力に従って広場の中
央辺りに降り立つ。

着地の衝撃は強化した肉体と雪のクッションで殺し、すぐさま道のある正面へと走り出す。

「急げ！ 雪崩に呑み込まれちまう!!！」

「ああもう！ なんだってこんな時に自然災害が——！」

『『デットエンドハーデス冥府に落ちろ愚物共』』

響きは小さく。

しかし巨大な何かが押し潰された音がした。

思わず足を止め、その音の方、俺達がジャンプした崖を見る。

雪崩が、消え去っていた。

「……は？」

雪崩だけじゃない。
崖も、岩も、滑り落ちた斜面も。山の一部が丸ごと無くなっていた。
あるのは、背筋が凍るほどに断面が綺麗な谷。
まるでそこだけが奈落に落とされたかのように。

「……冗談でしょ」

ゼノさんの方も、足を止めてそれを見ていた。
さっきの地震も雪崩も、自然災害と呼べるものだ。それに巻き込まれれば不幸だが、起こるには現実的な理由があって、現実を起こつても不思議ではない事象。

だがこれは、明らかに人為的なものだ。
こんなことが自然災害として起こっていたら、この惑星は人が訪れていいものではない。

その谷の向こう側。

先程まで俺達が滑っていて、先が無くなっている以外は何も変わらない斜面を、仮面野郎が滑ってきていた。

そして、谷を飛び越すようにジャンプし。

空中で止まったところで、その左手を、俺達が行こうとしていた道へと向けた。

『『掴み握るは邪悪なる魔手』』

その左手から巨大な闇の腕が伸びた。

大型エネミーさえも一掴みしかねないその腕は、進行方向の道に沿った崖を掴み。

爆発した。

衝撃波がここにまでやってきて、思わず腕を盾にする。

転げるような事は無かったが、身動きの取れない衝撃波に耐え、それが終わると。

俺達が行こうとしていた道に崖が崩れ落ちて、行き来の不可能なただの壁と様変わりした。

仮面野郎は、こちら側の谷の端に降り立つ。

「……退路を、断られた」

……まさかさっきの地震も雪崩も、こいつが人為的に起こしたって
いうのか。

だとしたらそれも、俺達がこの広場に至るまでに別ルートを取らな
いよう、急がせる為だけに……？

あまりにも、規格外。

あまりにも、常識外れ。

獲物を逃がさない為だけに、これだけの事をしでかした……

！

「……戦るしか、ねえってか」

エコーさんを地面に下ろし、大剣を構えるゼノさん。

俺も、それに並んでエレキとスプラッシュを構えた。

「ちよ、ちよっと待ってゼノ！ 無理に決まってるでしょ!? 見たで
しょ、さっきの！ あんなのとどう戦えって言うの!?!」

「じゃあどうするんだ!?! 逃げ道が塞がれたんだぞ!?! ここで戦って
勝つしか道はねえだろうが!」

「っ……………」

「ハ、ハクさん…………」

不安げな顔で俺を見るジエネ。

俺だつてこんな所で諦められる訳がない。

俺にはまだまだ、やりたい事が数えきれない程あるんだ。

だが相手は、怪物。

今この瞬間にこの場で全員纏めて殺されてもおかしくない。そんな大規模攻撃を持ち合わせている。

逃げ道も塞がれ、もう跳び越せるような高さではない。隠れる場所なんて以ての外。

加えて500mをあつという間に追い詰めてくるような速度。ブーステッドを軽々と受け止める腕力と、フォトンの鎧。

何よりも、感じる悍ましさ。

この四人と、モア。全員が全力で立ち向かったところで、勝てる算段がまるで立たない。

次元が違う。

世界が違う。

だが。

(考える)

それでも。

(考える。考える。考える)

全身全霊で思考しろ。

あらゆる可能性を模索しろ。

死ねばそこで終わりだ。

終わりたいくないなら、生きる為に死力を尽くせ。

巨大過ぎる悍ましさの中に、僅かに感じる違和感。

何かある筈だ。

そこに、何かがある筈なんだ。

今日遭遇した時から、じゃない。それ以前にも。

余すことなく記憶を遡れ。

まずは。

最初にこいつと遭遇した瞬間から――

「終わりだ……」

剣を携え、怪物が迫る。

俺としても内心ドツキドキの判断でした

『ハクメイ。あんたはまた一人で本読んでるのかい?』

『他の子はみいんな遊びに行つたつてのに、ほんと空気の読めない子だよねえ。いや、あんたは読めないんじゃないか』

『この孤児院にいる子はみんな友達。みんな家族。そういうスタンスでやってきてるつてえのに、あんただけはいつまで経つても馴染もうとしないねえ』

『けど、あんたは友達がいらない訳でも、家族がいらない訳でもない。人一倍どころじゃないくらい、欲張りな子だからね』

『あんたはただ、ここの誰ともそういう関係になりたいとは思えないだけだろう? そうやって縛られるぐらいなら、一人で勉強してる方がよっぽど楽しいつてだけだろう?』

『孤児院にいる子供達。このあたしでさえも、あんたにとつちやとりあえずの住処にいるだけの同居人。全く、可愛くないつたらありやしない』

『それで? またなれもしないつて笑われたアークスになる為の勉強してんのかい?』

『……あたしからも、あんたはやめといた方がいいと言うよ』

『あたしも昔はアークスだった。どれだけ危険で、どれだけ才能が物を言う世界なのか分かつてるさ』

『あんたは賢い子だ。アークス以外なら、何にだつてなれる。何で

だって、一番になれる。それこそオラクル上層部の、更にトップに立って、アークスを顎で使うような人間にだってね』

『才能のないアークスなんかより、よっほど安全で、よっほど成り上がれる道だろう』

『それでもあんたは、アークスになるって言うんだらうね』

『周りに笑われようが、あたしの親心に泥を掛けようが、あんたはアークスになりたいって、そう欲するんだらうね』

『あたしや心配だよ。一体誰が理解してくれるだらうね。あんたの積み重ねている努力を。気が狂いかねない鍛錬を。正気を疑う研鑽を。理解されないまま、あんたは罵られ、そして褒め称えられるんだらうね。天才なんてチャチな言葉で』

『そんな苦勞が報われないまま死ぬかもしれないようなアークスに、あんたがそこまで拘る理由なんか知らんけど、あんたにとっちゃ大事なことなんだらうよ』

『だったら、絶対に諦めるんじゃないよ。絶対に、それを捨てるんじゃないよ』

『あんたは賢いのに、諦め悪い大馬鹿で、他人を利用してでも自分の強欲を満たす、可愛くない奴。それできつと、誰よりも幸せになれる男』

『中途半端に満足するなよ。格好悪くても足掻いて生き延びて、最後には老いて枯れ果てて、布団の上で満面の笑みで死ぬるような、そんな人生を送りな』

言われなくともそのつもりだ。

俺は、強欲なのだから。

力も。金も。女も。地位も。名誉も。

この世に遍く全てを手に入れて、俺は最強最高のアークスとなるのだから。

だから俺は望む。

だから俺は戦う。

だから俺は諦めない。

だから俺は勝ち取る。

だから俺は――

こんな所で、死ぬ訳にはいかない。

「つたく、この俺がこんな簡単な事に気付かないとはな」
「え？」

「いや、それだけあいつが脅威過ぎて、目が眩んだって事か。走馬灯まで見えるとか、ダセエったらありやしねえ」

仮面野郎は、俺に向かつて考えられないような速度で迫ってくる。

ゼノさんは矢面に立とうと、前に出た。

その肩に、手を置く。

「大丈夫ですよ、ゼノさん」

「は？ 何言って」

「あの大規模攻撃は、俺達には向かない」

そう言つて、俺はスプラッシュを奴の頭上高くへと向かつて投げ
て。

仮面野郎に向かつて走り出した。

「!? ハクさん!!」

「なつ、何馬鹿なことしてるの! 死ぬ気なの!」

「つ……! P B!」
フォトンブラスト

制止の声は届いているが、俺は速度を緩めない。

向こうも俺の行動に驚くことなく、どこるか願つてもないとばかり
に速度を上げてきた。

俺の後ろで、ゼノさんから声が響く。

「『ヘリクス・ブロイ』!!」

姿は見えないが、恐らくあの四足獣が召喚されたのだろう。

並の攻撃じゃこいつには掠り傷さえ負わせられない。そして、その
攻撃に巻き添えになる程俺が未熟ではないというのも、ゼノさんには
わかつているのだろう。

それが無くてもいけるつもりだが、ナイスサポートだ。

残り数歩で接触する、という所で、仮面野郎は姿勢を低くした。

剣を持っていない左手で、雪を、その下の土を掻き上げるように振
るう。

「ラ・ティーガ」

その地点から、棘のような岩の槍が続々と生えてきた。

つ、土を操るテクニックまで扱うのかよ。さっきの地震もこの系統
か。

だが、思った通りだ。

俺の身体を貫かんと迫る岩槍を前に、俺は――

「イル・ゾンデー！」

雷の鳥へと姿を変え、その槍をやり過ぎし。

仮面野郎の頭上後ろに踊り出る。

「！」

今日出発する前に奮発して買った、俺が今持つ唯一の上級テクニク。

僅かばかりの時間とはいえ雷そのものとなって高速移動するこれは、俺のようにテクニクを扱いながら接近戦もするアークスには、なんとしても欲しかった。買うのが一日遅れていれば、打つ手が無かったかもしれない。

仮面野郎が俺の方に振り返ると同時に、ゼノさんのヘリクスが岩槍を破壊した。

勢いを落とさず、そのまま仮面野郎へと迫る。逆様になった体勢の俺は、重力に従って落ちる。

その俺の首を薙ごうと、仮面野郎は剣を横に振るう。

その剣に合わせて、俺も右手のエレキを振るった。

「うおらっ！！」

ガキーン！ と剣戟。

踏ん張りの利かない俺の身体はいとも容易く飛ばされる。

同時に、ヘリクスの角も仮面野郎を刺し貫かんと迫る。

「…………ふん」

左手でその角を掴んで、突進を止めた。

「嘘だろ!？」

というゼノさんの声。

俺にとつては想定していた最悪という程ではない。軽く振り払われなかっただけマシなくらいだ。

弾き飛ばされた俺は地面を一度跳ねてから体勢を立て直し、雪を巻き上げながら着地する。

その俺に向けて、仮面野郎はヘリクスを軽々と持ち上げ、投げてきた。

「ゾンデイル・式式！」

仮面野郎とは反対側に待機させていた、上空から分裂させたスプラッシュの破片に俺を引き寄せる。

一瞬遅れて俺がいた場所に、ヘリクスが叩きつけられる。

前は説明しなかったが、元々ゾンデイルは磁力によって発生させた地点に敵を引き寄せるテクニク。敵性反応をプラス極、発生させた地点をマイナス極と考えれば分かりやすいだろう。

そして式式は、そのプラス極を敵性反応からアークスに変えたものだ。

つまり、アークスを引き寄せる磁場ということ。

仮面野郎がどちらかは知らんが、どちらであつても射程範囲外。俺だけがそのスプラッシュの破片へと到達する。

これで更に近付いた。

もう少し……！

「……………」

敵から目を逸らさなのままバック走でそこへと向かっていく俺に、仮面野郎はその左手を向けた。

「イル・スイク」

現れたのは、子供くらいならば丸呑みしかねない極太の蛇。それが水によつて形成され、うねりを上げて俺へと迫つてきた。

「土だけじゃなくて、水まで生み出して操るか。だが！」

エレキを仕舞い、呼び出したのは両剣。

「回炎『パイロソーサー』！」

呼び出した両剣を、円盾を作るように回し、その水蛇の正面に構える。

回炎といつても、剣が燃えている訳じゃない。

ただ、剣先に超高温の熱があり、更にその剣先は、視認出来ない程に細かく、高速に、チェーンソーが如く動き続けている。その切れ味は、大樹を一太刀で切断してみせたことから推して知るべし。

パイロソーサーに直撃してきた水蛇は、その身体をぶつかつた先から水蒸気へと変えていく。

それで視界が塞がれることなどないように、俺は水蒸気を風のテクニクで吹き飛ばし、霧散させる。

やがてそれも途切れ、同時に俺もようやくそこに到達した。

そして、仕舞つていたそれを左手に呼び出す。

仮面野郎は、左手を掲げる。

「……『塵^カへと還^タせ黒^ス星^ト』」

掲げた仮面野郎の左手に、彗星と見紛うばかりの闇が集まる。

……形だけはメギドっぽいのが、大きさが桁違いだな。もしかして、あの時やろうとしてたのもあれか？

「ハクメイ、逃げて！ それを喰らったらあんた、跡形も無くなるよ！！」

「くそっ！ やめやがれ！」

エコーさんがテクニクをチャージし、ゼノさんが大剣を持って仮面野郎に向かっていく。

ふむ。狙いが分かっていると分かかってないのだと、こうも焦りに違いが出るのか。

さつきまでの俺もあだだったと思うと、恥ずかしくなってくるな。

「ハクさん!! や、やめてください!! その人を、殺さないで——」

「そんな悲壮感出さんでも、そいつはそれを放れんよ」

「——え?」

ここに着いたなら、もう焦る事はない。

俺が立つ、今ここ。

この仮面野郎が作り出した、この谷の目先ならば。

「お前も、そんな虚仮脅しはもう通用しないことくらい分かっただろ? そっちの心臓に悪いし、さっさと消したら?」

「……………チツ」

酷く苛ついた様子で、仮面野郎は掲げていた左手を握る。同時に、集まっていた闇も霧散した。

あんなもんを出したり消したりが一瞬とは……ほんと底が知れない。

「考えてみればおかしな話だよな」

さて、答え合わせと行こうか。

時間を稼げるなら結構。

このまま退いてくれるなら御の字だ。

勝てたら文句なしだが、流石にそこまでは望まない。少なくとも、今は。

「前に会った時は弱ってたそうだが、その時もお前はそれを使おうとしてた。なのに、遭遇してすぐには撃とうとしなかった。さっきの見るからに、弾数制限があるとは思えないにも関わらずな」

弱ってたから撃てなかった、のではない。

撃つ気がなかった、のではない。

「俺の隣にアフィンがいたから、だろ？」

「……………」

仮面野郎は何も答えない。

だがそれは、凶星だ。

「だから、お前はまずアフィンを蹴っ飛ばして、俺の巻き添えにならないようにした後、そいつを撃とうとした。けど、ゲツテムの邪魔が入った。そして、邪魔が入ったから撃てなかったのでもなく、お前はあいつやメルフォンシーナが、俺の巻き添えになる位置にいたから撃てなかった」

「……………」

「さっきにしてもそうだ。わざわざ近くにきて剣を振るってこなくても、お前の大規模攻撃で遠くから察知されるまでもなく俺を殺すことくらい簡単だろう。なのに、それをしなかった。俺の隣にジエネがいたから」

「……………」

「ゼノさん達が来て、お前は……なんだっけ？ 邪魔をするなら殺すーとか言ってたが、ありや完全に脅し文句だ。本気で殺すつもりな

ら、雪崩をほつといて呑み込ませるなりなんなり出来たろうに、それをしなかった」

そこまで考えれば、答えは簡単だ。

もつと前から気付いてもよさそうなものだが、そこは言ってもしょうがない。考えつかなかったのだから。

俺は言う。

「お前は、俺以外を殺す気がないんだ」

俺に対する殺意は本物だろう。

だがそれは、他を殺してまで達成する目的ではない。

不気味で何を考えてるのか分からないこいつだが、一度考えてみればそういう答えが出てくるのだ。

「そして今、ジエネやゼノさん達と離れて、大規模攻撃でも俺一人だけ殺せる状況にあるにも関わらず、それをしない理由は……これだろうか？」

チマチマと小技で俺を仕留めようとしていたのは、もう一つ目的があるから。

俺が跡形も無くなるような攻撃をすれば、アイテムパックにあるこいつも、跡形も無くなるからだ。

「それは……さっきの杖？　それが理由って、どういうことですか？」

「さあ？　けど、こいつはこれがどうしても欲しいらしい。俺を殺すことは二の次にしてもな」

そうでなければ、「それを離せ」など言わない。

まるで「これを手放せば見逃してやる」とでも言うような口振りはな。

左手に持った、この怪しげな杖。俺としても気になるところだが、それに拘って命を捨てるような真似はしたくはない。

右手のパイロソーサーの刃先を、杖に向ける。

「それじゃあストレートに命令しようか」

「……………」

「こいつをぶった斬って谷底に落とされなくなかったら、大人しく引き下がれ」

流石にこの距離を、俺が反応するまでもなく迫る事は出来ない筈だ。出来るならとつくに俺を刺し殺してるだろう。

何か怪しい動きをするようなら、すぐさまこいつを両断して、半分を谷底に落としてやる。残り半分といえど、修復の可能性が残っている以上、それを持っていく俺ごと消し飛ばす事はない。

この仮面野郎なら谷に飛び込んでも平気な面してそうだが……その時はその時で、奴が飛び込んだ後にパイロソーサーで谷の断面を削り取って、雪崩を被せてやろう。

それでも生き残るのだとしても、手に入るのは半分。残り半分は俺の手の中にある。

……考え得る限り最悪なのは、問答無用で突っ込んできて、俺が両断して谷底に放り込もうがそれに目もくれず俺を殺して、俺が持つ半分を手にしてから谷底へと落ちていけばいいと考える事だ。

その時は、本当に賭けに出るしかない。

一見壊れているこの杖を、更に壊されるのは避けたい、と考えてくれりゃいいが……。

「……………」

果たして仮面野郎は、僅かばかりに思考するように顎に手を添え、それが終わると。

俺にその左手を翳してきた。

「っ、脅しじゃねえんだぞ!!」

パイロソーサーで、杖を断ち切——

』

杖から、声が響いた。

「……あ?」

思わず、動きを止める。

幻聴ではない。

声と言うにはあまりにも不鮮明で内容は聞き取れなかったが、ただの音でなかったのは確かだ。

それが、この何の力もないガラクタから響いた。

』

仮面野郎も、左手を翳したまま、硬直していた。

隙が、出来ていた。

そして、それを見逃すゼノさんではない。

「スキありッ!!」

後ろから迫り、仮面野郎の左頭部に、大剣の一撃。

纏っていた筈のフォトンの鎧も硬直と同時に解いてしまったのか、

その一撃はクリーンヒットする。

にも関わらずその頭が断ち切れることは無く、奴から見て右側に弾

き飛ばされる。

そのまま転げることはなく、飛ばされながらも爆転するように跳ね、見事に着地する。

だが、その仮面はゼノさんによって罅が入っていた。

「……チツ！」

さつきよりも大きな舌打ち。

仮面野郎は左手で罅が入った仮面の左頭部を押さえる。恐らく、そうしなければ仮面が落ちてしまうのだろう。

「おいおい、業物がイカレちまったよ」

かくいうゼノさんの剣にも、罅が走っていた。

鈍器として扱えばまだ戦闘は継続できるが、剣として斬ることは出来ない。そんな状態である。

「……だけどもあ、おあいこってところか」

「……おのれ、ハクメイ！」

「……………おいおい。俺の名前を恨めし気に呼ばれても困るぜ」

さつきの声は気になるが、まだ状況は続いているのだ。後回しにしなければならぬ。

そう思つて仮面野郎を睨みつけるが……………仮面野郎は仮面を押しさえたまま、高く跳び上がった。

この広場を囲む崖を易々と跳び越し、消えて行った。

「……うあー」

「ハクさん！」

脅威が去っていった事に安堵したら、腰が抜けてしまった。
その場に座り込む俺に、ジエネが駆けてくる。

「ふー……とんでもないヤツだったな。お前さん、大丈夫か？」

「いやー……割とマジで死を覚悟しかねなかったですねっとお！」

座り込んだ俺に、ジエネは飛び込むように抱き付いてきた。

「良かった……良かったです……！ わ、わたし……ハクさんが、死んじやうんじやないかって……怖くて……」

「……あー」

ジエネの頭は俺の横にあるので、その表情を見ることは出来ないが……見なくても、ジエネが涙ぐんでるのが声で分かる。

うーん。まあ確かに死にかねない行動だったよなあ。やんなきやマジに死んでたかもしれないとはいえ。

背中を腕を回して、つてのはあれなんで、パイロソーサーをアイテムパツクに仕舞って、あやすようにジエネの頭を撫でる。

「まー心配は有難いけどさ、ジエネ。俺そんなに懐かれる程何かしたか？ そこまでした覚えないんだが」

「……そんなこと、ないですっ。両親以外に、あんなに優しくしてもらえたの、わたし、初めてだったから……」

「そりやまた。俺は優しくしたつもりないんだが」

あれくらいでこんな事言えちゃうとか、どんだけ優しくされない人生だったんだよ。

こいつ自身はこんな風だったのに。恩知らずばっかだったのか、あまり深く人と関わってこなかったのか。

ちよつとは落ち着いたのか、涙ぐむ声は聞こえなくなってきた。

そんな俺達に、エコーさんの声が降ってくる。

「ほんつと、無茶するよね君。問答無用で掛かってこられたらどうするつもりだったの?」

「谷底に身を投げるつもりでした」

「はあっ!」

「んで、追ってきたあいつが飛び込んできたら、落ちる前にワイヤードランスを壁に引っ掛けて。あいつが落ちるのを見送ったらそのままよじ登るってところですね。怖いのは、あいつがそのまま落ちてくれるかどうかで」

「それ以前に君が危なすぎるでしょーが!!」

怒られた。

「ジエネもちよつと怒ったのか、抱き締める力が強まってちよつと痛い。」

「いや、俺も出来たらそれはしたくなかったよ? ただ、それぐらいの覚悟でないと切り抜けれなかっただけで。杖の声であいつが固まらなかったら、そんなことに――」

「……………」

「まあいいじゃねえかエコー。なんにせよ、あいつは撤退して切り抜かれたんだ。結果的に全員生きてる。今はそれを喜ぼうぜ?」

「それは、まあ……………そうだけどさ……………」

「ハクメイ」

「あ、はい」

「命は大事にしるよ……………つてのは分かっているだろうからいいか。大事

にしているからこそ、あれだけの事が出来たんだもんな。俺達もお前さんの判断に救われた。礼を言うぜ、ありがとよ」

「んー……お礼を言われるのはなんか違う気がしますが……ちゃんと受け取っておきます」

……まあ、この事はこれで終わりとして。

ようやくジエネも俺から離れたところで、質問を投げかける。

「ジエネ」

「え？ はい」

「お前にはさつき、この杖から声が聞こえたか？」

「は？ 声？」

「あ、はい。何を言ってるのかは分からなかったですけど……」

……やっぱり、ジエネには聞こえたか。

顔をゼノさんに向ける。

「ゼノさんは？」

「いや、そんなもん聞こえたか？」

「あたしも聞いてないけど……」

『オレもそんなの聞こえてねーぞ』

モアが、ジエネのチップスロットの中で言う。

「そーいや忘れてた。」

ロジオからも通信が届く。

『……私の取得したデータにも、そのような音声情報はありません』
「そうか……」

……やはり、シオン関係、もしくはそれと同系統の何かなのか？
どちらにせよ、仮面野郎がそれを狙った理由が分からん。

「ところで、モア？ もうあの人はいません。出てきても大丈夫ですよ」

『えっ!? い、いいいいや! オレはまだこええから、チップの中に入ってるよ!! うん! 早く帰ろうぜ!』

「? どうしたんです? そんなに慌てて」

怖がってる、にしては明らかに狼狽え方が違う。

チップの中にいるモアは、バツの悪いような、引き攣った笑顔。

……………まさかお前、マジで?

「それについては同意見だな。確か、ウエポノイドだったか?」

『オ、オレはモアって言うんだ! よろしくな!』

「おう、よろしくな。まー、ハクメイ。お前さんも気になる事はあるんだろうが、考えることはロビーでも出来るだろ。早いとこ帰ろうぜ」

「……………そうですね」

「学者さんよ、あんたの欲しかったデータって奴も集まっただろ?」

『はい、そちらも十分に取れています。……………ですが何故、ハクメイさんへの依頼内容をご存知なのですか? 掲示板では、地質調査とは書きましたが……………』

「あ……………先輩ってのはな、後輩のやる事為す事全部把握してるんだよ」

「あたしに調べさせたくせに」

「いきなりバラすなつての! ほら、さっさと帰るぞ!」

あいつが戻ってこないとも限らない。俺達はせつせとテレパイプを起動し、キャンプシップでアークスシップに帰投した。

職人が目の色変えた時つてすさまじい

「そういえば、なんですけど」

キャンプシップの中で、ジエネが尋ねてくる。

「ハクさんとゼノさんが、えーつと、ふおとんどらいぶ？　つて言つてたあれ。なんなんでしょうか？」

『失礼ながら、私も気になっていました。それに、通常のアークスでは考えられない身体能力。あれも、それを言った後に発露していました。一体どういふものなのでしょうか？』

「あー」

やっぱ言及してくるよなあ。

今俺達は、俺達の乗ってきたキャンプシップにゼノさんとエコーさんも乗せて、アークスシップへと向かっている途中だ。二人が乗ってきた方は、アークスシップ側の遠隔操縦で帰投させるとのこと。

モアは頑なにチップから出てこようとはせず、俺達四人がいる空間の中、ゼノさんエコーさんの夫婦……二人は、困ったように顔を見合わせる。

とにかく、俺の口から説明することにした。

「まあ簡単に言うと、身体強化の技術つてやつだ。体内フォトンそのものを活性化させて、身体能力をざつと五倍に引き上げる。それでもあいつにや全然及ばなかったがな」

『ご、五倍ですか!?!それはまた、凄まじい技術ですね』

「ああ。俺はゼノさんを見様見真似して、ゼノさんは正体不明の師匠さんに教えてもらったつてよ。ね？」

「あ、ああ。そうだそうだ。他の奴は全然出来ないつーのに、こいつとアフィンだけは真似出来ちまったんだよ。師匠に教えてもらっ

ちやいたが、俺も正直良く分かんねーつつーのに」

……今にして思えば、ゼノさんの師匠さんと仮面野郎って、どっちもヤバイ存在だよな。

片や俺の完全上位互換で、並列起動数5000の演算を行う怪物。

フォトンブラスト

片や自然災害を人為的に起こす大規模攻撃と、P Bを易々と掴んで受け止める肉体を持つ怪物。

最強最高のアークスを志す以上、いずれは超えて行かなきゃいけない壁だ。

つつても、ほんとどうしたもんか。

今回はあいつの目的を利用して生き延びたようなもんだが、あの状況であいつにも何か打つ手があったようだった。もし杖からの声が聞こえてなきやどうなつてたか。

あの領域に立つ為に、果たして俺に何が必要だ？

つかそもそも、あんだけの怪物が何で今まで発見報告とかされなかつたんだよ。発見次第六芒全員で出動してもいいレベルだろ。

「……………いや、あいつだけは出来たか。あー、腹立つな……………」

「……………」

「？ ハクさん？」

「ん？ ああ、悪い。考え事してた」

「いえ。…………あの、もしよかったら、わたしにも教えてくれませんか！」

ゼノさんに向いて、ジエネは頭を深々と下げる。

「わたし、もつと強くなりたいです！ みんなを守るように、ハクさんの足手纏いにならないように！」

「あー…………その、熱意は買うんだけどな……………」

困ったように頭を掻くゼノさん。

その横から、エコーさんがフォローを入れる。

「さつきも言ったように、他の人達には全然出来なかったのよ。こいつ、説明ド下手でさ」

「悪かったな！……ま、つまり俺自身も他人に教えられる訳じゃねえんだ。見せるだけならいいんだけど」

「そ、そうなんですか……」

しゅん、と顔を俯かせるジエネ。

「ま、俺もゼノさんと同じ状況だけど、いずれは他人に教えられるくらいには理解を深めとくから」

「……ハクさん」

二人が「よくもまあペラペラと……」と言いたげな顔で見ってくるが、別に悪意あつて嘘をついてるわけではないのだ。

そもそも、こいつにはそれ以前の問題がある。

「その前に、お前はフォトンの人並みには扱えないとな」

「え？」

「だつてお前、コントローラーが下手ですーぐバテちまうんだろ？」

「うぐっ！」

「俺にだつて、これがどれだけ制御するのが難しいのか分かつてる。今のお前が扱おうとしても、ちつとも保てないならまだしも、最悪よりバテるのが早くなるだけだと思っぜ？」

「あううう……」

しよぼん、となつてしまふジエネ。

まー、事情を加味せず実際に俺が教えたところで、そうなるだけなのだ。

ジエネくらいなら教えても問題ないかもしれないが、余計なこと

教えて成長が滞っても仕方ない。

「あーそうだ二人もそうだが、ロジオも。一応これは守秘義務つてことで。あんまり広めたくないんで」

『そうですか。あなたの方にも事情はあるのでしょうか。この事は私の胸の内に秘めておきます』

「わ、わたしも、ちゃんと秘密にします」

『オレも、誰にも言わねえからな！』

「……不安だな」

「ええっ!？」

ジエネはうつかり言っちゃいそうという不安だが、モアはな……。仕方ない。ちよつと一手打つとくか。

「新たなマターボードが産まれた。これは、貴方の行為が意味を為し、事象の好転を示す」

アークスシップに帰還し、シヨップエリアのシオンがいつもいる場所へと来た。

他の奴等とはゲートエリアで分かれ（モアはチップのままジエネにセラフィさんの所まで運ばれていった）、俺一人だけ会いに来たわけだ。

そして、やはりこの類の台詞である。

シオンは俺から見て背中側に向けていた視線を、俺の方へと向き直す。

「私と私達から、千の感謝を。易き道程でない事を、私達は知り、それでも私は貴方を頼った。応えたのは貴方だ。貴方の意思が応えた。故に、私は感謝する」

「まー確かにあの野郎とは命懸けの判断下すことになったが、知ってたんなら言ってくんないか？ それとも、それもまた言えないってか？」

「……私は謝罪する」

……とはいえ、事前に知ってたら頑なに行かなかっただろうな俺は。

今回の時間遡行で手に入れた杖。

これが例え本物の創世器だったとしても、あいつと遭遇するくらいなら捨て置くだろう。隠密してゲットするにしてもリスクがあり過ぎる。

「貴方の認識において、優位事象の取得が行われている。得た物は貴方以外に得られぬ物となる」

シオンは、俺の腰辺り、アイテムパックがある辺りを見る。

「貴方が手にしたかの武器について、私は知らない。知り得ない。ただ、それが貴方にとっていずれ分かる事象であると私は知っている」

「……そんな曖昧なもので、わざわざ時間遡行させますかねえ？」

「これ以上語るべき言葉を私は持たない。……許してほしい」

ふむ。

何かは分からなくても、優位事象、俺に何かを齎す物だとは分かっているってことかね。

無機質ながら、申し訳なさそうな顔を浮かべるシオンは、続ける。

「そして、幾度となく貴方を頼らねばならない私を、どうか……許して

ほしい」

そう言って、シオンは消えた。
そして、再びブラツクアウト。

「……戻ってきたか」

視界が開けた時、シオンはそこにいなかった。
今回の時間遡行が終わったということだろう。デバイスを開けば、
新しいマターボード。

「ま、とりあえずこれが武器っぽいのは分かったし、ジグさんに見せに
行くか」

前回会った時のテーブルに、ジグさんはいた。

「なんだ、お主か。何か見せようとしても言うのか？ わしの情熱を呼
び覚ますような？」

「……………」

開口一番、この台詞だ。

やさぐれてんなあ。

気持ちは分からんでもないが、表に出しちゃうのは大人気ないと思
うよ。

「ええ。ちよいと珍しいものを拾ったんで、あなたには見せておこう

かと」

そう言つて、アイテムパックからあの杖を取り出す。

「無駄だ、無駄無駄。冷めきつたわしの情熱は、そんなじゃそこの武器……では……」

その杖をジグさんが認識した時。

あつという間に俺の手から奪われてしまった。

機械の身体でなければ、目の色を変え、見開かんばかりの声で、ジグさんは言う。

「なんだ、これは……！ 無駄しかないようなフォルムで、その実、全てが噛み合っている……。この形状、どうやって作って……いや、それよりもこれだけのものを、どうやって錬成したというのだ……！ お、おい……お主、これをどこで！」

杖に釘付けになっていた視線を俺の方に戻す。

今までの冷えた態度が嘘のようだった。それ程までに、豹変したとでも言わんばかりの食いつきようである。

……ふむ。怪しいけど力があるようには思えないが、ジグさんの興味関心は引けたか。

あんだけ苦勞して手に入れたのに、それさえ出来ないようなら粉微塵にしてしまいかねない所だった。

「凍土エリアでちよつと。結晶体……今思えば、あれは氷の中だったのかな？ それにしちやおかしいか？」

「氷の中……じゃと？ そんな……しかしこれは……つ、ええい！ 悩むより行動じゃー！」

ジグさんはその杖をテーブルに置く。

が、手は離さない。

「お主、この壊れた武器の一部を貸してはくれまいか？ わしなら、修復できるやもしれん」

「そうです——」

「心配せんでも見返りを要求したりはせん！」

まだ何も言っていないだが。

「むしろ逆じゃ。タダでも言わん！ 必要なら、お主の為に武器も作ろう！」

「おー……」

刀匠自らこう言っただけで貰えるとは、出血大サービスだな。

俺の自作武器も、この人に頼めば機能を残したままグレードアップしてもらえるかもしれないし、なんなら要求する機能を付けた武器を作ってもらえるやもしれん。

ジグさんは視線を再び杖に戻す。

「武器の一部、それも破損状態……なのに、これ程の魅力を醸し出す、その真の姿……見てみたい！」

ふむ。

俺の見立てではパーツが足りないようだし、これ一つから全部修復は出来ないだろうが、あまり時間を割けない俺が持つてもしょうがないだろう。それなら、これ一つに時間を割けるこの人が持っていた方が有用だ。

というか、今から何言っても無駄っぽいし。

「わしの中で燻り、消えかかっていた情熱が、再び燃え上がってきたのだ！ ふふ……ふふふ！ 楽しみだ、楽しみだぞ！ お前さんの真の

姿は一体どんなものなのか！ わくわくが止まらぬ！」

やっぱりキャストなので表情変化は窺えないが、言葉通り楽しそうなのでいいでしょう。

ハクメイにとっては見知った人物なので、その存在を認識していても気に留めなかったが。

その二人のやり取りを見ている人影がいた。

そしてその人影は、ジグが持つ、破損した杖の一部を見て、呟く。

「……あれは」

壊れた杖をジグさんに貸し終えた。
スキップでもしかねないあの人の背を見送り、背伸びを一つ。

「さて、この後はつと——おっ？」

デバイスに、通信が入った。

ジエネからだ。

？ なんだ？ この時間だと確か、ジエネはマトイに会いに行つた筈……。

回線を開く。

「どうした？　なんかあった——」

『ハクさん！　ハクさんですか！？　今すぐにメディカルセンターに来てください！』

舌がもつれそうな声で、ジエネは続ける。

『マトイちゃんが……』

あなたが優しい、その理由

どこまでも、真つ黒だった。

どこまでも、何もなかった。

そんな世界に、ただ一つ、わたしだけがいた。

「……ここは、どいっ？」

空も、地面もない。

上下も左右もない。

光でさえも何も無い世界で、わたしだけがわたしを認識できる。

そんな世界で、わたしは浮いているのか落ちているのかも分からず、存在していた。

わたしは、ここにいた。

でも——

「……ひとりぼっちだ」

ここには、何もない。

ここには、誰もいない。

わたし以外の存在は、何一つとして存在しない。

誰も、わたしと話さない。

誰も、わたしに触れない。

誰も、わたしを知らない。

そんなの、いてもいなくても同じだ。

わたしはいてもいなくてもいい存在。

いようがいまいが、何も変わらない。

悲しいくらいに、わたしは独り——

『そんなことないわ、*****』
「え？」

声が、聞こえた。

最後だけ聞こえなかったけれど、それは確かに声だった。
そこを見ると、そこには。

女の人がいた。

『ああ、本当はマトイなんだっけ？ ごめんごめん。ずっとそう呼んでたから、慣れちゃってて』

「……誰？」

知らない人だった。

けれど、その人は、わたしと同じ年ぐらいのその人は、わたしと同じ目線で、わたしの目を見て話し掛けてくる。

『……そっか。忘れちゃってるんだよね、わたしの事。あなたの事』
「……わたしの、事？ あなた、わたしを知ってるの？ わたしが忘れちゃった事、あなたは知ってるの？」

『それは……ううん。もしかしたら、あなたは知らないまま、忘れたままの方がいいのかもしれないわね。あなたにとっては、辛い記憶かもしれないから』

辛い、記憶？

その人は、悲し気に、でも優しく微笑む。

『でもね、マトイ。もしもそれを思い出してしまう事があるのだとしても、怖がることはないわ』

わたしの手を、その人の両手が包み込む。
温かい。

じわあつて、優しさが流れてくるみたい。

『だってあなたには、ハクメイがいるんだもの。あの時も、そして今も』

「……ハク、メイ」

そうだ。

わたしには、ハクメイがいる。

記憶も何もないわたしに、寄り添ってくれるあの人。

わたしと話してくれる。

わたしに触れてくれる。

わたしを知ってくれる。

そんな人が、いる。

『思い出せなくてもいいけど、思い出してもいいのよ。あなたにとってあの人がどれだけの存在なのか。それを思い出すのは、きつと幸せなことだから』

「……ハクメイの事、知ってるの？　ねえ、あなたは誰なの？　どうして、そんなに悲しい顔してるの？」

『……私の方もちよつと、ショックな事が色々あつてね。わたしが誰かは……あなたが思い出す事を選んだ時に、思い出すから』

その人の手が、離れてしまう。

その人自身も、離れてしまう。

「ま、待って……！　まだ、聞きたい事が……！」

『決して忘れないで。あなたも、ハクメイも』

『あなた達は——』

「待って！」

「うお」

ガバっと起き上がった。

「……………あれ？」

景色が変わっていた。

そこは、わたしが寝泊まりしている、メディカルセンターの一室。白い色がいっぱい、刺激が少ない部屋。そのベッドの上に、わたしはいた。

あの世界じゃなかった。

見渡す限り真っ黒の、何も無い世界じゃない。

そして、あの女の人もいなくなっていた。

「急に倒れたって聞いたから来てみたら、起きるのも急だなおい」

そして、ベッドの左隣で、ハクメイが椅子に座っていた。

わたしを見て、少し驚いた顔をしてる。

「……………ハク、メイ？」

「ん。ハクメイさんですよっ」と

ハクメイの青い瞳が、じっとわたしを見る。

「ちつと麗されてたし、顔色もよくなさそうだが……大事はなさそうだな。ま、もうちよい寝とけ」

「……夢、だったの？」

「なにが？」

「……ううん。ごめん、なんでもないの」

「なんでもないって顔じゃねえが、まあいいか」

あつさりと、ハクメイは引き下がる。

……よく見たら、わたしの左手はハクメイに握られていた。そつと、優しく。

「……ごめんなさい」

「うん？」

「わたし、また迷惑かけちゃったよね」

「……そいつは俺より、そつちでぐーすか寝てるやつに言えよ」

「え？」

ハクメイが顎でベッドの右隣を見るように促す。

そこを見ると、ジエネちゃんがいた。

ハクメイと同じように、ハクメイとは違って強く、わたしの右手を握って、握ったままベッドに頭を乗せて寝息を立てていた。

「ジエネちゃん……」

「大変だったんだぜー？ お前と話してたら、急に頭痛が来たとかでいきなりぶっ倒れたんだって？ 俺が来た時にも大慌てだよ。あんな戦闘があつて——あ、それは二日前か。探索終わって間もない身体で、フィリアさんがもういいって言つても聞かずに、ずっと看病してたんだと。俺が夜食でも買いに離れてたら、この通りだ」

「……………」

そんなに、心配かけちゃったんだ。

それはそうだよ。だって、目の前でいきなり倒れられたりなんかしたら、驚くどころの騒ぎじゃないもん。わたしだったら、どうしたらいいかわかんないまま棒立ちになっちゃいそう。

ジエネちゃんは、今は気持ちよさそうに寝ている。

その目元が赤く腫れてるのは、きつとわたしのせいなんだろう。

「……ジエネちゃんも、ごめんね」

その頭を撫でてあげたいと思ったけど、今は両手が塞がってた。仕方がないから、言葉だけにする。

今度起きてる時に、改めて伝えないと。

「その、……わたし、どれぐらい寝てた？」

「んー？ お前達が話してた時間から、大体このぐらいまで」

デバイスのスクリーンを表示させて、ハクメイはわたしに時刻が表示された画面を見せる。

とつくに夜中だった。

宇宙空間にある船で夜と言うのもおかしな話だけれど、オラクルでの時間という設定で出回ってるもので、一般的に非活動時間と言われる時間帯だ。

「わ、わたし、そんなに寝てたの？」

「うん」

「……その、ごめんなさい。探索後だっていうのに、こんな」

「気にすんなよ。俺は自己回復出来るから、なんなら一週間ぐらいは寝ずに活動できるし」

なんてことないようにハクメイは言っつて、苦笑する。

……そうは言っても、夜になったら寝たくなくなるのが人間なのに。

ハクメイは、未だにわたしの左手を握り続けている。

それをわたしが見ているのに、ハクメイは気付いたみたいだった。

「ああ、これか？ ジェネの真似して握ってみたら魘されなくなったけど、起きたわけだし、離そうか？」

「う、ううん……。その、まだ握ってほしい、かな……」

きつと、ハクメイに迷惑がかかる。

そう思っているけど、わたしはそう懇願してしまった。

まだわたしがあの夢を……。真つ暗で誰もいない、ひとりぼっちの世界を引き摺っているから。

こうして繋いでいる手の温かさがある内は、わたしは同じ夢を見ない。そんな気がする。

ハクメイは嫌な顔一つせずに、わたしの願い通りにその手を繋いでいてくれた。

「……ねえ、ハクメイ」

「うん？」

「どうしてハクメイは、わたしに優しくしてくれるの？」

アフィンさんは、わたしの事を気に入ったからだって言ってた。

ハクメイは気に入った人にしか優しくしないって言ってた。

でも……。わたしには、気に入られる要素なんてない。

わたしはハクメイに何もしてあげられてないんだから。

なのに、ハクメイはこうして、言われなくても手を握っていてくれた。それぐらい、優しくしてくれた。

その疑問にハクメイは、あっけからんと答える。

「お前が可愛い美少女だから」

「びっ……!?!」

び、びしょうじょ!?

びしょうじょって、あの美少女!?

可愛い美少女って、わたしが!?

「か、かわ……え!?!」

「なんだよ自覚なかったのか？ 世間一般から見ても俺からしても、お前は完全無欠に美少女だぜ？ 可愛くない所なんてないくらいにな。俺だったらな、いくら俺以外に覚えてることがなくて俺以外に頼る人がいなくても、お前がブ男とかだったりしたら普通に捨て置くぞ？ 流石に救助はするけど」

「え、え、え、え!?!」

「狼狽え過ぎだろ……ジエネだって、お前の事は可愛い可愛い言ってたろうが」

「そ、それはそうだけど……!?!」

ジエネちゃんは優しい子だから、実際はそこまでじゃなくても可愛いって言ってくれる子だと思う。

けど、ハクメイはそういう褒め言葉を盛ったりしない人だから、それはつまり、本心ってことで……あうー!

「か、かか、可愛い美少女っていうのは、その、ジエネちゃんみたいな子の事を言うんだよ？ ほら、今寝てる顔だって、すつごく可愛いし……」

右隣にいるジエネちゃんを見る。

本当に、すやすや眠ってる顔も穏やかで優しく、可愛くてしょうがない。

それに髪もふわふわで、胸もおつきくて、腰は細くて、いつもニコニコ笑ってて。

まるで太陽みたいな女の子。

「まあそれはそうだな」

「でしょ？」

「お前が可愛くない理由にはならんが」

「あう、うううー……」

顔から火が出そう。

手で隠してしまいたいけど、その両手はガツチリ掴まれてる。

せめてもの抵抗で顔を俯かせるけど……恥ずかしいって認めてる気がしてならない。

そんなわたしに、ハクメイは言葉を重ねる。

「言っとくけど、外見が全てって言うてるわけじゃねえぞ？ 外面つてのは多少内面が滲み出てくるもんだが、例え絶世の美女だろうと性格最悪だったら関わり合いになりたくないし。その点、お前は外も内もひつくるめて可愛い美少女だと評価してるわけだ」

「ううう……」

「つーわけで、俺がこうしてるのも別にお前の為って訳じゃなくて、俺の自尊心を満たす為って事だ。男ってのはいつの時代も単純なモンで、可愛い子には懐かれない。良く思われたいってのが根本にあるんだよ。所謂下心ってやつ？」

「そ、そんな」

そんな言葉で、片付けていいのかな。

ただの下心。

それだけで、この左手にある温かさが、生まれるのかな。

『あなた達は——』

不意に、夢の言葉を思い出した。

「……………」

あの人の手も、温かかった。

ジエネちゃんの手も、まるで太陽みたい。

けれどハクメイの温かさは……………もつと心地良い。

ぎゅつと、その手を握り返す。

「？ マトイ？」

「……………ごめん。これからもう一回眠るから、それまでは手を握っててくれるかな？」

「んー、いいぞ。なんなら」

「わたしが寝たら、ハクメイもちゃんと寝てね？」

「ぬ……………」

……………ふふ。なんだか、また少しハクメイの事が分かってきたかも。

もう一度横になったわたしに、ハクメイは布団を掛け直してくれる。手は繋いだまま。

目を閉じて、世界は真っ暗になる。

でも、もう悲しくなかった。

だってこんなにもあったかい温もりが、両手にあるんだから。

これからもまた、この手を離して、二人は戦いに行く。

わたしが唯一頼れる人、ハクメイ。

わたしのお友達になってくれた、ジエネちゃん。

二人が危ない目に遭ったらって、いつも心配になる。

だけど、絶対に帰ってきてくれるって、信じてるから。

キャラ設定

ハクメイ

年齢：17

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：オールラウンダー

- ・主人公。
- ・ウエポノイド試験チームのリーダーを務める。
- ・方向性が違うお子様の二人を引っ張るお兄ちゃん的存在。
- ・アークスになる才能が無かったらしい。その理由は……？
- ・アークス以外なら、何にでも一番になれたと言われている。
- ・好きな食べ物は甘味。砂糖菓子が特に好み。

マトイ

年齢：18？

種族：ヒューマン？（原生民の可能性があるため）

性別：女

- ・謎の少女。
- ・頭痛によつて倒れた事から、検査の頻度が上がって内心うんざりしている。
- ・ハクメイに外も内も美少女と評価されている。言われた時を思い出してにやけた顔は、度々フィリアに目撃されている。
- ・あまり態度には出していないが、友達になってくれたジエネには感謝している。
- ・好きな食べ物はケーキ。ショートケーキはシンプルイズベスト。

ジエネ

年齢：16

種族：ヒューマン

性別：女

クラス：ファイター

・ウエポノイド試験チームで、ハクメイの部下となる少女。

・喜怒哀楽が分かりやすく、素直で嘘が付けない。

・ハクメイが出会った中で随一の大きさを持つ（どこがとは言わない）。

・マトイの友達に立候補し、見事その座を勝ち取った。

・頭痛によって突如倒れたマトイを目の前で目撃してしまった為、トラウマになっている。

・マグを持っていない。理由は「小動物の脳を埋め込んだと聞き、その小動物に恨まれそうだから」。

・好きな食べ物はフルーツ。特大パフェ生クリーム盛り盛りを、三個いける。

モア

年齢：0（見た目年齢は10）

種族：ウエポノイド

性別：男

・クレイモアのチップ化によって生まれた、少年のようなウエポノイド。

・クレイモアのような羽根で飛んでいる。原理は自分でも良く分かっている。なんか飛べた。

・お調子者で、ビビリ。

・リーダーであるハクメイは、「いじわるな人」という評価。ジエネは「おつちよこちよい」。

・好きな食べ物は肉。顎が弱いので、柔らかいのが好き。

セラファイ

年齢：21

種族：ヒューマン

性別：女

・アークス管理官。

- ・ウエポノイド試験チームの担当管理官。
- ・普段は真面目だが、実は管理官の中でも大胆な方……？
- ・ハクメイのマグを受け渡ししたコフィーとは仲が良い。
- ・好きな食べ物、というか飲み物はお酒。ワインを嗜むような優雅さが欲しいが、現実には発泡酒である。

アフィン

年齢：16

種族：ニューマン

性別：男

クラス：レンジャー

- ・ハクメイの元ルームメイト。
- ・ハクメイの友人第一号でもある。ハクメイについてよく理解している、数少ない一人。

- ・現時点ではハクメイよりも惑星に降りている時間が長い、戦闘は極力しないようにしながらなので、戦闘経験は少ない方。

- ・レンジャーとして狙撃の術を学ぶべきかもしれないが、クラス担当官は怖いので近付けない。

- ・好きな食べ物は野菜。最初はあまり好きではなかったが、子供の頃に押し付けられる事が多く、食べている内に好んで食べるようになった。

ゼノ

年齢：23

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ハンター

- ・アークスの先輩。
- ・ハンターとして戦う為、大剣と銃剣を用いて戦う。
- ・適性はレンジャーだが、自分が盾となって守る為に無理を言っただけでハンターとなっている。

・お互い本気で闘ってハクメイに勝てる強さを持っているが、常勝出来る程ではないと思っっている。

・好きな食べ物は唐揚げ。レモンを掛ける派。一度無許可で掛けてエコーに引く程怒られた。

エコー

年齢：23

種族：ニューマン

性別：女

クラス：フォース

・アークスの先輩。

・ゼノをリーダーとしたチームの事務的仕事を受け持っているが、とりあえず所属しているだけのアークスがほとんどの為、実質的にはゼノと自分の二人分ではない。

・基本的にゼノと二人で行動するが、そうでない時もある。

・ゼノと口論となった時は、大体同じ話を蒸し返して繰り返し、お互いが怒り疲れるまでやる。

・好きな食べ物は唐揚げ。何も掛けない派。無許可で掛けたら引く程怒る。

ゲツテムハルト

年齢：28

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ファイター

・ハクメイに「狂人」呼ばわりされているアークス。

・ゼノを始め、ジエネやモアのように誰かを守ろうとするものを「甘ちゃん」と呼んで鼻で笑っている。

・意外とツツコミ体質だとハクメイに位置付けられている。

・チームなどは作っていない。自分は単独で行動していて、メルフォンシーナは勝手に付いて回っているだけ。

・好きな食べ物は特にならない。目の前にあれば喰らうのみ。

メルフォンシーナ

年齢：18

種族：ニューマン

性別：女

クラス：テクター

- ・ゲツテムハルトの付き人。
- ・自身を疫病神だと思っている。
- ・ゲツテムハルトに置いて行かれても、すぐに追いつく為に走り回っている。

・ゲツテムハルトの食卓は彼女が預かっているが、「美味しい」と言われたことは一度もない。だが、「不味い」と言われている時でも残さず全部食べてもらっている。

・好きな食べ物は特にならない。ゲツテムハルトと同じ物を作り、同じ物を食べるだけ。

テオドール

年齢：16

種族：ニューマン

性別：男

クラス：フォース

- ・ハクメイと同期の少年。
- ・アークス以外では何も出来ないからと、嫌々アークスになっている。

・ハッキリとした目的意識があつて動いているハクメイが羨ましいと内心想っている。

・ハクメイからは戦士としては頼りないが、才能に満ち溢れた男だと評価を受けている。

・好きな食べ物は麺類。すぐに噛み切れるから楽。

ウルク

年齢：16

種族：ニューマン

性別：女

- ・テオドールの友達。
- ・なんとかしてアークスになれないかと模索中。
- ・現在ハクメイに教えてもらったことを実践しているが、入り口に立てた気さえない。
- ・テオドールとは孤児院を同じくしたわけではないが、近所に住んでいた事から交流が始まった。
- ・好きな食べ物は餃子。パリパリに焼いたのが好き。

パティ

年齢：17

種族：ニューマン

性別：女

クラス：ファイター

・アークス一の情報屋『パティエンティア』を名乗る、双子の姉妹の片割れ。

・ハクメイと専属契約と嘯いてはいるが、その実態は他に相手にされていないだけ。

・肩書が欲しいので情報屋を名乗っているが、単にお喋りのネタが欲しいのが源点。

・実力はアークスとして平均的。必要以上に前に突っ込みがち。
・好きな食べ物はウインナー。無駄にエロい食べ方をしているが、本人は無自覚。

ティア

年齢：17

種族：ニューマン

性別：女

クラス：テクター

・アークス一の情報屋『パティエンティア』を名乗る、双子の姉妹の片割れ。

・パティとペアで行動しているが、チームを作っているわけではない。作ったら面倒が増えるだけだし……。

・ジエネの一部を見て、密かに舌打ちしてた。

・実力はアークスとして平均的。自身の攻撃力は優れていないと分かっている、姉のサポートが主流。

・好きな食べ物は刺身。姿勢よく食べているが、一緒に食べるパティの行儀が悪いので台無し。

ヒューイ

年齢：25

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ファイター

・六芒均衡の六。

・超ハイテンションの男。騒音問題として苦情が殺到するレベル。

・人助けを趣味としていて、困ったフォトンを感じたらすぐさま跳んで駆け付ける。

・ハクメイの事は肝が据わっていて面白いと評価している。

・好きな食べ物は肉。とびきり歯応えのある肉を戦うように喰らう。

オーザ

年齢：21

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：ハンター

・アークスのハンター・ファイタークラス担当官。

・先日、名も知らぬままマールと共闘したが、やはりフォースと

は合わない実感。

・好きな食べ物は焼肉。肉であればなんでもいい。タレをじゃぶじゃぶ掛ける。

マールー

年齢：21

種族：ニューマン

性別：女

クラス：フォース

・アークスのフォース・テクタークラス担当官。

・先日、名も知らぬままオーザと共闘したが、やはりハンターは嫌い実感。

・好きな食べ物は野菜。余計なカロリーはいらない。けどマヨネーズは必需品。

リサ

年齢：？

種族：キヤスト

性別：女

クラス：レンジャー

・アークスのレンジャー・ガンナークラス担当官。

・共闘したくないアークスNo.1。だが、彼女に撃たれたという変態が少なからずいる。撃たれたがるひとを撃つてもつまらないので撃たない。

・好きな食べ物は内臓肉。生で食べる。焼きもしないし味もつけない。

ルベルト

年齢：16

種族：ヒューマン

性別：男

クラス：レンジャー

・研修生の青年。

・ルベルト、ロツティの通信は、ハクメイが分岐路でダーカーと遭遇した後に万全を期す為に密かに切っていたので、二人はPフォントドライブ Dの事を知らない。

・好きな食べ物は白米。ド根性でお腹一杯になるまで食べる。しばらく行動不能になる。

ロツティ

年齢：16

種族：ニューマン

性別：女

クラス：ハンター

・研修生の少女。

・既婚者の兄がいる。アークスでは珍しいのだが、身内でひっそりとやっていたのであまり知られていない。

・好きな食べ物は焼き魚。未だに小骨が綺麗に取れなくて喉に刺さるけど、好き。

フィリア

年齢：？

種族：ヒューマン

性別：女

・メデイカルセンターの看護官。

・先日、マトイが急に倒れた事から、より一層目を離さないようになっっている。

・好きな食べ物はヨーグルト。病院食しか作った経験がないので、自炊したものは基本的に味が薄い。

ロジオ

年齢：27

種族：ヒューマン

性別：男

- ・アークスの研究者の一人。
- ・本来ならアークスとして自分の手で調査を行いたかったが、才能が無かったが為に学者としてアークスに協力を取り付ける。
- ・好きな食べ物はレーシヨン。食った感じはしないが、片手間に色んな味を楽しめる。

ジグ

年齢：75（キャストになってからは61年経つ）

種族：キャスト

性別：男

- ・刀匠と呼ばれた武器職人。
- ・情熱を失っていたが、ハクメイが持ってきた壊れた武器を見てからは再燃。現在武器の修復に取り掛かっている。本来の仕事を投げ出しかねない程で、ほとほと困っている。
- ・好きな食べ物は枝豆。酒と一緒に流し込むのが最高。

シオン

年齢：？

種族：ヒューマン？

性別：女？

- ・謎に包まれた女性。
- ・ハクメイにしか見えなかった筈だが、ジエネにも見える事が判明。
- ・好きな食べ物は不明。そもそも何かを食すような存在なのか。

仮面の男

年齢：？

種族：？

性別：男

クラス：ハンター？

・アークスのような男。

・ハクメイを殺そうと動いているようだが、その周囲の人間を殺そうとはしない。黒人チームはあっさりとした殺したのだが、ハクメイ達はその事を知らない。

・好きな食べ物は不明。仮面を着けたままでは何も食べられない筈なので、食事シーンを見つけたらそれは正体がバレた時であり、生きて帰る事は出来ないだろう。

オリジナル要素一覧

武装

剛剣『ブーステッド』

鉄の塊のような片刃剣で、色はそのまま鉄色。鋭さは全くなく、敵を叩き斬ることに特化している。峰に当たる部分にブースターが付いていて、任意のタイミングで起動させて剣速と破壊力を増すことができる。

電剣『エレキ』

雷のテクニックを使って帯電させられた剣で、触れる毎に電撃が敵に流れる。通常状態であれば静電気程の電撃しか流れていないが、雷のフォトンを流し込むことで電撃でスタンさせられる程の威力に増幅できる。

火杖『フレア』

炎系のテクニックを特に増幅させる機能を持つ。炎に特化した分、他のテクニックの増幅率は高くない。

氷杖『アイス』

氷系のテクニックを特に増幅させる機能を持つ。氷に特化した分、他のテクニックの増幅率は高くない。

光槍『ライトランス』

光系のテクニックを組み込まれていて、フォトンを流し込むことで槍先から光の槍が伸びてリーチを伸ばす。最大リーチは決まっておらず、流し込んだフォトンの量によって長さが変わる。

気砲『プレスキヤノン』

風系のテクニックを砲弾として扱い、気圧を撃ち出すことで見えないう砲撃を実現する。長い射程距離を持っているが、射程外に出ると気

圧弾が霧散してしまい、威力は無くなる。

分具『スプラッシュ』

投げた後、任意の地点、方向に分裂する導具。分裂した全ての導具からテクニックを放つことが出来る。最大数は10個。処理能力を鑑みて、それ以上の分裂はしないように出来ている。

回炎『パイロソーサー』

超高熱かつ超微細の刃をチェーンソーのように超高速で動かし続けることで、大樹を一刀に伏す切れ味を持つ両剣。アイテムパックから出している間は、周囲のフォトンを吸収して稼働し続けている為、加減が効かない。

特殊技能

フォトンドライブ
P D

全身のフォトン余すところなく活性化させて、身体能力を倍増させる。武器や防具の性能を上昇させるテクニック、シフト・デバンドと違い、筋肉と神経なども強化されるので、通常の5倍速く、強く動ける。通常よりも疲れやすくなるが、発動中はレスタを常に自分に掛けているため、肉体的な疲れはない。

テクニック並列起動

フォトンドライブ
P D 中は60〜75まで。テクニックを複数同時に発動できる。現在は最大で12〜15、

ディスク改造起動

独自の挙動に変えてディスクフォトンアーツのP A、テクニックを行使できる。零式と合わせて、式式のようにく式と名付けることが多い。既存の物と違い、他のバージョンを同時に使える。

フォトンマップ
P M

フォトンが薄く広げて、周囲を感知する。広げたフォトンが常に支配下に置く必要があるため、広げれば広げる程精密なコントロールが必要とされる。ハクメイの現在の最大範囲は500m。

ディスク

レイジングワルツ・式式

レイジングワルツによる切り上げを振り下ろしに変えた。

ゾンデイル・式式

発動させた地点へと対象を引き寄せせる雷系テクニック。引き寄せられる物の重量限界は、発動者のフォトン感応力に依存する。引き寄せせる対象をエネミーからアークスに変えた。現在ウエポノイドも対象に出来るように改良中。

【Episode 1—2. 5】『闇に触れる雛鳥』
秘密と仲間と暗躍と……

オレがきろくを始めて、今日で72回目になる。

ナンバー：72

天気：はれ

きろくしゃ：モア

リーダーと、ジエネとの三人でチームを組んだ。

リーダーってのは名前ばかりで、じっさいはオレがチームをまとめているようなもんだ。

だって、リーダーは強いけど、ちよつとなんかなあ……。

オレの事すぐ子ども扱いするし、いじわるだし、口がわるいし。

「おまけに、ジエネはぼやぼやしてて抜けてるんだもんなあ……！」

ほんとうに、あんなんでアークスになれたのがふしぎなくらいだ。

そりやまあオレはまだせんとうはぜんぜんだけど、オレがいなかったらチームとしてやってけないや。

せわのやけるふたりだぜ。

「セラファイさんも言ってたし。オレがふたりを引っぱらないとな！」

オレはそれを送って、画面をとじる。

その時、遠くからオレをよぶ声が聞こえた。

「モアー！ モアー！ どこですー？ どおーこーですー？」
「ん、ジエネ……？」

さつき言ってたメンバーのひとり、ジエネの声だった。

「ジエネ、どうしたんだよ？」

ものかげから出て、ジエネの方へととんでく。
オレを見つけたジエネは、にこにこ笑って言う。

「任務ですよ、モア！ ひとりで、どこいったんです？」

「いま、日記を書いてたんだ！」

「日記……ですか？ へえー、すごいですね！」

へへん！ そうだろ！

マメなんだぜ、オレ！ ふたりとはちがつてな！

「どうして、日記を書こうと思ったんです？ 日誌なら、チームのもあるのに」

「どうして……って……えっと……」

それを聞かれると、こまるぜ……。

けど、言うわけにもいかないんだ。

だってこれはひみつだって言われてるから。

けつきよくオレは、言いわけも浮かばないまま、怒るようになうそをつく。

「どうしても、いいだろ！ 任務なんだろ？ はやく行こうぜ！」

「はい！ ハクさんは、もうゲート前で待ってますよ！ 張り切って行きましようー！」

じょうほうを、しゅうせきして持ちかえる。
それがオレが作られた理由だからって、ふたりに言ったら、どうなるんだろう？

オレたちの任務は、ナベリウスの森林エリアでいじょう発生した
ダーカーのむれをたおすこと。

弱いこたいばかりだつて言うけど、数が数だからこれ以上あつまる
前にとうばつしなきゃいけないんだつて。

んで、リーダーは――

「ソニックアロウ!!」

そのむれのどまん中で、あばれまわつてた。

今もリーダーのP フオトンアーツ Aで、バカでかい剣から出たしんくーは？ が
ダーカーの前足をきつてる。

「そらもうひとつ!!」

もういっぱつそれやって、もう一体のダーカーも前足をきられ
た。四ほん足のそいつらも、前の二ほんきられたら立つてられなく
て、バランスをくずしてたおれる。リーダーは持つてるバカでかい剣
で、たおれたそいつらをぶつつぶしてた。

なんつーか、すっげーらんぼうだよな。

なのにけがとかはぜんぜんしないんだ。あんな大きい剣をぶんぶ
んふり回してるのに、こうげきをよけたりふせいだりするのがすっ

げー上手い。こいつらのことをザコだつて言つてたけど、リーダーはちつともゆだんとかしないんだ。ダーカーがりょうがわから二体おそいかかつてきても、リーダーは右は剣をつきたててふせいで、左は火を出してはんげきしてた。

すぎがないつて、こういうこというのかな？

オレたちも負けてられねえぜ！

「はあっー！」

「てやあっー！」

オレはジエネといっしよに、むれのそとからダーカーをたおしてく。

こうすると、オレたちがたたかつてゐるがわははさみうちになるから、オレたちはちよつとだけらくなんだつて。

……どまん中にいるリーダーはそのぶんあぶないけど、あぶないくらいじゃないときたえられないつて言つてた。

このまえのP フオトンドライフ D つていうのもつかわないし。「あれはそんなホイつかえるもんじゃない」つて。ほんとかな？

ダーカーのこうげきを下にとんでよけて、コアをさす。

ダーカーはきえてつた。

「どんなもんだい——っー！」

じまんしてやろうつて思つてジエネを見ると、ジエネにダーカーがおそいかかつてた。

ジエネはほかのダーカーとたたかつて、気づいてない。

「ジエネー！」

「!? モアー！」

そのあいだに入つて、こうげきをふせいだ。

ダーカーのつめがオレのクレイモアとぶつかる。

「いったあー！ これすつげーじんじんする！ けがはしなかったけど！」

ジエネは目の前のダーカーをたおして、おれがぼうぎよしてよろけたダーカーも、コアをきつてたおす。

「せ、せんとうちゆうだもんな！ ゆだんしちやだめだつてば！ そう思つてほかをさがしたけど、もういなかった。」

「……あれ？」

「なにしてんだ？ ダガン共ならお前らがやったので最後だぞ？」

「……」

なんつーか、オレの気合はどうしたら……。
つて、それよりジエネだつてば！

「はあ……はあ……はあ……はあ……！」

「ジエネ、だいじょうぶか？」

「……はい、大丈夫です！」

ジエネはにつこり笑う。

へトへトだつて、見りやわかるのに。

「たく。俺がど真ん中で引き付けてやったつーのに。要反省だな」

「ごめんなさい、ハクさん」

「むっ。リーダー！ ちょっとはほめてやってもいいだろ？」

「いつもいつもそれじゃ、甘やかしてるつて言うんだ。足手纏いになりたくないんだろ？」

「もちろんです！ あ、モア、さつきは……えつと」

ジエネは、オレの方を向いて、言う。

「いつもありがとう」

「え……う？」

「さっき、わたしのこと庇ってくれたでしょう？ それに……いつも優しくしてくれて、ありがとう」

……手はまだじんじんしてたけど、なんかうれしくなった。
でも、それも言えなくて、オレはぶいっと顔をそらす。

「……べ、べつつに、ふつうだろ！」

「ツンデレか」

「な、なんだよ！ もんくあるか!？」

「いや、別に？」

「ふふ」

ジエネは笑う。

ジエネはいつもそうだ。たたかったあとでもニコニコして、ぽやぽやしてて。

それで——

「……モアと、チームが組めてよかった。仲間になれて、よかった」

「……なか……ま」

——それ、で……。

「そ、そうだ……！ 仲間なんだから、とーぜんだろっ！」

「ジエネは、抜けてるしたよりないし……それに、ちよつと変わってると思う。人の話をすぐ信じるし、がんばりすぎてよくへトへトのクタクタになってるし……」

今日もオレは日記を……ほーこくしよを書く。

「でも……ジエネはすごいいいやつだ」

任務はじゅんちよーにおわって、けつきよくだれもけがしなかった。

オレがチームをまとめてるおかげだ。

……いや、わかってるんだ。

ほんとは、ほんとならリーダーとジエネのふたりでだって、ちゃんとやれるんだ。

今回ジエネがあぶなかったのだって、リーダーがジエネとはなれてたたかってたから。

はなれててもオレがフォローするからだいじょうぶだって、リーダーが信じてくれたんだ。

でも、オレは……。

ナンバー：84

天気：はれ

きろくしや：モア

きよう、ジエネがオレを仲間だって、そう言ってくれた。

ジエネは、いいやつだ。

リーダーも、いじわるだけどいいやつだ。

なのに、オレはふたりに言っていない、ヒミツがある。

ふたりといると、楽しい。
でも、ヒミツにしていることがある。
だから、むねのところがチクチクする。
オレには、ウエポノイドには心なんて、ないって言った。
なのに、痛いんだ。おかしいな。
いつか、ふたりに全部話せたらいいなって思う。

という文面で送られてきたメールを、ハクメイは細部まで目を通す。

「あんにやろうめ。これで意地悪って書かれるの何回目だ？」

持っている手帳に、文面そのものと、報告書から読み取れた情報を書き出していく。

彼は自分の記憶力に信を置いているが、文字にすることで新しく気付く事もあるのだと経験で分かっているのです、こうしてメモする習慣をつけている。幼い時分から続けていることもあってその量は膨大だが、捨てたものは一つとして無く、今でもアイテムパックと繋がる倉庫の中に眠っている。

書くことを書き終えると、ハクメイは手帳を閉じる。

「秘密ねえ。情報集め以外になんかありそうなのが気になるが……
ま、今日も問題なさそうだし、このままでいいか」

送り主がモアだという記録を残すようにデータを改竄し、本来の送り先に送る。

彼はこうして、情報を集積して持ち帰るといふ任務を持つモアの報告書を改竄し、怪しまれず、矛盾が起きず、しかし自分の都合のいいように、情報を誤認させている。

先日のP フオントドライブ Dの件もこうして改竄することで、「現段階ではゼノに比べてあまりに未熟なもの」と送り先に認識させていた。

最初から完全に出来てるのだと露見すれば、連中のことだ。あの手この手を仕掛け始めるだろう。

この一手も、モアと同じ場所に居合わせてモアが報告書を送ると同時に、自分のメール通知が聞こえたりすれば、怪しまれるのは必然だ。しかしそれは起きない。元々モアは、これを書く時はバレないように一人で隠れるのだから。

いずれはP フオントドライブ D以外の技術についても露見する事だろう。

だが、今はまだその時ではない。

その為にも、目を付けられるのはまだまだ先延ばしにしなければならぬのだ。

彼がやっていることは、チームメンバーのプライベートを覗くという、後ろ指差されてもおかしくない事。

モアの、誰かしらに無いと言われている心の内を、土足で踏み荒らす行為だ。

だが、彼に罪悪感は一欠片どころか粉塵でさえもない。

自分が不利益を被ると分かっているながら、他人に遠慮するような男ではないのだから。

自分より他人を優先する事など、彼にはないのだから。

0792―コードC・E・M・A研究所第一科製造班潜入成功。不
審な情報を入力。

1205―2コードS：緊急連絡。E・M・A研究所が爆破され
た。

1224―コードA：研究所職員『208893』。生体反応を確認
した。

――ブルーノ――

そして、闇が表れ始める。

思いがけない奴等に思いがけない縁があつた時つて、
どんな顔していいやら

間。
仮面野郎と二回目の遭遇を（不本意ながら）したあの日から、一週

間。
ウエポノイド試験チームの俺達は、ナベリウスの地で細々と任務を
こなす日々だ。

新しいマターボードは第二惑星・リリーパの地での活動を示唆して
いるが、生憎二人は新しい惑星に行けるレベルに達していないので後
回し。シオンもあれから何も言つてこないし、取り立てて急ぐことは
ないのだろう。第一、指定してる時間も相当先だしな。

仮面野郎との戦闘は（勝てるようになるまでは）もうしたくないが、
あれがあつて新しく出来た物もある。

ジグさんの協力もあり、技術的な面ではあの時より強くなった。

とはいえ肉体的な面はなあ……。一応あれからちよつと危ない橋
を渡るように戦闘してるから、ちよつとずつは成長してるんだと思ひ
たいが。

さて、現在。

後輩二人の顔合わせをさせているところである。

「纏めると、二人は一応顔見知りだったと」

「はい！ その通りです！」

「は、はい」

なんでもこの二人、家族同士が結婚しているらしい。

ロツティの兄と、ルベルトの従姉。

この二人とは大分年の離れた人達らしく、もう子供が二人。それも
結構成長してるとのことだ。

いつ死ぬとも知れない職であるアークスでは珍しい事だが、まさか身近にいたとはね。

「士官学校ではほとんど顔を合わせませんが、二人の結婚について知らされた時に駆け付け、その時に遭遇した次第であります！」
「遭遇て」

ルベルトの従姉、アレンデは元アークスで、最初の子供を腹に宿した段階で引退……寿退社？ したらしい。女性アークスは子供を産んだ後に復帰することも可能だが、そのまま専業主婦となったのと。と。

アークスとしては特筆するような実力を持たないが、ボンボンの娘らしく気品溢れる美貌（ロツティ評価）で、芯の強い性格をしているらしい。

ロツティとそのファミリーからしても、会ったその日に結婚をOK出来る程だそう。相当人の心を掴むのが上手いのだろう。

「先輩からもう一人データを見させて頂いている人がいるとは聞きましたけど……、まさかそれがルベルト君だったなんて……」
「いやあ、偶然ってあるものだね」

ロツティの兄、レイスは今でもアークスとして戦場に立つ男のとことだ。

一チームのチームリーダーを務め、更に高戦績を叩き出す優秀なアークス。今は特殊な任務でチーム共々ロツティ家とは違うシッパに移って活動している。アレンデはそのチームの元メンバーで、二人の親交もそこから始まったそう（元は二人共ただのメンバーだったらしい）。

ちなみに二人と同じく、ルベルトの従姉はヒューマン、ロツティの兄はニューマンだ。

種族が違えど、結婚することも、その間に子を産む事も可能である。

子供がどちらの種族として生まれるかという点、「どちらの種族も有り得る」が正解だ。

ヒューマンとニューマンの間に、ヒューマンが生まれる事も、ニューマンが生まれる事も、なんなら上がヒューマン、下がニューマンなんてこともある。ただし、どちらの特徴も併せ持つハーフの存在は確認されていない。

レイスとアレンデの場合、二人の子供は、上である姉の方がニューマン、下の弟がヒューマンだという。

余談だが、キャストは少し特殊で、子を成そうと思つたらボディパーツを戦闘用の物から、一般市民のキャストが利用する生活用の生体パーツに切り替えなければならない。身体をパーツと考えるキャストじゃ、子を成すのに必要な生殖器官は弱点になるからな。キャスト同士だと生体パーツはヒューマンをベースにしているからヒューマンか相手側の種族が生まれるそうさ。まあそもそも、パーツさえ変えれば寿命はいくらでも稼げるキャストは子を成そうって意識が低いんだが。

ちなみにデューマンは、二十年程前に試験管ベイビーとして生まれたばかりなのもあって子を成した者はまだいないので、この法則にどう絡んでくるのかがまだ未知数である。

長くなった。

話を戻すことにする。

「俺への説明があつたが、とりあえずお互いの自己紹介は省けたつてことで。二人を会わせた理由を説明しようか」

「押忍！」

「押忍て」

「はい。あの、どういった理由でしょうか？」

「お前らのレポート、途中経過でもいいからこの三人で見るの」

テーマという名のタイトルはともかく、卒業レポートは他の生徒には見せない。成果を横取りされるのを防ぐ為だ。

しかし共同研究という形ならば、研究協力したアークスが監視役となることでお互い見せ合うことが出来る。監視役と言つても責任者と言うわけではなく、あくまで第三者として、研究がどちらのものであるかを明言する立場である。

ルベルトはエネミーの弱点を個体毎に纏める研究。

ロツティはブーストエネミーについて纏める研究。

この一週間で二人の研究に少しばかり共通点が見つかった事で、共にするべきだと感じたのだ。

まあ、二人がお互いに見せ合い、俺が意見することで、レポート作成が捗るのもある。

二人の研究レポートが優れてりや、その分研究協力したアークスである俺の評価も上がるし。

「ブーストエネミーについてるコア、ルベルトは知ってるか？」

「お、押忍！ ダーカーによって浸食されていることを示す核のことですね？ プリアーダが産み出すダガンエッグに似ていると聞きます」

「正解。んで、それについて分かった事を、ロツティ」

「え!?! は、はい!」

急に振られてびっくりするロツティ。

しかしすぐに落ち着いた様子で、説明を始める。

「浸食核は、ブーストエネミーの弱点にもなるということが分かったの」

「弱点に？」

「うん。恐らく、浸食された事で内部に根のようなものを張られているから、浸食核に与えたダメージがエネミーの内側にも響いているんだと思う。人間だって、神経や内臓に直接与えられる衝撃に対する耐性なんてそうそう付けられるものじゃないでしょ？ 浸食深度にもよるけれど、ブーストエネミーにとって浸食核は、人間の目と同じよ

うに『露出している内臓』と考えれば分かりやすいかもしれない」
「成程……」

男なら金的を受けるようなものだな。まあ言わないけど。

そういう性格なのか、ロツティはこういつた定型的というか、情報を説明する時には随分と落ち着いた様子で話す。スイッチが切り替わる、とでも考えればいいんだろうか。

それにしても。

「敬語じゃない時はそういう喋り方なんだな」

「あ………！ いえ、その………！ 先輩と仲良くしたくないわけではなくて、ルベルト君は同年代だから………！」

「いや、別に敬語じゃないから仲良くないとは思わねーよ」

ジエネは誰に対しても敬語だが、そのまんまで仲良くしてるしな。

年功序列を持ち出す気はないのだが、ロツティのキャラでいきなりタメ口聞かれたらびっくらこくわ。

そのタメ口も結構丁寧だが。

年頃の大人しい女の子って感じでかあいい。

「つーわけで、ルベルトが研究してるテーマに、ブーストエネミーの浸食核の事も書いたらいいんじゃないかねーのって思ったわけだ」

「そ、それで先輩は、ブーストエネミーになった個体には、なる前に持っていた弱点が消える、或いは通じなくなる可能性も考えて、ルベルト君にはそこを探ってもらったらいんじゃないかって」

「つまり、弱点となる浸食核と、ブーストエネミーになる事で他の弱点が変化するかどうか！ その点を研究することで自分達が相互協力できるのではないかと考えたのですね!？」

「話が早くて助かる」

ほんとこいつ、お馬鹿に見えて結構頭が回る。

例えば、通常状態では通じていたエネミーの弱点が、ブーストして凶暴化することで、その弱点を突いても仰け反らなくなる。そんな場面に直面した時、想定外の事態によって硬直してしまう事もあるだろう。

その一瞬は、戦場ではあまりにも命取り。

なので、事前情報として何が通じて、何が通じないか。それを知っておけばそんな硬直も起こらないし、そもそも通じなくなった弱点を狙って突こうともしなくなるだろう。

その情報を纏めたレポートがあれば、二人の研究はきっちり成功して、無事卒業を果たすことが出来る。

俺としても個人的に欲しいデータだし、誰も損をしない。

「流石先生！ 慧眼恐れ入ります！」

「……あの、ところでどうして、先生なんですか？」

「この馬鹿に聞いてくれ。俺にもさっぱりだ」

とりあえず現在の研究内容を詳しく通じ合わせたところで、今回の集まりは解散した。

「おっ、こんにちは！」

「え？」

わたしがショップエリアを歩いていた時、元気そうな声でそう声を掛けられました。

？ 誰でしょうか？ あ！ それよりもまずは挨拶です！

「こんにちは！」

「ふふん、元気そうで何よりだね」

「はい！ ええっと、初めまして？」

「うん。まあこうして挨拶するのは初めてかな。でも、あなたには前から話しかけてみたいと思ってるんだ」

「？」

「ほら、あなたの……チームリーダー？ いつも一緒に任務に行くの、ハクメイさんっていう人でしょ？」

「……あ、もしかして、ハクさんのお知り合いですか!？」

「正解！ んで、一緒にいるとこ度々見かけるからさ。どんな子かなって思ってるね」

なんだか気さくな人で、シヨップエリアのテーブルについてすぐに話が弾みました。

その女性の方、ウルクさんは、どうやらハクさんをお願いごをしたり、相談をしたという関わりがあったそうです。

有料でフォトンの扱いについても教授してもらったそうで……ハクさんらしいというかなんていうか。マントやスカーフも後できちり請求されましたし。いえ、もちろんちゃんと払うつもりでしたよ？

フォトンの扱い、ですか。

ウルクさんは友達の方にも伝えてみて一緒にやってみたら、その人はあっさりマスターしてしまっつて、ちよつと凹んだそうです。すごい人なんですね。

わたしもフォトンの扱いが下手ですから、今度ハクさんにご教授お願いしてみるべきでしょうか。

「アークスって危険と隣り合わせで、すぐ怪我したりするからさ。こうして無事に話が出るのは、それだけでいいことなんだよ？」

「はい……わたしも、まだまだ未熟で。あ！ でも、ちよつとした怪我ならハクさんがあつという間に治してくれるんです！」

「へえ！ ハクメイさんって、前に出て戦いもするんでしょ？ 回復も出来るなんてすごいね」

「そうなんです！ ……大概、わたしのミスを指摘しながらになるんですけどね」

「でもそれって、それだけジエネちゃんの事心配してるわけでしょ？

どうでもよかったら、そもそも何も言わないしね」

「……えへ」

笑みが零れてしまいました。

ハクさんは優しくしてるつもりないって言いますが、わたしはハクさんに会って最初に思った通り、最初に思った時より優しい人だなって思います。

わたし達が怪我をしたら、その都度回復してくれる所。危ない時にフオローしてくれる所。わたし達の戦いを見て、直すべき所を言ってくれる所。

あの仮面の人と相對した時も、ハクさんはわたしを背負って走ってくれました。

モアやマトイちゃんが言うように意地悪な所も、厳しい所もありますけど……ハクさんは優しい所が一番に出てくると思います。それはきつと、二人も同じです。

「おや？ ……なんか良いこと思い出した？」

「え、えつと……その、そうです」

「んー素直で良い子。でも、気を付けなきゃダメだよ？ ……まあ、安全圏にいさせてもらってるわたし達が言えた言葉じゃないけど……」

少しだけ自嘲気味にそう言うウルクさん。

ウルクさんは小さい頃からアークスに憧れていたけれど、適性がなかったばかりになれずじまいとなってしまうのだそうです。

……ウルクさんなら立派なアークスになれたでしょうに、才能がないなんて……。可哀想です。

「うにや、それも言い過ぎか。アークスが戦い、私達一般員が生活圏の維持を行う。そういう役割分担だもんね」

空気を変えるように明るく言われます。

「……わたしは、何をしようかなあ。食物管理……は向いて無さそうだし、製品開発……もなんだか微妙だな」

「うーん……わたしも、アークス以外の仕事はあまり詳しく知らないので、なんとも言えないです……ごめんなさい」

「謝ることないって。あ、そうだ！ ippそのこと、アークス関連の職員なんかもいいかも！」

パン、と手を打ち合わせるウルクさん。

アークス関連の職員、ですか。

セラフィさんのようなアークス管理官を始め、メディカルセンターやクラスの管理官、チームセンターの職員なども、ゲートエリアにいる人達はアークス関連の職員と一括りにされます。ゲートエリアにいない職員さんもいますけど、代表的な所はそこですね。

「未練がましいって思われるかもしれない。アークスとして戦えない分、辛いかもしれない。でも、ずーっと憧れてたんだ。少しでも関わりたいって思うのは、自然なことよね？」

……とても立派な人です！

憧れてたアークスになれなかったのに、それでも追い求めて頑張る姿勢。わたしはすごいと思います。

「もちろんです！ わたし、ウルクさんが職員になれるよう、応援しますからね！」

「あはは。修行が上手くいってアークスになれることも、ついでに応

援してくれたら嬉しいな——ん？」

「はれ？」

わたしのデバイスから通知を知らせる音が鳴りました。

「あ、ごめんなさい。次の任務だと思えます」

「そっか。頑張ってきてね。わたしは大概この辺うろついでるから」

「はい！ またお話ししましょうね！」

「あ、あの……こんにちは。よく、お会いしますね」

「おお、テオドールか」

ゲートエリアを歩いていたら、テオドールに声を掛けられた。

いつも通りおどおどした様子で俺に尋ねてくる。

「あの、貴方はどうしてアークスに……？」

「おん？」

「ああいえっ、文句とかではなくて、ただ単純に興味があるだけで……」

いや、何も言っていないんだが……。

しかし興味か。なんでまた。

俺のその疑問に答えるように、テオドールは語る。

「……ぼくの知り合い、アークスになれなかったんです。その……適

性がないそうで……。いっつもアークスになるって言っていたんですけど……才能がない、って」

「あー」

ウルクの話か。

向こうは友達ってハッキリ言うのに、こっちは知り合いと言うんだな。

まあこいつの性格で「幼馴染です！」みたいに強く言われてもあれだが。

「ぼくがアークスになっちゃって、彼女がなれない、って……理不尽ですよ。可能なら、ぼくの適性をあげたい……けど、そんなことできないし……」

「まあそればかりはなあ」

色々技術を生み出している俺でも、それは出来ない。

お前の才能なら、出来たら俺が貰いたいものだ。

「……なんで、ぼくなんでしよう。ぼくじゃなくて、彼女の方がよっぽどアークスに向いているのに……」

「確かに。やりたくない事の才能ばかりで、他がなんも出来ねえなんてよ」

「いえっ、ぼくの事は……まだ、いいんです。それより、やりたい事が出来ない彼女が……」

顔を俯かせるテオドル。

話し掛けられてそんな顔されても困るんだがな。

ふむ。

やりたくても出来ないなら、出来るようになればいいと、口で言うのは簡単だがな。

アークスになりたいってのは、ウルクの問題で、ウルクの『欲』。

友達だろうが、あくまでこいつとは別問題。

それに心痛めるより、こいつ自身が戦う理由を見つける方が先だと
思うが……。

「おっ。」

デバイスが通知を知らせる音を鳴らす。

少しだけ目を通すと、どうやらセラフィさんから次の任務の通達の
ようだ。

「まー、そいつの相談相手になるなりなんなり、好きにしろよ。けど、
才能を持ったことを申し訳なく思うのはやめとけよ？ そいつも良
い顔しないだろうし」

「……はい」

そう締め括って、俺はセラフィさんの所へと向かう。

まあ、勿体無く思うのは事実だが。

あいつの才能を活かすのも腐らすのも、あいつの勝手だ。

「へえ。ウルクに会ったのか」

「はい。とつても良い人でした！ モアも、今度会いに行ってみま
しょうね」

「いいけど……そこまではやるやつなのか？」

「まー貴重っちゃ貴重な奴かね」

俺達はいつもの三人で、キャンプシップに乗っていた。

向かう先はナベリウス。

乗ってる間は暇なので駄弁っていたのだが……ジエネはどうやらウルクに会っていたらしい。

俺がテオドールと会った時と大体同じくらいの時間だから、えらい偶然だ。

ウルクは今、俺が教えた訓練法を試しながら、アークス関連の職員を志そうとしているとのこと。

俺もテオドールと話したこと伝えるべきかなあ。でもあいつ、マイナス思考な発言しかしてないんだよなあ……。

まあいいか。

セラファイさんへと通信を繋ぐ。

「細かい任務内容は道中にするって話だったけど、結局どういう内容なんですか?」

『はい。みなさんは、E. M. A研究所爆破事件をご存知ですか?』

「研究所爆破事件って……確か4か月前にひどい爆発が起こって、職員の方もすべて亡くなったと聞きました」

その話なら俺も知っている。

武器の研究所であるE. M. A研究所が、施設丸ごと崩壊する程の大規模な爆発が起こり、それに巻き込まれて施設内にいた人間は全て死に絶えたとのことだ。

原因は解明されておらず、研究中の事故なのか、計画的な犯行なのかさえ判断がつかないそうだが……武器の研究で施設が崩壊する爆発が起こるとは考えづらいので、暫定的に人為的な爆発だと見て、犯人を捜索中だと。

『それが……つい先日、研究所の職員・ザツカードさんの生存が確認されました』

「……なに?」

「ええ! バクハツで助かった人がいたのか!」

『目撃者も、証拠となるものも何も残っておらず、調査は難航しています。ですが、生存者から話を聞くことが出来れば、事件の真相が分かるかもしれません』

……生体反応だと？

爆発から四か月も経った、今更？

「なあ！ その助かった人って、事件の犯人に捕まってるかもしれないよな？」

「確かに……もしそうだとしたら、早く助けてあげなきゃ可哀想……」
「……………」

その可能性も否定しがたいが……引つ掛かるな。

その生体反応が確かな情報だとして、他に考えられる可能性は……。

『みなさんの任務は一刻も早く、ザツカードさんの安全を確保することです。私の案内に従って、これからザツカードさんの生体反応を追ってもらいます！』

「もしかしたら、事件の犯人も一緒に捕まえられつかもしれないな！」

「うん！ そうですね！ 頑張りましょう！」

「……ああ、そうだな」

幾つかの推論を頭の片隅に留めておき、俺はそう領いた。

さて。ダーカーが出るか、龍族が出るか。

俺の嫌な予感が当たるなら……ジエネにはちっと酷かもな。

狂乱の研究者・ザツカード

「やあほおー！ーうっ！ さむくなー！ーいぞおー！ー！」

モアはウツキウキで歓声を上げる。

セラファイさんから任務内容について聞いた後、俺達はキャンプシツプから凍土に降り立ち、森林から凍土へ抜けた時と同じように、凍土を抜けて遺跡エリアへと辿り着いた。

二人は羽織っていた外套を脱ぎ、アイテムパックに仕舞う。

「ようやく、寒い凍土を抜けられました！ よかったですね、モア」

「目ん玉こおるんじゃないかってくらい寒かったから、ほーんとここ天国!!」

「まーその分ダーカー溢れてるけどな」

事前情報でも聞いていたが、こうしてこの場に来てみるとよくわかる。ナベリウスの森林エリア、凍土エリアで原生種がいた分までダーカーに変わったかのような出現密度だと言えよう。

このエリアに出てくる原生種は、森林と凍土にいたエネミーが入り混じって存在し、新しく出てくる個体は総じてダーカーとなっている。

甲羅に覆われた亀型のダーカー、ミクダ。その上位種のオル・ミクダ。眼面魚のダーカー、ダガツチャ。その上位種、ダーガツシュ。巨大な体躯と身の丈程の大盾を持つ人型ダーカー、ガヴオンダとグヴオンダ。同じく身の丈程の打棍を持つ人型ダーカー、キユロクナーダ。それと同じ外見で、鉄球のようなボールハンマーを投げってくるサイクロネーダ。他にも惑星リリーパに現れる、人間サイズの蜂と蠟螂を足して二で割ったようなダーカー、エルアーダ。幼虫みたいなダー

カー、クラーダ。その上位種の蟹と亀を足して二で割ったような、硬い甲羅が特徴のダーカー、クラーハーダ。

数え上げるだけで気が滅入るほど、ダーカーが数多く種類多く存在するのだ。

おまけに――。

(大型ダーカーの存在も確認されてる、とのことだと)

出来ればまだ遭遇したくないところだが、状況によつちやそうもいかないだろう。

PDだけならばもうこの二人には披露した事だし、使うことに抵抗は無いんだが、テクニック並列起動はそうもいかない。

ハンター(適性はレンジャー)のゼノさんに習ったという言い訳が利かないからだ。

この二人なら適当言っても簡単に納得しそうだし、モアの報告書なら改竄すればいい。しかし、どうしても俺が『並列起動を使える』という事実は二人の中に残る。

二人からして使うべき時に使わなければ反感を買うし、隠している理由に言及されても困る。しかもこの任務は常にセラフイさんが案内することになるから、後輩二人のように都合が悪いから通信を切るという事も出来ない。

……まあ、遭遇しないで済むならそれがいい。今のところ探知範囲内には大型のはいないようだし。

「さっきまでとここ、同じ星だと思えないぜ! 不思議だなあー」

「ほんと、不思議ですよね!」

二人は呑気に会話中。

ここ遺跡エリアは、遙か昔にナベリウスに文明が存在していた事を示すように、崩壊して苔の生えた建造物達が散乱としていた。俺達の上っているここも人の手で建造された床に緑が生い茂っているよう

で、その下は湖となっている。このエリア全体に広がり、凍土の山に囲われている巨大なものだ。山々が冷気を遮っているのか、このエリアの気候は温暖である。

森林から凍土に来た時もあったが、滅茶苦茶な気候だよな。

そういえば、とジエネは続ける。

「アークスには惑星の探索や調査をする人もいるんですよ」

「え！　じゃあ、ジエネやリーダーみたいな戦うアークスだけじゃないんだな！」

「そうです！　宇宙の不思議を追ってる人もいるんですよ」

「それもかつこいいいな！　そういえば、ザツカードもアークスなんだっけ？」

『はい。ザツカードさんも、E・M・A研究所の職員であり、アークスでもありました』

「研究をしたり、調査をしたりするアークスもいるんだ。なってるほどなあ！」

惑星に降りる以上、ダーカーやエネミーとの戦闘は避けがたいので、戦闘能力は必要になる。しかし、それだけがアークスの仕事ではなく、むしろ調査兵团と名乗っているのもあつて本来はそっちの方が本職だ。

とはいえ、惑星の調査など取り立てて急ぎ解明するようなこともなく、必然的に生命を脅かすダーカーの対処の方に力を注ぐのは当然と言えよう。

「セラフィさん。ザツカードさんはその……研究所で、一体何の研究をしてたんですか？」

『あ！　すみませんでした。詳しくお話していませんでしたね』

「ホン、と咳払いするセラフィさん。」

『E・M・A研究所は、みなさんが使う武器の研究開発をしている機関でした』

「それって、わたしが使っている武器も、そこで作られたってことですか？」

『そうですね。E・M・A研究所が開発したものかもしれませんが。最近では、武器の使用データを集積、解析することにも注力していたようです』

「じゃあ、モアの元であるクレイモアも、そこで作られたのかもしれないですねっ」

「へっ？ あー、うん。そうかもしれないな！」

「……………」

モアの反応がおかしい。

……例の秘密に関係してるのか？

疑問もそこそこに、俺達は先に進んでいく。

慣れないダーカー相手なので動きが読み切れず、無傷とはいかなかった。

しかしまともに貰う事もなく、二人のフォローもする余裕はある。時にはグヴオンダの大盾やキュロクナーダの打棍をブーステッドで割碎、パイロソーサーで熱切断しながら倒していく。

多少の傷も俺の個別回復で治る。実質的には無傷だ。

ここまで並列起動はもちろん、PDの出番もなく、難なく進んでいく。

「へへっ！ 新しいダーカーもいっぱいだけど、オレたちの敵じゃない

いな！」

「……………」

……切れ味が悪いな。

やっぱ、原生種共と同じようにはいかないか。

「…………あの、ハクさん。大丈夫ですか？」

「あん？ 怪我ならちゃんと治してるし、治してやってるだろ？」

「いえ、それもですけど、そうじゃなくて……。キャンプシップを降りてからずっと、口を開かないままだったので……」

「ん？ あー…………」

そういや、ずっと考え事してばっかで会話にまるで参加してなかったな。

戦闘では切り替えちやいるが、ジエネからは不自然に見えたんだろ
う。

普段の俺は結構喋る方だし。

「気にすんな。ちっと今回の件で気になる事があったから、考え事してただけだよ」

「？ 考え事？」

「それって——」

『！ みなさん！ ザツカードさんの反応がすぐ先です』

セラフィさんの通信が会話を遮る。

「ま、それもザツカードとやらに話を聞けば解決するだろ。さっさと行こうぜ」

「それもそうだな！ って、あー！ ふたりとも、あれ！」

モアが何か気付いたようで、俺達の行く先に向けて指差す。

そちらに視線を向ける。

「……………どうしよう……………どう……………ああ……………ごめんなさい……………ごめ……………」

ひたすら虚空に向かって謝り続けるデューマンの青年の姿があった。

「……………あれ、か？」

「お、おいジエネー！」

「う、うん。ザ、ザッカードさん……………ですよね……………？」

「……………どうしよう……………どう……………ああ……………ごめんなさい……………ごめ……………」

「おーい。聞こえてんのかー？」

『リーダー！ ジエネちゃん！ モア君！ 彼がザッカードさんで間違いありません！ 保護をお願いします！』

人違いではなかったようだ。

ザッカードは紫の髪を肩まで伸ばし、知的な雰囲気醸し出す眼鏡と、長身を実立たせる黒い服を身に纏っている。

デューマンの噂のオッドアイはここからだと窺えないが、特徴の一つである角は、一本角。男性デューマンは一本、女性デューマンは二本なのが普通らしい。

もう一つの種族特徴でもある白い肌がインテリさを一層強くして、白衣でも着せれば一気に研究者っぽくなりそうだ。

しかし、なあ……………。

「あの……でも、なんだか、様子が……」

「ジエネ！ 確かになんか、ヘンだけど！ やらなきやダメじゃんかっ！」

「わ、わかってます！ ……モア、なんでわたしの後ろに隠れるんです？」

「へタレめ」

「う、うるせー！」

ホラーっぽいのは分かるけど、せめて俺の後ろに隠れるよ。ジエネの後ろとか情けなくならない？

ジエネはそれ以上言及せず、ザッカードに呼びかける。

「ザッカードさー！ わたし、アークスのジエネです！」

「……………」

「うわあっ！ こっち向いたって！ 向いたって！」

「わーかったから騒ぐなって」

「爆破事件の事とか、いろいろ……ええっと。とにかく、わたし達と一緒に戻りましょう！」

ジエネのその言葉を受けて。

ザッカードは、再び謝り始めた。

謝り、言った。

「ゴメンナサイ、ごめんなさい、ごめんなさい。もつと上手くやるはずだったんです、です。もつと綺麗に燃える筈だった……だった。計算を間違えたのか、天候の問題か……？」

「な……何、何を言って……？」
「……チツ」

嫌な予感の方が的中しやがったか。
……こうなったら、やるしかねえか。
左手にスプラッシュを呼び出し、投げて拘束——

「上手く出来ただろう……？ 綺麗に爆発させてやっただろうがあ
!!」

その時。

「!?」

投げようとした手を、止めた。

……くそ！ この反応………遭遇したくないって思ってた矢先にこれかよ！

『みなさん！ 注意してください！ 強力な、ダーカーの反応が……！』

「え!?!」
「な、なんだよ!?!」

セラファイさんが、キャッチした反応が示す個体の名を、通信越しに叫ぶ。

『あれは……ウォルガーダ!!?!』

巨大なゴリラのような体躯を持つ大型ダーカーが、立ち塞がるよう

に出現した。

その背にいるザツカードが、そのウォルガードに向けて。
命令した。

「壊せ！ 壊してしまえ私の下僕！！ 私をイジめる何もかもをなあ
!!!」

ウォルガードが、それに呼応して雄叫びを上げた。

ゴリラの相手とかご勘弁

「くそっ！ 次から次へと！」

のっそのっそと歩いてくるウォルガーダの前に、悪態をつく。

遭遇したくなかった大型ダーカーが、よりにもよって保護……いや、捕縛対象を前にするという、簡単に逃げるわけにもいかない状況で現れたのだ。舌打ちの一つしたくなるっでもんだ。

しかも言動を鑑みるに、あいつが呼び出したと来た。

それだけじゃなく、天敵のアークスであるザツカードの言う事を聞く、しかもあんな曖昧な指示で操れるというのだ。

保護だなんて簡単に終わる気配がない任務だとは思っちゃいたが、こうも想定外の事態が起こるたあな。

新人チームがやる任務じゃねえだろ、ったく！

「ダーカーが、アークスの指示に従うなんて……こんなことって……っ!!」

ジエネが目の前で起こっている事実を受け止められないのか、口に出してそう言う。

モアもその後ろでおろおろとしていた。

二人の隣で、俺は武装を呼び出す。

「ライトランスッ！」

白一色の直槍を、ウォルガーダに向けて突き出した。

狙うは両肩にあるコア、右肩の方だ。そこに向けて一直線に突き出したライトランスから、光の槍が伸びていく。奴のコアに比べれば細

い線だが、スピードは中々のものだと自負している。

果たして光の槍は、右肩のコアへと刺さっていく――

直前で。

ウォルガーダの左腕がそれを防いだ。

「チィッ！」

光の槍は左腕の装甲と衝突し、ガラスが割れるように弾け、霧散する。

ウォルガーダの両腕には装甲が着けられていて、これが相当な硬さだと聞く。腕を構えれば盾となり、巨体から振るわれる時には武器となる。ウォルガーダ本体の膂力を活かした攻防一体の武器だと言える。とは言っても、身体から生えてるものを武器と言っているのか。人間の歯や爪も武器っちゃ武器だし、同じカテゴリか。

先手必勝に失敗したので、ライトランスは仕舞う。

「お前らー！」

「え!? は！ はい!!」

「お、おう！」

「考えんのは後だ！ 今はこいつを倒す事を考えろ！ ジェネ！ 俺の後ろでスイッチの準備！ モアはあいつの肩を飛び回って牽制！

ただし回避優先で行け！」

「わ、わかりました！」

「よ、よっし！ やってやるぜ！」

二人が武器を構えたのを見て、補助テクニクを掛ける。

「シフター！」

赤いフォトン活性化フィールドを展開。

そしてもう一つ。

「デバンドー！」

青いフォトン活性化フィールドを展開して、それぞれの強化を為す。

武器の威力とユニットの防御力の底上げ。正直言って微々たるもんだが、あるとないとじゃ大分違う。

正直言うと並列起動で同時に行いたかったが、今はまだ隠す段階だ。

……この戦いで、どこまでそう言ってもらえるかは分からんがな。

「フォトンドライブ
P D !!」

自身の肉体も強化し、ウォルガーダへと走る。

一直線に向かってくる俺に相對し、ウォルガーダはその場で身を屈め、力を溜めるような体勢を取る。

もう少して攻撃範囲に入ると言う所で、ウォルガーダは張り手を交互に突き出すような連撃を繰り返してきた。

「ヒヤハヒヤハヒヤヒヤヒヤ!! 壊せ壊せ壊せえ!!」

うるせえな、あそこの狂人。

ゲツテムハルトも大概だと思ってたが、あそこまで話が通じないとレベルが違う。

向かってくるウォルガーダの連撃に対し、俺は進路を変えずに走る。

そして、その頭に向かって跳んだ。

一足飛びで突進してくる俺に、ウォルガーダはすぐさま対応。張りの角度を上向きに変え、俺に突きをお見舞いしようとしてくる。

勿論、考えもなく空中に身を投げる俺ではない。

向かってくる張り手を前に、テクニックを発動。

「イル・ゾンデー！」

雷となつて張り手を潜り抜ける。

同時にウォルガーダの頭上へと踊り出て、イル・ゾンデーの解除と同時にブーステッドを取り出して、振り上げる。突進した勢いを殺さずにウォルガーダの頭頂部に到達したところで振り下ろし始める。加えてブースターを起動。

「ずおらッ!!」

頭頂部後ろ側に、ブーステッドを叩きつけた。

張り手によつて重心が前に傾いていたウォルガーダは、頭上からの衝撃に耐えられず、顔面から地面に突っ込んだ。衝撃が地面に響く。

フォトンアーツ
P Aではないとはいえ、体勢を崩したところにPDとブーステッドの相乗効果だ。割碎とはいかずとも仰け反らせることは出来る。

「追撃！」

「はい！」

遅れて走ってきたジエネが、うつ伏せに倒れたウォルガーダの背に跳びかかる。

「サブライズダーク！」

落下の勢いを利用し、両剣をその背に突き刺す。

深々と突き刺さった両剣だが、大型ダーカーの体格からすれば致命傷には程遠い。ジエネはすぐさま両剣を引き抜き、その場から離脱しようとする。

「うあつー！」

が、一足遅かった。

俺が体勢を整えて着地をすると同時に、ウォルガーダは地面に張り手をするように両手を突き出し、その身体が跳ね上がる。

全身で下から押され、ジエネの身体が宙を舞った。

無防備となったジエネに追撃を掛けようとしていたが、そうはさせないとばかりにモアがウォルガーダの眼前に躍り出る。

「させるかー！」

突如現れた小さなモアに反応出来ず、ウォルガーダは顔をモアのクレイモアに切り裂かれる。

しかし、モアの攻撃では大した傷をつけられる筈もなく、引っ掻いたような小さな傷が刻まれる程度だ。それでもジエネから注意は逸らすことが出来る。

モアが飛び回りながらひたすらクレイモアを振り回してウォルガーダを惑わせている内に、俺はスプラッシュをジエネに向けて投げた。二つに分離させ、中程で止まったところでゾンデイル・弐式。スプラッシュの破片、続けて俺と繋いでいき、ジエネを左腕で抱き止める。

空中に押し出された勢いが死んで、落下し始める前に引き寄せたから、衝撃はほとんどない。無事を確認し、地面に下ろした。

「あ、ありがとうございます……っつー！」

「礼は後でまとめて受け取っとくー！」

痛みに顔を歪めるジエネ。しかしそれに構ってはいられない。

ウォルガーダに向けて走り出し、ブーステッドを仕舞って、パイロソーサーを呼び出す。

視線の先で、モアがウォルガーダの振り払うような腕を受け、弾き

飛ばされた。

「うわあああああ!!」

「モアー!」

広場の端の方に飛ばされていくモアだが……防御は間に合っていたようで、大怪我には繋がってない。防いだクレイモアごと飛ばされたのだろう。

モアが作った隙を見逃さず、追撃する。

「テッドリーアーチャー!!」

上に注意が向いていたウォルガーダの右腿に、パイロソーサーを投げた。

吸い込まれるように直撃する。

上半身に比べれば細いウォルガーダの太腿。パイロソーサーの高速回転する熱刃ならばすぐに断ち切れてもおかしくはない。が。

「くそっ……!」

出た結果は、ウォルガーダの右脚の太さ四分の一程の切れ込みを入れる程度に収まってしまった。

人間ならばそれでも大量失血によって死の危険がある傷だが、ダーカーには血など通っていない。傷から赤黒い蠢きが見えるだけだ。

……やはりダーカー相手だと、エネミーや自然物と同じ結果にはならないか。

ウォルガーダが腕で振り払うようにパイロソーサーを弾こうとするが、その前にブーメランのように返ってくるパイロソーサーをキャッチする。

(このまま戦ってもなんとか勝てるかもしれないが……ギリギリだな。ブーステッドも衝撃ばつかで切り傷はほとんど入ってないようだし)

……四の五言ってられねえか。

パイロソーサーをジェネに投げ渡す。

「え？」

戸惑いながらもキャッチするジェネ。

「モアなら深刻なダメージは入ってないみたいだから、心配すんな。お前はこっちに集中しろ」

「で、でも！」

「い、いつてええええ！ 身体中がいてえええよおお！」

弾き飛ばされた方から、そんな叫び声。

モアのものである。

「な？」

「な？」じゃなくて！ 大丈夫なんですか!? モア、本当に大丈夫なんですか!？」

「ほんとにヤバかったら逆に黙るから」

そうこう言ってる内に、ウォルガーダが短く跳躍した。

地面に着地し、力を溜めるように蹲る。

チツ。急がねえと。

「とにかく、俺が注意を引くからジェネ。お前がパイロソーサーであいつの足を断ち切れ」

「た、断ち切る？ でも、ハクさんがやって切れなかったのに——」
「心配すんな。お前なら断ち切れる」

「え？」

呆けた様子のジエネと俺に、ウォルガーダは蹲って溜めた力を解放するように、跳びかかってきた。

俺は右。ジエネは左に跳んで避ける。

着地し、ウォルガーダに向きなおせば、野郎はすぐさま体勢を立て直していた。そして短く跳躍し、俺に向かって蹲っている。もう一度跳びかかるつもりだろう。

やはり背中を突き刺したジエネより、足を四分の一切った俺の方がヘイトを集めているか。

ザッカードもその辺に指示を出す気はないようだ。

「あと！ これからやる事は秘密だからな！」

「は、はい！」

「セラフイさんも！」

『え!? は、はい！ 了解しました！』

モアは見る余裕があるかどうか知らんが、後回しでいい。

もう一度跳びかかってくるウォルガーダを、今度は上に跳んで避けた。

そして、光杖『フラッシュ』を呼び出し、地上のウォルガーダに向ける。

「グランツ、並列起動60！」

照準をウォルガーダに合わせた、光の矢が生まれた。

その数、一つの起動につき8本。

8×60の480本！

「大盤振る舞いだ！ 有難く受け取れや!!」

その全てをウォルガーダに降り注がせた。

局所的な光の雨と言っても過言ではない範囲面攻撃。ヘッドスライディング直後のデカブツに避けられる筈もなく、無防備な背中を的に、吸い込まれるように刺さっていく。

時に矢が矢を押し、より深く刺さっていく。

時に別の矢の僅かにズレた場所に刺さり、傷口を広げていく。

時に刺さりはしないものの、横腹を掠めて切り裂くように傷をつける。

そうして光の雨が止み、刺さった矢が消える頃には、その身体に無数の傷がつけられていた。

『こ、こんな数のテクニクを同時に……!?!』

通信から聞こえてくるセラフィさんの声を流し聞きしつつ、背中側にスプラッシュを投げる。

落下しながらウォルガーダの様子を眺めていると、ウォルガーダはジエネにダメージを与えた時と同じように、両手について跳ね上がるうとしていた。

それを繰り返す俺ではない。ゾンデイル・式式でスプラッシュに俺を引き寄せ、後ろに下がる。

俺が元いた場所にウォルガーダの身体が跳ね上がる。

しかし、それで終わりではなかった。

ウォルガーダは未だ落下を続ける俺に向けて、拳を振り上げたのだ。

「っ！ ブーステッド！」

スプラッシュとフラッシュを仕舞い、ブーステッドを呼び出す。

身の丈程の鉄塊を盾にするよう、前面に翳す。

その鉄塊ごと殴り抜く衝撃が、鉄塊を通して響いてきた。斜めに叩きつけられ、地面に小さいクレーターが出来る。

「いぼっ……い！」

胴体を突き抜ける衝撃に、吐き気が込み上げる。

くっそ、地面に着地する為のスプラッシュの分離が間に合わなかった……！

喉まで迫り上げてきた胃液を飲み込み、ブーステッドを仕舞う。倒れた俺の目線の先でウォルガーダが足を振り上げていた。

「チイツー！」

後ろに爆転して、踏み潰そうとする足裏を躲した。

震脚で広場の地面が震えた。

あつぶねえな！俺が四散したらどうしてくれるってんだ!?

遠ざかった地点に着地し、左手にフレアを呼び出す。

胃液で僅かに焼かれた喉に手を当てて回復し、テクニックを発動。

「フオイエ、並列起動60！」

ウォルガーダの上半身に集中して、絨毯爆撃を行う。

相手は両腕のガードで身体を守り、その爆撃に耐える。

その巨体が見えなくなる程の煙が上がる。

それを眺めながら、俺は声を上げた。

「ジエネ、断ち切れ！」

「はー！」

巨体の後ろから、その下半身に向けてジエネが走っていた。

上半身に向けた前からの爆撃を受けているウォルガーダはそれに

気付いていない。

ジエネは、俺がパイロソーサーでつけた傷跡。その背中側に向けて跳びかかる。

手に持ったパイロソーサーを、薙ぐように振るい。

何の抵抗も無かったように、ウォルガーダの右脚が斬り落とされた。

「……………ええ!？」

斬った本人が一番驚いていた。

そんな驚きを余所に、ウォルガーダの身体はバランスを崩し、右側へと倒れ込もうとする。

が、野郎は倒れる前に左拳をジエネに叩きつけようとしていた。

「エレキ！」

右の逆手にエレキを持ち、フォトンを流し込んで、左肩のコアに向けて槍投げのようにぶん投げた。

余所見をしていたウォルガーダはそれを弾けず、ブスリと刺さる。そこから電撃が流れ、ウォルガーダは悲鳴を上げた。

「右のコア！」

「え……………は、はい！」

驚きから立ち直れてなかったジエネは、俺の声にハツとなる。

パイロソーサーを前面に構え、右肩のコアに向けて突進する。

「トルネードダンス！」

錐揉み回転しながら突っ込んでいくジエネ。

最早何の抵抗もせず、ただ倒れていくウォルガーダ。ジエネの身体がその右肩のコアへと吸い込まれていき。

貫いた。

「上出来！」

右肩に大きな風穴を開けられ、右腕が胴体から離れていくウォルガーダ。

声も出せないくらいに驚いているジエネを横目に、フレアを仕舞い、ブーステッドを呼び出す。

遂にズズン、と大きな音を立てて倒れたウォルガーダ。その左肩の傍に立つ。

「こいつで……トドメだ!!」

振り上げたブーステッドを、振り下ろした。

「スタンコンサイド！」

鉄塊を叩きつける二連撃。

それで左肩のコアも完全に潰れ、ウォルガーダは黒い靄へとその姿を変えた。

「あ、あああ、ああああああ!!!」

黒い靄が晴れ、完全に消えた様子を見て、ザツカードは悲鳴を上げた。

「くっ……！」

勝つには勝てたが……結構重い貫つちまった。

回復出来ないことはないが、連戦はキツイな。

とにもかくにも、次を呼ばれる前に捕縛しとかねえと。

「ハクさんっ、今のはどうして——ううっ……！」

痛みに呻くジエネ。

さつきは動けたようだが、ジエネも相当なダメージだったようだ。横腹を押さえて蹲る。

そこに、モアが狼狽えながら戻ってきた。

「ジエネ、ケガしてるじゃねえかよ！ くそっ、ダーカーってこんなに強いのかっ！」

「だい……じょう、ぶ……。ありがとう、モア。モアこそ、大丈夫です……っ。」

「オレはトリメイト飲んだから大丈夫だってば！ 人の心配してないで、自分の心配しろよな！」

トリメイトは、モノメイトよりも効き目のある回復薬だ。骨折一本くらいなら応急処置程度の治療が出来るが、その効果もあって貴重かつ高価だ。

余程の事がなければ使わないようにと言ってあるが、今回はその余程の事なので、OKとする。

あの二人も、とりあえずは大丈夫そうだな。

俺は俺で自分の治療をしながら、ザツカードへと向き直る。

「礼を言う。目的を、思い出した。思い出したぞお……っ!!」

そう言っつて、ザツカードはテレパイプを呼び出した。

「! 待ちやがれ!!」

スプラッシュを呼び出し、間髪入れずに投げたが、射程範囲に入る前にザツカードは転送された。

テレパイプはすぐに消えていく。

「ま、待ってください!! くっ……ううっ!!」

「ジエネ、大丈夫か!? こんな酷いケガじゃ、追いかけるのはムリだ!」

『仕方ありません。ここは撤退しましょう!』

「……くそっ!」

俺がついた悪態だけが、虚しく響いた。

「ごめんなさいっ! わたしのせいで、ザツカードさんを、逃がしちやいました……!」

アークスシップに帰還し、怪我も大方治療し終えたジエネがそう頭を下げた。

「なに言っつてるんだよ! ジエネのせいとかじゃないからなっ!」
「でも……」

「……お前が怪我してなくても、転送装置を使われちゃどうしようもねえよ。いらん責任まで負うな」

「二人の言う通りです。ジエネちゃんのせいじゃないですよ」

テレパイプが消える前ならその座標を解析するなり出来たろうが、ああもすぐ消されちゃ手出ししようがない。

怪我一つなら俺もモアもしちまったわけだしな。

モアは戦線離脱してたし、俺もPDしてなかったらジエネ以上のダメージになつてたろう。

「三人のおかげでザッカードさんが爆破事件の犯人だと、断定するこ
とが出来ました。また三人には、ザッカードさんの……いいえ！
ザッカードの追跡をお願いします！」

「おう！ もちろんだぜ！」

「……犯人、ね」

爆破の犯人は確かにザッカードなんだろう。本人がそう言っていたのだから。

だが……どうにも引つ掛かるな。

ザッカードのあの態度。言葉。ダーカーを呼び出して使役する技術。

事はそう単純じゃなさそうだ。

……思つたより、大きな事件になりそうだな。

「ハクさん！ モア！ 絶対に捕まえましょう!!」

「……ああ」

なににせよ、あいつを捕縛するのが一番手っ取り早い。

ジエネの言葉にはとりあえず頷いておいた。

指令コード 0792—コードS

研究所職員 208893 ザツカードの生存を確認。

チーム0808の報告により、E・M・A研究所爆破犯と断定。

ブルーノへの追加指示：爆破犯ザツカードの研究内容の調査を再開せよ。

「次から次へと……つたく！ 人使いが荒いぜ……」

ハクメイが事件の内容を訝しんでいるのと時を同じくして。

一人の男が、送られてきた指示書に悪態をついていた。

「ザツカード。アンタならアレの保管場所、知ってるんだらうな……？」

指示書の画面を閉じ、代わりに映し出したのは、事件を担当する試験チーム。

そのリーダーを務めるハクメイの顔写真を見て、男は誰にもなく呟いた。

「殺さず拘束してくれよ。期待してるぜ。主席くん……」

狂人に対する思考実験

ザツカードの生体反応はこれから順次追っていくとのこと。

しかしただ待っているのも退屈なので、俺達一行はナベリウスに来ていた。

別に手掛かりがあるわけではないが、手掛かりがないなりにザツカードがいたここを調べるのが、一番だろう。

というのもまあ事件に臨むに当たっては、というだけで、主目的は俺達自身のレベルアップだ。二人は事件の方が主目的だろうけど、俺としてはまたあの大型ダーカーと相対するのはまだ避けたいところである。

まあ、何も対策を打ち立てていない訳ではない。

しかしそれはまだ完成してないのでまだ、という事だ。

森林エリアの木々に囲まれた広場。

そこで俺は、フレアをダガンの群れに向けていた。

「ラ・フォイエ、並列起動10」

一拍遅れて群れの周囲で10の爆発が起こり、それらが一つになつて一際大きな爆発。

黒煙が晴れた先にダーカーは影も形も残らずに消えていた。

「うん。これならもう逃がすことはないかな」

ラ・フォイエは、任意の点に爆発を起こす炎系の中級テクニクだ。発動から少し遅れて爆発が起こるからタイミングが掴み辛く、素早い敵にはほとんど当たらない。が、それも単発ではの話。並列起動で取り囲むように放てばそうそう逃がすことはないだろう。

このテクニクの良い所は、目に見える範囲ならどこまでも届くと

いう事。

初級テクニクでもゾンデやグランツに同じ特徴があるが、如何せん殺傷能力が高すぎる。単純にエネミーを相手にするならそれでもいいが、人間相手を捕縛するとなればそうもいかないわけ。その点、ラ・フォイエは加減が利きやすい。

これである時のようにザッカードを逃がすことはないだろう。同じ状況であれば、だが。

後ろで見てた二人へと振り返る。

「つーわけで、これがテクニクの並列起動だ。驚いたか？」

「……………」

驚き過ぎて声も出ないようだった。

「そういうアフィンもこんな反応だったなあ、と思い出しながら、フレアを仕舞う。」

「まー、あれだ。こっちは法撃クラスにしか扱えないし、フォントドライヴ P Dよか断然習得しづらいからな。ゼノさんに教わったわけでもなくオリジナルの技術だが、目につくのは変わりない」

『あの……それより、何故今になって披露する気になったのでしょうか?』

通信からセラフィンさんの声。

「いや、ほんとならずつと黙ってるつもりだったよ? 奥の手はいくつも持っておきたい主義だからな」

「だ、だったらなおさらなんでだよ?」

「いやあ」

ポリポリと頭を搔く。

あん時は厳しい所だったし、この三人に明かしても秘密は守られる

と判断したからってのもあるが……。

「お前ら相手に隠し事すんのも馬鹿らしくなったから」

「……あれ？　もしかして馬鹿にされてます？」

「もしかしくなくても馬鹿にされてるってば！　こんにやろー！」

さて、雑談はこれくらいにして進むか。

「やあこんにちは。そしてさようなら」

出会いと同時に別れを告げられた。

「ええっ!?　なんで会ったそばからさよならなんだよ!？」

「ああいやいや。気を悪くしないでくれ。何を隠そう、私は今調査中でね。他の事に気を割く余裕はないんだ」

そう語る彼女はアークスであるが、いかにも研究者といった風貌だった。

逆立ってあまりオシャレに気を遣ってないのが見て取れる黒髪と、理知的な眼鏡。これまたオシャレに気を遣ってないのが見て取れる簡素な戦闘服。総じて美容に重きをおいてないのが見て取れる。

素材は悪くない、どこか美人の部類に入る。磨けば更に光るだろうに、それを怠っている感じでなんだか勿体無い感じだった。

「私とキミ達に縁があるのであれば、いずれ行動を共にすることもあるだろう。話などは、その時にまとめてしてしまっただ方が効率が良い

と思わないかい?」

「人付き合いって、効率でするものでしたっけ?」

「ま、そういうことだ。それじゃあね」

そう言つて、名前を名乗りもせず彼女は去つて行つた。

他の事に気を割く余裕はないという言葉通り、すたこらさつさとあつという間に俺達の視界から消えていく。

その背を見送り、モアが一言。

「なんなんだあいつ……」

「ま、急いでるのもあんだろ。すれ違つただけだし、今後会う事もないだろうから気にしても仕方ねえや」

「そういうもんかな?」

しかし、意外にも縁があつたらしく。

彼女と再会し、行動を共にするのは、そう遠くない未来の事だった。この時の俺は勿論知る由もないが。

「……………」

「ん?」

ジエネを見ると、何かを考え込んでいる様子。

「ジエネ? どうかしたのかよ?」

「あ、いえ。今の研究をしてる人を見て、その……ザツカードを思い出して……」

「え? あいつのことかよ?」

「研究者繋がりで?」

「はい」

まあ、他の繋がりなんて眼鏡くらいしかないしな。

「ザッカードが思い出したと言っていた目的って……一体何なんでしょう？ 研究所を爆破した事と、これから彼がしようとしていることは、繋がっているんでしょか？」

「んんっ？」

「ふむ……」

「E・M・A 研究所は、武器の研究開発を行っていたんですよね？」

「ジエネ……？ もしかして、なにかわかったのかよ？」

モアが期待の眼差しでジエネを見る。

対するジエネ。

「え、いえ……ぜんぜん」

「うえっ？ なんだよー！ わかったのかとおもったぜ！」

「いやあ、えっと、その……！ なんて、あんなことをしたんだろうって、思ったんです」

爆破された研究所の映像資料でも思い出したのか、唇をきゅつと結んでジエネは言う。

「研究者は、多くの人の未来を幸せにするために、その為に日々研究に励むものだ……」

「……………」

多くの人を幸せに、か。

俺から見た研究者、科学者なんてのは、自分の知識欲を満たしたいだけの癖に正義面して命を奪っていく連中が多数なんだけだな。

もちろん全部がそうとは思っちゃいない。ロジオのように真つ当な研究者だっている。

皮肉なことにそれが少数なだけで。

「ジエネ??」

「あ、いや、家族の、受け売りなんですけど!! だから、その! 彼は何がしたいんだろうって」

「……何がしたいか、ね」

目的さえも曖昧なまましっちゃんかめっちゃんかに行動するから狂人なんだが、しかし。

「理由もなく、たくさんの人を奪うなんて、そんな酷い事、出来るんでしょうか? 理由があれば良いわけじゃないですけど……」

ジエネは、少し考え、頭を横に振って、そのまま下げる。

「ごめんなさい。変なこと言って……」

「……オレ、よくわかんねーけど。たぶん、そういうヤツは、いるとおもう」

「モア……?」

俺としてもそれは同意見。

が、それで片付けるにはあまりにも不自然だ。

「……じゃ、ちよつと思考実験してみようか」

「? しこうじっけん?」

「ザッカードが、何故研究所を爆破するに至ったのか」

「ま、所謂発想の逆転ってやつだな」

森林を抜け、凍土を歩きながら、俺達はザツカードの目的について考える。

本人の口から聞かない以上、仮定にしかならないだろう。

とはいえジエネも気になる事だろうし、口にすることで整理出来る事もある。

「ジエネは『理由もなく、たくさんの人の命を奪うなんて考えられない』。そう言ったな？」

「はい」

「ならば、『ザツカードにはE・M・A研究所を爆破して、職員を皆殺しにするだけの理由があった』と仮定出来る」

字面するだけでもとんでもない事だ。

人間の悪意に疎いであろうジエネには、想像も出来ない事だろう。

「特定の個人に殺意を抱くなんて良くある事だが、不特定多数の人間に殺意を抱くなんて相当なもんだ。それを実行に移すんだから、極まりりって感じだな」

二人は俺程弁が立つ訳ではないので、この思考実験はほとんど俺の独壇場。

俺の考えを述べる場となっている。

とはいえ、この二人にも飲み込めるように話さないといけないので、その辺は注意が必要。

「或いは主目的は研究所の破壊そのものであって、被害者に関しちやついでだったのかもな」

「ついだって……！」

「無いことは無いとはいえ、可能性は低い方だと思うけどな。その派

生で行くと、施設ごとでも消し去りたい研究があったのか。それは自分の研究だったのか。研究所主導の研究だったのか。それが恐ろしく非人道的な研究だったのか」

「ちよ、ちよつと待ってくれよリーダー！」

モアが拳手をしつつ、口を挟む。

「それだと、研究所のひとのほうがわるいみたいじゃんか！ あつちはひがいしいやなんだぞ！」

「だから『皆殺しにされる理由があつた』って前提の話だつったろ？ 全く非の打ち所のないような人間がそうホイホイいると思うか？

「そんな奴に殺意を抱く奴も」

「そりや、そんなにいないけど……！」

「理由もなく殺されたなら、犯人が殺人鬼だつたつてだけの話だ。理由があるなら大抵は『被害者に何かをされた過去がある』つてことになる。侮辱を受けたとかなんやらな」

「ザ、ザッカードのやつを見たろ!? あんなの、おかしいやつにしかみえねえつてば！ だから」

「そこでチェス盤を引つ繰り返す」

「さつじんきでも、え？」

指をバキンと弾く。

特に意味はない。

「立場の置き換えつてやつだな。ジエネ」

「は、はい」

「お前は研究所の、研究者を採用する立場の人間だとする。その上で考えてみる。ある日、ザッカードがE・M・A研究所で働こうと研究所にやってきました」

「……………」

「お前はあいつを見て、採用するか？」

「……しません」

まあそれはそうだ。

これでするとか言われたら、俺はどうしたらいいだろうと思う。
話を続ける。

「それはなんで？」

「えつと……あまり人を第一印象で決めつけるのは良くないとは思
うんですけど………ザッカードは、一緒に働くにはちよつと……」

「あまりにも言動がおかしくて、何をしでかすか分からない。だよな
？」

「その………はい」

「？ それがなんだよ？」

「最初からあんな狂人だったんじや、職員として働く前に門前払いを
受けるってことだ」

どころか、まずもってアークスになることだって出来ないだろう。

狂人アークスは前例があるが、あれはまだ話を通じる方。ザッカードは会話のキャッチボールさえ成り立たない。

アークスにならなかつたところで、社会に出て日常生活を送れると
も思えないレベルだ。

だから。

「今のザッカードは恐らく——ん？」

立ち止まり、前を見る。

そこには——

「やはり森林よりも凍土の方が数が多いね……」

一人の女性キャストがいた。

二人もそれに気付いたようで、話を中断して俺の隣で立ち止まる。彼女の方は背を向けているせいか俺達に気付かないまま、独り言をぶつぶつ呟く。

「でも交戦自体は少ない。まるで意図して避けられているみたい。いや、そっちのけで何かを探っている？ 全くレギアスの言う通りだね。なんだか不気味な感じだ」

ここからじや顔は見えないが、背中からでもその機械的ボディは窺える。女性キヤストだという見立ては間違いないだろう。

探知ではエネミーにだけ気を払ってたから気付かなかったが……こりやまたとんでもねえな。

それに左腕パーツに描かれた花卉の紋章……女性キヤスト……まさか。

「六芒均衡の二、マリアさんか？」

「ん……？ ああ。アンタ、アークスかな？」

俺の言葉でようやく気付いたらしいマリアらしき人。

「いやはや独り言を聞かれちゃったか。そいつは少しばかり恥ずかしいね。出来るなら忘れてほしい——」

振り向いて、その顔を認識した時。
顔をガツと掴まれた。

「むおっ!？」

「ええっ!？」

「うえっ!？」

「……………」

驚き仰天の俺達にはまるで構わず、両頬を握るように掴んで至近距離から観察してくる。

こちらはこちらで驚いて言葉もない様子。

いや、いきなり顔を掴まれた俺の方が驚いてるんですけど!?

「ぬあ、ぬあにぬあにぬあに!?!」

「……ああ、失礼」

パツと掴んだ手を離される。

力強いわこの人。まだちよつと痛い。

黄色と黒のパーツで構成されたローズマリー・シリーズで身を固める青髪（頭部パーツ）のその人は、黒いマスクを着けているような口許で、窺える顔は目元だけだ。マスクと言っても布製のそれではなく、顔半分が黒いパーツで出来ているとも言えいいのか。

二人がハラハラしてる様子で見守る中、事情を聞くことにする。

「なんですか？ あなたに絡まれる謂れはないと思うんですが」

「いやすまないね。顔馴染みの昔に似てたもので」

「顔馴染み?」

「アンタ、両親は?」

「一人は知ってますが、不特定多数の遺伝子を混ぜたタイプの試験管ベイビーなので。あなたの顔馴染みっていうのも、それに混ざってるんじゃないですか?」

「ほー。聞いたことはあつたが、実際に会ったのは初めてだね。不特定多数か……そうすると、まさかねえ……」

また考え込むかと思つたが、「ま、いいか」とあつけからんに言う。

「重ねて失礼、自己紹介が遅れたね。アタシはマリア。割と古参のアークスよ。ま、アンタはどうやら知ってるようだけど」

「そら六芒で女性キャストつつつたら、三英雄と並んで40年前の大

戦争を戦い抜いたマリアさんしか該当しないでしょ。なあ？」
「え？ も、もちろんですよ！」
「お、おう！ オレも知ってるぜ！ あつたりまえじゃんか！」
「あ、もういいです」

二人は知らなかったようだ。
こいつらアークスの歴史に疎すぎる。

「三英雄じゃなくて四英雄でもいい筈だけど、本人が辞退したとか」
「よく勉強してるねえ。で、アンタ達は？」
「わたしは、ジエネって言います。初めまして、マリアさん」
「オレ、モアっていうんだ！ よろしくな！」
「で、俺はハクメイ。こいつらとのチームリーダーやってます」
『試験チームですけどね。申し遅れました。私は管理官のセラファイです』

セラファイさんまで通信で割り込んできた。

六芒の偶数番の長に偶然お目通りしたわけだし、管理官としちや挨拶しときたいのかね。

マリアさんはふむふむと頷く。

「そっちの坊主は最近出てきたウェポノイドってやつだろう？ アークスの相方として組んでるとか。アタシの方にはそういうのは来ないけどねえ」
「そら、六芒均衡の相方が務まるのなんて早々ねえ……」
「ま、アタシも一人の方が気楽だからそれでいいさ。それじゃあ失礼ついでに」

俺達に再び背を向けるマリアさん。

「この先にデ・マルモスが一匹いるって話さ。目的は知らないけど、こ

ここを探索するのなら気を付けな。老婆心からの忠告だよ」
「ほう……痛み入ります」

そう言っつて、マリアさんは去っていく。

デ・マルモス、か……。

俺達でも戦うだけなら問題ないだろうが、そうだな……。

「よし。思考実験は中断して、行ってみるか。今日の所はそれまで」

「いくのか？ きをつけろって言われてたけど……」

「みんなでなら、きつと倒せますよ！ 頑張りましょう！」

「倒さない」

「え？」

「捕獲する」

鏡合わせの二人

刺爪『ブラッドクロウ』。

前にも取り出したことのある物騒な名前の自在槍だが、その用途は捕獲用に重きを置かれる。

爪のカーブ部分から伸びる針。持ち手にあるボタンを押すとこの部分から更に無数の小さな棘が生えてくる仕様になっている。

エネミーに針を刺し、そこから生やした棘から神経毒を流し込み、動かなくさせる。そういう武器だ。

個体によつて抗体は違うので、その都度針を変える。そう、着脱可能である。

神経毒とは言ったが、他にも様々な毒を用意していて、用途によっては死に至らしめる毒もあるので、『死の爪（ブラッドクロウ）』と名付けた。『毒の爪（ポイズンクロウ）』と名付けてもよかったが、まあエグさが伝わって良いかなって。

まあ、ダーカーに効く毒なんてないから、対エネミーに限られてしまうのだが。

で、なんでいきなりこんな話を始めたかというと。

デ・マルモスの動きを止める毒を注入しても、最終的に動かなくなつたのは13回刺してからだったからだ。

「やっぱり巨体だと必要な量も違うね」

横倒れになつたデ・マルモス。マルモスを巨大化させたその姿を横目に、セラフィさんが転送してきた捕獲装置を起動させていく。

勿論死んではない。捕獲してチップ化させる以上、生け捕りでなければならぬからだ。

以前からちまちまと小さいエネミーを捕獲して、チップのスロットは満杯にしていた。が、それだけでは強化も僅かなものである。そこ

で、今回は大型エネミー捕獲に踏み出したわけだ。

さつきセラフィさんに話したところ、この大型エネミーを捕獲すれば、そのサポートチップをこちらに回せるようにしてもらえるところ。

「なんかオレ、すっげー！ すっげー！ 強くなったきがするぜ！」

「おう。お疲れさん」

「大型エネミーを危なげなく倒せたってことは、わたし達、強くなつてますよね……っ！」

「そうだな。俺の方も、ドライブも並列起動も使わずに倒せたし」

こちらも全くの無傷とはいかなかったが、苦戦という程ではない。

大型エネミーの遭遇自体はこれまでも何度かあったが、捕獲に踏み出さなかったのは力量を鑑みてだ。捕獲に拘って戦闘できるかどうか。その判断が要された。

今ならいけると考えて、捕獲を提案した。その期待通り、こうして重傷者も出さずに無事捕獲出来たというわけだ。

『みなさん、デ・マルモス撃破おめでとうございます。息もぴったりですすね！』

「ええ。……つと、そろそろ装置の準備が出来るんで、そっちに転送しますねー」

デ・マルモスの巨体を囲う捕獲装置は、起動してから完了するまでに時間が掛かる。厄介な事に、その間ずっとこの装置の円内にエネミーを捕えておかなければいけないのだ。

途中で出ていかれようものなら最初からやり直し。まあ、アークスシップのエネミー保管場所にまで送るのだから、座標の指定だとかに時間が掛かるのだろう。

俺は神経毒があるからいいが、この円内に捕えておく為に暴れるエネミーを抑えようと戦い、生け捕りに失敗する事が多々あるらしい。

まあ、俺には関係ないことだ。
装置の転送が完了し、デ・マルモスの姿が消えていく。

「にしてもザッカードのやつ、ぜんぜんみつかないなー。どんどん強くなるオレにビビったんだな！」

「そ……そうかも、しれない……です……ね……」

ふむ。そろそろか。

ふらっと、力が抜けたように横へと倒れていくジエネを片腕で抱き止める。

元々それに文句言うような奴ではないが、今はその元気もないようだ。

「ジエネ？ おい、めちやくちや顔色わるいぞ！」

『ジエネちゃん、大丈夫ですか？』

「……………」

「んー。ちよつと喋る元気がないみたいだし、このまま帰るか。

モア、テレパイプ」

「え、あ、わ、わかったってば！」

モアが起動させたテレパイプからキャンシップに乗り込み、アークスシップへと帰還していった。

「なあなあリーダー」

「ん？」

ジエネをメデイカルセンターに預け、ショップエリアで仕上げの作業をしていると、モアに声を掛けられた。

その顔は浮かない。

今はゆっくり眠っているであろうジエネの事を考えているのだろう。

「ジエネ、だいじょうぶかな？ あいつ、けっこー身体弱いんじゃないのか？ 心配だぜ……」

「そう思う？」

「うん……。フォトンのコントロールが上手くないってのと、かんけいあんのかな……？」

「……………」

説明するのだるいなあ……。

けど、いいか。ドーセ後の作業は片手間に終わらせられるし。

チームメンバーの弱点を把握させておくのもいいだろう。

「モアは、フォトンコントロールとフォトン感応力、フォトン積載量にどういう関係があると思ってる？」

「え？ か、かんおうりよくと……せきさいりょう？」

「……………そこからか」

武器にも関係してくる話なのに、こいつとことん無知だな……。

「そうだな……。ここに貯水タンクがあるとするだろ」

「うん」

「フォトンをここに貯まつてる水に置き換えて、その貯水タンクに入れられる水の量が、フォトン積載量。それが一人が体内に貯められるフォトンの量になるわけだ」

手を動かしながら横目に見るモアに、説明を続けていく。

こいつの頭でどれだけ理解できているかはわからんが、とりあえず熱心に聞いてはいるようだ。

「んで、それを捻り出す蛇口の大きさがフォトン感応力。蛇口を捻って出す量を調整するのがフォトンコントロールってわけだ。ここまではOK?」

「お、おっけー」

前にウルクに説明した時はあたかも適性Ⅱフォトンコントロールという風に言ったが、実際はこれの総合力がフォトンの適性となる。(次教える機会があったら暴露するつもり)

ウルクは感応力こそ下の下だが、積載量自体は人の平均レベルだ。

これで積載量まで下の下だったら目も当てられなかったが、まあそれでなくとも別の道を模索してもいるようだし、それはいいか。

モアが質問してくる。

「それで、それがジエネの身体が弱いのとどうかんけいあるんだよ?

ジエネはフォトンが上手く使えないから、身体が弱いのか?」

「あいつはむしろ丈夫な方さ」

そう。身体が弱いわけじゃない。

あいつは、才能に振り回されているのだ。

類稀なる天賦の才が、ジエネの中で暴れているから。

「フォトン感応力が強過ぎるから」

「え?」

「積載量まで桁外れだからなんとか戦えているが、それを捻り出す蛇口が巨大過ぎる。だからあいつはすぐ倒れるんだよ」

フォトンコントロールが上手く出来ない。

それも当たり前だろう。

持つのさえ一苦勞する重さの剣を、我が身のように振るえる劍士がどこにいる。

「そんな巨大な蛇口でずっと全開のまままでいてみる。すぐに中の水が空っぽになる。しかも、勢いが強すぎるせいで貯水タンクにまで負荷が掛かる始末だ」

「えー！　じゃあ、じゃあ、ジエネは戦うたんびに傷付いてんのかよ!？」
「ああ」

溢れ出したフォトンが自分の身体まで傷付けていく。だというのにコントロールが出来ないせいで武器に集中させることも出来ず、本来の威力を発揮することも叶わない。

それでもパイロソーサーを持ってばウォルガーダの片足を切断し、コアを貫く威力なのだ。

それだけの力を戦闘中常時垂れ流し。倒れて当然というものだろう。

「……リーダーは、さいしょから気付いてたのか？」

「そうだな」

「じゃあ、なんで……」

「あいつなりに、覚悟を決めてるからだよ」

その痛みを覚悟せず、耐える気力がなければ、すぐに音を上げる筈だ。

たかだかチームリーダーの俺に、それを押してもアークスを続けさせる権限なんてないし、そんなつもりもない。

だというのにあいつときたら。

自分が辛い癖に、まず他人に謝るんだ。

「あいつの両親は、ダーカーに殺された。そんな人がもう生まれないように、守りたい。だから戦うってよ。それにどれだけの覚悟がある

か、あいつは身を以って証明してるわけだ」

「……………」

「お前に、それを止めるだけの理由があるか？」

「ありがとうございます！」

「はい。お大事にどうぞ」

メデイカルセンターに勤めるフィリアさんに、深々と頭を下げるわたし。

お見送りをしてくださった綺麗なその人は、にこやかに手を振って、職場へと戻っていきました。

お世話になったメデイカルセンターを後にして、溜息を一つ。

「はぁ……………」

「ジエネちゃん、大丈夫？ 元気がないけど……………」

そんなわたしを、傍にいたマトイちゃんは、心配そうに覗き込みます。

…………ダメですね、わたし。マトイちゃんにまで心配かけて。

努めて明るく笑って、わたしはそれに応えてみせます。

「大丈夫ですよ！ しつかり休ませてもらえましたから、もう元気モリモリです！」

「…………無理しなくてもいいんだよ？」

「う」

見透かされてました。

マトイちゃん、目敏い所があるから、隠し事が出来ないです……。わたしが全然嘘つけないのもあるのだと思いますけど。

「……その、本当に身体の方は元気になったんです。元気がないとしたら、別の事で」

「別の事……?」

「はい……。わたし、情けないなあって思ってた」

ゲートエリアのベンチに、二人一緒に腰掛けて、愚痴のような話をしていきます。

わたしが戦いの後、いつもへバツてしまうこと。

それでいつも、ハクさんやモアに迷惑を掛けていること。

それでなくとも、ハクさんの足手纏いになってしまっていること。

本当はこんな話したくない。マトイちゃんとは楽しくお話したい。

……でも、マトイちゃんの瞳に見つめられると、言葉がするすると口から出て行ってしまいました。

「今日なんか、戦いが終わったたら倒れちゃって……。チームなのに、お荷物になってばかりなんです」

「そっか……」

マトイちゃんは口を挟まず、わたしの話を聞いてくれます。

本当にマトイちゃんは可愛くて良い子です。

でも今は、そんなマトイちゃんに愚痴を聞かせている自分が情けなく……。

「強くなってるって、そう思いたいです。でも、ハクさんはどんどん先に行ってる。一緒にいても、守られてばかりです」

わたしがハクさんを守れたと思えた事が、一度もない。

助けられてばかりで。
守られてばかりで。

そのお返しが出来ないまま。

あの人……ゲツテムハルトさんの言うように、守られないようにすることが、出来ないまま。

「……全部、わたしが弱いのがいけないですよね。ずっと、このままなくらいなら……」

「ねえ、ジエネちゃん」

「え？」

マトイちゃんが、わたしの手を取りました。

両手で包み込むように、ぎゅうつと。

「わたしが倒れた時、ジエネちゃんはこうして、手を握ってくれてたよね？」

「え、それは……」

「あの時のお礼、まだ言えてなかったよね。ありがとう、ジエネちゃん」

「そんな、お礼なんていいですよ。わたしがしたくてしたことなんですから」

「ハクメイも、きつとそう思ってる」

「え……？」

「ジエネちゃんが言うように、ジエネちゃんが弱くて、足手纏いだとしても、一緒にチームとして戦いたいから。だから、ハクメイはジエネちゃんと一緒に戦うんだと思う。それはきつとモア君も。ジエネちゃんは、そうじゃない？」

「……それは」

……………わたしだって。

わたしだって、二人と一緒に戦っていきたいです。

でも、でもわたしは。

「強くなりたいうって思うのは、素敵な事だよ」

マトイちゃんは一層ぎゅつと、力を込めてわたしの手を握ります。

「でも、ジエネちゃんもハクメイも、戦えもしないわたしの手を握っててくれた。傍にいてくれた。それは、わたしが戦力になるからじゃないよね？」

「……………」

「ジエネちゃんが今より強くなりたいうって頑張ってる事は、わたしだって知ってる。一緒に戦ってるハクメイが知らない訳ないもん。そんなジエネちゃんだから、ハクメイも助けてくれるんだよ」

「でも…………」

強くなりたいうって、頑張ってるつもりです。それは嘘じゃないです。

でも、と。わたしの口から出てくるのは弱音ばかりで。

「でも、わたしはハクさんみたいに強くなれる気がしないんです。ハクさんみたいに、才能があるわけじゃない。わたしには」

「それ、ハクメイさんに言ったら怒られちゃいますよ？」

横合いからの突然の声。

そこにいたのは、セラファイさんでした。

二人一緒にちよつとびっくりして、そちらを向きます。

「いえ、呆れられるでしょうか？ とにかく良く思われたいですね」

「セラファイさん、良く思われたいって…………」

「確かにハクメイさんは優秀です。戦闘での立ち回り、戦局を見極める戦略眼、決断の早さ、何より生み出した独自の技術。どれをとって

も一級品だと言えるでしょう」

ですが、とセラフィさんは言います。

「アークスとしての才能、という一点だけは、そうはいきませんでした」

「？ それってどういう——」

「フォトン感応力が、通常ならアークスになることも出来ない程弱かったんです」

「——え？」

フォトン感応力。それは聞かされた事があります。

わたしが疲れやすいのも、それが強過ぎるから、それをコントロールする事が出来ないからだ。

フォトンを扱った攻撃の威力を決める、フォトン感応力。

それが……ハクさんは、弱い？

「ずっと不思議だったんです」

セラフィさんは言います。

「あの時、ハクメイさんの武器を使ったジエネちゃんは、ウォルガーダの足を斬り落としていました。同じ武器を使ったハクメイさんはフォトンアーツ P A を使って傷をつけるのが精一杯だったのに。まるでバターでも切るかのよう」

「あ……」

そうでした。

あの後には色々あったから有耶無耶になってしまいましたけど、わたしがハクさんの武器を使ったら、あの時の大型ダーカーの身体を自分でも驚くぐらいに簡単に切ってしまえたんです。

「ジエネちゃんの感応力が人並み外れてるだけかもしれないと思いますが、それだけではないような気がして、調べてみたんです。そして知りました。ハクメイさんの感応力が士官学校入学当時から全く成長していないことと……その事が原因で、『落ちこぼれ』と呼ばれていたことを」

「そんな……だって、ハクさんは主席卒業で、同期の中で一番強いアークスで」

「そうなるまでに、どれだけの修練を積んだか想像できますか？」
「……………」

「いえ、入学前からそうだったのでしょう。修練を積んでも感応力が僅かでも成長しなかったということは、入学時点で既に極限まで鍛え上げたということです。知り合いにアークスがいたとしても、士官学校の施設もなしに鍛えるなんて、無謀極まりないと思われて当然なんですよ」

それだけ鍛えて、落ちこぼれ。

通常ならアークスにもなれない程に、弱い感応力。

才能の無さ。

「そんな感応力でもアークスになれたのは、戦闘での強さ、アークスとしての知識、何よりフォトンのコントロールが誰よりも優れていたからなんですよ。きつと生まれた時から磨き続けてきたであろうそれを、『才能』という言葉で片付けるのは違うんじゃないでしょうか？」

「……………」

わたしは、一体何をしていたんでしょうか。

あの人が生まれ持つ事が出来なかった感応力を、才能を、持ち合わせておきながら。

持つことが出来なかったあの人がアークスになる為に、必死に鍛錬を積み重ねている間に、わたしは――。

「……ハクメイは、どうしてそんなに、アークスになろうと？」

マトイちゃんが問い掛けます。

「詳しい理由は聞いていません。ただ、アフィンさんから聞くには『強欲だから』と。『欲を満たす為に、夢を叶える為に頑張るのは当然だと、相棒は考えてるんですよ』。そう言っていました」

(……夢を、叶える為に)

「お、お待たせしましたーっ!!」

ショップエリアに響く、ジェネの声。

見ればジェネが俺達の方へと走ってきていた。

「お。もう大丈夫そうか？」

「はい！ もうバツチリです！」

むんっ、とマッスルポーズを取って見せるジェネ。可愛い。

「ならいいさ。もう聞いたかもだが、セラフィさんがザツカードの生

体反応を捉えられたってよ。これから出撃するぞ」

「はいっ」

「……うーん！」

「モア？ どうしました？ え？ なになに？なんでそんなに変な顔をしてるんですか？」

「へ……変な顔っ？ なんでもない！ ザツカード捕まえに行くぞ！」

「……??」

そっぽを向いて、モアは飛んでいく。

さっきのを聞いて、口出ししたくても出来ないってどこか。全く。

遠ざかるモアの小さな背を追おうとすると。

「あの、ハクさん」

「ん？」

ジェネに呼び止められた。

「…………」

「？」

「……頑張りましょうね！ わたしも、頑張りますから」

「？ ああ」

逃げ惑い、逃げ狂い、それを追い

「うわあああつ！ 落ちるっ！」

「落ちるも何も飛んでるだろーがよ」

足元の床が抜けたのでモアがそう叫ぶが、元々重力に逆らってる奴だから無関係だった。

遺跡エリア。

最初にザツカードを見失ったこのエリアの、前に来た所とは別の地点に、俺達は来ていた。

慌てるだけ慌てて、モアは姿勢を正して飛び直す。

『モアくん、大丈夫ですか？ ここから先の遺跡エリアは、足場が悪く非常に危険です。注意してください！』

「おう！ つつても、ザツカードのやつさ。またここに来たんだな」

「惑星を彷徨ってるのは、目的の為なんでしょうか……？」

「どーだかなー」

生体反応の軌跡を辿ったところ、どうやらザツカードは別の惑星に飛び立っていたそうだ。

キャンプシップを個人で持っていたとは思っておらず、ナベリウスで生体反応を追っていたばかりいたらしい。他の惑星に行っていたアークスの目撃証言から他惑星でも探査を行ってみたところ、今度はナベリウスに向かってザツカードの生体反応が見つかったとのこと。ナベリウス以外に行ってるなら、そら見つかるわけないわな。

「あんま考えねー方がいいと思うぜ」

考え込む俺達に、モアが言う。

「研究者って言っても、アイツはわるいやつだ！ ジエネの家族とは、ちがう！ だから、あんま気にするなよなっ！」

「……ふふっ。ありがとう、モア」

励まされたように笑うジエネ。

俺から話を聞いて、モアなりに考えた結果がそれだったようだ。まあ、戦う分にはこれで問題ないだろう。

……あれだけ言っただけでまだそう事が単純だと考えてる辺り、まだまだガキンチョだな。

「行きましよう！ ザツカードを捕まえに！」

意気揚々とするジエネと共に、遺跡の残骸達を足場に進んでいく。

「はあ……っ、はあ、はあ……!!」

「ジエネ、だいじょうぶかよ？」

「うん、大丈夫っ！ ありがとう」

「ならいいけどさ……」

「まあ、クールダウンに歩くくらいでいいだろ。これぐらいなら」

鎌を持った人型に近い蟲系のドーカー、プレディガーダを狩り、ジエネは息を上げていた。

あいつ高速移動でいきなり傍に現れてくるからなあ。何度か戦闘してて、何度か危ない所があった。ドライブを使えばその動きも見切れるんだろうが、使用制限がある設定だからこんな何でもない場面で

そう使いたくもないし。まあ高速移動もクールタイムが必要そうだから、その間に攻撃したが。

「そうだ！ リーダー。このまえの、ぱいろそーさー？ ジエネに貸してやったらいんじゃないか？ そしたら楽に戦えるぜ！」

「今はダメだな」

「なんでだよ!? ケチ！」

「ケチるってんなら、そうだな」

いつでも振るえるようにエレキを腰に差しながら、モアに言う。

「あれ、普通の武器よりフォトンの消費が激しいんだよ。しかも流し込むフォトンのコントロールでオンオフ付ける仕様だから、普通のアークスなら持つてるだけでじわじわフォトンを奪われる」

「あ……じゃ、じゃあジエネはダメだな」

「？」

「強敵だとかで苦戦しそうな時には貸してやるが、今はその時じゃない」

そもそもあれ切れ過ぎるから、普通に持ち歩くには危険なんだよな。触れただけでスパツといくし。

当たり前だが俺の武器は俺が使う前提だから、俺が扱うに長けた機能を付けている。その多くはフォトンのコントロールに左右されるので、苦手なジエネには扱いづらいだろう。

それにしても……。

「二人共、そろそろ氣い締めてけ」

「え？ なんでだよ？」

『今のダーカーも、もしかしたらザツカードが操った可能性がありません。出現の仕方が前回と酷似しています』

通信からセラフィさんの声。

操ったかどうかまでは分からんが、ウォルガーダの時と似たような感じはあった。計測器でもそう出たなら、そうなのだろう。

『詳しい事は分かりませんが、特殊な装置を開発したのかもしれないね』

「ダーカーを、操るアークス……ですか……」

天敵を使役するアークスに対してか。天敵に使役されるダーカーに対してか。

疑問を投げかけるような言葉をジエネが吐いた時。

「褒めてください、ほめてください……とても、とても、いい、ものでしょう?」

「!?」

「ザッカード!!!」

突如声が掛かり、エレキに手を添える。

こいつ、探知の中にもいきなり現れやがった!?

転送装置でも使ったのか……? だとしたら、何の為に?

「ふふふ、はははっはあははははは!!」

驚きの表情を浮かべる俺達がおかしいのか、狂おしく笑う。

「……わざわざそっちから出向いてくれるたあ、とうとう観念したか? それとも、自分が何をしてるのかも分かってねえか?」

「ふざけるなよ! お前がしてることは悪いことだ!」

「割るい？ ワルイ……悪い。なぜ」

目の焦点をモアに合わせるザッカード。

「ああ、あああ、そうそうそうか」

その姿を確かめて、納得するように頷いた。

……なんだ？

疑問が浮かぶ俺を差し置き、ザッカードは言う。

「お前、何かと思えば……デキソコナイか……」

「っ！」

そう言うやいなや、ザッカードは背を向けて逃亡を始めた。

転送装置で現れた癖に、逃げるのは自力……？ 奥の方に誘い出す
気か!?

「まちなさい……っ！」

「そう何度も逃がすか、よっ！」

その足に向けて、ラ・フォイエを放とうとしたところで――

「っ！ チイツー！」

その間に立ち塞がるように、大盾を持つダーカー、グヴオンダ数体が現れた。立て続けに、上空にエルアーダも数体。

奴への視界が塞がれ、テクニックが中断される。

目に見える範囲ならどこまでも届くとは言ったが、逆に言うとも視界に入らなければどれだけ距離が近くても届かない。暗闇などで光がないから見えない、であれば問題ないが、障害物があるから見えない、では届かないのだ。

くっそ。下手に跳んで視界を確保しようにも、上空じやあエルアーダのサンドバッグ。アークスだけあつて、対アークスの備えはしてあるってことか。

「仕方ねえ。こいつら片付けてさっさと行くぞ！」

「はい！ モア！ 追いかけてみましょう！」

「……ああ、うん！ 行こう！」

エレキを引き抜き、敵の群れに向かって先陣を切る。

「まさか、あいつ……」

——
集積型プロトタイプ

お前の役割はもう終わりだよ。

（ちがうちがうつ！ ちがうんだ！ オレは……デキソコナイじゃないっ！）

『平和の為に戦うアークスであるあなたが！ たくさんの命を奪うだ

しかし彼の後ろについて回る恐怖。

「見つけたぞ、ザツカード!! 逃げられねえってばっ! あきらめろ!!」

「いや、そういうの周りを片付け終わってからにしてくれる!？」

その一つが声となって届いてくる。

先程のデキソコナイが追い付いてきたようだった。

同行するアークスは、進行上のダーカーを相手にしながら、ザツカードへと迫ってくる。

「あ……あ……んんっ? 近寄るな。嫌いだ、おまえ……」

虫でも払うかのような口振りで吐き捨て。

「チツ……!」

ザツカードはもう一度逃げ出す。

今度は無茶苦茶なフォームではなかった。

少なくとも、今何から逃げればいいのかは分かったから。

「……っのやろう! セラファイさんっ、ザツカードのやつはどこだつてばっ!」

『このまま北北東の方向に進んでください。そこまで遠くには行っていないません!』

「よし! リーダー、ジエネ、行くぜ!」

俺らに押し付けといてよく言えたもんだな。

瀕死だったエルアーダの胴体に、エレキを突き立てる。電撃を流し、消滅させた。

周囲のダーカーの掃討が終わった事を確認し、一息つく。

「近くにはもういないようだが、いつまた出てくるかもわからん。武器は持ったままできろよ」

「はい。……………」

「ジエネ？　どうかしたのかよ？」

「いいえ、なんでもありません。……………行きましょう」

そうは言うが、ジエネは周りの様子を探るばかり。

周囲に警戒を払っている……………訳ではないようだ。

「ジエネ。今はザツカードだ。考えるのは後にしろ」

「は、はい！」

ギヤースカ暴れてる奴を見てると逆に落ち着くあれ

「やつぱり……ここ、わたし……」

全力疾走して体力が尽きては本末転倒なので、適度に歩いてクールダウンし、落ち着いたら走る。それを繰り返す。

そのクールダウンで歩いている最中、ジエネは呟く。

……一体何がそんなに気になっているのだから。

『これ以上先は、アークスの先遣隊も足を踏み入れたことがありません。十分注意して進んでください。遺跡のかなり奥深くで、生体反応を感知しています』

「やっぱザツカードは奥へ誘い込むつもりか。野良のダーカーに襲われない何かを開発したのか、或いはそれも即座に操れるのか……」

どちらにせよ、あいつがダーカーに襲われて、獲物を横取りされる心配はなさそうだ。

その分俺達に予先が向くわけだが、強行軍する必要はないと見るとして。

「ジエネ。さつきからどうしたよ」

「……昔ここに、来たことが……」

……ここに？

周りを見回してみても、そこら中に苔の生えた施設の残骸があるのみで、人が住んでる気配は全く感じられない。

そもそもこの辺は今ほどでなくともダーカーがうようよしている危険地帯なのだから、子供を連れてくる場とはとても思えない。

モアもそう思ったのか。否定する意見を口に出す。

「なーに言ってるんだよ！ 子どもの頃に似たところに来たんじゃねーの？ さつきセラフィさんが先遣隊も来たことないって言ったじゃんか！」

「そ……そう、ですよね」

「……………ふむ」

まあ、一応気に留めとくか。

「それよりジエネ、お前体調はどうなんだ？」

「えっ？」

「え？ じゃねーよ！ どうなんだよっ！」

『ジエネちゃんを心配しているんですよ。優しいのね、モアくん』

「モア……ありがとう。大丈夫よ。わたし、まだ戦えます！」

「ふ、ふんっ」

ふいっと顔を逸らし、照れを隠すモア。

変な所で意地っ張りな奴だよなあ。

遺跡の奥地。

ダーカーがそこら中にいる。

大型ダーカーこそ出なかったものの、数が数だ。二人も予想以上に頑張ってるからフォローは少なめとはいえ、頑張った分ジエネは疲労困憊。モアもミスが目立つようになってくる。

今は俺がラスト一匹のプレイガーダを相手している所である。
ガキンツ、と音が響く。

プレディガーダが下段から振り上げた鎌を、左に持つエレキで受け止めた音だ。

右に持つエレキで袈裟斬り。向こうのもう片鎌で受け止められる。プレディガーダは鏢競り合いを嫌って離れようとしたが、その前にエレキの電撃が流れ、向こうの動きを止める。

左のエレキをアイテムバックに仕舞い、入れ替わりで風杖『ウインド』を取り出し、左手でウインドを持つ。

「ザン・並列起動2」

ブーメラン型の風刃がプレディガーダの両肘を切り裂く。

俺の感応力じゃ闇雲に放てば切り傷しか与えられないが、細身の部分を狙えば十分に切り落とせる。法撃武器が無かったらそれも出来ないんだけど。

武器を失ったプレディガーダの顔面に、エレキを突き立てる。

それがトドメとなり、プレディガーダは黒い靄となって消えた。

ウインドを仕舞い、エレキを取り出す。

「ひとまずこれで終わり、っと」

「ああ……ひどい人達だ……。私の下僕を、壊してしまっただすね……」

それを見ていたザッカードが嘆く。

今いる場所は大きな広場となっている場所で、俺達の後方以外に道はない。

とりあえず一見は、俺達が追い詰めた形である。

「ザッカード！ もう逃げられねーぞ！ ちょこまか逃げやがって！」

勇み立って前に入るモア。

それに並んでジエネも前が出る。

「どうして……？ 研究者であるあなたが、こんなことを……！
だって、研究者は……！」

「ジエネ！ あいつはお前の家族とはちがうんだ。家族と重ねて、ジエネが悲しんだり……、そんなことしなくて、いいんだからなっ！」
「でも、わたし……知りたしいし、信じたい。最初から、悪い人なんかいないって……」

「ジエネ……」

「……ま、どっちにしろだ。捕まえなきゃ碌に話も出来やしねえだろ」
「そ、そうだな！ まずは捕まえるぞ、ジエネ！」

モアもそう言うが、ジエネは乱暴な真似をしたくないようで、刺激しないように、優しく強く、呼びかける。

「ザッカード！ わたし達と、オラクルに帰りましょう！ そこで、ちゃんと裁きを受けて、罪を償いましょう！」

手を差し伸べるジエネ。

対して、ザッカード。

「悲しい、かなしい、悲しい、悲しい！ 愚かなアークス、愚かな！
罪を償いたいなら、私が与えてやろう……与えてやろう！」

「ザッカード！ ……どうして！」

どうして、とジエネは聞くが。

俺の頭には一つ、仮説が出来ていた。

「……一つ、聞いといてやる」

証拠も何もない、ただの当てずっぽう。

しかし一応聞いておいてやろう。

今も狂い悶えるようにしているザッカードに届くかどうかは知らんが、最悪どつちかがここで死ぬわけだし。

別に大声で問い掛ける必要はないので、聞こえる程度の声量で問うた。

「お前は一体……何をされた？」

答えはなかった。

ただ、明確に反応があった。

それを覆い隠すように、ザッカードは吼える。

「貴様らあー……全員、ぜんいん!! 処刑——!!」

「……凶星か。まあ、後でゆっくりと聞いてやる」

ザッカードは大量のダーカーを呼び寄せ、広場があつという間に埋め尽くされる。

ひいふうみい……大体五十体くらいか。

小型のダガン、更に小型のクラーダなどが中心だが、五体に一体ぐらしい割合でエルアーダやグヴォンダ、キユロクナーダなどが見受けられる。

そしてその中央に聳え立つ、大型ダーカー。

『あの甲羅……ゼツシユレイダ?!』

通信のセラフイさんからその個体名を告げられる。

隣にいる二人があまりの多さと大型ダーカーの組み合わせにたじ

ろぐ。

『みなさん、この戦力では勝ち目がありません！ 急ぎ救援を呼びますので——』

「お前ら」

撤退してください、と。

セラファイさんが言う前に、二人に呼びかける。

「二十体ぐらいなら、いけるか？」

「え……？ は、はいっ」

「お、おおお、おうっ！」

「俺があのだカブツと三十体ぐらいを相手する。残りはお前らが倒せ。いいな？」

『!? 待ってください！ それではハクメイさんがあまりにも危険です!!』

セラファイさんの待ったが掛かるが、俺は一步前に出た。

『以前のウォルガーダとの戦いを忘れたのですか!? ゼツシユレイダはあれよりも更に硬く強いダーカーなんです！ ハクメイさんの感応力では、あの鎧を貫くことは——』

「俺が以前のままなら、ね」

『え?』

アイテムパックからそれを取り出す。

「こんなこともあるのかと用意しておいた、俺の新しい切り札！ とくにご賞味あれってな!!」

普段使いのマグとは違う、専用のマグ。

「フォトンプラスト
P B !!」

そいつを驚搦んで、叫ぶ。

「炎神『プロメテウス』!!!」

炎炎の魔神が、その姿を現した。

炎神『プロメテウス』

——頭が追い付きません。

今のわたしの心情を正直に表すなら、そうなるでしょう。

ザッカードは悪いことをした人で。

みんなの幸せを願う筈の研究者なのに、たくさんの命を奪った人で。

わたし達は、ザッカードを捕まえる為にナベリウスを彷徨って。

でも、もしかしたらそこに何か事情があつたかもしれない。

だから一緒にオラクルに帰って、罪をちゃんと償おうと、そう言うて。

でも断られた。

どうして、と思った。

何か事情があるなら話してくれれば、力になれるかもしれないに。

それでもハクさんは、ザッカードに何をされたのかと聞いた。

わたしは裏切られたと思ったのに、ハクさんは未だザッカードを信じている。

ザッカードは悪い人かもしれないけど、全部がザッカードのせいじゃないと。

もしかしたらそれは、ザッカードじゃなくて自分の推論を信じているだけなのかもしれないけれど。

その問い掛けに、ザッカードはわたしでも分かるくらいに反応しました。

でも、そんな考えは遺跡エリアの広場を覆いかねないダーカーの群れを前にして、頭から飛んでしまいました。

そしてその中央に聳え立つ大型ダーカー・ゼツシユレイダ。楽観的だと言われるわたしでも、この戦力差は覆せないことくらい分かります。

事実、セラフイさんも通信から撤退を促す声を上げているのですから。

なのに、あなたは笑います。

この程度がどうしたと鼻で笑うかのような、とつても悪い笑顔で。

「炎神『プロメテウス』!!」

その声と共にハクさんの背後に現れたのは、ゼツシユレイダと並び立つ程に大きな、炎の巨人でした。

筋肉の鎧を着たかのような、上半身だけの肉体。

その身体は猛り狂うかのような炎に包まれ、近くにいるだけで燃えてしまいそうな熱を持っていました。

加えて頭部にある二本の巻角と、凶悪な人相。

まるで――

『ま………魔神?』

わたしの心の声を代弁するかのよう、セラフイさんが通信越しに呟きます。

それに応えず、ハクさんは大声を出す前のように息を大きく吸い込みました。

それに連動して魔神も息を大きく吸い込み。

二秒だけ止まって。

『ヘルフレイム』!!!』

魔神が巨大な火炎を吐き出して。
広場のダーカーを大多数、焼き払ってしまいました。

「ええええええええええええええええええええええ!!?」

結構な数のダーカーが焼き尽される様を見て、一番に叫び声を上げたのはモアだった。

「ちょー！んな、リーダー！なんだよこれ!? こんなのいつの間
用意してたんだよ!!?」

今回の出発前である。

俺がジエネの事をモアに話している時に仕上げていた物。それが
この『プロメテウス』だ。

通常のマグの内部構造を解析し、それを基にして新しくマグを作り
上げ、通常のマグに搭載されている他の一切合切を取り払い、フオートンブラスト P B
のみを使えるように改造した、フオートンブラスト P B 専用のマグである。
本来であればフオートンブラスト P Bは既存のタイプしか使う事は出来ない。

一角獣の幻獣・ヘリクスタイプ。

要塞の幻獣・アイアスタイプ。

白魚の幻獣・ケートスタイプ。

女神の幻獣・ユリウスタイプ。

戦士の幻獣・イリオスタイプ。

この五つのタイプにそれぞれ三つのプログラムが存在するのだ。

例えば、ゼノさんの《ヘリクス・ブロイ》。

ヘリクスタイプに属するP^{フォトンプラスト} Bで、「敵に向かって突進。その後転身してもう一度突進する」というあらかじめプログラムされた動きをする。

タイプと合わせて、このP^{フォトンプラスト} Bをどれにするか、その為にどうやって育てていくかは個人によるだろう。

しかし俺は、既存にはない新しいP^{フォトンプラスト} Bを生み出す事に成功した。

P^{フォトンプラスト} Bのフォトンエネルギーを、特化させることで更に増大させ。マグにテクニクを組み込むことで属性を持たせ。

数多くの試作と入念な調整の結果、通常のP^{フォトンプラスト} Bを超える超火力の切り札を手にしたのである。

「……………」

「おい、ジエネー！」

「え!? は、はい!?!」

呆然としてたジエネに呼びかける。

驚くのは無理もないものだと思っているが、それに付き合っただけの状況でもない。

今のヘルフレームで三十体……を少しオーバーしたが、まだ小型ダーカーは韋めいているのだ。

「ボケっとしてんな! こいつもそう長くは出せない! さつき言っただ通り、お前達が残りの取り巻きを相手しろ!」

通常の、あらかじめ決められたプログラムをしたら消えるP^{フォトンプラスト} Bとは違い、プロメテウスは明確な時間制限はない。ただしそれはいつでも出していられるわけじゃなく、出力に応じてガッツリ消費されていく俺の体内フォトンに限界が来るまでというだけ。

おまけにP^{フォトンプラスト} Bのプログラムをその場で組むのだから、演算処理で掛かる脳の負担もある。

プロメテウスを出すと同時にPフォントドライブ Dも使ったからその負担も軽度であるが、代わりにフォントンの消費も早まっている。

速攻でケリをつけなければならぬ。でなければ、最悪負けて死ぬ。それでなくても以前のように危ない戦いを強いられることになる。

「っ、わかりました！ ハクさん、気を付けてくださいー！」

「そろこっちの台詞だ。いくぞ!!」

「お、おう！ やってやるぜ!!」

そうして二人が構え直すのを待っていてくれる……訳ではなく。

ゼツシユレイダの方にも動きがあった。

ゼツシユレイダは、わたし達に背を向けました。

背中にある甲羅はまるで睨みつけるような目を持っているようです。しかし、それでわたし達を疎ませることが狙いではありませんでした。

その甲羅の外周部、その所々に空いた穴から、複数発のダーカー砲弾が飛び出します。

「うげえー!? あいつ、めっちゃくちやうってきたぞ!」

ゼツシユレイダに向けて走り出すハクさん。

そのハクさんと背中では追従する魔神に向けては勿論、小型ダーカーに向けて走るわたし達にもダーカー砲弾は向かってきます。

しかし、それを見逃すハクさんではありませんでした。

「お前の相手は、こっちだろうが!!」

走りながら拳を振るうハクさんに連動して、魔神がその巨腕を振ります。

まず、わたし達に向かっていたダーカー砲弾。

続けてハクさん自身に向かっていた砲弾を拳で打ち落とし、進路上で立ち塞がる小型ダーカーも薙ぎ払います。

魔神の拳は凄まじい炎を纏い、その打撃を受けたダーカー達はその炎と打撃で掻き消えてしまいます。

正に鎧袖一触です。

それを見届け、わたしはモアに言います。

「モア！ ハクさんを信じましょう！ わたし達は、わたし達の出来ることを！」

「お、おう！」

魔神の火炎でハクさんが半分以上倒してくれたとはいっても、まだまだダーカーはいます。

ハクさんがゼツシュレイダに集中してる今、わたし達だけで倒せるか――。

(いえ！ 倒すんです！)

俺とあいつらに向かったダーカー砲弾を打ち落とし、立ち塞がるダーカーを薙ぎ払って、ゼツシュレイダの前に辿り着く。

向こうは砲弾を撃ち終わって、こちらに振り向いた所。さつきまで遠くにいたプロメテウスが目前に迫っていたが、ダーカーであるゼツシュレイダはそれにいちいち驚くような感情を持ち合わせていない。右鎌を中段に振り上げて、こちらを薙ごうと振るってきた。

プロメテウスの右拳で迎撃する。

轟音。

ほんの僅か鏝競り合い、振り切ったのはプロメテウスの方だった。打ち返されたゼツシュレイダの右鎌の装甲が、少しだけ剥がれる。

「……っ」

同時に、右腕に走る痛み。

このオリジナルPBのデメリットの一つがこれだ。

俺の動きと連動させた代償として、プロメテウスが受けたダメージが痛みとして俺自身にフィードバックされてしまう。

殴ったら殴った拳も痛いし、撃ち抜かれようものなら身体に風穴を開けられた痛みが襲い掛かる。

鎌の攻撃を拳で迎え撃ったから、拳が僅かながら切れた痛みと、衝撃が腕に来た痛みが同時に来た。

はつきりと感じる痛みだが、我慢できない程じゃない。

「っ、だらあ!!」

今にも絶対ロクでもない何か(ダーカーの炎とかなんとか言われている)を吐き出そうとしていたゼツシュレイダの横っ面に、左拳を叩き込んだ。

勢いそのまま、頭部から地面に叩き込ませる。

ゼツシュレイダを横倒しにした衝撃で広場が揺れた。

この大型ダーカーは二足歩行する亀のような外見で、一度倒れたらすぐには起き上がれない。

背中の甲羅にブーステッドのブースターみたいなのをつけてるか

ら起き上がれないってことはないのだが、四肢が短いせいだ。

それまでは仰向けにされた亀と同じで、完全な無防備。そしてコアは胸の部分。

叩き込まない訳がない。

「おおらッ!!」

ゼツシユレイダの身体を踏みつけながら跳躍し、上空に踊り出た所で右拳を叩き込む。

横倒しになった時に出来たクレーターが広がる。

が、コアは碎けない。

ダーカー共通の弱点なのは確かだが、ダーカーの個体毎にその硬さも変わる。ゼツシユレイダともなれば、そうそう簡単には壊せないだろう。

「らあッ!」

間髪入れずに左拳を叩き込んだ。

クレーターが更に広がる。

「————『バーニングラッシュ』!!!」

連撃。

一発一発、全力で。

ゼツシユレイダの装甲が飛び散る。

殴った衝撃が腕に響く。

起き上がる暇は与えない。

このままコアが碎けるまで殴り続けてやる。

セラファイは通信で送られてくる映像で、三人の様子を見ていた。

ジェネとモアの二人と、ハクメイの位置は離れているが、セラファイの通信画面には広場全体が写っている。ザツカードがハクメイの出した魔神に怯えている様子も把握出来た。

戦況は、優勢だ。

ハクメイは魔神の拳でゼツシュレイダに対してマウントを取って、一方的に攻撃を加えている。

ジェネとモアも順調にダーカーを倒していき、その数を減らしていた。

このままいけば、最初は絶望的に見えたダーカーの軍勢を全滅させることが出来るだろう。

(けれど……)

しかし、セラファイの胸中には不安があった。

ハクメイはあの魔神をそう長くは出してられないと言った。

ハクメイも魔神を出した影響か、脂汗を流している。もしかしたらあの強大な力の代償として体力を大幅に削るのかもしれない。そういう意味で長くは出してられないのか。

ジェネも体力の消耗が激しく、呼吸が荒い。

もしもゼツシュレイダを倒し切る前に、ハクメイの限界が来てしまったら？

ジェネの体力が限界を迎えて、ダーカーの前に無防備な姿を晒す事になってしまったら？

見縊る訳ではないが、モア一人でジェネを守り切れるとは思えなかった。

優勢に見えても、実際は綱渡りの状態で、いつ綻びが出てもおかしくない。

という事ではなかった。

(魔神の拳の、衝撃が重すぎます……!)

ハクメイがああ言った以上、体力の消耗が激しかろうが意地でもゼツシユレイダを倒し切るだろう。

しかしその攻撃は、彼等の戦場である遺跡広場を徐々に罅割らせていた。

クレーターが出来て、地形が変わるくらいなら問題はない。

だが広場が崩れ、底の知れない湖へ瓦礫と共に身を投げる事になれば、危険では済まないのだ。

ハクメイが悪いとは言えない。

ゼツシユレイダの巨体が倒ればそれだけで大きな衝撃になる上、ダーカー砲弾も広場に罅を走らせる威力だった。その巨体を横倒しにして叩きつけるのも、ゼツシユレイダの攻略法として考えれば、足ではなく顔面を攻撃して横倒しにすることを除けば真つ当なものだ。しかしこのままでは、全員湖の底行き。

それを、息もつかせぬ連撃を叩き込んでいるハクメイに言うべきか。

言つて攻撃を緩ませるべきか。だがそれではゼツシユレイダを倒し切れないかもしれない。

セラフィは悩んだ。

悩んだ末に。

「——ハクメイさん！」

言う事にした。

「戦いの衝撃で、遺跡広場が倒壊する恐れがあります！ このままでは皆さんが湖に」

『分かってる！』

「!?」

しかし、返ってきた答えは予想だにしないものだった。

ハクメイは倒壊の危険について、既に考えていた。

恐らくは、魔神を出す前の段階から。

連撃の手を緩めないまま、ハクメイは続ける。

『だから、こいつをぶっ倒したらすぐにザツカードを連れてここから離れる！ それまでは保つ筈だ！ セラフィさんは向こうが片付くか俺が倒したら、二人にすぐ広場から出るように言ってくれ!』
「……そんな事まで」

口調がいつもより乱暴なのは、余裕がない証拠か。

そんな状態でもハクメイは次の事を考えて行動していた。

今でも必死に最善策を練って、戦っている。

確信のある策ではない。

だが、全力でそれを実行しているのだ。

(……ならば、私もそれを信じなければ)

一方的と思われていたゼツシユレイダに、動きがあつた。

ゼツシユレイダの巨体に着地して、後ろに跳ぶ。

地面に着地すると同時に、ゼツシユレイダが独楽のように回り始めた。
た。

それに巻き込まれないよう、更に後ろへと距離を置く。

「さあ、来い」

出来れば横倒しになったまま倒したかったが、そう上手くはいかないか。

だが、相当弱らせることは出来た。

プロメテウスもまだ保てる。

これ以上は広場の方が持たない。

次の一撃で決めてやる。

「……………」

ゼツシュレイダはその場でだけでなく、螺旋を描くように巨体を回す範囲を広げていく。

これに巻き込まれて押し潰されるわけにはいかないが、俺はそうならないように距離を取っているし、二人はもっと遠くにいる。

今はまだ攻撃を叩き込む段階ではない。

敵は回り続けている。

まだ……もう少しだ。

身体の向きを変える為に跳ね起きた。

(ここだッ!!)

その巨体が自ら飛び上がるのを待っていた。

罅が入り始めていた、ゼツシュレイダの胸のコアに狙いを定めて。

『クリムゾン——』

プロメテウスの右拳を、真っ直ぐに打ち込み。

『ブラスト』ツ!!』

拳を通した衝撃と爆裂が、コアの中心からゼツシユレイダを弾け飛ばした。

「な、なんて威力……!」

魔神の一撃でゼツシユレイダは消し飛んだ。
それを見届けて、セラファイは口元を抑えた。

(たった一人で、ゼツシユレイダをああも一方的に……ついこの前まで新人で、ウォルガーダ相手に三人がかりで苦戦していたというのに)

元々PBは、アークス個人の切り札として扱われている。

六芒均衡が振るう創世器には遠く及ばないが、それでも戦術兵器としては十分な威力。

それでも大型ダーカー相手では大きな傷を与えるに留まる。

まずアークス自身の力で弱らせ、トドメとして使うのが定石だ。

だが、ハクメイがPBとして生み出した魔神は、それを超えている。
た。

ダーカーの軍勢を一息に消し去り、ゼツシユレイダを弱らせる前から戦い、消し飛ばしてしまったのだ。

(アークスになつて一月もしない内に、こんな戦略兵器を生み出してしまふなんて……。これから先、一体どれほどの……)

慄くセラファイだが、ハクメイは何も一月足らずで魔神——『プロメテウス』を生み出したわけではない。

実際にマグを受け取って改造を始めたのは一月足らずではあるが、それ以前から設計は行われていた。

P Bの存在を知つてから、ずっと。

頭を悩ませた時間。幾度も繰り返した試行錯誤。

そうして土台はアークスになる以前から盤石に固められ、あとはその上に建てるのみとなつた。その建てる作業も、一筋縄ではいかなかった。失敗した数など計り知る事は出来ないだろう。

それをセラファイは知る由もない。

だが、ハクメイはそれを不幸とは思わない。

承認欲求を満たしたいだけならば、積み上げたそれを見せびらかせばいいのだから。

彼の強欲はそんなものでは満たされない。

積み上げた先に得られる物を欲さずして、何が強欲か。

(……そんなことを考える前にやる必要があるでしょう!)

セラファイは自分の両頬を張る。

ゼツシュレイダはハクメイの手で消滅した。

しかし、本命のザツカードを捕えたわけではなく、チームの安全が確保されたわけでもない。

ハクメイの指令通り、これからジエネとモアの二人を撤退させる役割がセラファイにはあるのだ。

セラファイは通信画面の視点を二人の方へと移した。

ジエネとモアのチャンネルへと通信を繋ぎ、呼びかける。

「ジエネちゃん！ モアくん！ ハクメイさんからの」

命令です、と。

そう言おうとしたセラフィの目に映ったのは。

ジエネがキュロクナーダの棍棒で頭を打ち倒された、その瞬間だった。

一つの結末。一つの始まり

チームで行動し、戦闘するに当たって、そのリーダーに最も求められるものは何か。

それは、戦略眼。

敵の実力を見極め、味方の戦力とを照らし合わせ、素早く判断する能力である。

先のブラックパウンドも、単純な実力より、リーダーの戦略眼が優れていたことが、チームメンバーを欠けさせることなく戦えていた要因だった。次元の違い過ぎた仮面の男と遭遇することさえなければ。

勝てると思えば戦い、勝てないと思ったならば逃げる。逃げられない戦いならば、せめて工夫する。

そうした判断を下せる能力を、チームリーダーには求められる。

そしてハクメイも、この戦略眼は優れている人材だった。

PMによる感知によって敵と味方の実力を計りやすいのもあるが、己の感覚を信用し、それに従う決断力も確かなものだ。

今回の戦いにおいても、ジエネとモアならば周りの小型ダーカーを15〜20体程ならば倒せると判断し、自分はそれ以外のゼツシユレイダを含むダーカー達を倒せると断じた。

そして事実、ハクメイはゼツシユレイダを倒し、ジエネとモアも順調にダーカー達を倒していた。

ハクメイの戦略眼に間違いはなかった。

誤算があつたとすれば――

「ジエネ!!」

『!? ジエネちゃん!』

キュロクナーダの棍棒で打ち倒されたジエネを見て、セラファイが叫び、モアが飛び寄る。

「……………」

ジエネから呻き声が聞こえ、生きていることを確認した。

しかし、モアに安堵はない。

少なくとも血の量を初めて見た、というのもあるが、それだけではない。

頭部を打たれ、いつも笑顔を浮かべていたジエネの顔が、頭から流れた血に染まっている。知識をそれ程持たないモアでも、頭への衝撃と流血がどれだけ危険かは知っていた。

今は生きていても、このままでは死んでしまうのではないか。

モアの顔から血の気が引いた。

——誤算があつたとすれば、それはプロメテウスを使った戦闘の影響が、二人の戦闘にも出た事だった。

広場全体に行き渡る衝撃。それは足場を揺らされているとも同然であり、離れた場所にいた二人も例外ではなかった。モアは飛んで地に足をつけていなかったが、それでも腹の底に響く衝撃。足をつけていたジエネはそれ以上である。

それでもダーカーが最後の一体となるまで油断なく戦っていたが……肝心な時。

キュロクナーダが棍棒を振り上げたのを見て、ジエネがそれを回避しようとした時に、プロメテウスの『クリムゾンブラスト』によって足場が大きく揺れた。

それによって後ろに跳ぼうとして出来なかったジエネの頭に、キュロクナーダが容赦なく棍棒を叩きつけたのだ。

「ジエネ！ おい、ジエネ！ しっかりしろよ！ 今回復するから

なっ!!」

モアはアイテムパックからソルアトマイザー——一定範囲内のアークスをまとめて回復させるアイテム——を取り出し、すぐに使おうとする。

が、それを待つてくれるようなダーカーではない。

『!・モアくん、後ろです!』

再びキュロクナーダが棍棒を振り上げる。

セラファイは叫ぶが、当のモアはジエネを回復させることにしか頭になく、セラファイの声も耳に入らない。

一秒先の光景を想像し、セラファイは目を瞑った。

が、そうはならなかった。

振り上げた棍棒が、ワイヤードランスに絡め取られたからだ。

『……え?』

棍棒を引つ張られ、キュロクナーダの体勢は崩れる。

そして絡めとったワイヤードランス——刺爪『ブラッドクロウ』のワイヤーが急速に縮んでいく。

「グラップル……チャージッ!!」

ハクメイは勢いそのまま、キュロクナーダの一つ目にドロップキックを叩き込んだ。

PDで強化された蹴撃はキュロクナーダの身体を大きく飛ばし、広場外の湖に退場させた。広場の端ではあったが、本来はここまで飛ばせるものではない。

飛ばされただけで消滅したわけではないのだが、それに構う暇ではない。湖に落ちたのを見届けもせず、ハクメイはジエネに駆け寄

る。その背にいたプロメテウスは消えている。

モアが使ったソルアトマイザーが効果を発揮し、血は止まったが、依然立ち上がる気配は見せない。

「ジエネっ！ おい、しつかりしろ！ 倒したぞ、オレたち！」

「……っ、はい。……ザツカード……捕まえて……、みんなで……帰ろ……」

朦朧とした意識でも笑って見せるジエネに、ハクメイは内心舌打ちした。

ジエネを責めてる訳ではない。

自分が下した判断を、自分の戦闘の影響で台無しにして、その結果ジエネが傷付いた。ハクメイはそれに気付いているのだ。

本来責められるべきは自分の筈。

だというのに、ジエネはそれを詰るでもなく、安心させるように笑っているのだ。

わたしは大丈夫だと。心配しないでくださいと。

今ここで立ち上がれもしない癖に。

「う、うわああっ！ なんだなんだっ!!？」

広場の揺れが、唐突に大きくなった。

『今の戦いで、足場が崩れ始めています！ 危険です！ 今すぐ退避してください！』

「チッ、本格的になってきやがったな。モア！」

ブラッドクロウをアイテムパックに仕舞い、ジエネを背負うハクメイ。

あまり頭を揺らしてしまいたくはないが、急いで退避しなければならぬ。代わりに背中部分でフォトンの光輪を作り、固定する。

揺れる広場から外へと足を踏み出した所で、ジエネが弱弱しく呟いた。

「ハクさん……ザッカードを……」

「……………」

「ばか！ アイツつれてたらお前どうすんだよ！ ジエネひとりじゃ動けねーだろ！ リーダー！ ジエネを連れてここからはなれようぜ！」

『ハクメイさん！ 急いで脱出してください!!』

モアは先んじて飛んでいく。

ハクメイも、ジエネの呟きを意に介さず、走り出した。

「だ、だめです……！ わたしは、大丈夫ですから……！」

「うるせえ!!」

「命張って救われた命だろうが!! お前が大事にしないで、どうすんだ!!」

「っ！」

目先の地面にヒビが入った。

躊躇わず踏み出していく。

「……………そうでした」

足元の地面が崩れ、体勢を崩し掛けた。

踏ん張って事無きを得る。

「……わたしを助ける為に、家族は犠牲になりました……。だから、わたし……まだ、死ねない」

広場から出る道が崩落し、途絶えた。
大きく飛び込んで、向こう側へと着地した。

「ハクさん……ごめんなさい」

ハクメイの背中にいたジエネは、そうやって意識を手放した。

「は……ははははははは!!! こわれろこわれろこわれろ!」

崩落していく遺跡広場の中、ザツカードの狂笑が響く。
それを背中に受けながら、ハクメイとモアはその場を後にした。

後日、崩落した遺跡エリアに別働隊が再調査に向かったが、そこで
E・M・A研究所爆破事件の犯人、ザツカードの生存は確認できな
かった。

生体反応を広範囲におよんで調査するが、確認できず、上層部は犯
人の死亡でこの事件を幕引きとした。

多数の死者を出したE・M・A研究所爆破事件は、原因が解明され
ぬまま、後味の悪い結末となった。

「うええええええっ!!!　なんでチーム解散しなきゃいけないんだよ！」

ザッカード捕縛作戦が失敗に終わってから、数日。

俺達はシヨップエリアの一角へと、セラファイさんに呼び出されていた。

内容はまあ、モアが今叫んだ通りで。

「いいじゃんいいじゃん！　ずーっと三人でやればさ！」

「とても残念ですが、このチームは実験的なものでしたので……」

セラファイさんの言によれば、ウエポノイドを入れた俺達試験チームの運用は成功とされ、単独で行動していたウエポノイド達もアークスチームの一人として扱うことになったそうだ。

既に俺達以外にもアークスと共に行動しているウエポノイドもいて、今後はモア以外にもアークスにつけられるウエポノイドが増えていくとのこと。

なので、試験としてウエポノイドのモアをつけていた俺達チームの存続理由は無く、これにてお役御免というわけだ。

「また、このメンバーで頑張りたいですね。本当にお疲れ様でした」

不満だぜ、と言わんばかりの膨れっ面を見せるモアが、口で何かを言う前に。

ジエネが口を開いた。

「モア、セラファイさん……ハクさん！ 本当にありがとうございました！」

ジエネは、笑って見せる。

多分モアでもわかるくらいに、無理矢理。

「次に会う時には、わたしもつと強くなります！」

「……………ジエネ」

「……………」

……何かを言おうとして、何も言えなかったモアが、俺を見る。

これでいいのかよ、と。

まあ、ジエネの考えてそうな事は大体分かる。

今は傷跡も後遺症もなく治って何の別状もないとはいえ、ジエネが怪我をした事が原因である作戦は失敗に終わった。

ザツカードを捕まえられず、崩落に巻き込まれて死んだ。

事件の経緯を知ることなく、オラクルで裁きを受けるでもなく、一人の命が失われた。

それをジエネは、重く受け止めている。

自分があの場合で倒れるような事が無ければ、もつと強ければ。

作戦は成功して、ザツカードを捕まえられたんじゃないかと。そういう風に考えてるのだろう。

「だから、絶対にまた会いましょうね！」

それを踏まえて。

俺は言った。

「なにお別れムード出してんの？」

「ええっ!？」

驚愕の表情を浮かべるジエネ。というか三人。

「まさか、俺が『ああ、元気でやれよ』とか言ってお見送りするとも思ったか？」

「で、ですがハクメイさん。先程も申し上げた通り、このチームは今回限りの実験的なものでして……」

「試験チームとしては、でしょ」

スクリーンを呼び出す。

んで、ポチポチポチ……つと。

「? なにをして……!」

ジエネの方に通知が来たようだ。

スクリーンを呼び出し、ジエネはそれを確かめ、目を見開く。

「……これ、って」

「私的なチームとして組むのにまで、口出しされたくないね」

それは、招待状。

オラクル上層部に組めと言われて組むチームではなく。

俺がチームリーダーとして自主的に組む、俺のチーム。

そのチームへの招待状が、ジエネの手元に展開されていた。

「……! なあなあリーダー! オレには?！」

「え? いや、別にお前はいいかなって」

「なんだよそれ! 仲間外れにすんなよな! オレもチーム入るってば!!」

「あーはいはい」

モアの方にも送って、来たと同時に承認される。

こいつが俺のチームメンバー第一号か……まあいいや。

ジエネは招待状を見続け、未だ承認をしない。

「なんだジエネ、嫌か？」

「嫌なんかじゃないです！」

強くそう言われた。

ジエネは続ける。

「でもわたし、ハクさんの足手纏いで……ザッカードの時だって、わたしももっと、もっと……！」

だから。

あれは俺の判断ミスで、お前はちつとも悪くないんだって。

そう言ってもジエネには響かないんだろう。

どうしてこう、履き違えてばかりなんだろうか。

「もしも」

「……？」

「もしもの話だけだな」

だから、それは言わない。

響く言葉を選んで、言う。

「もしもお前が自分のフォトンを、身体に負担なく、最大限に発揮するようコントロール出来たら、どうなると思う？」

「えつと………一人前に戦えるようになります？」

「三英雄を遥かに上回る最強のアークスの誕生だ」

「……え？」

「お前のフォトン感応力は、アークスとしての素質は、それ程までに天性のものだってことだ。そもそも感応力が高過ぎて身体に負担が掛かるアークスなんて聞いたことがあるか？」

事実、六芒均衡最強のレギアスだって、ジエネ程のフォトンは携えていなかった。

理不尽な話だろう。

それだけの力を持っていながら、得られた結果が普通以下のアークス。

俺のように弱いのが故に操りやすい奴でない以上、独学でコントロールする努力をするのも限界がある。

だからこそ。

「そんな桁外れのフォトンをコントロールする術をお前に学ばせるのに、俺以上の適任がいるか？」

「……………」

「そんな将来有望な部下を、みすみす俺が手放してやるとでも思ったか？」

何もジエネだけが得する話じゃない。

部下であるジエネが強くなれば、俺にだって得はある。

俺の為に俺が鍛える。ただそれだけ。

「今力不足なことなんざ気に病むな。俺だって、才能がなくてアークスになれないって言われた自分を踏み越えて、今ここにいるんだ」

「……ハクさん」

俯いて、スクリーンを見ながら逡巡するジエネが、ぽつりぽつりと問い掛けてくる。

「わたし……強くなれるんでしょうか？」

「お前にその気があるならな」

「ハクさんと並んで、戦えるようになるんでしょうか？」

「追い越されないように、俺も強くならなきゃいけないような時もあるんじゃないの？」

「誰かを守るわたしに、なれるんでしょうか？」

「ああ。なりたい自分に、なつてやろうじゃねえか」

「……なりたい、自分に」

そしてジエネは。

俺の招待を、承認した。

「頑張ろうな、ジエネ」

「……………っ、はいっ！」

「はあ……はあ……っ」

薄暗い闇の中、一人歩いていた。

右目が痛い。とても。とても痛い。痛くて泣き出しそう。なん
でこんな事になったんでしょう。誰が私の目を……目を！

ああ……そうだそうでした。

私が――

「目的……研究……なすべき、ぐうっ……ごほっ……！」

血反吐を吐く。内臓を痛めたか……？ いや、骨が内臓に刺さつて

いるのか……？

まあいい。今はそれよりも、なすべき事がある。

歩いて歩いて、ようやく辿り着いた。

そこは見慣れた研究設備。研究室。研究、研究研究研究！

「ふ……これ、で……ダーク……ファルス……が……ふふ……」

鼓動が、小さく鳴った。

【Episode 1—3】 『砂塵の奥』

センスが残念な奴は、得てして自分が残念な自覚がないものである

「……私は謝罪する」

シオンはお馴染みの台詞を言って、目を伏せた。
俺の傍には誰もおらず、久々の一対一である。

「謝罪？ 何に対する？」

「新たなマターボードは二つあった事。その片の運命を、私は秘匿していた」

「……二つ？」

「これが、そのマターボードである」

そう言つて、シオンはマターボードを俺に渡した。

前に受け取っていたマターボードは埋めきっていないのに、である。

早速そのマターボードを確認し。

確認、し——

「……おい。こりゃあ」

「貴方にとっては望まぬ結果になると理解していながら、後の未来を優先し、私達はこれを譲渡しない事を選択した」

そのマターボードは、既に埋まっていた。

それも当然だ。何故なら。

そのマターボードは、ザッカード捕縛作戦の時の事を記していたのだから。

明確にそうと書かれている訳ではない。

ただ、時系列や場所はあの作戦の時と一致している。

偶然、である筈が無いのは、シオンの顔を見れば分かった。

「このマターボードは、貴方を導かない。導けない。最善の結末を既に得た後であり、繰り返す事は無意味であるが故に」

「……じゃあ何か？ あの作戦は、失敗した方が都合が良かったとでも？」

「最悪の結末を回避するに至った。それは赦翼の雛鳥を喪失しなかったからである」

赦翼の雛鳥……。前の会話から察するにジエネの事か。

確かにあいつが死ぬくらいなら一度の作戦なんざ放棄してもいいが、あの時はやりようによつて作戦を成功させながらも全員無事でいられた筈だ。

それが、最善でない？

「私達の望みがどうであれ、微かに掴み取っていた貴方の信用を裏切る行為であったのも事実。誹りは甘んじて受けよう」

「……………」

まあ、やり直せるものならやり直したいところだが。

本来時間は一方通行であり、時間遡行したいなんて思っても出来ない事だ。

こいつの思惑がどうであれ、今回は出来ません？ ふざけんなつて文句付けるのも違うよな。

マトイの救出はともかくとしても、あの訳分からん杖の回収の為に仮面野郎とやり合った借りがあることを思えば、それを返してもらおうという名目で俺の望むように時間遡行させるなら筋が立つ。かと

いってあの時の借りを今回時間遡行させてチャラにしようって程の価値もないしな。あの狂人研究者には。事件の経緯を知りたいっ
ちや知りたいが、仮面野郎との死闘に勝る程の関心もない。

むしろ今回の事も借り、ということにしとけば、通算二つ分の借りが出来る訳だし、もっと大事な時に使うべきじゃないだろうか。

「……じゃあ、前回の事も合わせて貸し二つってことで。それでいいな？」

「……感謝する。同時に、これからも貴方の助力に頼る事を、私は謝罪する」

そう言つて、シオンは消えていった。

とまあ、シオンと気になるやり取りはあつたものの、俺はショップエリアを後にして、ゲートエリアに来ていた。

マトイのいるメデイカルセンター前である。

ジエネとモアはすぐそこにあるチームカウンターで、正式なチーム所属の手続き中だ。

「ふふふ」

マトイはご機嫌だった。

「今日はやけにニコニコしてるな、マトイ」
「うん。やっぱりハクメイは優しいなって」

日誌と一緒に読みながらチーム結成の経緯をジエネから聞いたらしいマトイは、そう纏めた。

「ジエネちゃんね。自分の力が足りないって、ハクメイとは距離を置いた方がいいんじゃないかって悩んでたみたいだったから。でもジエネちゃんにはハクメイがついてないと不安だし、わたしは一緒に居た方がいいと思ってたの」

「そらあなあ。あの性格じゃ、保護者がついてないと悪い男に騙されてホイホイついていきそうだし」

「そうだね。うん、心配」

頭を悩ませながら書類と戦う後姿を見ながら言う。

大多数の男好みする見た目なのに、無防備過ぎるんだよなあ。

まあ、俺がその悪い男でないと限らないが。

「だから、ハクメイと一緒にチームに誘ってあげたって聞いて、安心して」

「ふーん」

とは言っても、本当の本当に無能だと思ってたなら、ジエネがいくら可愛くても同じチームには入れなかったろう。それはモアも同じで、あいつに関しちや誘わなくてもいいかな、とも。

が、今弱くても未来にどれだけ強くなるかは未知数な訳で。

強くなる気概さえあれば、俺のようにアークスとしての才能を持たずとも同じじゃそらの奴等には勝てるようになるのだ。

逆に言うとなオドルのように気概が欠けていれば、そいつの強さはそこで打ち止め。あいつは総合スペックが高いからそれでも大抵の事はやれちゃうわけだが。

気概を持たない奴だって、持つ為の切っ掛けさえあれば変わる事は出来るが、そこまで面倒の掛かる奴を相手にする気はない。

その点で言えば二人は甘ちゃんなりに強くあろうとしてるし、モア

はともかくジエネのフォトンのスペックは高い。

言うなりや宝の持ち腐れ。俺以外の下じや腐らせたままになるし、それなら俺が有効活用してやろうって魂胆なわけだ。制御にかかる時間は一朝一夕とはいかないだろうが、リターンは大きい。

(なんて言っても照れ隠しとか受け取られそうだけど)

まだまだ俺のことが分かってないと言えよう。

読み書きが終わった日誌を閉じると同時に、二人はこちらへと戻ってくる。

「二人とも、手続き終わったの?」

「はい! これでわたし達は、正式にハクさんのチームメンバーです!」

「これからどんどん活躍して、チームのエースになってやるからな!」
「はいはい、期待しときますよつと」

ちなみにセラフィさんはあの場でしばしのお別れとなった。

いやだって、一定の功績や規模になったチームにはチーム専属管理官つてのが就くらしいけど、出来立てホヤホヤのチームにそんななるわけないし……。それでなくてもあの人、アークスとウエポノイドの橋渡し役みたいになってるらしいから、新体制が出来たばかりのこの時期にこつちに割ける時間とかあるわけないし……。

一応普通の管理官としてアークス達のサポートも行いうらしいから全く顔を合わせない訳じゃないが、頻度は他の管理官と同程度に落ちるだろうとのこと。

「それじゃ、早速チーム会議といくか」

二人がそこにあった席に座り、野ざらしの会議が始まる。

場所はチームに与えられるルーム、といきたいところだが、それも

またある程度の功績が必要なので、このような場所になる。チームが出来る前、メンバーが入る前の功績は考慮されないの、この二人分の功績はカウントされていかない。ので現状俺一人の功績が積み上がっている訳だが、まだ少し足りないそうさ。

「まず、俺達に必要なのはなんとと言ってもチーム名だ」

指を一本立てる。

「いつまでも『オレ達のチーム』じゃカッコつかねえもんな」

「ああ。他に認知するにも覚えてもらうにも、チーム名が無いといけない」

有名所では六芒均衡だが、あれはほとんどチームの体裁を保っちゃいないし、名前に六人に限定されてしまう。

ナベリウスのダーカー襲来で全滅したという『ブラックパウンド』は、リーダーを始め初期のメンバーが黒人だったことから名付けられたと言われている。それに因むと、俺達はなんだろうな？

……俺ことハクメイと、チームで日誌をつけている事から、『ホワイトアルバム』？

ダメだな。なんか根掘り葉掘りの葉掘りが訳わからなくて八つ当たりしそうな名前だ。いや、何言ってるんだ俺は？

「一応考えておくようには言っておいたが、候補は出たか？」

「もちろんです」

「オレもオレも！ 早速オレからな！」

候補の名前をメモってきたらしく、ポケットから紙を出す二人。

俺は頭に入れてきているから出さないが……まずは二人の候補から聞くかな。

「チーム名……なんだかそれっぽいね」

「それっぽいとする為にあるようなもんだしな、こんなのは。じゃ、モアから言ってみろ」

「へっへーん！ 聞いて驚けっば！」

モアが踏ん反り返りながらメモを読み上げる。

『モアと愉快的仲間達』！」

「却下」

「ええ!? なんでだよ!？」

「なんで俺達がテメエのおまけみたいになっただよ」

出すとは思ってたけど。

「じゃ、じゃあ『勇気いっぱい元気ひやくばい団』！」

「幼児向けTVか。却下」

『宇宙戦隊スーパーアークス』！」

「子供っぽさが前面に出過ぎ。却下」

『チーム・クレイモア』！」

「一番それっぽいけど結局お前メインじゃねーか！」

くうつ、と呻くモア。どうやらそれで出尽くしたらしい。

期待はしてなかったけどここまでとは。センスとか以前の問題だ。

嘆息し、次に移る。

「じゃあジエネ。お前言ってみろ」

「はい！ わたしのは自信あるんですよー」

大きな胸を張るジエネ。

不安だ。

『ラッピーさんを可愛がり隊』！ です！」

不安の中だった。

「うん。却下」

「ええ!? なんですか!?!」

「そういうのはチームとは関係ない同好会でも作ってやってくれ
……」

「ラッピーさん、可愛いじゃないですか! ほら!」

アイテムパックから何を取り出したかと思ったら、ラッピーのぬいぐるみ（抱きかかえサイズ）だった。え? 持ち歩いてんのそれ。

「わあ! 可愛いね。……わたしも一つ欲しいなあ」

「ほら! マトイちゃんもこう言ってますし!」

「そう言われても……」

まあ元はエネミーとはいえ、マスコットの可愛いの俺も認める
ところだ。

しかしそれとこれとは別の話である。

ラッピーを愛でる二人の美少女は見てて微笑ましいものだが、別の話である。

「ジエネー……。他の奴から俺達のことを呼ばれる時、『ラッピーさんを可愛がり隊』って呼ばれたいのかよ?」

「お前のも俺はやだけどな」

「わたしは呼ばれたいです!」

「呼ばれたいのかよ」

センスが残念というか、マスコット愛ですぎだった。

「つたく、結局俺の候補になりそうだな」

「うう……ラツピーさん……」

「名残惜しむな」

「リーダーの名前だって、決まるとはかぎらねえだろ！」

「ハン。センスおこちやまのお前と一緒にすんなよ」

「なんだとー！」

「け、喧嘩はだめだよ。仲良くしよ？」

マトイに仲裁され、モアはさすが引き下がる。

やれやれ。これじゃあ、俺一人でさっさと決めちまった方が早かったかもな。意見も聞かずに決めたら反発が生まれそうだったから、一応聞いたんだが。

「それじゃあ、ハクメイの意見は？」

「おう。発表するぞー……」

息を一つ吸って、言う。

『『エレクトロムーンペンタラスター』』

「却下!!」

二人同時に却下された。

「なんでだよそう頭ごなしに!」

「こう言っってはなんですけど、まずもって意味不明じゃないですか!」
「なんだよそのとりあえず言葉をならべただけの名前は?!」

「並べただけだど? 確かにこれ自体に意味はないが、ちゃんと意味あつてこの名前なんだぞ」

「どんな意味だよ?」

「文字を切り取っていくと『エンペラー』、すなわち一見意味のない言葉の中に身を隠す『隠れた帝王』になる」

「ややくし!!」

帝王。

望むもの全てを手に入れる、王の中の王。

最強最高のアークスの他に俺が志す姿だ。

強欲を体現する俺が人生を賭けるに値する最終目標である。

が、二人には不服のようで。

「それならオレの『勇気いっぱい元気ひやくばい団』の方がぜんぜんカッコいいもんね！ これだけはゆずらないぞ！」

「最初に出た『モアと愉快的仲間達』じゃねーのかよ！ いやどっちも嫌だけど!!」

「やっぱり『ラツピーさんを可愛がり隊』です！ ラツピーさんが好きな人に悪い人はいないんです！ 入団条件にラツピー好きを入れれば、良い人ばかり集まります！」

「いや、それはオレでも無理だって分かるってば……」

「平和ボケした奴しか集まんねーだろ。やっぱここは俺の『エレ』」

「却下！」

「せめて最後まで言わせろやあ！」

全くなんて奴等だ！ リーダーの意見を尊重しようとは思わないのか!!

当初の予想よりヒートアップしていく、チーム名の談義。

ゲートエリアのど真ん中でやってるもんだから「なんだなんだ」とこつちに視線を寄越す輩がゾロゾロと現れてくる始末。横目に見えたゼノさんとエコーさんが「俺（私）達も最初はああやって喧嘩してたなあ……」と言わんばかりの優しい表情をして去っていたのがちよつと印象に残った。

そんな中、隣のマトイはオロオロオドオドしつつも、俺達を止めに

かかる。

「み、みんな落ち着こ？ 喧嘩はダメだよ？ 他のみんなも見てるし、ね？」

その言葉で注目を浴びていることに二人も気付いたのか、俺達は一旦落ち着く為に上げていた腰を下ろした。

クールダウンして周囲が散っていくのを見届け、深呼吸してから会話を仕切り直す。

「このまま言い合っても終わらねーな」

「そうだな。二人にはまかせらんねーし」

『ラツピーさんを可愛がり隊』が一番です」

強情な奴等め。まあ俺も人のことは言えんが。

頬を膨らませるモアとジエネ。

このメンバーでやってきて以来、初めてのこの険悪な雰囲気はどうするか。リーダーである俺が一番に考えるべきかもしれないが、俺もそう簡単に譲りたくはない。

ので、言葉で他を折らせるのは止めにする。

「こうなってくると別の方法で決めるしかないか」

「別の方法、ですか？」

「一番手っ取り早いのは、マトイにどれがいいか決めてもらう事だが……」

顔をマトイに向けると、マトイはびくつとちよつと怯えた感じで俺を見る。

これもマトイに向けられる初めての表情だが、平時ならともかく今のタイミングで見られたら納得の反応だった。

「そんな胃痛案件を任せるわけにもいかねーし」

視線を外してそう言うと、マトイはあからさまにホッとする。

「ここはひとつ、運で決めようか」

「運？　じゃんけんか？」

「いんや、くじ引き」

日誌の白紙のページを一枚切り取り、四等分。四つ折りにして一人一人に配っていく。

そして真ん中にアイテムパックから取り出した穴の開いた箱を置く。

「この紙にそれぞれのチーム名候補を書き込んで、箱の中に入れる。その中から一つ引いたら、それが俺達のチーム名だ」

「そういうことですか……！　絶対に私のを！」

「恨みっこなしだかな！」

「あの、なんでわたしの分も……？」

「この際だ。お前もなんか考えろ」

「ええ……」

あからさまに困惑するマトイを置いて、二人は意気揚々と書き込み始めた。

……細工されてるとか全く考えないのかね。まあつまんないからしないけど。

俺もサラサラつと書き、マトイも少し考えてから書き込んだのを確認して、箱の中に四枚投入。
箱を横に揺らして混ぜる。

「で、だれが引くんだ？」

「もちろん俺だ」

「リーダーですからね。わたしもそれでいいです」
「んー。ほんとはオレが引きたいけどなー」
「部外者だけど、ハクメイが引くなら文句はない、と思うよ?」

俺が後悔しそうではあるけどな。他に引かれるよりはマシってだけで。

了承を得たので箱の中に手を突っ込む。
手に触れる紙の感触。

(こういう時は願掛けとしてそうだな……。一つずつ触って、最後に触ったやつにするか)

同じのをカウントしないよう、触ったやつは隅の方に置く。

一つ、二つ、三つ。そして四つ目。

(とりあえずモアの『勇気いっぱい元気百倍団』だけは引きませんように)

三人の視線を集めながら、手を引っこ抜く。
摘まんだ紙を、広げた。

「……………」

「ど、どうでした……?」

「『勇気いっぱい元気百倍団』だったのか?」

「いや……………」

「『ラッピーさんを可愛がり隊』でしたか!」

「いや、それも違って」

「じゃ、じゃあ、リーダーの……えっと、なんだっけ?」

「残念だがそれでもない」

「え。じゃあ、マトイちゃんの……?」

「うう……………」

箱をどかして、広げた紙を真ん中に置く。

『ダーカーバスターズ』

「……………」

「う〜……………」

黙ってしまった二人を見て、マトイは呻く。

「…………や、やっぱり直そう？　せつかくのチーム名なのに、わたしが付けた名前じゃダメだと思うの」

「いや、それ始めたら永遠に決着つかないからそうだからしないけど」

しかし、ダーカーバスターズ、ねえ。

「一応聞くが、なんでこれに？」

「えっと。アークスは宇宙の敵のダーカーと戦って倒すのが主な仕事だって聞いたから、そのお手本みたいなチームになれたらいいよねって思っ、思い浮かんだのがこれだったっていうか……………」

説明していく内に尻すぼみになっていく言葉。

…………まあ無茶ぶりしたのは俺の方だし、それにしてもちゃんと意味ある名前ではあるし。

俺としては、二人の名前に比べたら全然妥協出来る方だが。

「そんな感じなんだけど…………ふ、二人はどうかな…………？」

ぎこちなさげに首を傾げるマトイ。

それに対し、二人は。

「いいですね！」

「いいなこれ！」

「え」

歓迎ムードだった。

「アークスの、みんなのお手本！　すごくいいですそれ！　みんなでそんなチームを目指しましょう！」

「ダーカーをギツタンギツタンにしてやるぜー！　って感じだよな！」

オレ、これにしたいな！」

「え、ええつと……」

「……どうやらお気に召したみたいで」

こうして。

今は俺ことハクメイ、ジェネ、モアの三人のチーム、『ダーカーバスターズ』の名付けが、名付け親をマトイとして成された。

そしてこの名は後々、オラクル船団に轟く事になる。

『最強』が率いる『最高戦力』として。